
次元の破壊者～繋がる世界の絆～

亀鳥虎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元の破壊者〜繋がる世界の絆〜

【Nコード】

N9297T

【作者名】

亀鳥虎龍

【あらすじ】

『次元の破壊者』と呼ばれる男に、様々な平行世界が破壊されてしまった。

次元を渡る事を許された巫女・閃可は、幼馴染の真之介と共に選ばれし者達と共に、その野望を阻止するために立ち向かう。

『重要大事』さんの許可を貰い、『次元の破壊者』をアレンジしました。

是非呼んでください。

9月30日にタイトルを変えました。

第一話・プロローグ（前書き）

序章です。

第一話：プロローグ

「とうとう、この世界も終わりか……」

私はそう呟きながら奴に破壊された『世界』をただ見守る事しか出来なかった。

「父ちゃん……俺……どうすれば良いんだよ？」

私の友達の真之助をそう言って俯く。

「でも……まだ希望はある！」

そう思いながら私は、鏡に映る七つの世界を見る。

「彼等なら……きっと！」

「じゃあ、俺はこの世界に。」

「気を付けて。」

そして私達は時空を越え、助けを求めた。

僅かな希望に……

第二話：幻想殺しと任侠一家と霊界探偵（前書き）

最初のメインメンバー登場！

第二話：幻想殺しと任侠一家と霊界探偵

「イテテテ……あれ……ココ何処だ？」

右手に幻想を殺す力を宿す少年・上条当麻がそう言った。

辺りは真っ暗と言うより、闇に包まれている。

「とーまー！」

そんな彼のもとへ、『禁書目録』と呼ばれる白い修道服の銀髪シスター・インデックスが駆け寄る。

「インデックス。もしかしてコレって、魔術絡みか!？」

「それが、分からないんだよ。」

「……インデックスでも分からない現象だつて言つのかよ!？」

動揺する上条であったが、突如声が聞こえた。

「何だア……手当たり次第歩き回つたら、何でオマエに会うんだア？」

「すっごい再会！ つてミサカはミサカは驚いたり!！」

「ミサカも、ちょっと驚き」

『学園都市』最強のレベル5・一方通行アクセアレータと外見年齢十歳前後の少女・

打ち止め（ラストオーダー）、そして彼女を高校生くらいの体格にした少女・番外固体ミサカワーストが現れる。

「一方通行に打ち止め、それに・・・番外固体だったな！ お前等、どうして!？」

「どオしたも、こオしたも・・・目が覚めたらココにいたんだよ。」

「これには本当に驚いたってミサカはミサカはビックリする。」

そして今度は、今度はジャージを来た少年が現れる。

「オイオイ、コリヤどういうことだ!？」

「はまづら、少し落ち着いて。」

『アイテム』の構成員・浜面仕上とその恋人の滝壺理后が登場。

「全体が真っ暗だもんだから、色々歩いて見たら、顔見知りに出っ
ちまったよ。」

「どつやら俺達、謎の空間に着ちまったみてえだな。」

すると、上条に向かって閃光が走ってきた。

「うおおおおおおお!？」

すぐに右手を構えてその閃光を打ち消す上条。

「何すんだよビリビリ!」

「やっぱりアンタだったのねってビリビリ言うな!」

さらには『常盤台の超電磁砲』^{レベルガン}の異名を持つレベル5の能力者の第
三位・御坂美琴、

「全く、キミとこんな形で再会するとは……」

「お久しぶりです、上条当麻。」

魔術教会『必要悪の教会』^{ネセサリウス}の魔術師・ステイル^{II}マグヌスと神裂火
織、

「お久しぶりです!」

天草式十字凄教の魔術師・五和、そして

「いよう、カミヤンに一方通行、久しぶり」

陰陽術師の家系の能力者にして、上条のクラスメイト・土御門元春
がいた。

「土御門。」

「ん?」

因みに土御門は、突如上条&一方通行に、

「オラア!」

「ガフン！」

顔面ヒットされた。

「な……何するんだにやー？」

「いや、何となくムカついた。」

息びつたりの二人であった。

そんな上条達の前に五人の人物が現れる。

「オイオイ、こりやどうなってんだ!？」

霊界探偵・浦飯幽助が上条達の下へ現れる。

「多分、彼等も同じ考えでしょうね。」

赤い髪青年・蔵馬がそう言い、

「霊力とは違う変わった気があの四人に感じるんだが……」

幽助の同級生・桑原和真がステイル、神裂、五和、土御門を見てそう言った。

「それにしても、ココ真つ暗なのに周りはハッキリ見えるね。」

霊界案内人・ぼたんがそう言った。

「……………」

黒いコートを着た小柄な男・飛影は沈黙していた。

「なあ、お前等もこの状況に驚いてるのか？」

「え……あ、ああ……………」

幽助に問われた上条は戸惑いながらも素直に答える。

「何か、大変だな……………」

「ああ、全くだぜ。」

桑原と浜面は、いつの間にか意気投合し、

「……………何だア、テメエ？」

「……………フン、別に。」

一方通行と飛影は、親近憎悪と言つべきか、今にも喧嘩上等という

秀囲気であつた。

「やれやれ、誰かムードメーカーと呼ぶべき人物はいないんでしょ
うか？」

溜め息混じりに苦笑する蔵馬に神裂は、

「大変ですね。」

少し、同情する。

いつの間にか親睦を深めた彼等であつたが、

「「「「「！」「」「」

浦飯チームの四人は、突然何かを察知した。

「コイツは！」

「妖気!？」

「バカな、どれもS級以上だぞ！」

「しかも凄い数だぜ！！」

四人は戦闘態勢に入って構えるが、すぐに解かれる事になった。

「あれ、やっぱり誰かいる。」

今度は中学生くらいの着物を着た茶髪の少年を先頭に九人の集団が現れた。

それは関東妖怪任侠一家『奴良組』若頭・奴良リクオとその仲間達、そして陰陽師の花開院ゆらであった。

「若、どうしやす？」

「とりあえず、話しをしてみないと……」

「奴良くん、それホンマにするつもりか？」

そんな彼等の会話を聞いて蔵馬は、

「どうやら、彼等も同じ状況みたいですね。」

そんなこんなで、話しをする事になった彼等であった。

数分後、互いの状況を聞いた三組は、すぐに打ち解けた。

「つまり、ゆらだっけ？ オメエは、『鵠』って妖怪を倒すために、リクオ達と共闘してるってことか？」

「妖怪と手え組むのはしゃーないけど、これも人々を守るためや。

てかアンタ陰陽師で驚かんのか!？」

「いや別に？」

ゆらは、陰陽師の自分に驚かない幽助に逆に驚く。

「俺は土御門が陰陽師って聞いた時は内心信じられなかったけど、ゆらなら納得がいく。」

「確かにな。」

上条と一方通行は、ゆらと土御門を見比べそう言った。

「ちょっと、それは俺がゆらちゃんと比べて、陰陽師ばくないって言ってるのと同じじゃん!？」

「当たり前だろオ?。」

「だってそうだろう?。」

そんな会話をしながら歩いていると、リクオが何かを見つける。

第二話：幻想殺しと任侠一家と霊界探偵（後書き）

更なるメンバーが次回に！

第三話・銀髪の子と謎の女（前書き）

遂にあの人が登場

第三話：銀髪の侍と謎の女

空間の中を歩いていると、リクオが何かを見つけた。

「ねえ、あれって……」

『ん？』

そこには、銀髪の天然パーマの男、眼鏡を掛けた少年、チャイナ服の少女、同じ黒い制服を着た三人の男の六人が寝ていた。

「……………」

どうしようかと思ったが、とりあえず起こしてみる。

「おい、起きろ。」

幽助がそう言つと、

「誰だ、変な目覚まし掛けた奴。」

「今八時だろうが！ 少しくらい寝かせるバカヤロー！」

「銀さんも神楽ちゃんも五月蠅い。」

寝言で返事する三人。

と言つ事なので、

「「「起きろ!」「」」

幽助が銀髪を、一方通行が眼鏡を、飛影がチャイナ服を踏み付けた。

「「「んが!?!」「」」

踏まれてすぐに起きた。

「テンメ! 何しやがんだ!」

「そうアルよ! 折角のお昼寝の邪魔は許せないアルね!」

「そうですよ! 睡眠妨害で訴えますよ!」

「つーか、周りを確認してから寝てたのか?」

「「「へ?」「」」

幽助にそう言われた三人は、周りを見渡すと、

「あ、ホントだ。」

「真っ暗アル。新八、電気何処アルか?」

「いや、どう見てもそう言う状況じゃないでしょ!?! てか何時まで我が家気分!?!」

「.....気付いてなかったのかよ?」

すると、今度は黒服の三人も起きた。

「何だあ、随分と騒がしい」

「へ？」

すると、黒服で黒い髪の子と銀髪の子は、顔を見合わせる。

「「何でテメエがいんだアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

どうやら顔見知りのようだった。

この六人こそ、万事屋を営んでいる坂田銀時、志村新八、神楽の三人と真選組のトップの近藤勲、土方十四郎、沖田総悟であった。

「やっと目覚めたのね……全く、どれだけ起こしてもピクリとも動かないんだから……」

そう言って艶やかな着物姿の少女が現れた。

「何だオメエ？」

銀時にそう言われた少女は、こう言った。

「貴方達を呼んだものよ？」

「マジで!？」

「マジで。」

さてと、と言って少女は自己紹介をする。

「私の名は閃可^{せんか}。貴方達に頼みがあつてココに呼んだの。」

そう言うと、閃可は腰の刀を抜く。

「まずは、腕試しよ。上条当麻、浦飯幽助、奴良リクオ、坂田銀時！」

「来る！」

「構えとけよ！」

「わーってるわ、ボケ！」

「うん！」

閃可は右手から火球を放つも、

「効くかよこんなモン！」

上条が右手で打ち消した。

それを見た能力者&魔術師メンバー以外は驚きを隠せなかった。

「打ち消した!?!」

「弾くのではなく、打ち消すって!?!」

「何だあの能力!?!」

それを見た閃可は、

「流石は『幻想殺し(イマジンプレイカー)』!」

そのままリクオに刃を向ける。

「少年、受け取れ!」

近藤から刀を受け取ったリクオ。

「ハア!」

振り下ろされると同時に、リクオに変化が起きた。

ガキイイン、と刀と刀がぶつかり合う。

しかし、一同が驚いているのは、

「良い腕だな。」

「それがぬらりひよんの血か。」

リクオの体が白い長髪に170センチもある長身の青年に変わった事である。

「か………変わりやがった!?!」

「変化か!?!」

「性格まで変わってるんだけど………」

すると閃可は銀時に刀を向ける。

「オラア!」

すぐに銀時は腰の木刀を抜き取る。

「やるな。」

「どうも。」

そして、すぐに銀時から幽助へ攻撃を仕掛けるも、

「喰らいやがれ!」

幽助が右手の人差し指の先端から妖気を集中させていた。

「レイガアアアアアアアアアン!」

放つのは、十八番の大技・霊丸。

「クッ！」

すぐに霊丸を紙一重でかわす閃可。

浦飯チームのメンバー以外は驚きを隠せなかった。

「な……何だ、アリヤ!?」

「妖気だけでこれほどの威力が出せるなんて!？」

「ハア……ハア……流石は霊丸……凄い威力ね。」

「まあな。」

すると、閃可は刀を納めた。

「突然攻撃してゴメンナサイ。貴方達の力を知りたかったから。」

「で、そこまでやる理由は何だ？」

その問いに閃可はこう言った。

「私が『次元の破壊者』と呼んでいる人物を倒して欲しいの。」

「次元の……破壊者？」

「ええ。」

リクオの発言に閃可は頷く。

「彼は、私の幼馴染の親友で……と言っても私と幼馴染はまだ六歳で、その親友は十八歳だけど。」

「……随分、齡の離れた親友ですね。」

説明を聞いた神裂は、少し驚く。

「彼は、当時結婚を控えていたの。でも、彼の婚約者の女性が暴力団の起こした交通事故に遭い、帰らぬ人となった。」

「……とても穏やかな話しじゃねエな。」

一歩通行は呟きながらそう言った。

「そして彼は、その悲しみと憎しみが暴走し、幾つもの異世界を破壊しようとしてるのよ。」

「ソイツが『次元の破壊者』ってことか？」

「……ええ。」

閃可はさらに話しを続けた。

「そして、私は彼に対抗するべく、幼馴染と共に選ばれた異世界の住人に協力をして欲しいと考えたの。」

「それが、俺達ってことか？」

「そう言う事よ。」

「しかし、何故そこまでして彼は異世界を壊そうと？」

蔵馬の質問に閃可はこう言った。

「世界には、必ず『理』という物が存在するの。」

「まさか、ソイツの目的って!？」

「そう……死んだ婚約者を生き返らせる『理』を得るためよ。」

その言葉で、全員が驚愕した。

全ての話しを終えた閃可は、頭を下げた。

「お願い！ これ以上、世界を壊されたくないの！ 力を貸して！
！」

それを聞いた上条は、

「頭、上げるよ。」

「え……………」

「俺達と呼ばれた理由が分かった。だったら、ソイツの幻想をブチ殺してやるよ！」

右手の拳を握りながらそう言った。

「面白え、やってやるうじやねえか。ソイツのイカしたツラあ、ぶっ飛ばしてやるよ。」

幽助がそう言って右手の拳を左手の掌にぶつける。

「俺も、全ての『畏』をぶつけて、完膚なきまでに叩き潰してやるよ。」

リクオがそう言って腕を組む。

「じゃあねえな、やってやるよ。」

そう言って銀時は頭を掻く。

「有難う！ それじゃあ、今から私の幼馴染が呼んだ異世界の住民の代表者について説明するわ。」

第四話・マフィアの世界と魔導師の世界と死神の世界（前書き）

説明が始まります

第四話：マフィアの世界と魔導師の世界と死神の世界

閃可は突如、後ろの背景を大きなスクリーンにして映像を見せる。

「な、何だこりゃ!？」

「七つの地球!？」

驚く幽助と桑原に彼女はこう言った。

「この七つの内、貴方達の住んでいた世界、私はそれをこう呼んでいるの。まず幽助達の世界は『霊界探偵の世界』、リクオ達の世界は『百鬼夜行の世界』、上条達は『科学と魔術の世界』、そして銀さん達は『侍の世界』ってね。」

そう言った閃可は、一つ目の世界の代表者を紹介する。

「まずは、この世界よ。この世界では、並盛町と呼ばれる街に住むこの少年なんだけど……」

するとそこには、重力を無視したようなツンツン頭の少年が必死に走っていた。

「彼の名は沢田綱吉。勉強も運動も全くダメな少年で、通称は『ダメツナ』なんだけど、実は彼は先祖代々から続くマフィア『ボンゴレファミリー』の十代目ボスなの。」

「ま……マフィアって、あの洋画に出てくる麻薬とかを売ってるあのマフィアか!？」

「幽助の言ってることは過剰だけど……彼には、自身の所有し、家庭教師であるアルコバナーレ・リボンが放つ弾丸に使われる丸薬『死ぬ気丸』を使うことで、ハイパー化と呼ばれる姿と化すことが出来るの。その映像がこれ。」

するとそこには、額にオレンジ色の炎を宿したさつきとは別人のツナが映っていた。

「さ……さつきのガキとは思えねえ雰囲気だぜ……。」

「それだけじゃない、グローブの炎の噴出で空を飛んでいる。」

「そんな彼にはこんな技があるのよ。」

閃可がそう言うと、そこにはグローブから発する炎を相手にぶつか
るツナの映像を見て驚愕する。

「この技は、彼の武器『Xグローブ』を使った『X BURNER』
と呼ばれる技で、幽助の霊丸に匹敵する威力よ。」

「マジで！ スゲー！！！」

驚くどころか、ワクワクする幽助に上条達はこう思った。

「（バトルマニアかよ！？）」

またリクオにいたっては、

「（こいつも俺と同じ境遇を持ってることか……）」

自分と同じ境遇を持つツナに共感を持った。

「私はこの世界を『マフィアの世界』と呼んでいるわ。」

次に閃可は、『マフィアの世界』の説明を終えた後、次の世界の説明をする。

「次は、この世界。この世界は『ミッドチルダ』と呼ばれ、魔法が盛んになっていて、銃器などの物理兵器の使用を禁止している。」

「ん？ 魔法って……ステイルや神裂達が使う魔術と違うものなのか？」

上条がそう言うと、閃可はこう答えた。

「まあ、名前だけが違うだけで、殆どが似たようなものかな。因みに私が紹介したいのはこの人物。」

映像には、杖を持って空を飛んでいる白い服に栗色の髪の女性の姿があった。

「さっきのツナって奴みたいに飛んでるぞ！」

驚く桑原であったが、御坂がこんな事を言った。

「魔法に、女性って・・・もしかして『魔法少女』!?!」

それを聞いた銀時はこう言った。

「おいおい、そりゃアニメの観過ぎじゃねえか?」

「いや、彼女は立派な魔法少女よ。」

それを聞いた銀時は古典的なこけ方をしてしまった。

「彼女名は高町なのは、23歳。ミッドチルダにある組織『時空管理局』の武装部隊所属にして、戦技指導官を務める女性で、『エースオブエース』の異名を持つ。因みに怒らせると怖い。」

「スゲーな、んじゃコイツにも必殺技ってあんのか?」

期待する幽助に閃可はコレよ、と映像を見せた。

そこには、砲撃を撃ち込んだなのはの姿だった。

「スゲー! 何だあの技!」

「『デイベインバスター』・・・高町なのはの使う杖形デバイス『レイジングハート』のシューティングモードから放たれる技よ。」

「スゲーな! 俺の霊丸とガチで勝負してえ!」

闘争心を昂ぶらせる幽助に、殆どがドン引きし、浦飯チームのメンバーは呆れてしまう。

「私はこの世界を『魔導師の世界』と呼んでいるわ。」

最後に閃可は、『魔導師の世界』の次にある世界の映像を見せた。

「この世界では、異形の姿と化した悪霊『ホロウ虚』から死神が人々を守るために戦っている世界なの。」

「待てエエエエエエエエい！ 死神つて、黒いフードに大鎌を持った骸骨の事だろ!?!」

「それは人間のイメージよ。本来死神というのは、死した魂を導く存在なのよ。『黒いフードに大鎌を持った骸骨』っていうのは、人の恐怖心の産物よ。因みにこの世界の死神は、黒衣着物の侍の姿をしているのよ。」

銀時の素朴な問いを一蹴するように答えた閃可は、ある人物の映像を見せる。

そこには、黒い着物を纏い、巨大な出刃包丁のような刀を構えるオレンジ色の髪の少年がいた。

「彼の名は黒崎一護。霊力が強いのを除けば、普通の高校生だったけど、家族を虚に襲われた際に、死神・朽木ルキアから死神の力を貰い、それ以降戦いの世界に足を踏み入れてるわ。」

「“一つの大切なものを護る”から一護か……良い名ですね。」

一護の説明を聞いた神裂は、彼の名前に敬意を表した。

「因みに彼には、こんな事が出来るのよ。」

そう言うて閃可は、次の映像を見せた。

そこには、漆黒のコートのような着物を纏い、細長い刀身の『卍』型の鍔と柄尻に途切れた鎖の着いた全てが黒い日本刀を持った一護の姿であった。

「コレの名は『卍解』と呼ばれるもので、死神の刀『斬魄刀』の強化形態と呼べるもので、最初の『始解』から十年分の修行を経て発動させる事が出来るものよ。」

「マジすげえええええええええええ!!！」

『卍解』の説明を聞いた幽助は、感激のあまりに絶叫する。

「そして、これが彼の必殺技。」

そう言うつと閃可は、一護が斬魄刀『新月』から巨大な斬撃を放つ映像を見せる。

「これは一護の必殺技で、名前を『月牙天衝』と呼ぶわ。」

「ホントにスゲエな！早くアイツらに会わせてくれよ！」

期待が高まる幽助に閃可はこう言った。

「それじゃあ、説明も終わったし、今から貴方達に彼等の情報を頭の中に入れておくわ。」

「そんな事、可能なのか？」

「勿論、それじゃあ、目を瞑っというて。」

そう言われ全員は、目を瞑りながら二つの世界の情報を閃可から得たのである。

「しかしスゲエな、アイツ等相当な場数を踏んでやがるよ。」

「それじゃ、これから私の知り合いの世界に行くわよ。」

第五話：部屋分けと模擬戦の対戦カード

四組が着くと、そこには大きな屋敷が立っていた。

「デケエなあ、これオマエの家か閃可？」

「一応は、知り合いから借りてるといえば良いかしら。」

銀時の問いに閃可はサラッと答える。

ドアを開けると、そこには広すぎると言っても可笑しくないリビングがあった。

「かあ、広すぎんぜ！」

「マジかよ、これ俺等が使って良いのかよ!？」

驚く幽助と桑原であるが、

「良いのよ。困った時はお互い様だから。」

閃可はサラッとそう言った。

「それじゃあ、部屋分を行いたいんだけど良いかしら？」

「俺は構わないぜ？」

「俺も眠れるトコなら何処でも良いぞ。」

「俺も構わないけど。」

「僕も同じです。」

「じゃあ、こつしたんだけど。」

閃可は、何処からか持って来たホワイトボードに張られた張り紙を見せる。

そこには、こつ記されていた。

・ルームナンバー1
奴良リクオ

上条当麻

浦飯幽助

坂田銀時

・ルームナンバー2
青田坊

神楽

河童

・ルームナンバー 3

近藤勲

沖田総悟

黒田坊

・ルームナンバー 4
神裂火織

五和

毛倡妓

・ルームナンバー 5

志村新八

首無

桑原和真

・ルームナンバー6
御坂美琴

ミサカワースト
番外固体

氷麗

・ルームナンバー7
浜面仕上

滝壺理后

・ルームナンバー 8
花開院ゆら

蔵馬

土御門元春

・ルームナンバー 9
アクセラレータ
一方通行

飛影

・ルームナンバー 10
インデックス

打ち止め（ラストオーダー）

・ルームナンバー11
鳩

ぼたん

・ルームナンバー12（喫煙室）
ステイルⅡマグヌス

土方十四郎

「まあ、こんなところかしら。じゃあ、あとは好きにして。」
そう言って、閃可は台所に向かった。

それぞれ指定された部屋に入った十二組は、その部屋の広さに驚きを隠せなかった。

「スゲー！ 広すぎるぜ！！」

「マジで！ コレ使って良いの！？」

「広すぎるにも問題があるような・・・」

「まあ、良いじゃないですか？」

等の感想が漏れた。

因みにステイル・土方ペアの部屋はというと、

「オiiiiiiiiii！ ココもしかして、喫煙所か！？」

「まあ、嬉しい気遣いといえば嬉しいが・・・」

自分達の部屋が喫煙室である事に内心喜んでいた。

数時間後、部屋の内通電話で閃可に呼び出された一同は、彼女が作った料理を食べながら親睦を深め合った。

翌朝、全員が広間に集められ、閃可からこんな事を告げられた。

「模擬戦？」

「ええ、別世界の能力を肌で感じてもらうという事よ。」

幽助の疑問に即答で返した。

「確かにそれは、良い案ですね。」

「そんじゃ、対戦カードを組み込んでおいたわよ。」

そう言っつて背後のモニターに映像が映し出された。

そこには、神裂と首無の写真が映し出された。

「第一回戦、神裂火織 vs 首無。」

「え！？」

「成る程、ランダムというワケではなさそうだな。」

神裂は、イキナリの出来事に驚き、首無は閃可の思考に納得しがちであった。

「次に第二回戦、土方十四郎VS黒田坊。第三回戦は御坂美琴VS河童。」

「拙僧は、土方殿か。」

「ああ、宜しく頼むぜ。」

「え、私が!？」

「へえ、オイラが？」

驚く御坂とは対照的に、河童はマイペースであった。

一方の土方と黒田坊は、互いに一礼をする。

「第四回戦は一方通行^{アクセアラレータ}VS飛影。」

「ほう……ソイツは楽しめそうだな。」

「面白エ、やってやるぜ。」

一方通行と飛影は、互いに対戦相手を睨みながら闘争心の炎を密かに燃やす。

そしてモニターには、二組の写真が映った。

「最後に第五回戦、坂田銀時VS奴良リクオ。そして第六回戦、浦飯幽助VS上条当麻。」

「え〜と、僕が坂田さんと?」

「みてえだな、宜しく頼むぜ。それとそんな堅苦しくしなくても銀さんで良いぞ。」

「じゃあ、宜しく願いします銀さん。」

「そんじゃ、宜しくな上条。」

「ああ、宜しく。」

そう言って二組は、互いに相手の顔を見合わせた。

第六話：鋼線VS紐、女教皇、（前書き）

神裂VS首無、開始。

第六話：鋼線VS紐く女教皇く

「んじゃ、これから私が作った『超幻覚』のフィールドに行っ
て貰
うわよ。」

「オメエ、一体ナニモンだよ？」

六つのフィールドが用意され、模擬戦をするメンバーは、指定され
たフィールドに向かった。

残りのメンバーは、モニターからその様子を観戦する。

「それじゃあ、試合開始！」

遂に次元を超えた戦いが始まった。

第6フィールド……砂のフィールドでは、神裂と首無が戦闘態勢に入った。

「必要悪の教会所属・神裂火織、参ります。」

ネセサリウス

「奴良組本家所属・首無、何時でも。」

すると神裂は、愛刀の『七天七刀』の柄を右手に持ち、鞘を左手に持つ。

「『七閃』。」

そして技名と共に、刀を抜くと同時に地面が裂けた。

「!?!」

驚く首無は、すぐさま間合いを取る。

「（今のは、斬撃!? しかし、あの刀の長さで遠くの対象を斬れるのか!?!）」

全長二メートルもある『七天七刀』を見ながら首無は、神裂の戦い方を分析する。

「（『七閃』に気付き、即座に間合いを取るとは、どうやらこの勝負、簡単には終われないようですね。）」

神裂も首無の行動を見ながら、次の策を練る。

「（落ち着け、あの長い刀で高速の抜刀は不可能だ! 何か、何か

秘密がある筈だ。」

そう思い首無は、神裂の周囲を確認する。

すると、彼女の周りに、僅かに糸のような物が見えた。

「成る程、鋼線術を使った高速斬撃だね。 抜刀はあくまでワイヤ
ーを隠すためのフェイクということかい？」

そう言っつて首無は紐を両手に持って構える。

「まさか、『七閃』の正体にすぐに気付くとは……あの青年、
決して甘くないと思っていましたが、これ程とは……」

首無の予想以上の分析力に内心驚く神裂。

モニターから戦いを観戦する五和と鳩は、互いに驚きを隠せな
かった。

「オイオイあの姉ちゃん、トンでもねえ代物隠してたのかよ!？」

「凄い……女プリエステル教皇様と互角の勝負をするなんて。」

女プリエステル教皇様とは、当時天草式のトップだった頃の神裂の異名で、現在でも天草式では彼女の事をこの呼び名で呼んでいる。

「しかし、首無さんの戦いって、一体どんな戦法なんですか？」

疑問に思う五和に、鳩はニヤリと笑いながらこう言った。

「そりゃ、トビつきりスゲーもんだぜ。」

ステージ内では、神裂と首無の戦いが続いていた。

その時首無は、彼女にこんな事を聞いた。

「ところで、一つ聞いて良いかな？」

「何ですか？」

「さっき土御門氏がキミに“模擬戦に負けたらメイド服を着て貰う

モニターから戦いを観ていた土御門はニヤニヤ笑いながらこう言った。

「フフフフフ…… “ねーちゃんのメイド姿を拝みたい” と銀ちゃんとゴリチンがワクワクしてるから待ってなよねーちゃん。」

そんな彼の右手には、メイド服が握られていた。

「ねーちゃんが負けた証には、この『墮天使エロメイド』の衣装を着て貰うにゃー！」

ワクワクする顔でそんな事を言い出す土御門であるが、左手にはセーラー服を持っていた。

「いや、どうせならセーラー服も着せた方が……」

そしたら、今度は近藤がこう言った。

「先生、どうせなら俺はバニーガールが良いです。」

そう言っつてバニーガールの衣装を手にしていた。

「そんな場合じゃねえだろおおおおおおお！」

二人のマニアックなボケにツツコミを入れる新八であったが、

「私も着ようかな・・・」『大精霊チラメイド』。／／／／／

「何でそうなの!？」

本気でそんな事を考える五和に、さらにツツコミを入れたのであった。

第六話：鋼線VS紐く女教皇く（後書き）

スタイル

「……彼、ツツコミ以外は何か頼りになさそうなんだけど。」

神楽

「仕方無いアル、新八のスキルはツツコミだけアル。それを否定したら新八はタダの眼鏡アルよ。」

スタイル

「キミ、何気に酷いね。」

第七話：鋼線VS紐（弦殺師）（前書き）

遂に首無が、本領発揮です

第七話：鋼線VS紐く弦殺師く

紐を構え、戦闘態勢に入る首無。

「行くぞ。」

「（一体……どんな攻撃を！？）」

様子を窺いながら、『七天七刀』を構える神裂。

「“常州の弦殺師”首無……それが昔の僕の呼び名ぞ。」

遂に第6ステージの対決に決着が着く。

く鋼線VS紐く弦殺師く

「『畏』……発動！」

突如、首無の体から何かを感じ取った神裂は、すぐさま体勢を立て直す。

「（来る！！）」

すると首無は、フィールドの砂を紐で巻き上げ、砂煙の煙幕を作った。

「目暗ましか！？」

そう思った神裂は刀を構え、慎重に様子を見る。

すると煙幕から、首無が跳び上がって来た。

「！！！」

自身の後ろに着地した首無へ、すぐさま振り向く神裂であったが、

「貰った！」

しかし首無には胴体があっても、頭部が無かった。

「な！？」

驚く神裂であったが、後ろから突如声が聞こえた。

「『抜け首』とは、『轆轤首』の一種で、頭が胴体から離れて活動する妖怪だ。」

振り返るとそこには、首無の頭部が浮かんでいた。

「僕はその『抜け首』の一人だね。」

「（頭と胴体で別個だったとは！）」

首無の妖怪ならではの変則的な戦いに悪戦苦闘する神裂。

「クツ……このままじゃ……」

一端退こうと、後ずさりする神裂であったが、

「喰らえ……」

突如彼女の足元から、首無の紐が螺旋状に砂の中から出現した。

「しまった！（まさかさっきの砂煙は、目暗ましではなくこれを隠すための罠！？）」

神裂が気が付いたときには、既に遅かった。

「『殺取“螺旋刃”』！！」

首無の紐が渦を巻くように、神裂の体を命中させた。

「が……は……」

「これが、奴良組の戦いさ。」

モニターから観ていた魔術サイドメンバーは、驚きを隠せなかった。

「ば・・・莫迦な！ 神裂が！？」

同僚の敗北と相手のトリッキーな戦法に、驚愕するステイル。

「驚くことじゃねえよ。大体首無自身も、あの姉ちゃんが掛かったのが偶然みてえなもんだぜ？」

鳩がフォローするようにそう言った。

「しかし、あの短時間で策を練るなんて出来るもんなのかね？」

「近くの物や手元の道具も、使い方次第では立派な武器ですからね。」

「まあ、確かにそうだな・・・」

疑問に思っただけなのに、蔵馬が答えると、浜面も納得する。

一方フィールドでは、

「ハア……ハア……」

首無の策にはまり、大ダメージを受けた神裂。

「クツ……！」

立ち上がるうとするも、首無の紐が襲い掛かり、そのまま彼女を縛り上げる。

「な!？」

縛られた神裂は、再び地面に叩きつけられる。

「が……はっ……」

「もう止めなよ、女性を縛るのは好きじゃない」

そう言つて首無が彼女の顔を見下ろす。

何とか抜け出そうとする神裂であつたが、その瞬間だつた。

ミシミシ、と紐が徐々に締め上げてきたのだ。

「な!？」

「無駄だよ。その紐は捕縛癖のある女郎蜘蛛と、好きなら絶対に離さない毛倡妓の髪を編みこんであるんだ。暴れれば暴れる程徐々に締め上げる。」

自身の武器の説明をする首無に、神裂は抵抗できなかった。

「どうする、ギブアップするかい？ 続行すならそれでも構わないけど?」

首無の問いに、神裂はこう言った。

「いえ……私の負けです。」

「そうか、素直で助かつたよ。」

模擬戦・第6フィールド……結果は、圧倒的な実力で、神裂を追い込んだ首無の勝利。

ギブアップを聞いた首無は、すぐに紐を解いた。

「中々、良い勝負でした。お陰で良い教訓を得ました。」

「いや、僕も良い勝負が出来て良かったよ。ところで良いのかい?。」

「はい?。」

キョトンとする神裂に、首無はこう言った。

「彼との罰ゲーム・・・本当に受けるのかい?。」

それを聞いた神裂は、顔を真っ赤にして絶叫した。

「そうだったアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!?。」

第八話：侍 vs 僧侶 vs 暗殺破戒僧

モニターから二人の戦いを観る一同。

「土方さんの試合か……さて、どうでるんでしょうか？」

新八が疑問に思っても、横から沖田の声が聞こえた。

「イケエエエエ、笠坊主の旦那アアアアアアアア！ 土方をぶつ潰すせエエエエエエエ！！」

「アンタどんだけ土方さん嫌ってんだよ!!！」

応援内容についてツッコミを入れる新八であった。

侍 vs 僧侶 vs 鬼の副長

第5のフィールド……森のフィールドでは、土方と黒田坊が立

っていた。

が、突如土方が背筋に悪寒を感じ取った。

「!」

「ん、どうした？」

「い……いや、何も……（何か変な悪寒が!？）」

「風邪ではないのか？ だとすれば無理はせぬ方が良さぞ」

「安心しろ、コイツは武者震いだ！」

「そうか、なら此方も手加減は無用！」

「真選組副長・土方十四郎、参る！」

「奴良組本家所属兼特攻隊長・黒田坊、参る！」

“鬼の副長”と呼ばれし真選組の？と、“奴良組特攻隊長”と呼ばれし破戒僧の戦いが、遂に始まった。

モニターから観ていた近藤は、一瞬ある疑問を投げつけた。

「ん、待てよ？ 黒田坊殿は僧侶なのに戦いに人を武器を抜けても良かったっけ？」

「近藤さ〜ん、いい歳こいて破戒僧を知らないんですかい？」

すると沖田が信じられないという顔でそう言った。

「破戒僧？ 名にアルか新八？」

「破戒僧って言うのはね、肉食や不殺生などの仏の道を踏み外してもそれを恥じないお坊さんの事だよ。」

神楽も気になっていたが、新八が説明をして教えていた。

フィールド内では、土方と黒田坊が激突していた。

「ウオオオオオオオオオオ！！」

「ハアアアア!!!」

互いの武器をぶつけ合う二人。

「良いぜ黒田坊！ その武術、ウチの真選組に欲しいくらいの人材だぜ!!!」

「フツ、悪いが拙僧には、奴良組という組織がある。折角の誘いはお断りさせて貰うぞ。」

「そりゃ残念だぜ。」

会話をしながら間合いを取る二人。

「ウオオオオオオオオオオ!!!」

そして土方が迫ってくると黒田坊は、袖を掴むように右手を前へ向けた。

「行くぞ、土方殿！ 『暗器“黒演舞”』!」

次の瞬間、黒田坊の袖から、無数の武器が飛び出してきた。

「何!?!」

驚く土方は、すぐさまガードするが、全て受け切れず、そのまま吹き飛んでしまう。

「ガアアア!!!」

後ろの木にぶつかり、ズルリと倒れる土方に黒田坊はこう言った。

「スマンな土方殿。卑怯だと思っならそう思っても構わん。これが、“暗殺破戒僧” 黒田坊の戦い方なのでね。」

モニターでその光景を観ていた新八。

「う・・・嘘！ これって流石にずるいんじゃない!？」

「いや、新八君。戦いに卑怯という言葉は無い。あるのは、命の有無だけだ。だからアレも、立派な戦術の一つなのだよ。」

驚く新八であるが、近藤の珍しく侍らしい台詞に反論できなかった。

「って作者アアアア！ 珍しくってなんだよ!？」

「確かに、近藤さんがそんな侍らしい台詞を吐くのってありませんからね。」

「新八くんまで!？」

折角カッコよく言ったのに何だかバカにされた近藤であった。

一方のフィールドでは、

「ヘッ……やるじゃねえか……これくらいやって貰わねえと、面白くねえからな。」

そう言つて立ち上がる土方に驚く黒田坊。

「驚いたな。　まだ動けるとは!?!」

そんな彼に土方はこう言つた。

「例えどんな奴が相手だろうと、負けるわけにはいかねえんだよ。来いよ、本物の喧嘩、見せてやる。」

第八話：侍vs僧侶〜暗殺破戒僧〜（後書き）

沖田

「チツ、土方め。アレで死なねえか。」

新八

「アンタ、どんだけ腹ん中真っ黒だよ!？」

ステイル

「ホントに彼、応援する気あるのかい？」

神楽

「絶対ないアルな。」

第九話：侍 vs 僧侶 vs 鬼の副長（前書き）

グダグダな上に、短いです。

第九話：侍vs僧侶vs鬼の副長

「本物の喧嘩・・・か・・・面白い！行くぞ！！」

遂に二人の戦いに、決着が着く。

侍vs僧侶vs鬼の副長

最初に仕掛ける土方。

しかしその斬撃には、更なる重みがあった。

「グッ！！」

「まだまだあ！！」

その猛攻に反撃が出来ない黒田坊。

「そこだアアアアア！」

そのまま土方は、強烈な突きを放った。

「グアツ！」

攻撃を受けた黒田坊であったが、すぐさま体勢を戻し、反撃に入る。

「『暗器・黒演舞』！！！」

再び技を放つも、

「しゃらくせエエエエエエエ！！！」

土方は、そのまま正面から飛び込んだのである。

「な！？」

これには黒田坊本人も驚きを隠せなかった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

そして、渾身の一撃で見事黒田坊を倒した土方であった。

その様子を見ていた奴良組メンバーは驚きを隠せなかった。

「アイツ・・・黒を倒しやがった！」

「凄い!!」

「やはりこの勝負は、トシの勝ちみたいだな。」

そんな彼等とは違い、近藤は土方の勝ちを誰よりも信じていた。

因みに、沖田の場合は、

「チツ、土方め、死ななかつたか。」

本気でそう言っていた。

第九話：侍 vs 僧侶 vs 鬼の副長（後書き）

新八

「作者アアアアアアアアア！　いくら何でもこれは短すぎだああああああああー！！」

第十話：電気と水（前書き）

御坂VS河童です。

第十話：電気と水

第4のフィールド・・・水のフィールドでは、御坂美琴と河童が位置についていた。

「行くわよ、私の実力・・・見せてあげる！」

体から電気を発しながら戦闘準備万端の御坂に対し、

「フウ・・・水が無けりや、絶対負けると思ってたけど、水場が戦場ならイケるかな？」

マイペースに河童はそう言った。

〈電気と水〉

「行っけEEEEEEEEEEEE!!!」

電撃の槍を放つ御坂。

「ホイ。」

河童は水で作り上げた壁を盾の様にし、攻撃をガードする。

「な!？」

「“水場だから、電気を通せば勝てる”と思ったかい？」

驚く御坂に対し、河童は普段と変わらないペースでそう言った。

モニターでその様子を見ていた五和と新八。

「電気と水……若干一方的に勝敗が決まるようで違うものなのですね。」

「確かに、水使い⇨電気に弱いワケじゃないし、電気使いが水を被つたら、電気が使えなくなりますからね。」

「それにしても……河童の皿って、あんな卵の殻みたいな形だったアルか？」

最後にどうでも良い疑問をぶつけた神楽であった。

得意の電気が通用しないことに動揺を隠せない御坂。

そんな彼女に河童はこう言った。

「さつき実力を見せるって言ったよね？ オイラも本気で行くから、そっちも本気で来なよ。」

それを聞いた御坂は、一瞬ニヤリと笑い出す。

「フツ……良いわ、私の本気を……見せてあげる!」

そしてスカートのポケットからゲームセンターのコインを取り出し、

「これが……私の切り札……」

一度指で弾いた後、

「『^{レールガン}超電磁砲』よ!」

それに磁力で河童に向けて飛ばした。

その速度は、通常の3倍である。

「ぶっち貫けエエエエエエエエ!」

「おっと!」

それを見た河童も、すぐに回避した。

モニターからその様子を見て、

「ええええええええ！ 御坂さん何かスゲエ技だした!？」

「カッケーなあ・・・私もやりたいヨ。」

驚く新八とは逆に、羨ましがる神楽であった。

「電気によって生み出した磁力で、コインをあそこまで・・・」

蔵馬も新八程ではなかったが、『超電磁砲^{レールガン}』には驚いていた。

そんな二人は、まだ戦いが終わっていなかった。

「さあて、次で決めるわよ！」

そう言って御坂が2発目の『超電磁砲^{レールガン}』を撃とうとするが、

「やっと完成した。」

そう言って河童の頭上には、巨大な水の球体が出現した。

「え!?!」

これには御坂も驚愕する。

「河童忍法秘伝……」

「ちょ……ちょっと!?!」

「『ミズチ球』!」

「ギャアアアアアアアア!」

見事に巨大な『ミズチ球』を喰らい、水浸しになってしまった御坂。

「ま……負けた……」

「あゝ楽しかった。」

勝負は最後までマイペースな河童であった。

第十話：電気と水（後書き）

次回、怪物と怪物がぶつかり合う！！

第十一話：怪物同士（前書き）

白と黒の対決が始まります。

第十一話：怪物同士

第4のフィールド・・・街のフィールドでは、アクセラレータ一方通行と飛影が立っていた。

「テメエとは、何時かはこオなるとは思ってたけどなア・・・まさかこんなに早くなるたア、驚きだぜ。」

「それは同感だ。」

「そんじゃア・・・」

「手加減無しの・・・」

「「勝負だ!!!」」

こうして、『白い怪物』と『黒の邪眼師』の戦いが始まった。

「オラア！」

一方通行は、電極のスイッチを切り替え、ベクトルを操作した足で真っ向から跳び込み、右手で思いっきり殴りつける。

それを見た飛影は、回避した後、得意の剣技を振るいだす。

「ハア！」

「甘エ！」

しかし一方通行は、『反射』を使い、攻撃を防御する。

「チッ！」

弾かれた飛影であったが、すぐさま後ろに退き、体勢を立て直す。

「やるな……」

「お互いにな。」

モニターを通してその様子を観ていた他のメンバーは、驚きを隠せなかった。

すると、首無と神裂、御坂と河童が戻ってきたが、

「く……まさか……こんな屈辱を味わうとは……
// //」

「何で私も着なきゃならないのよ……// //」

神裂と御坂に限っては、かなりエロいメイド服を着ていた。

「なかなか良いだろう？ 『墮天使エロメイド』に『小悪魔フリメ
イド』、そして『大精霊チラメイド』!!」

そう言って何故か着替えていた五和を見せる土御門。

「「っておい！」」

すぐさまツツコミを入れた二人であった。

「で……勝負の方は？」

河童にそう言われ、モニターを観る四人。

「す………凄い……あの一方通行と……互角!？」

「最強のレベル5……コレほどの実力とは………」

「そんじゃア……次で終わりにしてやるよ!」

その瞬間、一方通行が踏み付けを行った瞬間、アスファルトの道路にヒビが入り、そのまま地割れを起こした。

「!?!」

その攻撃に飛影はすぐさま電灯へ移動するも、周りのビルの窓が地割れの影響でガラスが雨のように割れ、降り注いだのだった。

「チッ！」

飛影はすぐに回避しようとしたが、まさにその時であった。

「アハハハハ、ワザワザ的になってくれてどうもアリガト。」

そう言つて一方通行が四つの竜巻を背中に接続し、飛影に目掛けて飛んで来たのだった。

その姿は、まるで天使であった。

墮ちるところまで墮ちた天使が、翼を広げ、牙を向けて来たように。

「オラア！」

ベクトルを操作された拳が、見事に飛影の顔面にヒットし、ビルを突き抜けるように吹き飛んだ。

「クッ！」

「何だア？ こんなモンかア！？ もう少し本気だせよ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それを聞いた飛影は、額の鉢巻を取り外した。

その額には、第三の眼『邪眼』が大きく瞼を開けた。

「良いぜ……やってやる………」

「オイオイ飛影の奴、まさかアレを使うんじゃないやねえだろうな!？」

「そうなるほど追い込まれるという証拠ですよ。」

桑原と蔵馬は、そう言って飛影の戦いを観ていた。

「アレ?」

二人の話を聞いていた神裂も、それが何かが疑問に思った。

「行くぞ！」

飛影は、両手から炎を発し、そのまま拳で殴り付けた。

「『邪王炎殺煉獄焦』！！！」

「！！！」

一方通行は、すぐに『反射』に切り替えようとするが、飛影の速度には追いつけず、殴り飛ばされる。

「ガア！」

すぐに立ち上がり、体勢を立て直す一方通行。

しかし彼の眼はまるで笑っていた。

「…………しれエ…………」

「（何だ…………この凄まじい…………感覚は？）」

「最ッ高オに面白エぞオオオオオオオオ！」

「!!」

その瞬間、一方通行の背中から噴出するかのように、墨のような漆黒の翼が大きく広げられた。

「悪いが、こつから先は一方通行だ！ 負けても文句は無しだア！」

「ああ、良いぜ。 久々に楽しめそうだ!!」

こうして、二人の『怪物』の戦いは、第2ラウンドへと変わった。

第十一話・怪物同士（後書き）

続きます。

第十二話：BLACK&WHITE（前書き）

久々に更新します。

第十二話：BLACK&WHITE

「うおおおおおおおおおおお！」

「ハアアアアアアアアアア！」

アクセアレータ
一方通行の翼と飛影の炎。

二つの『漆黑』がぶつかり合う。

どちらとも互角・・・まだ勝負は続いていた。

BLACK&WHITE

「何っー戦いしてんだよ!？」

「レベル越えてますね」

驚く桑原とは対照的に蔵馬は呑気にお茶を飲んでいた。

「いや、冷静になりすぎですよ！ アンタもう少し驚けよ!!！」

「いや、そんなオーバーなりアクションが出来ませんので」

「オーバー扱い!？」

余りにも冷静な蔵馬の発言に驚きを隠せない新八であった。

「ウオオオオオオオオオ！」

「ハアアアアアアアアア！」

あまりにも激しいを抜く戦いを繰り広げる二人。

「チツ！」

「クソがッ」

体力の消耗の激しくなり、二人は息が上がっていた。

「ハア…………ハア…………」

「ハア…………ハア…………」

アクセラレータ
一方通行は首の電極に手を当てる。

脳にダメージを負っている彼は能力をフルに使えるのは30分が限界であるため、好き勝手な戦闘は出来ないのだ。

「（後…………10分つてところかア…………上等だぜ…………）」

「そう思いながら飛影を見る。」

「（幽助以来だ…………此処まで良い勝負が出来たのは…………）」

「そう思いながら飛影もニヤリと笑った。」

「お互いに……負けられない理由があるみたいだな……」

「当たり前だろオが……俺には、負けられない理由があんだよ。だから……絶対に負けられねェンだよ！」

その瞬間、一方通行の翼が墨のような漆黒から雪のような純白に変わり頭上には同色の輪が浮かんでいたのだった。

「な……なななな何だあの翼はアアアアアアアアアア！」

「凄い……あの姿は……まるで……『天使』だ」

一方通行の翼に驚きを隠せなかった桑原と蔵馬。

「あの翼は……本当に……『科学サイド』が生み出したモノなんですか!？」

「まるで……魔術を施しているようだ……」

神裂もステイルも、その光景に言葉を失くした。

「アレが……一方通行の……第一位の真の力だって言うの!？」

「マジかよ!？」

「むぎのが第四位になる程の理由……何か分かった気がする」

無論、『科学サイド』メンバーも驚きを隠せなかった。

「コイツで決めるぜ……」

「ならば……本気を出さんのは失礼のようだな!」

そう言つて飛影は剣に妖気を通し、そこに漆黒の炎を召喚する。

「ハアアアアア．．．．．『邪王炎殺剣』！！」

「うおおおおおおおおおおおおおお！！」

「はああああああああああああああ！！」

白い翼と黒い炎．．．遂に互いの『切り札』を放つた一方通行と飛影。

すれ違い様に反対方向の位置に立つ二人。

「．．．．．」

そして次の瞬間、ボタンと互いに倒れたのである。

つまり、引き分けであった。

「ひ……引き分け!？」

「ひ……飛影がここまで!？」

「見事な戦いですね」

飛影が倒れた事に驚きを隠せない桑原とぼたんとは違い、冷静に判断する蔵馬。

「あの……一方通行が……引き分けで!？」

「アイツ……強すぎる!？」

『科学サイド』のメンバーは、一方通行が引き分けになるといふことに驚きを隠せず、

「本当に彼の翼は科学で生み出された能力なのでしょうか？」

『魔術サイド』の神裂は未だに翼に驚きを隠せなかった。

「兎に角、運びますか。 桑原君」

「おつよ」

すぐにフィールドに向かった蔵馬は飛影、桑原は一方通行を運んだ。フィールドから出た後、二人からユックリと下ろされる飛影と一方

通行。

隅に座った飛影はすぐさま眠り、ソファに座った一方通行は、

「お疲れ様ってミサカはミサカは缶コーヒーを渡してみたり」

「・・・・・・・・・・ありがとうな」

打ち止め（ラストオーダー）から渡された缶コーヒーを飲んだのであった。

第十二話：BLACK&WHITE（後書き）

次回、リクオVS銀時&上条VS幽助！

第十三話：ぬらりひよんVS白夜叉&幻想殺しVS霊界探偵（前書き）

久しぶりの投稿！

主人公各のバトルです。

第十三話：ぬらりひょんVS白夜叉&幻想殺しVS霊界探偵

「もうすぐリクオ様の試合……」

「この勝負、絶対に若が勝つぜ！」

「そうとは限らん」

「あの銀時という男、木刀を使っているとは思えない戦法の持ち主だからな」

などと奴良組のメンバーはモニターを凝視していた。

「ウラアアアア！」

「うおおおおお！」

ぬらりひよんの孫と白夜叉。

二人の剣劇はさらに加速した。

「オラあ！」

「フン！」

銀時が薙ぎ払いをするが、リクオはかわし、逆に斬り上げをするも銀時にかわされる。

「へ、やるじゃねえか！」

「アンタもな」

競り合いから距離を取った二人。

互いにニヤリと笑いながら刀を構えていた。

〜当麻VS幽助〜

第1のフィールド・・・『大地のフィールド』では、上条と幽助が互いに構えていた。

「行かせ幽助」

「何時でも良いぜ！」

能力者と妖怪。

全く異なる能力を持つ二人は互いに走り出し、

「うおおおおおおおおお！...！」

拳を握りながら思いつきり撃ち込んだ。

バキツという音と共に、互いの顔に相手の拳がめり込んだ。

「ぐっ」

「くっ」

一度よろめくが、すぐに体勢を立て直し、

「うおおおおおおお！」

「おらあああああ！」

再び拳を突き出した。

再びよろめく二人であったが、すぐさま距離を取った。

「（いつ痛く・・・こんなに強え一撃、生まれて初めてだぞ！）」

科学と魔術の戦いに足を踏み入れた上条にとっては、幽助はそれ以上の強さであり、

「（結構良い一撃じゃねえか。コイツは禪締めて掛かんねえとな）」

妖怪や能力者との戦いを繰り返した幽助にとっては、上条はその中に入る実力者だと認識していた。

「行くぜ！」

すると幽助は、右手の人差し指を鉄砲のように構え、

「レイガアアアアアアアアアア！」

必殺技の『霊丸』を放った。

「喰らうかよ！」

上条はすぐさま右手を突き出し、無効化させた。

「おいおい、まさかと思って試したけど、本当に無効化出来るのかよ」

「まさかそこまで威力の高い技が出せんのかよ」

互いに相手の能力を見て、更に身構える二人。

（控え室）

映像を観ながら今の状況に驚く一同。

「す……スゲエ……」

「リクオ様……楽しんでるようだ」

「銀さんも楽しそうですよ」

まるで戦いを楽しんでいるリクオと銀時に、奴良組メンバーや万時屋メンバーは驚きを隠せないでいた。

「フン、幽助め……久しぶりに手応えのある奴に会えて楽しんでい
やがる」

「みてえだな」

「彼らしいですね」

浦飯チームメンバーは、楽しんでいる幽助に呆れるつつあるが、

「アイツ……何か楽しんでるわね」

「だろオナ。 殺し合いでも何でもねエ、ただの試合だからな」

楽しそうな顔をする上条を観て、苛立ちを見せる御坂に、一方通行
は溜め息混じりにそう言った。
アクセアレータ

だが彼等は知らなかった。

幽助とリクオは、この戦いで新たな力を得る事を…

第十三話：ぬらりひよんVS白夜叉&幻想殺しVS霊界探偵（後書き）

次回、魑魅魍魎の斬魄刀

第十四話：魑魅魍魎の斬魄刀（前書き）

リクオの新たな力、遂に登場！

第十四話：魑魅魍魎の斬魄刀

模擬戦が始まる前、リクオは夢の中にいた。

それも、何にもない草原だけの世界に。

「何だ、此処？」

リクオはそう言いながら周りを見渡す。

すると、あるモノに注目する。

「ん？」

それは、雪のように白い着物を身に纏った長い銀髪の女性であった。

「奴良リクオ様ですね？」

「ああ…アンタは？」

訊ねられたリクオは、女性に名前を問うが、

「私ですか？ 私の名前は　　です」

「…！！（聞こえない？）」

まるでノイズが入ったように、女性の名前が遮られた。

「どうやら、私の声が届いていないようですね」

そう言って女性は、ゆっくりと瞼を閉じた。

魑魅魍魎の斬魄刀

「　　！！」

一瞬、リクオは夢の事で気を取られてしまったが、すぐさま距離を取り、刀を構える

「（何だ？　一瞬誰かと話してたような…）」

一体何が起きたのかが分からないリクオであったが、そんな暇を与えない銀時の猛攻が続く。

「クツ！」

「オラオラオラア！」

まったくすきを与えない銀時。

「オラアアアアアアアア！」

さらに強力な一撃を喰らい、リクオは吹き飛んでしまう。

「ガア！」

吹き飛ばされ、そのまま倒れてしまつりクオ。

「く……あ……」

「悪いなりクオ。　この勝負、俺の勝ちだな」

不適な笑みを見せる銀時。

果たして、リクオは銀時に勝てるのだろうか。

一方の上条VS幽助戦では…

「（異能を打ち消す能力者か……でも………）」

幽助は、再び走り出し上条に接近する。

「な!？」

その異常を超えたスピードに驚きを隠せない上条。

「（マジかよ！　どんな速さで動いてんだよ!?!）」

上条当麻は、今まで戦った相手の中で様々なタイプの人間を見てきた。

世界中で20人しかいない聖人の神裂や最強のレベル5の称号を持つ一方通行アウセアラクタのような当時から能力チカラを得た“生まれつきタイプ”、一つ

の技に長けた土御門のような（天才タイプ）、そしてレベル1から自力でレベル5になった御坂のような“努力家タイプ”なら分かる。しかし、幽助のような“戦いの中で成長するタイプ”の相手は、生まれて初めての出来事である。

幽助は、素早い動きから懐に入り、左手で上条の右手を強く握り、

「取った！」

そのまま右手で、霊丸の構えを取る。

「飛び道具系の技は打ち消せても」

霊丸を撃とうとしたその時であった。

「！？（霊丸が……霊丸が撃てない！？ どういう事だよ！？）」

妖気が放てなかったのだ。

幽助の作戦は、“右手を使わせない用に強く握り、その状態で霊丸を放つ”という作戦であったが、右手を握った瞬間に能力を無効化されたのだ。

「（おいおいマジかよ！？ 能力者に触れるだけでも無効化出来るのかよ！？ 何なんだよコイツ！？）」

焦りを見せた幽助に、上条は右手を振り、幽助の拘束を振り払うと、

「ウオオオオオオオオ！」

そのまま右手で幽助を殴り飛ばした。

「う……浦飯がふっ飛ばされた!？」

「能力者自身に触れたら……！」

「能力そのものを封じれるのか!？」

上条の能力に、浦飯チームメンバーは驚きを隠せなかった。

「いくら幽助でも、能力の無効化はやばいんじゃない?？」

「で、でもよう、浦飯には身体能力があるじゃねえか」

「奴が鈍っていなければな」

心配するばたんに桑原がそう言うが、飛影からそう言われたため冷汗を掻いた。

一方のリクオは、

「クソ……」

「おいおい、さっきまでの威勢は何処いったんですかコノヤロー」

「（これほど差があるなあ……これが戦闘経験ってヤツか？）」

ポロポロの身体を起こし、刀を構えるリクオ。

「（どうすれば……）」

悩むリクオであったが、

『リクオ様』

「!?!」

その時、夢で見えていた長い銀髪の女性が現れた。

「アンタは!?!」

『アナタはまだ私の名前を呼んでいない』

「名前!?!」

『私の名を呼び、己の眠りし力を解放するのです』

その瞬間、リクオの動きが止まった。

突然の事に驚く銀時は、木刀を構える。

『全ての妖怪を治める百鬼夜行、それを束ねる魑魅魍魎の主に対応しき力………叫べ、我が名を!』

その瞬間、リクオの眠りし力が覚醒し、

「映せ『鬼纏姫』!」

凄まじい光が放たれた。

「!？」

銀時は、その光景に驚きを隠せなかった。

光が晴れると同時にリクオの手には、三日月を模した鍔に柄には鎖で繋がれた菱形の枠の中に「畏」と描かれた装飾が突いた日本刀が握られていた。

「行くぜ銀時、コイツが俺の新しい力・斬魄刀の『鬼纏姫』だ」

遂に、戦いはヒートアップする。

第十四話：魑魅魍魎の斬魄刀（後書き）

次回、魔族の『畏』

第十五話：魔族の『畏』（前書き）

幽助にも変化が！！

第十五話：魔族の『畏』

斬魄刀『鬼纏姫^{まといひめ}』を解放したリクオ。

それを観ていた閃可はニヤリと笑いながらこう言った。

「遂に目覚めたのね、死神の力が」

魔族の『畏』

「さくせ……」

するとリクオの姿は一瞬で消え、

「よっ」

「な!？」

いつの間にか銀時の懐にいた。

「ハアッ!」

「グッ!」

リクオの斬撃を受け止めた銀時であったが、

「どうした? いつの間にか威勢がなくなったぜ?」

「クッ!」

するとリクオは距離を取ると、刀身を地面に刺す。

「『暗器・黒演舞』」

その瞬間、地面から幾つもの武器が出現し、銀時を襲つ。

「クソッ!」

かわしきれず、幾つもの傷を追つ銀時。

「今のは、拙僧の黒演舞！？」

「何故若が！？」

黒田坊は、自身の技を使うリクオに驚く。

他の奴良組メンバーも、これには驚いた。

「成る程、アレがリクオの斬魄刀の能力か……………」

閃可はそう言って分析を行っていた。

リクオ本人は、刀を構え、

「いくぜ」

『明鏡止水』による瞬間移動で、銀時の懐に飛び込み、彼の喉元に刃を突き立てた。

「!?!」

これには銀時も驚きを隠せなかった。

「まだやるか？」

その言葉の意味に銀時は、

「いや、降参だ」

刀を納めたのであった。

坂田銀時VS奴良リクオ…勝者・奴良リクオ。

一方の上条VS幽助の戦いは、

「ウオオオオオオオ！」

攻撃にキレが無くなった幽助は、我武者羅に拳を振るった。

上条は、そんな幽助の攻撃をかわしながら攻撃の隙を探っていた。

「クソ！ 全然当たらねえ！！！」

徐々に攻撃が鈍りだす幽助に、

「ウオオオオオオオ！」

上条が一撃を叩き付けた。

「浦飯の奴、攻撃にキレが無くなってやがる！」

「上条君の異能の無効化で動揺してるんだ」

「あのバカが！ 油断するからこんな事になるんだぞ」

桑原達も驚きを隠せなかった。

「（そろそろか……）」

しかし、閃可は何故か冷静であった。

「（クソッ！ 霊丸が効かねえってことは、霊光波動拳が効かねえつてのと同じじゃねえか！！）」

徐々に焦りを見せる幽助。

しかし一瞬、彼の体に変化が起きた。

「ん？ 何だ？」

まるで煙のようなモノが体から噴き出てきたのだった。

「（まさか……いや、確かめるしかねえ！！）」

すると幽助はゆっくり目を閉じ、拳を下ろした。

「（何だ……一体？）」

上条本人も窺いだす。

するとその時、

「ウオオオオオオオオオオオオ！！」

幽助の体から、煙のようなモノが一気に噴出した。

「な、何だ！？」

動揺を隠せない上条であったが、煙が晴れると同時に

「な！？ 嘘だろ！？」

目の前の出来事に驚きを隠せなかった。

そこには、腰まで伸びた髪に隈取のような青い模様、そして肌の色が褐色に近い幽助の姿であった。

「どうやら、これが俺の新しい力みてえだな」

リクオ達の『百鬼夜行の世界』の妖怪達の持つ力『畏』によって、幽助は新たな力を得たのであった。

「何だよ、それ!？」

驚きを隠せない上条に幽助はこう言った。

「悪い、上条。上手く右手で消してくれよ」

「え？」

その言葉にキョトンとする上条であったが、

「多分、手加減は出来ねえぜ!」

「!!!」

幽助が放った霊丸を目にして、咄嗟に右手で打ち消した。

イメージブレイカー

「ハア……ハア……ハア……トンでもねえ技だぜ。
これ程とはな」

そうやって上条は周囲を見ると、自分のいる位置以外が殆ど吹き飛んでいたのである。

「スゲエな、幽助」

疲れて眠っている幽助に上条はそう言った。

「俺の負けだな、コリヤ」

上条当麻VS浦飯幽助…勝者は幽助となった。

その光景を観ていた浦飯チームのメンバー。

「あの野郎、またトンでもねえ力あ手にしやがって！」

「フツ、彼らしいですね」

「久々に楽しめそうだ」

そんな中閃可は、

「斬魄刀を手にしたリクオと『畏』を手にした幽助……あとは上条だけね」

そう言ってニヤリと笑った。

果たして、その意味とは？

第十五話：魔族の『畏』（後書き）

次回・Wの参上／新たな仲間登場

第十六話：Wの参上／新たな仲間登場（前書き）

新たな仲間登場です。

第十六話：Wの参上／新たな仲間登場

模擬戦も終わった翌日、全員が集まった。

「今回の模擬戦でとりあえず判明した事は、リクオと幽助にそして当麻の三人に異世界の能力チカラが使える素質があることだ」

「「「エエエエエエエエエエエエエエエエ！？」」」

これには幽助、リクオ、そして上条が驚いた。

「いや、当麻は兎も角、幽助とリクオは気付いてなかったのか？」

Wの参上／新たな仲間登場

「まずリクオだ。アナタには死神の能力の一つである『斬魄刀』、そして幽助には『百鬼夜行の世界』の能力『畏』おそれが発動されている」
それを聞いたリクオは自分の腰に差した刀・鬼纏まといひめ姫を見る。

幽助もまた、模擬戦での出来事を拳を見ながら思い出す。

「でも、閃可さん？ 上条さんは一体どんな素質が備わっているのでしょうか？」

上条は手を挙げながら質問すると、閃可はキツパリ答えた。

「仮面ライダー」

「「「「はい？」「」「」」

その答えに全員がキョトンとなった。

「すみません、もう少し分かり安くお答えできないでしょうか？」

上条がそう言ったその時、

「イツテ〜、タイミング良く出て来いって言われても流石に無理があるだろ！」

「翔太郎君、声が聞こえてるよ！」

「いや、もう遅いよ」

「以下同意」

「へ？」

突然の声に全員が振り向いた。

そこにはソフト帽を被ったスーツ姿の青年にラフな格好をした髪をクリップで留めている青年、ポニーテールで動きやすい格好の女性、そして赤い革製のジャケットと赤いズボン姿の青年が現れた。

「ちよつとオオオオオオオオ！ 何イキナリ出てきてるのオオオオオオオオ！？」
「まだ登場までは早すぎるよー！」

「いや、そうは言われてもよ」

閃可とソフト帽の青年が口論みじた会話をするも、

「え〜と、そちらの方々は何者でしょうか？」

そう言うとソフト帽の青年、クリップの青年、革ジャンの青年、ポ
ニテール女性の順番で自己紹介が始まった。

「おっと失礼。俺の名は左翔太郎、探偵だ」

「僕は相棒のフィリップ」

「風都署超常犯罪捜査課の照井竜だ」

「私はその妻兼探偵事務所所長の亜紀子です」

それを聞いた上条は、閃可に再び問い出した。

「あの、この方々と俺の素質の関係は？」

その問いに閃可は分かり安く説明をした。

「仮面ライダー、世界を危険に陥れようとする怪人たちに立ち向かう戦士……言わば守護者みたいな存在で、当麻にはその仮面ライダーに変身できる素質があるの」

「マジですか！ 上条さんはこれでもヒーローに憧れてました！」

「凄い反応ね」

嬉しそうな反応をする上条に、閃可は呟く。

「それで、どうやって変身するんだ？」

「これよ」

閃可は上条にあるモノを投げ渡した。

「おっと……ん？ USBメモリ？」

「後のことは彼等に聞けば分かるわ」

そう言って説明役を翔太郎達に任せた。

「んじゃ、説明するぜ」

何処からか持ち出したホワイトボードにメモリの説明を図で示す翔太郎。

「コイツは『ガイアメモリ』ってな、コイツは一見USBメモリのように見えるが、実は地球のあらゆる『記憶』を宿している。そしてこのメモリを使った人間は、超人的能力を持つ怪物・ドーパーントに変身するんだ」

「人が怪物に!?!」

「まさか閃可、アナタは上条当麻にその怪物に変身しろと!?!」

神裂の疑問に翔太郎が答える。

「全く、早とちりなお嬢さんだな。今から続きを説明するぜ」

そう言っつて翔太郎はあるモノを取り出す。

「コイツはガイドドライバーって言っつて、こいつに付いているスロットにメモリを差し込むことで、メモリの力を制御できる代物なんだ」

「そしてこのメモリとドライバーを使っつて変身して戦う戦士を仮面

ライダーと呼んでいる」

先程渡されたメモリを見ながら、上条は深く考えた。

「じゃあ、俺もその仮面ライダーになれるってことなのか？」

「そう言うことだ」

「しかし仮面ライダーに変身できると言っても、今の君の戦い方やドーパントには勝てない筈だ」

フィリップの言葉に、どれだけ強いんだよとドーパントの恐ろしさを想像してしまう上条。

「そこでだ。上条当麻、俺の下でライダーとしての特訓をしねえか？」

「特訓？」

「そうだ。まずは体力勝負で負けるわけにはいかないからね」

ソレを聞いた上条は拳を強く握り締め、

「俺、やります。いや、やらせてください！」

それを聞いた翔太郎は、サムズアップをする。

「決まりだな！」

「ん？でも、俺やリクオは誰に付けば良いんだ？」

「あ、そう言えば」

幽助とリクオの疑問に閃可は答えた。

「安心して、既に来てるわ」

「どうい」

言いかけた幽助であったが、突如気配を察知し、すぐさま振り向いた。

「まさか、気配だけで気付くとはな」

そう言ってバンダナを付けた黒髪に背中に七本の鎌を背負った少年がいた。

その後ろに赤い羽織の中世的な顔の青年、亀のような外見の異形がいた。

「リクオと同じ世界から来た、遠野妖怪・カマイタチのイタクだ」

「同じく、天邪鬼の淡島だ」

「オイラは沼河童の雨造」

遠野妖怪のメンバーが三人現れた。

「話しは聞いている。お前が浦飯幽助だな？」

「ああ」

「俺はこれからお前の教育係りになる事になった。ビシビシ鍛えるつもりだから、手は抜かねえぞ」

「そうしてくれ。そっちの方が面白えからな」

幽助のヤル気満々の表情に奴良組メンバーは若干引いた。

「若！」

すると、黒いフードを被った2mもある長身に刀を所持した青年が現れる。

「猩影（君）！？」

それは奴良組幹部の一人・猩影であった。

「話しは聞いてます、俺も若や皆に付いて行きますぜ」

それを聞いて、リクオは答える。

「頼むよ、猩影君」

「はい！」

すると閃可は、何かを思い出したようにこう言った。

「リクオは暫らく待ってくれる？」

「え？ 僕は別に良いですけど」

「よし、じゃあ特訓は明日行っわよ」

そして翌日、上条と幽助そしてリクオの特訓が行われるのであった。

すると銀時は、ふと疑問に思った。

「なあ、俺にも素質ってあるのか？」

それを聞いた閃可は、サラッとこう言った。

「特に無い」

「ガアアアアアアアン！」

思いっきり落ち込んだ銀時であった。

第十六話：Wの参上／新たな仲間登場（後書き）

次回、三人の特訓

第十七話：三人の特訓（前書き）

久々の投稿です。

第十七話：三人の特訓

上条当麻、浦飯幽助、そして奴良リクオは、特別な鍛錬場で修行を開始した。

果たして、三人は新たな力を使いこなせるだろうか……

三人の特訓

（リクオ篇）

奴良リクオは現在、岩場のフィールドにいた。

「一体誰なんだろう？」

講師が来ないため、どんな人物が来るのかが聞かされていないリクオ。

すると、後ろから声を掛けられた。

「キミが、奴良リクオ君だね？」

「あ、はい。　そうですけど……」

名前を呼ばれたリクオが振り返ると、そこには長い白髪に黒い和装に白い羽織りを来た穏やかそうな男性がいた。

「俺は君等で言う『死神の世界』から来た、浮竹十四郎だ。　閃可という子に頼まれて、キミの修行を見て欲しいと頼まれたんだ」

「そうでしたか、よろしくお願いします！」

「よし、まずは斬魄刀の説明からするよ」

フィールド場から図書館に場所を変えたりクオは、浮竹から斬魄刀の指導を受けていた。

「良いかい？ 斬魄刀とは、死神の魂から生み出された武器で、皆名前とその本体を持って生きているんだ。無論、一人ひとりによって特性が違う部分もある」

「魂から……」

「そう、死神は斬魄刀の能力を理解する事で初めてその力を解放できるんだ。中にはそれを理解できずに道具扱いする者もいるけど」

「あ……」

この時リクオは、夢の中で『鬼纏姫^{まといひめ}』の本体と出会っていたため、それがどう言う意味かがすぐに理解できた。

「つまり、僕の前に現れた銀髪の女性が鬼纏姫^{まといひめ}の本体で、僕の魂の一部そのものなんですな！」

「お、理解が早いね。それじゃすぐに鍛錬場に移って実践だ。無論、君自身の能力なしで斬魄刀の能力だけで戦ってもらおうよ」

「はい！」

こうしてリクオは、浮竹と共に鬼纏まといひめ姫の能力を理解するために、鍛錬場に移動したのであった。

（上条当麻篇）

上条当麻は、草原のフィールドで翔太郎と組み手をしていた。

探偵修行で護身術のイロハを叩き込まれた翔太郎の体術に身体が追いつけず、翻弄される上条。

「グッ！」

「オラア！」

「ぐあー！」

回し蹴りを喰らい、吹き飛ばされる上条にフィリップはこう言い出

す。

「成る程、上条当麻。　どうやらキミは、自分より身体能力の高い相手に勝った経験は無いね？」

「!?!」

凶星を突かれて驚きを隠せない上条。

「確かに……………そうですけど……………」

実は上条は、記憶を失う前は聖人である神裂に負けた経験があり、記憶を失った後も殺しの技を徹底的に磨き上げた土御門、そして神裂と同じ聖人である『神の右席』の一人・後方のアツクアと言った身体能力が非常に高い相手に敗北した経験がある。

「まずキミに必要なのは、身体能力の向上だ。　いくら『幻想殺し（イマジンプレイカー）』でも、身体能力のみが武器の相手と戦う時は無に等しいからね」

「う……………ごもつともです」

「それで、どうするんだフィリップ？」

「翔太郎はジョーカーに変身して彼と戦ってくれ。　そこから僕が彼に合わせた戦い方を見つけるよ」

「分かった。　頼むぜ相棒」

【JOKER】

そうやって翔太郎は、ロストドライバーのスロットにメモリを挿入する。

「変身！」

【JOKER】

次の瞬間、翔太郎の姿がW型の銀色の触覚に赤い複眼、そして黒いボディの戦士に変わった。

その名は、仮面ライダージョーカーである。

「か……………カツコイイ！」

見惚れてしまう上条であるが、

「おい、当麻。見とれるのは勝手だが、修行にも気合入れろよ」

「あ、はい！」

ジョーカーにツッコまれ、我に返ったのであった。

果たして、フィリップが見つけた上条に合わせた戦い方とは！？

浦飯幽助篇

浦飯幽助は風のフィールドで、イタクと模擬戦を行っていた。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

「オラオラオラオラア！」

鎌と拳がぶつかり合い、互いに距離取る二人。

「成る程な、相当な修羅場を潜ってるようだな」

「へん！ 伊達にあの世は見てねえぜ？」

二度の死を経験した幽助にとって、命を賭けた戦いは日常茶飯事であつた。

「兎に角、俺は自分の『畏』の属性を知らなきゃならねえんだろ？」

「ああ、だからこうやって模擬戦でさっきの戦いの記憶を呼び起してるんだろっが」

「身体で聞くってやつか、上等じゃねえか！」

「ウオオオオオオオオオオ！」

「オラアアアアアアアア！」

因みにこの戦いは、約三十時間も続いたのであった。

果たして、幽助は自分の『畏』の属性を知ること出来るのか？

第十七話：三人の特訓（後書き）

次回・魔導師とマフィアと死神との出会い

本編での三人の修行は、彼等の回想シーンという形で書きます。

第十八話：魔導師とマフィアと死神との出会い（前書き）

魔導師、死神、マフィアの登場です。
重要さんのネタを少し入れてます。

第十八話：魔導師とマフィアと死神との出会い

閃可が翔太郎と照井を呼び出す。

「何だと!？」

驚く翔太郎とは対照的に冷静な照井に彼女はこう言った。

「一刻も早く向かって欲しいの。丁度良い挨拶代わりになるけどね」

果たして、閃可の言葉の意味とは？

閃可の幼馴染・真之介は、『死神の世界』、『魔導師の世界』、『マフィアの世界』のメンバーと共に健康ランドからの帰りであった。

「ん、良い湯だったぜ」

「ホントでしたね」

「うんうん」

黒崎一護達は温泉で温まり、気分が良かった。

すると、二人の黒服の男に遭遇する。

「何だ、アンタ等？」

一護がそう言うと、

「『死神の世界』、『魔導師の世界』、『マフィアの世界』の者達

か

「我々は次元の破壊者様の目的のため、排除する」

二人の男は、戦闘態勢に入るが、

「オラァ！」

一護に蹴り飛ばされた。

「凄いです一護さん！」

沢田綱吉（以下ツナ）がそう言うと、一護がこう言った。

「いや、こいつ等がメチャクチャ弱かっただけだから」

すると男たちは立ち上がり、懐から何かを取り出した。

「見せてやろう、我々の本気を」

それはUSBメモリであった。

「ハア？ USBメモリで戦うつもりかよ、バカだろお前等」

獄寺隼人がそう言い、他のメンバーも頷く。

「ヤバイ……」

真之介だけは違った。

「一護、ソイツ等からメモリを奪い取れ!!」

「え?」

疑問に感じた一護であったが、その時男たちはメモリのボタンを押した。

【マグマ】

【アイスエイジ】

メモリを腕に押し付けた瞬間、男の片方がマグマの炎のような怪人、もう片方が氷をイメージしたような白い怪人に変身した。

「何!?!」

これには驚く一同。

「ウオオオオオオオオ!」

マグマの怪人は、高熱弾を雨のように発射した。

「うおお!」

一護は斬魄刀・斬月で防ぐが、

「グッ!」

炎の威力が高すぎて、吹き飛ばされてしまふ。

「ガア！」

「一護君！」

高町なのはが助けようとするが、

「ハア！」

白い怪人は手から冷凍ガスを放ち、なのはの足を凍らせる。

「あッ！」

「なのはさん！」

ツナはハイパーモードになって戦おうとするが、

「無駄だ！」

炎の怪人は拳で殴り飛ばした。

「グア！」

「十代目！」

各世界の代表が追い込まれる強さに、全員が恐怖し始める。

勝てない　そう思ったその時であった。

「そこまでだぜ」

二人の男がバイクに乗って現れた。

一人はソフト帽を被ったスーツ姿の青年、もう一人は革製の赤い服を着た青年。

「ダメです！ 逃げてください！！」

フェイト・T・ハラオンが叫ぶが、スーツ姿の青年がこう言った。

「安心しな。こいつ等に関しては、専門だからな」

【JOKER】

「そついうことだ」

【ACCEL】

「あの人達と同じメモリ!?」

「まさか、あの人達も変身するんか!?!」

八神はやてがそう言うが、そんな事も気にせず二人は腰のベルトにメモリを差し込んだ。

「変身!」

【JOKER】

「変……身!」

【ACCEL】

その瞬間、スーツ姿の青年はW型の銀色の触覚に赤い複眼を持つ黒いボディの戦士、青い複眼にバイクをイメージした赤いボディの戦士に変わった。

「さあ、お前の罪を数えろ!」

「さあ、振り切るぜ!」

仮面ライダージョーカーとアクセルが此処に光臨したのであった。

アクセルは白い怪人・アイスエイジドーパントに立ち向かった。

「ハア！ タア！」

アクセルは専用武器・エンジンブレードを振るいながら、アイスエイジドーパントを斬り裂く。

「グッ！」

「ハア！」

吹き飛ばされたアイスエイジドーパントは冷凍ガスを放つが、

【ENGINE・STEAM】

アクセルはエンジンブレードにメモリを差し込み、刀身から蒸気を放つ。

蒸気の熱に冷凍ガスを無効化されたアイスエイジドーパントは、そのまま蒸気を喰らう。

「グアアアアア！」

「剣から蒸気が出るだど!?!」

「面白い戦いだな」

ウィータは驚き、シグナムは興味深く観察する。

一瞬の隙を狙ったアクセルは、左グリップのレバーを引いた。

【ACCEL MAXIMUM DRIVE】

その瞬間、アクセルのボディは燃え上がり、そのまま回し蹴りを叩き込んだ。

「ハア!」

必殺技・アクセルグランツァーが決まり、

「絶望が、お前のゴールだ」

「グアアアアアアア!」

アイスエイジドーパントは爆発と同時に元の男の姿に戻り、メモリも砕かれた。

一方のジョーカーは、マグマの怪人・マグマドーパント戦っていた。

「ハア！ オラア！」

真っ向からの格闘戦で攻めるジョーカー。

マグマドーパントは一端引くと、火炎弾を発射するが、

「オラア！」

ジョーカーはお構い無しと言って良い程に、それを蹴り飛ばした。

「な！？」

蹴り飛ばされた火炎弾は、そのままマグマドーパントに命中した。

「グア！」

「あの弾を全く動じずに蹴り飛ばすだ！？」

「なんつうー戦い方してんだよ！」

ジョーカーの戦いに石田雨竜と阿散井恋次は驚きを隠せなかった。

「いくぜ」

そう言つてジョーカーは、メモリを一端取り出すと、右腰のマキシムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

「ライダーキック！」

跳び上がる同時に、紫色のエネルギーが纏つた右足でキックを叩き込んだ。

吹き飛ばされたマグマドーパントは苦しみ出し、

「これで決まりだ」

「グアアアアアアア！」

爆発と同時に元の男の姿に戻り、メモリも砕かれた。

「あの化物を倒しただと……」

「何て奴等だ……」

全員が二人の強さに驚きを隠せなかった。

変身を解いた翔太郎と照井は、すぐさま彼等の元へ向かう。

「怪我はないか？」

「あ……ああ」

一護がそう言うと、

「左翔太郎と照井竜……何でアンタ達がいるんだ!？」

真之介が驚いたように質問した。

「俺に質問するな　と言いたいと事だが」

「ああ。まあ、とりあえず……アイゼンハウワーって人のところへ行くぜ」

そうやって彼等は真之介の知り合い・アイゼンハウワーの住んでいる屋敷に向かった。

屋敷に向かうと、一人の少女が待っていた。

「遅い！」

真之介の幼馴染の閃可であった。

「せ……閃可!？」

「早く入りなさい！ 話をしておくから!!」

そう言われ全員が中へ入る。

「あ、おかえり」

「やあ、待ちわびたよ」

そう言ってフィリップや亜紀子、そして各世界の住民達がいた。

「お前……ここまで!？」

「そうよ。『科学と魔術の世界』、『百鬼夜行の世界』、『靈界

探偵の世界』、『侍の世界』、そして『Wの世界』の住民を連れて来たの」

「成る程……」

驚く真之介に閃可は自身満々気にそう言った。

「真之介。誰なんだよ、こいつ等？」

一護の言葉に、真之介はこう答えた。

「閃可が連れて来た、これからお前等と戦う仲間だ」

ドーパントの説明を行った閃可は、その後にこんな企画を出した。

「明日から別世界の戦い方を学ぶために模擬戦を行うから、必ず早起きをする事。良いわね？」

それを聞いたなのはは、魔導師達を代表して答えた。

「構わないよ。六課でも良くやってたし」

それを聞いたツナも答える。

「俺も良いですよ」

そして一護も答える。

「俺も良いぜ。別に命賭けるワケじゃないねえだろ？」

続いて上条も答える。

「俺も良いよ。準備は出来てる」

リクオも答える。

「僕も構いませんよ」

翔太郎も答える。

「構わないぜ。一緒に戦う仲間の強さも見たいしな」

幽助に関しては、

「待つてましたアアアアアア！ 全力で戦うぜ！！」

やる気満々であった。

「くっそお〜！ 早く明日になんねえかなあ〜！！！」

それを聞いた死神メンバー、ボンゴレメンバー、六課メンバーは若干引くが、シグナムだけは闘争心を見せていた。

因みに銀時はというと、

「え〜、模擬戦？ 嫌だあ〜」

ヤル気無しであったが、

「模擬戦参加してくれたら、チョコレートパフェを一日三食ご馳走するわ」

「よっしやああああああ！ 行くぜコノヤロオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

見事に閃可の口車に乗せられてしまった。

「……………」

これには全員が苦笑したが、新八が小さく呟いた。

「単純だな」

第十八話：魔導師とマフィアと死神との出会い（後書き）

次回・W対烈火の将／黒い切り札対剣の騎士

遂に、模擬戦開始！

第十九話：W対烈火の将／黒い切り札対剣の騎士（前書き）

模擬戦が始まります

第十九話：W対烈火の将／黒い切り札対剣の騎士

翌朝、朝食を済ませたメンバーは、真之介と閃可のいるモニタールームに向かった。

「それじゃあ、模擬戦の組み合わせを行おうと思う」

真之介がそう言うと、閃可がメモを読み上げる。

「第一回戦、左翔太郎 & フィリップ VS シグナム & アギト」

「え、イキナリかよ!？」

「ほう、面白くなってきたな」

驚く翔太郎とは対照的にシグナムは嬉しそうに笑う。

因みにアギトはというと、

「誰か、コイツを何とかしろアアアアア」

「魔導師というのは、こんな小さい者までいるのか!? とても興味深い!」

フィリップの好奇心の標的にされていた。

そんな二組を構わず、閃可はメモを読む。

「第二回戦、アクセアレータ一方通行VS阿散井恋次」

「ヨッシャアアアアア！」

「……………」

ヤル気満々の恋次とは違い、アクセアレータ冷静な一方通行。

「第三回戦、浜面仕上VS獄寺隼人」

「な！？俺がこんなジャージ野郎と！？」

「おい、ジャージ野郎は余計だ」

罵る獄寺に、ツッコミを入れる浜面。

「まずはこの三組から模擬戦を始める」

こうして、三組がそれぞれのフィールドに立ったのであった。

砂のフィールドでは…翔太郎とシグナム、そしてアギトがいた。

「左、フィリップが見当たらないぞ？」

フィリップがいないと気付くシグナムに翔太郎はこう言った。

「準備が要るから自分の分まで戦ってくれってよ」

そう言つて翔太郎はジョーカーメモリをロストドライバーのスロットに挿入し、横に倒した。

「変身！」

【JOKER】

仮面ライダージョーカーに変身し、戦闘態勢に入る。

「アギトは待機してくれ。まずは一対一サシで勝負したい」

「分かったよ」

そう言つてシグナムは、レヴァンティンを構える。

「左翔太郎……及び仮面ライダージョーカー、行くぜ！」

「ヴォルケンリッター烈火の将・剣の騎士シグナム、参る！」

遂に二人に戦いが始まったのであった。

ジョーカーは走ると同時に飛び蹴りを叩き込む。

「ハア！」

しかしシグナムはそれをかわし、剣を振るいだす。

「おっと！」

無論ジョーカーも回避した。

「スゲエな。美人だと思って油断するところだったぜ」

「甘く見ては困るぞ左」

拳と刃が高速でぶつかり合う。

「ウオオオオオオオオ！」

「ハアアアアアアア！」

一端引いた二人であったが、シグナムが先手を取ったのであった。

「喰らえ、シュランゲフォーム連結形態！」

形状が恋次の斬魄刀・蛇尾丸と同じ蛇腹剣のように変わり、それを見たジョーカーが驚く。

「ちょッ！？ 武器の変形なんてありかよ！？ つーかそれ、ホントに剣か！？」

鞭のように襲い掛かるレヴァンティンに、ジョーカーは悪戦苦闘する。

モニターでその様子を見ていた一護。

「まるで恋次の女版じゃねえか」

「いや、シグナム殿は恋次より頭は良いほうだぞ？」

一護の台詞にルキアはツツコミを入れた。

「いや、その言い方恋次さんが可哀想なんですけど」

今度はルキアの台詞に新八がツツコミを入れたのであった。

「仕方ねえ、だったらこれだ」

ジョーカーはそう言ってメモリを取り出し、右腰のマキシマムスロツトに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

その瞬間、ジョーカーの右手から紫色のエネルギーが纏う。

「ん?」

一度レヴァンティンを通常形態に戻したシグナムであったが、

「ライダーパンチ！」

突進して来たジョーカーのパンチをすぐさまガードした。

「オラァ！」

「グアァ！」

しかし、パンチの反動で吹き飛ばされてしまう。

「どうだ、これがジョーカーの能力だ」チカラ

ジョーカーの言葉にシグナムは笑いながら答える。

「面白い、不本意ではあるが使わせて貰うぞ。アギト！」

「おうよー！」

次の瞬間、シグナムとアギトは融合ユニオンを発動した。

「あれが……」

閃可から魔導師達のこととは聞かされたジョーカーでも、生で見るので驚いていた。

融合ユニオンにより、雰囲気が変わったシグナム。

「行くぞ、カートリッジ・オン！」

その瞬間、レヴァンティンの刀身から炎が纏う。

「ヤベッ！」

すぐさまジョーカーは必殺技を発動させる。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

右足に紫色のエネルギーが纏っているのを見たシグナムは、

「今度はキックか。行くぞ！」

ジョーカーに向かって接近してきた。

「ライダーキック！」

「紫電一閃！」

互いの必殺技をぶつかり合う。

「グアア！」

しかし、吹き飛んだのはジョーカーのみであった。

「流石に、強えな」

「まあな。それより左、そろそろフィリップを呼んだほうが良いぞ？ これはタッグ戦でもあるからな」

「……良いぜ。　だけど、後悔はするなよ」

シグナムの台詞を聞いて、ジョーカーは変身を解いたのである。

「何!？」

これにはシグナムも驚きを隠せない。

『おい、どう言つつもりだよ！　変身を解くなんて!？』

アギトの言葉にシグナムも同意であったが、翔太郎は不適な笑みを浮かべながらこう言った。

「安心しろ、取って置きを見せてやるからな」

「とっておきだと!？」

「ああ、悪いがこの勝負は貰うぜ。　俺が……いや、俺達がな」

そう言つて翔太郎はロストドライバーの左側にスロットが追加されたようデザインのベルトを装着し、ジョーカーメモリを構えた。

【JOKER】

「行くぜ、フィリップ」

そしてその場に居ないはずのフィリップにそう言った。

モニタールームのフィリップも翔太郎と同じデザインのベルトを付けていて、緑色のメモリを構える。

【CYCLONE】

そして二人は、そのまま叫んだ。

「「変身!」」

フィリップは右スロットにメモリを差し込むと、突如倒れてしまう。

「え!?!」

「フィリップ!?!」

驚く一同であるが、亜紀子と照井はそれを見て動じなかった。

ただ、照井がこう呟いただけであった。

「「よっやくか」」

翔太郎はベルトの右スロットに転送されたフィリップのメモリを奥に差し込むと、ジョーカーメモリを左スロットに差し込み、それをアルファベットのWのように横に倒した。

【CYCLONE・JOKER】

その瞬間、突風が巻き起こり、翔太郎姿が徐々に変わりだした。

「!?!」

シグナムは、その姿に驚きを隠せなかった。

そこに居たのは、右半身が緑で左半身が黒のジョーカーに酷似した仮面ライダーであった。

「右半身が、緑のジョーカー!?!」

するとその戦士はフィリップの声で答えた。

「違うよ。これはジョーカーではない」

「そう。俺達は……」

「二人で一人の仮面ライダー、^{ダブル}W!」

遂に、風の切り札が光臨したのだった。

第十九話：W対烈火の将／黒い切り札対剣の騎士（後書き）

次回、W対烈火の将／風の切り札

（メンバー紹介1）

BLEACH：一護、ルキア、織姫、石田、茶渡、恋次、日番谷

リリカルなのは：なのは、フェイト、はやて、スバル、ティアナ、
キャロ、エリオ、シグナム、ヴィータ、アギト、ノーヴェ

リポーン：ツナ、リポーン、獄寺、山本、クローム、良平、京子、
ハル、ランボ、雲雀

銀魂：銀時、新八、神楽、近藤、土方、沖田

第二十話：W対烈火の将／風の切り札（前書き）

W 参上！ 反撃の時！！

リン

「というか、私も忘れないで欲しいです！」

第二十話：W対烈火の将ノ風の切り札

翔太郎とフィリップ：二人が変身する戦士・仮面ライダーW。

その力が今、発揮されるのであった。

「さあ、お前の罪を数えろ！」

W対烈火の将ノ風の切り札

Wの言葉を聞いて、シグナムはふと笑う。

「罪を数える」か……確かに私は過去に大きな罪を背負っている」
それを聞いたWは驚いてしまう。

「いや……ついノリで言っただけなんだけど………」

「まあ、人には誰にも言えない過去の事情ってものがあるからね」

翔太郎とフィリップはそう言って戦闘態勢に入り、

「それじゃ、行くぜシグナム！」

そしてWは、シグナムに突進してきた。

同時に、赤いガイアメモリを右のサイクロンメモリと取り替え、右半身が赤に変わる。

【HEAT・JOKER】

「右半身が赤に変わった!？」

驚くシグナムであったが、すぐさまWの左手からのパンチを防御する。

「掛かったね！」

フィリップがそう言うと、Wの右手から炎が出現し、シグナムの懐に一撃を与える。

「オラア！」

「ガア！」

攻撃を受けたシグナムは、防御を崩してしまい、

「オラオラア！」

同時にWのパンチが炸裂し、シグナムは吹き飛んでしまう。

モニタールームでWの戦いを見た六課メンバー。

「シグナムと同じ、炎の能力を！？」

フェイトはWの右手から炎が出現したことに驚きを隠せなかった。

「でもあのジョーカー、右半身が緑だったのに何で赤に！？」

スバルは疑問を感じたが、亜紀子が答えた。

「あれはWって言って、ジョーカーじゃないの」

「え？ ジョーカーとどう違うんですか？」

ティアナの質問に亜紀子が再び答える。

「メモリが一本だとそのメモリの能力しか発揮できないんだけど、Wはガイアメモリを二本使う事でその力を同時にすることが出来るの」

「そう言えば、フィリップさんはさっきから気絶してますけど、大丈夫なんですか？」

エリオの問いに照井が答える。

「Wは本来、ドライバーの装着者が二人いないと変身ができない。

変身の際は一人の意識がもう一人の身体に転送される。 キミ等の言葉で言う融合ユニオンに近いと行って良いだろうな」

それを聞いて六課メンバーを驚きを隠せなかった。

「それじゃ、今の二人は融合ユニオンして戦ってるって事ですか!？」

「マジかよ!？」

なのははWの変身を聞いて驚き、ヴィータは信じられない顔をしていた。

炎を纏った拳を見て、シグナムは驚いてしまう。

「バカな！ 炎の能力だ！？」

『シグナム、ここは空中から攻撃だ！』

「よし！」

アギトの指示で、シグナムは空中へと飛ぶが、

「逃がさねえぜ！」

【LUNAR・JOKER】

Wは黄色のメモリを赤のヒートメモリから変えると、右半身を黄色に替わり、右腕をゴムのように伸ばした。

「な！？ 腕が伸びるだ！？」

「オラア！」

驚くシグナムであつたが、足を掴まれてしまい、そのまま地面に叩き付けられてしまう。

「グアッ！」

腕を戻したWは、今度は銀のメモリをジョーカーメモリから取り替えた。

【LUNAR・METAL】

左半身が銀に変わり、背中には棍棒型専用・メタルシャフトが付加されていた。

これを見た銀時と神楽は興奮していた。

「腕が伸びたアルううううう！？」

「ルイカ！？ ルイなのかアイツは！？」

「いや、何でだよ！ ルイなら身体全体が伸びるでしょっが！！」

「じゃあ、半分コルイだ！」

「そうアル！ 半分ゴム人間ネ」

「お前等一端それから離れろ！」

そんな二人に新八はツツコミを入れた。

再び変わったWを見て、シグナムは立ち上がった。

「クツ！ シユランゲフォルム 連結形態！！」

シグナムは変形したレヴェンティンを鞭のように振るうが、Wもメ

タルシャフトを手に取り鞭のように振るった。

ガキーンという音と共に弾かれるレヴェンティンとメタルシャフト。

「どンドン行くぜ！」

【CYCLONE・METAL】

今度は右半身を緑に替え、風を纏ったメタルシャフトでレヴェンティンを弾く。

「今度は風だと!？」

驚きを隠せないシグナムであったが、Wは止まる事を知らない。

【CYCLONE・TRIGGER】

「ハア！」

左半身が青に変わり、銃型の専用武器・トリガーマグナムを手にとったWは風の弾丸が連射させ、それを弾くシグナム。

「クッ！」

「まだまだ行くぜ！」

【HEAT・TRIGGER】

今度は右半身が赤になり、銃口から炎の弾丸を放つ。

「オラア！」

「同じ手は効かんぞ！
シュランゲフォルム 連結形態！！！」

そうやってシグナムは、空中へと飛びながらレヴェンティンを変形させる。

「うっしゃ、コイツでどうだ？」

【LUNAR・TRIGGER】

今度は右半身が黄色に変わり、弾丸を放つ。

「そんなもの、弾き落とすまでだ！」

高速でレヴェンティンを振るうが、まさにその時であった。

「なに！？」

弾丸は軌道を変えながらシグナムの肩や足を狙う。

「ぐあー！」

攻撃を受けたシグナムは、すぐさま姿勢を立て直しながら地面に着地する。

【HEAT・METAL】

ソレと同時にWは右半身を赤に、左半身を銀に変える。

「ハア！」

「ハッ！」

再び武器と武器のぶつかり合いであったが、Wは炎を纏った右手の拳で殴り付けた。

「オラア！」

「ガア！」

攻撃がヒットしたシグナムは、殴られた腹部を押さえながら一端距離を置いた。

「決めるよ、翔太郎！」

「ああ、最後はコイツで決めるぜ！」

【CYCLONE・JOKER】

そして右半身が緑で左半身が黒のサイクロンジョーカーに戻ったWは、ジョーカーメモリを右腰のマキシマムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

その瞬間、竜巻が出現する同時にWが宙に浮かび、そのままドロップキックを放つ。

「ジョーカーエクストリーム！」

するとWの半身は上下に切り離された状態でキックを叩き込んだ。

「『グアアアアアア！』」

Wの必殺技・ジョーカーエクストリームが見事に決まり、シグナムとアギトも強制的に融合ユニゾンが解けてしまう。

「大丈夫か？」

手を差し伸べるWにシグナムはその手を掴む。

「ああ、なかなか良い勝負だった」

模擬戦第一戦目、勝者は翔太郎 & amp・フィリップこと仮面ライダーW。

第二十話：W対烈火の将／風の切り札（後書き）

次回、最強と脇役その1〜狒々王と嵐〜

メンバー紹介2

ぬらりひよんの孫：リクオ、氷麗^{つらら}、青田坊、黒田坊、首無、毛倡妓、河童、猩影、イタク、淡島、雨造、ゆら

とある魔術の禁書目録：上条、インデックス、御坂、一方通行^{アクセアレータ}、浜面、滝壺、打ち止め（ラストオーダー^{ミサカワリスト}）、番外固体、ステイル、神裂、五和、土御門

幽遊 白書：幽助、桑原、蔵馬、飛影、ぼたん

仮面ライダーW：翔太郎、フィリップ、照井、亜紀子

第二十一話・最強と脇役その1〜狒々王と嵐〜（前書き）

一方通行と浜面の活躍を大幅にします。

第二十一話・最強と脇役その1〜狒々王と嵐〜

第二回戦の街のフィールドでは、一方通行と恋次が見合っていた。アクセアラータ

「んじゃ、とつとと始めるぜ。準備は良いよな？」

「はア……良いから早くしろ」

「ハッ、上等じゃねえか！」

こうして、第二回戦が始まるうとしていた。

最強と脇役その1〜狒々王と嵐〜

第三回戦の岩のフィールドでは、浜面と獄寺が慎重に構えていた。

「(クソ、どうすりゃ良いんだ)」

考えながら獄寺を見る浜面であったが、

「来ねえのか？」

「……………」

「来ねえなら、コッチから行くぜ！」

そう言つて獄寺は、懐に入れていたダイナマイトを着火させる。

「な!?!」

「果てる!」

浜面はすぐさまダイナマイトが爆発する前に逃げようとしたが、

「逃がすかよ!」

獄寺がダイナマイトを投げ飛ばす。

「二倍ボム！」

さらにその倍のダイナマイトを投げ、

「三倍ボム！」

紙飛行機に乗せたダイナマイトを飛ばした。

「これで終わりだ！ ロケットボム！」

「ヤベッ！」

ドガアアアンという音と共にダイナマイトが爆発した。

モニターでその様子を見ていた一同。

「あの浜面って奴……ある意味で大丈夫だよな？」

「分からん。 獄寺も必要以上に攻めてきたからな」

「護とルキアがそう言つと、閃可はこう言った。

「多分、大丈夫かもよ」

「「え？」」

煙りが晴れると同時に、獄寺はあるモノを見た。

「何……だと!？」

それは、服が焦げているが、軽傷で済んでいる浜面の姿があった。

「咄嗟にテメエが投げた方向とは全く逆の方向に跳んで良かったぜ」

実は浜面は、獄寺が前方から投げるとは逆の方向に跳んで爆発を免れていたのである。

「だったらコレだ!」

そう言つて獄寺は右腕に装着している髑髏にダイナマイトを入れ、その顔部分を浜面に向ける。

「果てる、赤の矢……フレイムアロー！」

赤い炎が矢のように発射され、浜面はそれを回避した。

「逃がすかよ！」

獄寺はフレイムアローを何発も撃ち込むが、浜面もそれを回避する。

「テムエ！」

怒る獄寺に浜面はこう言った。

「そんな豆鉄砲じゃ俺はやられねえよ」

「何だと？」

「聞いているぜ。テムエにはGの弓矢アーチエリーって切り札があるらしいな。見せてみるよ」

「バカかテムエは？俺が本気を出せば、テムエは大恥かくことになるんだぜ？」

獄寺が挑発しようとするが、

「怖えんだろ？そう言っただけにやられんのが」

「ああ！？」

浜面の発言に怒りが頂点に達した。

「後悔すんなよ！ 瓜、カンビフォルマ形態変化だ」

獄寺は嵐猫の瓜とフレイムアローが一体化した武器・Gの弓矢をアーチェリー発動した。

「やっと来たか」

そう言っつて浜面も銃を構えた。

一方、街のフィールドで戦っている恋次であったが…

「咆えろ、蛇尾丸！！」

斬魄刀・蛇尾丸の刃がアクセアラータ一方通行に効かなかったのだ。

「クソッ、どうなってやがる！！」

さまざまな敵を相手にした恋次でも、アクセアラレータ一方通行のような相手は始めてのケースであった。

「杖持つてるって事は、あまり動くことが出来ねえんじゃねえのかよ!?!」

「はア……哀れだなアお前は。本気で言ってるなら抱きしめてやりたい程の哀れだわア」

「何だと?」

するとアクセアラレータ一方通行は、自分の事について簡単に説明した。

「良い事を教えてやる。俺は嘗て、ある事情で脳にダメージを負った…今では演算も外部に任せきりで戦闘も三十分しか能力が使えない身だ。だがなア……」

グシャリと笑ったアクセアラレータ一方通行は、余裕を見せながらこう言った。

「俺に弱点があるからって言って、別にお前が勝てるってワケじゃ、ねエだろオがよオ! あア!?!」

その瞬間、アクセアラレータ一方通行が足で踏み付けたと同時にアスファルトの地面に亀裂が入り地盤が崩壊した。

「な!?!」

驚く恋次は、すぐさま瞬歩で回避しながら移動するが、

「それが瞬步つて奴かア？ 全然遅エなア！」

アクセアラレータ
一方通行は背中に四つの竜巻を接続して恋次に近づいてきた。

「ウソだろ！？」

驚く恋次は、さらに加速を上げたが、アクセアラレータ
一方通行はそれに喰らい付いていた。

それも、余裕をみせながら。

モニターで様子を見ていたボンゴレメンバーは、驚きを隠せなかった。
った。

「あのアクセアラレータ一方通行つて人、恋次さんのスピードに喰らいついてる！？」

ツナが驚きでそれ以外の言葉を失くすが、真之介が更にこう言った。

「当たり前だ。一方通行はアクセラレータその気になれば、ジェット機と追いか
けっこが出来るんだ。恋次の瞬歩に喰らいつく何ぞ、ガキの鬼ご
っこと同じだ」

それを聞いたボンゴレメンバーは驚きを隠せず、死神メンバーも驚
きを隠せなかった。

「ジェット機と追いかけてっつて!?!」

「本当に……彼は人間か!?!」

「(クソ、化物かよアイツは!?! 俺の瞬歩に喰らい付く何ぞ初め
てだぞ!?!)」

驚きの余り、対策が練れない恋次であったが、

「鬼ごっこは終わりだア!」

そう言つて一方通行は恋次の真横に居た。

「な!？」

驚く恋次に気にも留めず、一方通行は顔面を鷲掴みし、そのまま彼を投げ飛ばした。

「オラア！」

「グアアアアア！」

投げ飛ばされた恋次は、地面に叩き付けられてしまう。

竜巻を解除し、地面に降りた一方通行。

「何だア、こんなモンかア？」

「ハア……ハア……ハア……」

「そろそろ本気出せよ。聞いてるぜ、テメエ等死神には“**卍**解”
つて切り札があるらしいな？」

「!？」

「見せろよ、お前の本気を」

それを聞いた恋次は、立ち上がって刀を構えた。

「良いぜ、後悔すんなよ……」

「そのつもりだ」

「なら行くぜ……卍・解！」

その瞬間、恋次は狒々の毛皮を羽織った巨大な蛇の骨のような武器を手に持っていた。

「狒々王蛇尾丸！」

遂に、^{アクセアラータ}一方通行と恋次、浜面と獄寺の本気の戦いが始まる。

第二十一話・最強と脇役その1〜狒々王と嵐〜（後書き）

次回、最強と脇役その2〜翼と捨て身〜

第二十二話・最強と脇役その2〜翼と捨て身〜(前書き)

激突に結末が！

第二十二話・最強と脇役その2と翼と捨て身

卍解・狒々王蛇尾丸を解放した恋次。

「ウラアアアアアアアアア！」

Gの弓矢を発動させた獄寺。

「果てる！」

遂に、一方通行アクセアレータと浜面仕上の戦いに決着がつく。

最強と脇役その2と翼と捨て身

「恋次の奴、何も正解を使うこたあねえと思っけどよ」

モニタールームで、その様子を見ていた一護がそう言うが、

「それだけ彼が強いつて事だろ？ キミも注意した方が良くと思うぞ」

「う……」

石田に言われてしまい、気まぎれになってしまっ一護であった。

街のフィールド…そこでは恋次と一方通行アクセアレータが戦っていた。

狒々王蛇尾丸を鞭の如く振り回す恋次。

「そらそらそらアアアア！」

しかし一方通行は、それを尽くかわす。

そして、脚力のベクトルを操り、真っ向から突進する。

「うらアあああああああ！」

そして狒々王蛇尾丸の頭部の部分を思い切り蹴り飛ばす。

「クソッ！」

すぐに恋次は体勢を立て直した。

「ヤロウ………だったら！」

すると恋次は、狒々王蛇尾丸を叩き付けながら周囲を破壊する。

「!?!」

驚く一方通行アクセアラレータの隙を狙い、彼の胸倉を掴む。

「クソッ！ 離しやがれ！」

「いくらテメエでも、流石にこの零距离から喰らったら……流石にキツイだろうがよ」

抵抗する一方通行アクセアラレータに、

「破道の三十一・赤火砲」

恋次は死神の技の一つ・鬼道を放った。

一方の岩のフィールドでは、浜面にGの弓矢を向ける獄寺が必殺技を放つ。

「竜巻の赤い矢……トルネードフレイムアロー！」

巨大な炎が放たれ、浜面はそれをかわした。

「クソッ！」

銃を向け、引き金を放つ浜面。

「喰らうかよ！ ガトリングアロー！！」

すると獄寺は、雲属性の死ぬ気の炎を合わせたトルネードアローを放つ。

「グアアアアアアア！」

かわせることが出来なかった浜面は、その場で喰らってしまっ。

「獄寺君も恋次さんも形勢逆転したみたいだね」

「ああ、確かに一方通行アクセラレータも浜面も強かったかが、相手が悪かったみてえだな」

ツナと一護がそう言うと、先に模擬戦から上がった翔太郎とシグナムとアギトが来た。

「勝負の方は？」

シグナムが尋ねると、なのはが答えた。

「獄寺君と恋次さんが逆転したよ」

「そうか……あの二人の強さは分かっていたからな。浜面には悪いが、これは阿散井と獄寺の勝ちだな」

アクセアレータ
一方通行と

しかしリボーンは、映像を観ながらこう言った。

「いや……良く見ておいた方が良さぞ」

それを聞いて、一護とツナはキョトンとした。

服が黒焦げのアクセアラレータ一方通行であったが、

「……………」

一瞬で雰囲気が変わった。

「（何だ？）」

異様な雰囲気恋次は動揺を隠せなかったが、

「う……………」

突如として、アクセアラレータ一方通行の背中から、

「うおおおおおおおおおおおー！」

『翼』が出現した。

まるで噴出のように出現し、殺気を具現化させたように黒く、『闇』のように黒く、そして悪魔のように黒い翼であった。

「な!?!」

これには恋次も驚きを隠せなかった。

「……………行くぜ」

アクセアラレータ一方通行がそう言った瞬間、翼を思いっきり叩き付けた。

ドゴオオオンという音と共に地面が裂け、恋次はすぐさまそこから脱出する。

「クソツ！ 何だあの翼は！？ 聞いてねえぞ！！」

すぐに恋次は、狒々王蛇尾丸を構え、口部分から霊圧の砲撃を発射した。

「喰らえ！ 狒骨大砲！！」

ドガアアアンと一方通行アクセアラータに放たれた狒骨大砲。

「ハア…………ハア…………流石にこの技を直撃で喰らったら、無事じゃ済まねえはずだ…………」

しかし、恋次の予想は大きく違った。

「な！？」

煙が晴れると同時に、驚きを隠せなくなった恋次。

そこに居たのは、墨のような漆黑から雪のように純白の翼と頭上に同色の輪が付いていた一方通行アクセアラータがいた。

その姿はまるで優しさを具現化させたように白く、彼の精神的成長を表すかのように白く、そして天使のような白い翼であった。

「う…………そ…………だろう！？」

これを見た時、恋次の長年の勘がこう呟いていた。

“絶対に勝てない”と。

「う……ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

冷静さを完全に失った恋次は狒々王蛇尾丸を叩き込むが、

「悪いな……」

アクセアラータ
一方通行は翼を百枚に増幅させ、

「こっから先は、一方通行だ」

その翼で狒々王蛇尾丸を破壊しながら、恋次を叩き込んだ。

岩のフィールドでは、獄寺の攻撃を受けていたはずの浜面が立ち上がった。

「テメエ……いい加減に果てやがれ！」

そう言つて獄寺はガトリングアローを放った。

「ガトリングアロー！」

発射された複数のフレイムアロー。

「……………」

しかし浜面は、沈黙のままであつた。

「ハッ！ 流石に立ってるのが精一杯みてえだな！ まあ無理もねえな。教えておくれぜジャージ野郎、雲属性を使った俺のフレイムアローの連射弾数は百発だ。いくらテメエでも、流石にこの数はかわしきれねえハズ」

勝ち誇るように笑う獄寺であつたが、

「ウオオオオオオオオオオオ！」

突如、叫びを上げた浜面が突進してきた。

浜面は攻撃を受けながらも、走ることを止めなかった。

「テメツ、どういうことだ!？」

驚く獄寺に浜面はこう言つた。

「テメエは性格のワリに結構慎重派だからよ、絶対隠し玉を持って

ると思つてたぜ！」

「何言つて」

「連射系の飛び道具つて見た目は強そうだけどよ、一発一発の破壊力は低いつて相場が決まつてんだよ！ だからテメエがそういうタイプの攻撃を仕掛けてくるのを待つてたんだよ！ しかも連射系つて攻撃の最中に隙が出来るんだよ！！！」

「な！？」

そう、浜面はこうなる事を待つていたのだ。

獄寺の本当の隙が出来る瞬間を。

「行くぜ！」

銃口を向け、引き金を引く。

特殊なゴム弾と言えどダメージは高いため、バンバンバンと獄寺に命中する。

「ガッ！」

その隙を見逃さなかつた浜面は、

「ウオオオオオオオオオ！」

右手の拳を強く握りながら、

「終わりだアアアアアア！」

その拳で獄寺を思いつきり殴り付けた。

「グアッ！」

獄寺は地面に倒れ、立ち上がるうとするが、

「させるかよ」

浜面が再び弾丸を放ち、彼の間接部を正確に狙った。

「な!？」

「ウオオオオオオオオ！」

驚く獄寺であったが、浜面はそのまま頭突きを叩き込んだ。

「が……………」

「ハア……………ハア……………ハア……………」

この瞬間、アクセアラレータ一方通行と浜面は、重なるように恋次と獄寺にこう言
った。

「悪いな……」

「悪いな……」

「これが悪党（脇役）の戦いだ」

そう言っアクセアラレータて一方通行は縮めていた杖を元の長さに伸ばし、浜面は銃
をポケットに仕舞った。

第二十二話・最強と脇役その2〜翼と捨て身〜(後書き)

次回、浦飯チームの実力

桑原、蔵馬、飛影の戦いが遂に！

第二十三話：根性一直線！（前書き）

桑原が遂に活躍する！

第二十三話：根性一直線！

最初の模擬戦が終わり、閃可は再びメモを読む。

「よし。それじゃ、続けるわよ。第四試合・桑原和真VSヴィータ」

「うっしゃー！俺の出番だぜ！！」

「あたしか……」

遂に戦えると知って、桑原はヤル気満々になる。

逆にヴィータは落ち着いていた。

「第五試合・蔵馬VS石田雨竜」

「……」

落ち着いた表情で互いに相手を見る蔵馬と石田。

「第六試合・飛影VS日番谷冬獅朗」

「……」

飛影と日番谷も、互いに相手を見ていた。

根性一直線！

第四試合・炎のフィールドでは、桑原とヴィータが立っていた。

「うっしやあー！ んじゃ、全力で行かせて貰うぜ！」

「ああ、掛かって来い！」

すると桑原は、文字どおり突進してきた。

「うおりやあああああああ！」

拳を突き出すが、ヴィータはそれをかわし、デバイス・グラーフアイゼンを彼の頭部に目掛けて振り下ろす。

「おらあああああ！」

ドガツという音と共に、桑原は吹き飛ばされてしまう。

「ガア！」

「へへ……どうだ」

『鉄槌の騎士』の異名を持つ彼女にとって、桑原に攻撃を当てるなど動作もないことであった。

モニタールームでそれを見ていた一同。

「桑原と言ったな。あやつ、ヴィータ殿を女だと思って油断しすぎではないか？」

ルキアがそう言いながら腕を組むが、閃可はハッキリこう言った。

「いいえ、油断するのはヴィータの方よ」

「え、どうして？」

なのはの問いに真之介はこう言った。

「試合を観れば分かる」

鎚を構えながら、警戒を怠らないヴィータ。

「（非殺傷にしてるとはいえ、あたしのアイゼンの攻撃を喰らって立ち上がれ奴は）」

“いない”と考えていたが、彼女の考えは一気に碎かれる。

「いつてえ〜」

「な!?!」

頭を殴られて、普通に立ち上がった桑原。

頭からは出血がただけは、普通の状態であった。

「女だと思って油断してたぜ。こりゃ用心して掛かんねえとな…

……」

そう言つてムクリと立ち上がった桑原の打たれ強さにヴィータは驚きを隠せなかった。

「おいおい冗談だろ? 一応気絶する威力で殴つただけだ!?!」

「悪いな、中学の頃から浦飯に喧嘩を売ってたんでな、アイツのパンチや蹴りに比べりゃ大したことねえぜ」

桑原はそう言つと、右手に靈力を集中させた。

「行くぜ……霊けえええええん!」

その瞬間、靈力によって一本の剣が出現した。

これこそが、桑原の十八番の能力・靈剣である。

「浦飯チーム・桑原和真だ。男気を見せてやるぜ!！」

「やってみる! このヴォルケンリッター鉄槌の騎士・ヴィータが吹っ飛ばしてやる!！」

「そんな……ヴィータちゃんの攻撃が効かない!？」

ヴィータと戦った経験があるのはにとって、それは驚きを隠せない状況であった。

無論、他の六課メンバーでもある。

「霊力を具現化させるなんて……アイツは一体?」

「つか、ハンマーで頭を殴られて普通に立ち上がるってどっいう神経してんだ!？」

「いや、それ以前に……」

霊力を剣に変える桑原の能力に驚く茶渡とその打たれ強さに驚く一護であったが、

「ヴィータ殿の鉄槌が大した事無いと言っただけ……
こやつの一撃の威力がもの凄く気になるぞ」

「ん？」

幽助を見ながら、彼の一撃の威力が気になってしまいうルキアであった。

「うりやあああああああ！」

霊剣を構え、走り出す桑原。

「同じ手が通用するかよ！」

ヴィータがそう言って鎚を振り下ろすが、

「二刀流！」

桑原は、左手から霊剣を出しながら攻撃する。

「な！？」

驚いたヴィータは、すぐさま回避したが、肩を斬られてしまい、その傷から血が流れ出した。

「クソッ！」

「悪いな。この霊剣は俺の霊力で作り出してるんだ、二刀流も可能なんでな」

「だったらこうだ！」

そう言ってヴィータは、グラーファイゼンを形態変化させた。

「ギガントフォーム！」

その瞬間、アイゼンの形状が巨大な鉄槌に変わった。

「ぶつち抜けエエエエエエエエエエ！」

「な！？ ドワアアアアアアアアアアアア！」

これには桑原も吹き飛ばされてしまう。

「これなら、流石の桑原も気絶してしまうな」

「いや、そのまえに重傷になるんじゃない………」

シグナムの一言に新八は即座にツツコミを入れた。

「いゝや、まだ終わってないぜ」

真之介がそう言いながらモニターを観ていた。

「ハア……ハア……ハア……どうだ」

ヴィータはそう言って構えを取るが、

「まだ……まだ……俺はやれるぜ」

桑原は再び立ち上がった。

「オイオイ、今度こそマジかよ!？」

自慢の鉄槌による一撃を喰らって立ち上がる桑原に、ヴィータは恐怖ですら感じ取った。

「お前本当に人間かよ！ 普通の奴なら気絶しても可笑しくねえぞ
!！」

「へへへ……俺にも一つ、自慢があつてな……」

そう言って桑原は、霊剣を構えながら叫んだ。

「根性の勝負では、誰にも負けたこたあねえんだよ！ 剣よ、ヴィータに向かって伸びよ!！」

すると刀身が、槍のように一気に伸び始めた。

それもヴィータに目掛けて。

「なに!?!」

これには流石のヴィータも逃げるしかなかった。

「(くそ、追撃技かよ! 逃げ切れねえ!!)」

「ホントにアイツはナニモンだ!?!」

「あの打たれ強さは人間ではないぞ!?!」

一護とルキアは、桑原の打たれ強さに驚きを隠せなかった。

無論、他のメンバーも同じであった。

「しかし桑原君とヴィータちゃんじゃ、キャリアの差が違うんじゃない?」

屋敷の主、ハイゼンハウワーの言葉に閃可はこう言った。

「確かに、ヴィータの方は戦闘経験が豊富よ。でも、所詮はガジエットや魔力を持った人間。だけど桑原は、幽助や蔵馬と一緒に妖怪との戦いに足を踏み入れているよ。彼から見たらヴィータの鉄槌は屁の河童同然ね」

追撃する霊剣の刀身に追いかけてられているヴィータ。

「(クソッ！ こうなったら……………)」

そう思い、ヴィータは桑原に突進していく。

「何だ!？」

「ウオオオオオオオオオオ！」

霊剣が自分に来る前に、グラーフアイゼンを叩き込むヴィータ。

「エエエエ！！」

模擬戦第四試合は、桑原の異常なまでの打たれ強さに恐怖したヴィータのギブアップ負けであった。

その光景を見ていたメンバーは、顔を引きつってしまふ。

「今のヴィータ殿の一撃は、全力を込めてのモノであったぞ」

「それを喰らって立ち上がる何ぞ……………」

「ある意味、^{ホロウ}虚より厄介だぜ」

上からルキア、恋次、一護の三人がそう言ったのであった。

「あそこまで粘り強い奴が居たとはな……………面白い」

唯一、桑原の強さに戦ってみたいと思ったシグナムであった。

第二十三話：根性一直線！（後書き）

次回、最強の知将

桑原

「って、俺の活躍コレだけ!？」

第二十四話・最強の知将（前書き）

蔵馬VS石田の知恵比べみたいな対決です。

第二十四話・最強の知将

第五試合：草原のステージでは、慎重になる石田とは対照的に全く動じない蔵馬。

策略と智恵に長けた知将对決が、今始まるうとしていた。

「……………」

全く動じず、まるで全てを見透かしたような雰囲気を見せる蔵馬に、石田は同様に隠せなかった。

「（何なんだ彼は……まるで此方の考えがお見通しのような雰囲気だ）」

「どうしましたか？ 慎重なのは良いんですけど、過ぎると臆病に見られますよ？」

ゾクリと蔵馬の言動に石田が背筋を凍らせてしまう。

「（不味い……こっちも言い返さない）」

「ん？」

「そ………そう言うキミも、随分堂々とするじゃないか？ 何なら、キミから来れば良いじゃないか？」

逆に挑発で返す石田。

「そうか………なら、此方から責めましょうか？」

「え？」

その瞬間、蔵馬が動き出した。

一瞬で間合いに入り、上段蹴りを叩き込む蔵馬。

「クッ！」

すぐさま石田は、攻撃を開始する。

しかし蔵馬は攻撃を止めず、連続で攻めに入る。

反撃をしようとした隙を窺う石田であったが、

「無駄だ」

ドガツと蔵馬の蹴りを受けてしまう。

「アイツ…石田の考えを読んでやがる！」

「恐らく相当な修羅場を潜って居るはずだ」

蔵馬の隙の無い動きを観て、一護とシグナムはそう言った。

「でもよ、石田には弓があるじゃねえか？」

恋次がそう言うが、ルキアがこう言った。

「奴が隙を見せてくれればな」

蔵馬の隙の無い攻撃に翻弄され、反撃が出来ない石田。

「ハア……………ハア……………」

「随分と息が上がってきましたね？」

「（甘く見ていた……………このままじゃ、本当にやられる）」

そう考えた石田は、クインシークロス滅却師十字を取り、そこから弓を出現させる。

「……………それが、キミの武器ですか？」

「ああ……………これが僕の霊弓『銀嶺孤雀』だ」

そう言っつて石田は弓を引き、矢を放った。

蔵馬はすぐさま矢をかわす。

「無駄だよ」

石田は飛廉脚で真上に移動し、矢を放った。

「光の雨【ヒュートレーゲン】！」

ドドドドドと放たれる矢の雨。

飛び道具の使い手である石田の弓に逃げられる者はいない。

地面に着地した石田は、煙が晴れるのを待っていた。

「聞こえてるかどうかは分からないと思うが、一応言っておくよ。

僕は獄寺隼人と違って、頭に血が上りやすい性質じゃないからね」

そう言っつて眼鏡を掛け直す石田であったが、

「成る程、中々面白いものですね」

「!?!」

煙が晴れると同時に、全く無傷の蔵馬が不適な笑みを見せながら立っていた。

それも無傷で。

「ウソ……だろ!？」

「全くの無傷!？」

恋次とルキアが、全くの無傷の蔵馬に驚きを隠せなかった。

「アイツ………一体!？」

一護もなのはもツナも、それに驚きを隠せなかった。

しかしリボンだけは、こう呟いた。

「コイツは、石田の負けだな」

「バ……バカな………」

攻撃が全く通用しない蔵馬に、石田は恐怖を感じてしまった。

「どうした、その程度か？」

口調も変わった蔵馬は、全く動じていなかった。

「（それなら！）」

石田はすぐさま飛廉脚で後ろに回りこんだ。

「いくらキミでも、この零距离からの攻撃は避けられないはず！」

そう言って石田は、矢を放とうとしたその時であった。

「ローズウィップ
薔薇棘鞭刃」

蔵馬の髪から鞭が飛び出し、石田を攻撃した。

「な!?!」

石田は避けられず、攻撃を受けてしまう。

その場で倒れてしまった石田は、驚きを隠せなかった。

「バカな……鞭を……髪で……」

「悪いな、使えるのは手足だけじゃないんだ」

そう言って蔵馬は余裕を見せていた。

第二十四話・最強の知将（後書き）

次回、邪眼師VS死神

第二十五話：邪眼師VS死神（前書き）

飛影VS日番谷

第二十五話：邪眼師VS死神

第六試合：風のフィールドでは、飛影と日番谷の試合が行われていた。

「あの日番谷って奴、飛影の相手になるたあ運が悪いな」

幽助がそう言っていると、ぼたんがこう言った。

「甘く見ちゃダメだよ。あの子、あれでも隊長やってるらしいから」

「マジかよ!」

「あんなチビなの隊長かよ!」

「あんな小さいのに隊長なの!」

幽助、獄寺、スバルの順で驚くが、獄寺とスバルの言葉にルキアがこう言った。

「貴様等、それはヴィータ殿に対する当て付けか?」

それを聞いた二人は、桑原と共に戻ってきたヴィータが怒っている場面を見て、何とかフォローしようとした。

「ところでルキアさん。日番谷さんが隊長をしているというのは、本当ですか?」

「ああ。日番谷隊長は、護廷十三隊で十番隊の隊長を務めるほどの天才だ。恐らく飛影も苦戦するかもな」

それを聞いた幽助は、驚く事もなくこう言った。

「そうか？」

邪眼師VS死神

「十番隊隊長、日番谷冬獅朗だ。言っておくが、手は抜かねえぞ」

「そうしろ、死にたくなければな」

その瞬間日番谷は、凄まじい霊圧を放った。

「……………ほっ」

しかし飛影は全く動じる事も無く、当たり前のように剣を抜いた。

「行くぞ」

そう言って飛影は、日番谷に向かって突進した。

日番谷も剣を抜き、攻撃を防いだ。

ガキーンという音と共に反り合う二人の刃。

「ハア！」

そのまま飛影は剣を振るうが、日番谷は瞬歩で回避して後ろに回りこむ。

「そこだ！」

そう言って剣を振り下ろした瞬間、

「（取った!）」

そう確信したはずであった。

しかし、予想は大きく外れた。

日番谷が斬ったのは飛影ではなく、彼が着ていたコートであった。

「何!?!」

「残像だ!」

そう言っつて飛影は剣を振り下ろした。

「クッ!」

しかし日番谷も攻撃を防ぎ、一端後ろへ引いた。

「何だアレは？ 瞬歩!？」

「いや、いくら瞬歩でも残像を残す程の技術はないはず!？」

「まさか、普通の瞬間移動か!？」

死神メンバーの面々は、飛影のスピードに驚きを隠せなかった。

「ほう、それが『瞬歩』ってやつか？ 案外速いんだな」

「そう言うお前の今の移動は、何て名前だ？」

「名前？ そんなもの無い。あれはただの長所みたいなものだ」

そう言うって飛影は剣を構える。

それを見た日番谷は、決心したような顔でこう言った。

「仕方ねえ。出来れば使いたくはなかったんだが、阿散井も使ったから別に良いか」

映像を観ていた死神メンバーの面々は、ようやくかという顔をしていた。

「蒼天に坐せ」

日番谷が刀を上挙げた瞬間、空が突如曇りだす。

それと同時に日番谷の刀から水と氷が出現し、それは巨大な竜を作り上げた。

「氷輪丸！」

「な、何だよありゃ!？」

グイータの驚きにルキアが答えた。

「天候をも支配し、水と氷の竜を作り出す。日番谷隊長の斬魄刀にして、冰雪系最強を誇る剣・氷輪丸」

「久々だぜ、冬獅朗がアレを使うのは」

一護も本気を出した日番谷に思わず声を出した。

「ウラアアアアアア!」

日番谷は氷輪丸の氷の竜を飛影に向けて飛ばした。

すぐさま回避する飛影であったが、

「(何て水圧だ……かわすことが な!?)」

徐々に凍っていく右腕に驚きを隠せず。

「ウワアアアアアア!」

思わず叫びながら地面に落下していった。

「く……………は……………」

起き上がろうとする飛影であったが、日番谷がすかさず刀を向ける。

「コレまでだな。大人しく負けを認めれば、術は解くぜ」

「うつしやあああああああ！ 流石日番谷隊長！！」

そう言うて恋次は大はしゃぎであるが、

「朽木さん、どうしたの？」

モニターを凝視するルキアに織姫が訪ねだす。

「おかしい……………何だ、この違和感は……………」

ルキアの違和感は、すぐさま当たる事になった。

「どうした？」

尋ねる日番谷であったが、

「れ……………を……………な……………るな」

「ん？」

まさにその瞬間であった。

「俺を……………舐めるなアアアアアアアアアアアア！」

飛影の鉢巻が切れ、額にはには第三の眼が開眼した。

「何！？」

額の眼に驚きを隠せなかった日番谷は、一瞬後退りしてしまう。

その瞬間、飛影の全身から灼熱の炎が放たれ、氷が一瞬で解けたのだった。

全身から炎を放ち、邪眼師・飛影が再起した。

「喜べ日番谷、貴様が死神としての邪王炎殺拳の犠牲者第一号だ！」

ニヤリと笑う飛影が拳から炎が出現し、日番谷に接近した。

「邪王炎殺煉獄焦！」

「！！！」

すぐさまガードする日番谷であったが、

「（な……………何だ、この炎は！尋常じゃないほどの高熱だぞ！？）」

炎の熱量に驚きを隠せない日番谷であったが、

「ハアツ！」

飛影の次の攻撃に頭が回らずに、吹き飛ばされてしまう。

「グアアアアアアア！」

ドガンという音と共に、後ろの丘に吹き飛ばされてしまう。

「フン、いい加減に本気出せ。コッチもムカついてきたぜ」

そう言っつて飛影は日番谷に歩み寄った。

「う……ウソだろ!？」

「日番谷隊長が!？」

本気を出した飛影の実力に、死神メンバーが驚きを隠せなかった。

それを見た真之介はこう言った。

「当たり前だろう？ 飛影の実力は、まだこんなモンじゃねえぜ。
アレはまだ数分の一しか発揮してないぜ」

それを聞いた一同は、同様に隠せなかった。

第二十五話：邪眼師VS死神（後書き）

次回、氷竜VS炎龍

第二十六話：氷竜VS炎龍（前書き）

炎VS氷の戦いが始まった。

第二十六話：氷竜VS炎龍

遂に本来の力『邪王炎殺拳』を解放した飛影。

「とつとと本来の力を解放しろ。いい加減にムカついてきたぜ」

そう言つて飛影は構える。

日番谷は、立ち上がりながらも飛影にこう言った。

「ハア……良いぜ……見せてやるよ」

そう言つて全ての霊力を解放した。

「卍……解！」

その瞬間、氷の竜が日番谷と一体化したかのように、彼の身体に出現した。

右手には首を伸ばした竜が刀を啜えたように見え、背中には翼に巨大で長い尾が生え、全てが氷で出来ていた。

「大紅蓮氷輪丸！」

遂に、日番谷が卍解を解放した瞬間であった。

氷竜VS炎龍

モニターでその様子を見ていた一護達。

「冬獅朗のヤツ……遂に正解を！」

「しかしあの飛影というヤツ、まさか炎の使い手であったのか。」

日番谷隊長とは全く正反対の能力だ」

氷と炎、全く正反対の能力を武器にする二人の戦いを見て眩くルキア。

「でもよ……卍解を解放したんだからよ、日番谷隊長が勝てんじやねえか？」

恋次がそう言うが、

「いや、勝負はまだ分かんねえぞ」

リポーンがそう言ったのであった。

「行くぞ！」

そう言って日番谷が突進して来た。

無論、飛影も接近してくる。

ガキーンという音と共に、刃と刃がぶつかり合う。

「ウオオオオオオオオ！」

「ハアアアアアアア！」

二人は一度後ろへ下がると、再び攻撃を繰り返す。

「群鳥氷柱！」

「邪王炎殺煉獄焦！」

氷の弾丸を放つ日番谷に対し、飛影は炎を纏った拳で対抗する。

「千年氷牢！」

すると日番谷は、氷の牢を作り出して飛影を閉じ込めるが、

「邪王炎殺剣！」

炎を纏った剣で両断された。

「炎のパンチの次は炎の剣だと!？」

「私の『紫電一閃』と同じ技を!？」

「あやつ、何て格闘センスだ!」

一護は飛影の戦いに驚き、シグナムは自身と同じ技に驚き、ルキアは飛影の格闘センスに驚きを隠せなかった。

「そろそろ、潮時かな」

そう言って閃可はモニターを観ていた。

「ハア……………思ったより、やるな」

「お互いにな」

常に限界に達していた日番谷。

対照的に余裕を見せる飛影。

「行くぞ……………竜閃架！」

日番谷は刃を前方に向け、そのまま突進をする。

しかし飛影は、剣を上に向けると、

「ついさっき思い付いた技だ……………よく拝んでおけ……………」

剣を振り下ろすと同時に、紅い龍が飛び出してきた。

「邪王炎殺紅龍波！」

「ゴオオオオオオオオオオ！」

まるで意志を持ったように、紅い炎の龍が日番谷に迫ってきた。

「な！？」

驚く日番谷であったが、すぐさま攻撃をガードした。

「（まるで、氷輪丸……防ぎれな　　）」

しかし炎の威力は、空気中の酸素を燃やしながら膨大に増していた。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

その威力に耐え切れず、日番谷は吹き飛ばされてしまう。

「安心しろ、コレでも威力を抑え込んだ。火傷だけでもまだマシだぜ？」

模擬戦第六試合は、本来の能力『邪王炎殺拳』を解放した飛影の勝利。

第二十六話：氷竜VS炎龍（後書き）

次回、魔導師VS魔術師

フェイトと神裂の試合です。

第二十七話：魔導師VS魔術師（前書き）

似て非なる能力同士の戦い！

第二十七話：魔導師VS魔術師

第七試合…嵐のフィールドでは、神裂とフェイトが立っていた。

魔法と魔術…似て非なる能力を持つ者同士の対決が、今始まる。

魔導師VS魔術師

「フェイト・T・ハオラウンです。

宜しく願いします」

「神裂火織です。お互いに悔いの無い試合を」

そう言つてフェイトはバルディッシュ、神裂は七天七刀を構えた。

「ハアツ！」

最初に動いたのはフェイト。

「（神裂さんのあの長刀は、攻撃に使われたら厄介だね。その前に叩き込む！）」

刀を抜かせまいと神裂に突撃するフェイトであつたが、彼女の予想は大きく外れてしまう。

「七閃」

神裂が抜刀の構えを取つた直後、フィールド上が斬撃を受けたかのように切り裂かれた。

「!?!」

驚いたフェイトは、すぐに攻撃をガードする。

「グッ！（そんな、あの遠距離からの抜刀が!?!）……これが、魔術!?!」

「いえ、これは魔術ではありません。単なる物理攻撃です」

驚くフェイトであつたが、神裂の返答にさらに驚きを隠せなかつた。

「何だ、あの攻撃は!？」

「あんな速い斬撃は、見たことも無い！」

恋次とルキアが驚くが、

「まさか、女性剣士であのような技を持つ者がいるとは……異世界とは本当に凄すぎる！　クツ、一度神裂と試合ってみたい」

バトルマニアのシグナムの発言に一同が啞然としていた。

「でも、リボンさん。あんな長い刀で抜刀が出来るんですか！？」

獄寺の問いにリボンは答えた。

「いや、あの攻撃には何か『仕掛け』がある筈だ。　フェイトは、

それに気付かば戦いに余裕が出来るはずだ」

神裂の『七閃』に翻弄されるフェイトであったが、

「（オカシイ……あんな長い刀で高速の抜刀はまず出来ない……きつとカラクリがあるはず……）」

そう思いながら目を凝らして見ると、

「！？」

そこには、神裂の前方を覆いつくす鋼線ワイヤーの結界が張られていた。

「まさか！？」

「お気づきにまりましたね？ その通りです。『七閃』は本来、天草式に伝わる鋼線術から放たれる技」

ですが…と神裂は刀を構えながらこう言った。

「この七天七刀は、飾りではありません。私にはこの刀を使った新説『唯閃』という技があります」

「（悔れない……………）」

神裂火織という強者を前に、フェイトはどういった戦法を取れば良いのか悩むのであった。

「遠距離では鋼線……………しかし近距離では抜刀術の二重戦法……………これはどう見てもフェイト殿が不利だな」

ルキアはそう言いながら、映像を観ていた。

「それにしても、あないな攻撃が出来る人がおったとは、思わんかったな」

はやてもこれには驚きを隠せなかった。

しかし、土御門はふところ思った。

「しかし、あのフェイトって姉ちゃんには空中戦とか出来ないのにかにゃー？　いくらねーちんでも、空中戦は無理ぜよ」

それを聞いた六課メンバーは、確かにという顔をしていた。

「（そうだ！）」

何かを思いついたフェイトは、空中へと飛んだ。

「！！（空襲で来ますか）」

攻撃をすぐさま読み取った神裂は、構えを取りながら警戒する。

「行きます！ プラズマファイアー！！」

周りから発射口が展開され、フェイトの合図と共にプラズマ砲弾が放たれた。

「！！！」

すぐさま神裂は刀を抜いて、プラズマを弾いた。

しかし、フェイトはすぐに後ろを取り、魔力の刃を展開したバルデイッシュを振り下ろした。

「でやあああああああ！」

「クッ！」

ガキーンとぶつかり合う二つの刃。

「ハアッ！」

しかし、神裂に吹き飛ばされてしまいが、すぐさま体勢を立て直したフェイト。

「中々ですね」

「そちらこそ」

するとフェイトは再び空へと舞い上がり、呪文を唱えた。

「アルカス・クルタルス・エイギアス煌めきたる天神よ……今導きの
もと振りきたされ……バルエル……ザルエル・ブラウゼル……」

その瞬間、頭上に魔法陣が展開され、幾度の稲妻の光と雷の轟音が
鳴り響いた。

そしてフェイトは、ベルディッシュを徐々に上に挙げ、再び振り下
ろすと同時にこう言い放った。

「サンダー………ウォール！」

彼女の合図と共に、無数の稲妻が神裂を襲った。

「まさか、あんな切り札を隠し持っていたとは！」

神裂は稲妻をかわしながら走っていくが、

「逃がさない！」

バリアジャケットを通常のインパルスフォームからソニックフォームに切り替えると、バルディッシュを巨大な魔法刃の大剣に変えながら接近してきた。

「しまっ
」

神裂が気付いた時には既に遅かった。

「撃ち抜け、雷神！ ジェットザンバアアアアアアアアアアア！」

そしてフェイトは、神裂に向かって魔法刃を振り下ろした。

「グッ！」

「ハアアアアアアアアアアアアアアアア！」

その瞬間、膨大なエネルギーが大爆発を起こした。

モニターでその様子を見ていたエリオとキャロ。

「フウ……どうやらフェイトさんの勝ちみたいだね」

「そうだね。いくら神裂さんでもフェイトさんの魔法刃を受けて倒れないワケがないから」

そう言って安堵するが、

「いや、まだまだよ」

ステイルが煙草を吸いながらそう言った。

「ハア……ハア……勝った」

フェイトはそう言いながら息を切らすが、

「流石に、この技は効きました」

そう言っつて神裂が立ち上がった

「そんな……」

フェイトは自身の技を受けて、尚立っつていられる神裂の異常なまでのタフさに驚きを隠せなかった。

「出来れば使いたくはありませんでしたが、此方も見せましょう。

本当の『魔術』を」

その瞬間、神裂の魔力と戦闘態勢が変わった。

「Salvereeooo」

自らの魔法名を口に出した神裂。

その意味は、『救われぬ者に救いの手を』。

左右前後上下に『七閃』の鋼線が放たれ、それがフェイトの逃げ場を奪う。

「ウソツ!?!」

油断をしたつもりは無かったフェイトであったが、本気を出した神裂を相手に逃げる事が出来なくなってしまう。

その瞬間神裂は、2 mもある刀を構えながら突進し、その刃を鞘から抜いた。

「唯閃！」

シュバーンという音と共に、神裂の必殺技がフェイトに命中した。周囲を切り裂く『七閃』の結界と一撃必殺を決める『唯閃』の抜刀術。

「御安心を、峰打ちです」

「クツ……あ……」

例え峰打ちでも、本気の神裂が放った技はS級超えの魔導師であるフェイトですら敵わなかった。

「まだ、続けますか」

「いえ………私の、負けです」

模擬戦第七試合は、魔法名を解放した神裂の勝利であった。

「フェイトさんが……」

「負けた……」

フェイトが負けた事に、エリオとキャロはショックを隠しきれなかった。

煙草を吸いながらステイルは、

「しかし、神裂を此処まで追い詰めるとは、彼女やるじゃないか」

そう言ってフェイトの実力を評価した。

第二十七話：魔導師VS魔術師（後書き）

次回、赤き加速と牙の切り札

第二十八話：赤き加速と牙の切り札（前書き）

この戦い、ゾクゾクするね。

第二十八話：赤き加速と牙の切り札

模擬戦第八試合目は、フィリップ & amp・照井 VS スバル & amp・ノーヴェのタッグ対決であった。

「あの、フィリップさんも戦うんですか？」

スバルの問いにフィリップは答えた。

「僕も、ただ見てるだけは暇だからね」

赤き加速と牙の切り札

模擬戦第八試合…炎のフィールドに立つフィリップと照井ペアとスバルとノーヴェペア。

「スバル・ナカジマー等陸尉です。 全力で行きます！」

「ノーヴェ・ナカジマ。 手加減無しで行く」

「フィリップだ。 本名はあるけど、こっちの呼び名が馴染み深いからね」

「風都署超常犯罪捜査課の照井竜だ。 此方も全力で行く」

そうやってスバルとノーヴェは構え、照井はアクセルドライバーを装着した。

予めダブルドライバーにジョーカーメモ리가差し込まれたフィリップは、肩に恐竜型のガジェットを掌に乗せた。

「恐竜のガジェット？」

「何だ、アレ？」

疑問を感じたスバルとノーヴェであったが、フィリップはすぐさまそのガジェットを変形させ、一本のガイアメモリを出現させた。

【ACCEL】

【FANG】

「変身！」

「変……身！」

【ACCEL】

【FANG・JOKER】

照井は赤きボディに青い複眼の戦士・仮面ライダーアクセルに変身した。

そしてフィリップは、右半身が白で左半身が黒、そして触覚・複眼・ボディに猛獣の気高さと牙のような鋭さを思わせる雰囲気の変身した。

『牙の記憶』を宿すファングメモリと『切り札の記憶』を宿すジョーカーメモリによって、フィリップが主体となる『牙の切り札』仮面ライダーW・ファングジョーカーが、此処に光臨した。

「ハア！」

すぐさま四人は、一斉に激突を開始した。

「WVSスバル」

Wとスバルは、燃え上がる炎の中で激しい戦いを繰り広げていた。

「ヤア！」

スバルが勢い良く殴りかかるが、

「ハッ！」

Wはすぐさま拳を受け止めた。

「んぐぐぐぐ………」

力を入れているつもりが、中々入らない。

「な………何で!？」

「ラア！」

「キヤア！」

すると今度はWに思いっきり吹き飛ばされてしまう。

「クツ！ リボルバー……………シユウウウト！」

右手から繰り出す一撃をWの懐に叩き込んだ。

ドスンという音が鳴り響き、手応えを感じたスバルであったが、

「やるね」

「!?!」

Wはダメージを受けているどころか、全く平然としていた。

実はファングジョーカーは、通常のWとは違って『メモリチェンジ』という汎能性を持たない代わりに驚異的な戦闘力を持つことが出来るのである。

すぐさま体勢を立て直したスバルは、

「ナツクル……………ダスタアアアアア！」

魔力で強化した拳で殴りかかるが、Wはファングメモリの恐竜の頭部にある角部分・タクティカルホーンを右手で一回弾いた。

【ARM FANG】

その瞬間、右手から鋭い刃・アームセイバーが出現し、その刃で攻撃を防いだ。

モニターを見ていた一同は、驚きを隠せなかった。

「ウソだろ、スバルの拳が効かないって!?!」

「あんなに強い相手、今まで見たこと無い」

スバルの上司であるのはとヴィータは、スバルを翻弄するWに驚きを隠せなかった。

「最初はアームフングか……」

そう言いながら閃可はモニターを覗いていた。

ファングジョーカーの戦闘力に冷汗を掻いたスバルは、ウイングロードで翻弄する作戦に出たが、

「させないよ」

Wはタクティカルホーンを二回弾いた。

【SHOULDER FANG】

右肩に出現した刃・ショルダーセイバーを手に持ち、それをスバルに目掛けて投げ飛ばした。

「ハア！」

ブーメランのように飛んできたショルダーセイバーに驚いたスバルは、

「うわっ！」

すぐさま避けるが、誤って足を滑らせてウイングロードから落ちてしまった。

「いつ痛う〜」

痛がりながらも起き上がるスバルであったが、

「決めるよ、翔太郎」

「ああ、行くぜ！」

Wはタクティカルホーンを三回弾き、

【FANG MAXIMUMDRIVE】

右足に出現した刃・マキシマムセイバーが鋭く光りだす。

「ハアッ！」

飛び上がったWは、身体を思いつきり回転させ、

「「ファングストライザー!!!」」

そのまま回し蹴りの要領で、ファングジョーカーの必殺技・ファングストライザーをスバルに叩き込んだ。

「やばっ!」

すぐさまスバルは、Wの攻撃をガードしたのであった。

果たして、その行方は……

くアクセルVSノーヴェく

同時刻、アクセルVSノーヴェ戦では……

ノーヴェは拳を叩き込み、アクセルはエンジンブレードでガードした。

「クソッ！」

「甘いな」

そう言ってアクセルはエンジンメモリを差し込んだ。

【ENGINE ELECTRIC】

すると、エンジンブレードの刀身が電気を纏い、アクセルはそれを振り下ろした。

「うおっと!」

ノーヴェはすぐにそれを避けながら隙を窺った。

「あんな攻撃があるんだ。必ず隙がある筈だ……」

「(成程、隙を窺っているようだな)」

アクセルもそれを見抜いていた。

するとノーヴェは、真っ向から突進を仕掛けた。

「ウオオオオオオオオオオ!」

「来るか!」

【JET】

するとアクセルは、エンジンブレードの刀身からエネルギー波を放った。

それも気にせずに突進してくるノーヴェ。

「ならコレだ!」

【ENGINE MAXIMUMDRIVE】

今度はエンジンブレードから巨大なA字型のエネルギー波・ダイナミックエースを放った。

しかし、その時であった。

「そこだ！」

その瞬間、ノーヴェはエアライナーを発動させ、それを滑走路のよ
うに進み、アクセルの後ろへと跳んだ。

「しまった！」

隙を作ってしまったアクセルは、すぐさま振り返ろうとした瞬間、

「リボルバースパイク！」

魔力で脚部を強化させたノーヴェのキックが直撃した。

「ガッ！」

攻撃を喰らったアクセルは、その場から吹き飛ばされてしまった。

その様子を見ていた一同。

「あの刀、蒸気だけじゃなくて電気や呼び道具も出せんのかよ!？」

「しかし、ノーヴェも考えたものだな」

恋次はエンジンブレードの仕組みに驚き、シグナムはノーヴェの捨て身の戦法に感心した。

「これならノーヴェの勝ちは決まりだね」

なのはがそう言うが、真之介がこう言い出した。

「いや、まだまだぜ」

「え?」

それを聞いた一同は、疑問を感じてしまった。

起き上がったアクセルと構えを崩さないノーヴェ。

「今の攻撃は中々なモノだな……」

「まあな。悔いのねえように、全力を出した方がよいぜ」

「そうだな……」

するとアクセルは、手に持っていたエンジンブレードを投げ捨て、

「全て……振り切りぜ！」

信号機とストップウォッチが一体化したようなガイアメモリを取り出して、アクセルメモリと取り替えた。

【TRIAL】

グリップを捻ると、アクセルの装甲が赤から黄に変わり、そして装甲が削れると同時に青へと変わった。

『挑戦の記憶』を宿すトライアルメモリの力によって生まれた、青き挑戦・アクセルトライアルへとチェンジした。

「さあ、振り切るぜ！」

その瞬間、アクセルは一瞬でノーヴェの懐に飛び込み、肘撃ちを叩き込んだ。

「グッ！」

ノーヴェはすぐにガードしたが、その一撃の重さによって吹き飛ばされてしまう。

トライアルメモリの特性は『高速移動』で、装甲が削れて防御力が低下してしまうが、その分身軽になったため、極限までの高速移動を持つことが出来るのであった。

「（は……速すぎる……！）」

驚くノーヴェであったが、次の出来事に驚きを隠せなくなってしまった。

「W & amp; アクセル VS スバル & amp; ノーヴェ」

「スバル！」

ドガーンという音と同時に、自分の元まで吹き飛ばされたスバルに驚くノーヴェ。

「いててて…… フィリップさん、見た目に寄らず手強い」

実はスバルは、Wが放つファンゲジョーカーの必殺技・フェングストライザーをガードしたが、その威力に吹き飛ばされてしまったのである。

「こつなつたら、行くよノーヴェ！」

「ああ！」

そうやって二人は、拳に魔力を集中していた。

駆けつけたWもこれには驚くが、フィリップがこつ言った。

「照井竜、こつちも合体技で決めるよ」

「ああ」

トライアルから元の形態に戻ったアクセルは、マキシマムグリップを捻り出す。

【ACCEL MAXIMUMDRIVE】

「フツ、そうこなつくちゃ」

【FANG MAXIMUMDRIVE】

翔太郎がそう言うと、Wは再びタクティカルホーンを三回弾き、フアングストライザーの準備をする。

「そんなじゃ……タイミング合わせて、“ライダーツインマキシマム”だ！」

「ああ」

「決めるよ」

互いに大技で決める二組。

「ウオオオオオオオオオオ！」

先に仕掛けたのは、スバルとノーヴェ。

放つのはリボルバーシユート。

そしてWとアクセルもその大技に答えるべく、取って置きの技を放った。

「ウウライダー……ツインマキシマム……」

アクセルグランツァーとフアングストライザーによる合体攻撃。

ナカジマ姉妹のリボルバーシユートとライダーコンビのライダーツ

インマキシマムが、ぶつかり合った。

互いの技がぶつかり、その衝撃で吹き飛ばされたのは……

「グアッ」

「ウワッ！」

スバルとノーヴェであった。

「お嬢さん方、まだやるかい？」

翔太郎がそう言うと、上半身を起こしながら二人はこう言った。

「いえ、参りました」

「参ったよ、降参だ」

模擬戦第八試合は、息の合った合体技で勝利を手にしたWとアクセ

ルの勝利であった。

第二十八話：赤き加速と牙の切り札（後書き）

次回、白い魔王VS神淨の討魔

第二十九話：白い魔王VS神浄の討魔（前書き）

模擬戦に入る前日、高町なのはは夢を見た。

そこには白く美しく、まさに純白と言っても良い世界であった。

「ここは？」

驚くのはであるが、彼女の前にある人物が現れた。

「なのは」

「え？」

振り返ると、そこには自分に魔法を教えた人物、ユーノ・スクライアにそっくりな銀髪の青年であった。

「ユーノ……君？」

余りにも似ていたため、つい彼の名前で呼んだ。

すると青年は、首を横に振りながらこう言った。

「違うよ、僕の名前は　だよ」

「（聞こえない？）」

しかし、彼が名乗ろうとするとノイズが入った感覚になってしまい、名前が聞けなかった。

「どつちやら、今の君にはまだ僕の名前は聞こえないようだね」

そう言って青年は姿を消した。

「待って！」

追いかけてよとしたのはは、そのまま目を覚ましたのであった。

「ゆ……………夢？」

しかし、これが現実になるとは、まだ誰も知らなかった。

第二十九話：白い魔王VS神浄の討魔

フェイトと神裂、スバルとノーヴェにフィリップと照井が戻ってきたところで、

「さて、最後の四試合の組み合わせを発表するわ」

そう言って閃可は組み合わせを発表した。

「第九試合・高町なのはVS上条当麻」

「ほえ!？」

「え!？」

これにはのはも上条も驚きを隠せなかった。

「第十試合・坂田銀時VS斬月」

「あの〜……斬月って……誰？」

銀時がそう言うと、一護が答えた。

「斬魄刀だよ銀さん」

すると真之介は、何処からか奇妙な形の人形を取り出した。

「お前……それ……」

「転神体……隠密機動の重要霊具だ。一護、刀をコイツに刺せ」

言われた一護が刀を突き刺した直後、彼の隣に長身でサングラスを掛けた黒ずくめで長身の男が出現した。

「久しぶりだな、一護」

「オッサン……」

それを見た銀時は、恐る恐る尋ねた。

「あの……もしかして、斬月さんで宜しいでしょうか？」

「ああ」

「……「エエエエエエエエエエ！？」」「」」

それを聞いた死神メンバー以外は、驚きの余り言葉が出なかった。

「次行くわよ。 第十一試合・浦飯幽助VS黒崎一護」

「ヨッシャア！ 待ってましたアアアアアア！」

ヤル気満々の幽助に、一護は若干式気味であった。

「そして第十二試合・奴良リクオVS沢田綱吉」

「宜しく願います」

「あ、うん。 宜しく」

そう言ってツナとリクオは互いに礼をする。

「それじゃ、なのはと当麻はフィールドに向かって」

なのはと上条は、すぐさまフィールドに向かった。

第九試合……雪のフィールドでは、なのはと上条が立っていた。

「（イキナリ不幸だ……隊長やってるってことは、相当強いって事だよな……）」

そうやってイキナリネガティブになる上条。

「行っておくけど当麻君、手加減はしないよ」

そうやってなのはは、レイジングハートを構えた。

「クッ！」

こうして高町なのはと上条当麻の戦いが、気って落とされたのだった。

「行くよ、レイジングハート！」

するとなのはは、魔方陣を展開させ、レイジングハートの砲撃を上条に放った。

「エクセリオン……バスター！」

「クソッ！」

それを見た上条は、すぐさま避けながら走り出した。

目指すのはなのはの元。

「プロテクション！」

それを見たなのはは、魔法の防御壁を作り出し周りを固めた。

だがしかし、ここで思わぬ出来事が起きた。

「ウオオオオオオオ！」

上条の右手に触れた瞬間、ガラスのように砕かれたのであった。

「そんな!?!」

驚くなのはは上条は拳を叩き込むが、なのははすぐさま空へ飛んだ。

「クソッ！」

攻撃がヒットできなかった事に苛立つ上条。

しかしなのはは、それ以上の疑問を感じた。

「（どういう事！？ 当麻君の手に触れた瞬間、プロテクションが砕かれるなんて……）」

すると今度は、スラッシュムーブで上条の背後に回ると、

「な！？」

「取った！（いくら当麻君でも、手を握られたら逃げる事が出来ない！！）」

そう言つて、上条の右手を掴んだその時であった。

バシユウウウという音と共に、バリアジャケットが袖から徐々に解け出してしまったのだ。

「え！？」

驚いたなのは、すぐさま彼の右手を振り払い、再び空へ飛んだ。

「また上か！！」

そう言つて渋い顔をしながら空を飛ぶのはを見る上条。

「（どう言うこと！？ 当麻君に触れた瞬間、バリアジャケットが解けた！？）」

驚き隠せないなのは、肌が露出した左腕の袖を修復させた。

「だったら……」

今度は上条に向けて指を向けると、

「チエーンバインド！」

魔力で作られた鎖が、上条の身体を縛り上げた。

「な!？」

「今だ！」

驚く上条に構わずなのは、レイジングハートを向けながら、

「デイバイン……………バスタアアアアアアアアアア！」

十八番の魔法・デイバインバスターを放った。

「ゲツ!？」

そのまま魔力の砲撃は、上条へと放たれた。

「（勝った!）」

なのはがそう思った、次の瞬間であった。

バシユウーンという音と共に、右手を突き上げた上条が、デイバインバスターを打ち消したのだった。

「な!？」

バインドで身動きを取れなくなったハズでありながら、自分の魔法を打ち消した上条に驚きを隠せなかったなのは。

「クッ！」

再びバインドを放つが、

「無駄だぜ」

上条の右手に触れた瞬間、バインドが消えてしまったのであった。

「な!？」

「いい加減に降りて来いよ。まだ勝負は始まったばかりかだぜ？」

驚くのはに、上条は似合わない挑発をかました。

モニターを覗いていた六課メンバーは、驚きを隠せなかった。

「ウソ………なのは魔法が効かない!？」

「どういう事や!？　うち等の切り札“エース・オブ・エース”、
“管理局の白い魔王”の魔法が効かないなんて!？」

動揺を隠し切れないフェイトとはやてに、真之介は説明した。

「まあ、相手が当麻っていう事自体でアイツの余裕は、既に殺されてるけどな」

「どう言う意味だ?」

シグナムの問いに閃可が答えた。

「上条当麻の能力名は『幻想殺し(イメージブレイカー)』。その右手に触れた異能は打ち消され、無効化する事が出来るの」

「異能を打ち消すだ!？　そんな能力、聞いた事ねえぞ!」

ヴィータがそう言うが、真之介がサラッとこう言った。

「じゃあ、目の前にある状況は夢か?　言っておくが、あの右手に能力者が触れると能力を無効化させることが出来るんだ。さつきなのはバリアジャケットが解けかけたのも、アイツが当麻の右手に触れたからだ」

それを聞いた科学と魔術メンバー以外の一同は、驚愕を隠しきれなかった。

「能力者本人に触れたら、能力が使えなくなるって!？」

「どんだけチートな能力だよ!？」

さらに追い討ちを掛けるように、閃可がこう言った。

「彼の能力を知っているものは、“神をも浄化させる魔の討伐者”という意味から、彼のことを“神浄の討魔”と呼ぶ者もいるわ。または神の上に立つ者という意味で“神上”と呼ぶ者もいるから」

「神の………上に………立つ!？」

それを聞いただけでも、全員が凍りついた。

魔法を無効化され、接近も出来ないのは。

「（どうすれば……………」

動揺で戦えない彼女であったが、突如目の前にある人物が現れた。

「アナタは……………」

それは夢の中で出会った、ユーノに良く似た銀髪の青年であった。

「なのは、怖がらないで。恐怖は、全てを支配する。君はまだ、僕の名前を呼んでいない。」

その瞬間、なのはの中の何かが目覚めた。

「恐怖を捨て、前を見て！ 臆せば失う、呼んで、僕の名は」

「澄み渡れ……………」
『せいがい星界』！！』

『彼』の名を呼んだ時、なのはの奥底に目覚めた力が放たれた。

突如起きた光に驚き、上条はすぐさま目を瞑った。

目を開くと、そこにはレイジングハートを右手に、星型のチャクラムを左手に持ったなのはがいた。

「何だ、その武器は!？」

驚く上条であったが、なのははその問いにこう答えた。

「これが、私の新しい力……斬魄刀の『星界』」

「「「「「エエエエエエエエエエエエエエエエ!？」「「「「「

それを聞いた一同は、驚きを隠せなかった。

「「どう言うことだ!　なのは殿に死神の力があつたというのか!？」

「知るかよそんなこと！」

死神メンバーは驚きを隠せなかったが、閃可は不適に笑いながら呟いた。

「遂に目覚めたか」

ユツクリと地上に降りたなのは。

それを見た上条は、あるモノを腰に巻いた。

外見はダブルドライバーのロットが右側のみしかないような形状のベルトで、名はロストドライバー。

そして上条は、懐から一本のメモリを手にした。

【JOKER】

そのメモリを差し込むと、上条はスロットを横に倒した。

「変身！」

【JOKER】

次の瞬間、上条の体が徐々に黒い戦士に変身した。

それは翔太郎が変身して見せた、仮面ライダージョーカーであった。

只違うのは、右手に白い炎のような模様が付いていた事であった。

この姿を観た翔太郎とフィリップは、

「とうとう変身したか、当麻」

「見せて貰うよ、君の力を」

そう言って愛弟子の姿を観ていた。

「仮面ライダージョーカー……上条v rって所かな」

「いや、ホワイトフレアって呼ぶべきだなって」

そう言っつて閃可と真之介は映像を観ていた。

「行くぜ！」

「ええ！」

そう言っつて上条が変身した仮面ライダージョーカー（以下ジョーカー）と斬魄刀とレイジングハートを構えたのはが、全てを出そうとしていた。

果たして、死神の力によつて世界を覆う星の刃を手にした白い魔導師と、白い炎を纏う右手を持った黒い切り札と化した幻想殺しの戦いの行方は！？

次回に続く。

第二十九話：白い魔王VS神浄の討魔（後書き）

次回、流星の刃と怯まぬ信念と白い夜叉VS黒い賢者

第三十話：流星の刃と怯まぬ信念と白い夜又VS黒い賢者（前書き）

速めに終わりそうです。

銀さんVS斬月戦

第三十話：流星の刃と怯まぬ信念と白い夜又VS黒い賢者

斬魄刀・星界せいかいを手にしたなのはと、仮面ライダージヨーカーに変身した上条（以下ジヨーカー）。

この二人の戦いに、決着が着くのであった。

「星界、レイジングハート……行くよ！」

「これで決めるぜ！」

流星の刃と怯まぬ信念と白い夜又VS黒い賢者

「うおおおおおおお！」

ジョーカーはなのはに向かって突進して行く。

「ハッ！」

するとなのはは、星界をジョーカーに向けて投げ飛ばした。

シュルルルと飛んで行く星界。

「そこ！」

その瞬間、星界が二つに分かれ、ジョーカーの左右に飛んで行く。

「な！？」

驚くジョーカーであったが、そのまま星界はジョーカーに向かって方向を変える。

「クソッ！」

ジョーカーは飛び上がってかわすが、星界は元の一つに戻ってなのはの手元に戻った。

「ブーメランかよ！」

これにはジョーカーもツツコミを入れる。

「だったらコレだよ」

なのはは星界を握りながら、ジョーカーに振り下ろした。

「クッ！」

イマジンブレイカー
右手でそれを防ぐジョーカー。

しかし、死神の魂を具現化させた武器である斬魄刀は、膨大な霊圧を宿しているため打ち消す事はできない。

「オラア！」

右手で刃を振り払ったジョーカーは、すぐさま後ろへ下がった。

それを見たなのはは、星界を上空へ投げ飛ばしてこう言った。

「星空喜劇・第一幕『天之川』！」

その瞬間、無数の刃と化した星界が降り注がれたが、

「!!!」

コレを見たジョーカーは迷わず、なのはの方へ走りだした。

しかし、なのはも油断を見せなかった。

レイジングハートからピンク色の光が集中され、

「スターライト……ブレイカアアアアアアアアアア！」

最強の必殺技『スターライトブレイカー』を放った。

「クツソオオオオオオオ！」

すぐさまジョーカーは、メモリを取り出しマキシマムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

「ウオオオオオオオオオ！」

右手に白いエネルギーが集中した『ライダーパンチ』で、『スターライトブレイカー』を防いだ。

バシューンという音と共に、スターライトブレイカーを打ち消したが、無数の星界が襲い掛かって、ダメージを負った。

「クツ！」

逃げ出そうとするジョーカーであったが、なのはがそれを許さなかった。

「レイジングハート、星界……行くよ！」

「やったああああ！　なのはママが勝ったよー！ー！」

「凄いよなのは！」

「見事だ」

「ほんまに凄いわ、なのはちゃん」

六課メンバーの一人一人が、なのはの勝利に大いに喜んだ。

逆に科学・魔術メンバーは、

「うそ……アイツが……アイツが負けるなんて!？」

「信じられねエ……」

「まさか……上条当麻が……敗北!？」

上条の敗北に驚きを隠せなかった。

「ハア…………ハア…………ありがとう、レイジングハート…………それに…………星界」

そう言っただけなのは、二つ相棒を握り締めた。

だが、なのはにとって予想外の出来事が起きた。

煙が晴れると同時に、ジリツという足音が聞こえた。

「ハア…………ハア…………ハア…………」

「な!？」

そこには上条当麻の姿があった。

変身が解け、ボロボロになっていながらも、傷だらけの身体で立っていた。

「ハア…………ハア…………ハア…………」

上条自身も体力が限界であるが、そのままなのはの方へ歩き出す。

「そ…………そんな…………」

霊力と魔力を消耗したなのはも立っていられるのが精一杯。

しかし上条は、彼女の方へユツクリと歩き出した。

「うそ……………今のなのは、ホントの全力全開のハズなのに!？」

「ホンマや! 本気を出したなのはちゃんの攻撃を喰らって、立ち上がるなんて!？」

「奴は本当に人間か!？」

「打たれ強いにも程があるぜ!！」

本気のはのはの攻撃を受けて尚、立ち上がった上条にフェイトとはやては驚き、シグナムとヴィータは彼の打たれ強さに驚きを隠せなかった。

無論、他の六課メンバーもである。

すると真之介は、冷や汗を掻きながらこう言った。

「アイツの……上条当麻の本当の恐ろしさは、『右手』の力でも無ければ、相手の能力に応じた戦法でも無い……どんなに傷だらけになっても、どんなに不利な戦いにも決して怯まずに立ち向かう揺ぎ無い精神力と信念だからな。言ったら、上条が相手になった時から既になのはの負けは決まってるって」

それを聞いた一同は、驚きを隠せなかった。

『信念』……それが上条当麻を動かす原動力であるなら、精神面で彼に勝てるモノは居ないであろう。

「あ……ああああ………」

徐々に歩き出す上条。

今すぐに逃げ出したいのはであるが、恐怖で体が動けなかった。

「クッ！」

抵抗しようと星界を振るうが、上条はそれを右手で弾いた。

霊力を失った星界は、元の形状である星型の鏢の斬魄刀へと変わる。

「歯あ……食い縛れよ、魔導師」

そう言つて上条は、右手を強く握り締め、

「俺の………いぢげき全力全開は………少し………響くぜ」

ドガツと、思いつきりなのはの顔を殴り付けた。

「ガツ………」

殴られたのはは、なんとか踏み止まるが、

「やっと………一発………入れられ………た………」

そのまま上条が倒れる場面を見届けたのであった。

「か………勝った………んだ」

模擬戦第九試合…限界を超えた戦いの末、上条が気絶という形でなのはが勝利を収めた。

「こ……今度こそ……なのは勝ちだよな？」

「そ……そうみたいやな……」

上条がまた立ち上がるんじゃないか、という考えが頭から離れられないフェイトとはやて。

「シグナム……お前、当麻と戦いたいか？」

「ふ、ふざけてるのかヴィータ！ 相手は高町の攻撃を受けて立っ
ていられるだけじゃなく、そのまま戦おうとした奴だぞ！？ そん
な奴を相手にする事だけでも考えたら、背筋が凍ってしまうわ！！」

ヴィータの質問に必死で答えたシグナム。

それを聞いたフォワード陣のメンバーも、愕然としていた。

「シグナム副隊長が恐怖すると言い出すなんて……………」

「あの人、どれだけ恐ろしいのよ……………」

「もしかして、一番怖いのは上条さんの方じゃ……………」

「そ、そうだね……………」

第十試合目……………荒野のフィールドでは、銀時と斬月が立っていた。

「んじゃ、行きますか」

銀時はそう言っつて右手に木刀、左手に日本刀を手に持っていた。

因みにこの日本刀は、閃可から貰った物である。

「（スゲエ闘気だぜ……コッチが押し潰されそうじゃねえか）」

今まで無い闘気を感じた銀時は、思わず冷汗を掻く。

「行くぞ！」

瞬歩で懐に入った斬月。

ガキーンという音と共に、木刀と日本刀を交差させてガードする銀時。

「んぎぎぎぎぎ……」

しかし銀時は、攻撃をガードするだけが精一杯で、反撃が出来ない。

「ハッ！」

斬月はガラ空きの腹部を蹴り、銀時を吹き飛ばす。

「ガッ！」

吹き飛ばされた銀時は、後ろの岩山へ吹き飛ばされる。

「ぐ……あ……」

予想以上の強さに苦戦してしまう銀時。

「立て、坂田銀時。勝負はまだ、コレからだ」

そう言って斬月は刀を構えていた。

第三十話：流星の刃と怯まぬ信念と白い夜叉VS黒い賢者（後書き）

次回、目覚めた夜叉^{おに}

オリジナル紹介

「斬魄刀」

名前：星界^{せいがい}

所有者：高町なのは

解放の句：澄み渡れ『星界』

能力：高速追撃、分裂飛行

詳細：死神の力を覚醒させた高町なのはの斬魄刀。

通常時は鍔が星型の日本刀であるが、解放後は刀身が星型の戦輪^{チャクラム}に変わる。

分裂して相手を錯乱させたり、追撃を行う事ができる。

必殺技は、魔力を集中させたレイジングハートの先端に星界を取り付けて放つ『流星光破^{シューティングスターライトブレイカー}』。

本体は、外見がユーノ・スクライアに良く似た長い銀髪の青年。

（仮面ライダー）

名前：仮面ライダージョーカー・ホワイトフレア

変身者：上条当麻

使用メモリ：ロストドライバー、ジョーカーメモリ

能力：身体能力向上、異能無効化

詳細：上条当麻が変身する仮面ライダー。

外見は翔太郎のジョーカーに似ているが、右手には白い炎のような模様が付いている。

『ジョーカー・ホワイトフレア』が正式な呼び名であるが、本編では『ジョーカー』と呼んでいる。

身体能力の向上だけでなく、上条の能力である『幻想殺し』と同様に異能の無効化が可能。

必殺技は白いエネルギーを纏いながら放つ『ライダーパンチ』。

彼が使用するジョーカーメモリは、外見は翔太郎のモノと同様であるが、頭文字イニシャルの色が白である。

第三十一話・目覚めた夜叉（前書き）

銀時が遂に！

第三十一話・目覚めた夜叉

「ハア……………ハア……………ハア……………ハア……………」

斬月の驚異的な強さに、絶対絶命となった銀時。

「立て、坂田銀時。勝負はこれからだ」

果たして、銀時に勝算はあるのか！？

刀を構え、真っ向から突進して行く斬月。

「ハッ！」

「クッ！」

銀時はすぐさま防ぐが、

「そんな甘い剣では、斬月わたしの刃は防げん」

そう言ってそのまま銀時を吹き飛ばした。

「ガアッ！」

吹き飛ばされた銀時は、立つのが精一杯であった。

「どうした、その程度か？」

表情を一回も変えない斬月に、銀時はポツリと呟いた。

「どつやら……此処までだな」

「そんな、銀さんが……………」

新八は、追い詰められている銀時の姿を見て、驚きを隠せなかったが、

「何ビビッてるネ新八！」

「んが！」

神楽に殴られてしまう。

「私達がしっかりしなけりゃ、誰が銀ちゃんを信じるアルか！」

「神楽ちゃん……………」

神楽の喝を受けた新八は、モニターに目を向ける。

「頑張ってください、銀さん！」

ボロボロの身体を起こしながら刀を構える銀時。

「成程、威勢は大したものだ」

そう言って斬月は、刀を上挙げ、

「だが、コレならどうだ」

そのまま振り下ろした。

その瞬間、膨大な霊圧による巨大な斬撃が放たれ、

「……」

コレに驚く銀時は、必死で避けた。

ドガーンという音と共に、地面が一直線に斬れていた。

「オイオイ、マジかよ」

驚く銀時に斬月がこう言った。

「今の技は、斬月わたしの刃に霊力を吸収させ、巨大な斬撃を放つことが出来る。名を『月牙天衝』」

すると斬月は、刀を前方に向け、

「既に私達の事は聞いている筈……ならば、『これ』を隠す必要はないな」

そう言つて真の力を解放した。

「卍……………解!!!」

その瞬間、膨大な霊圧が解放され、周囲は煙に覆われた。

「クッ!」

煙が晴れると同時に銀時は思わぬモノを目にする。

「な!?!」

「行くぞ……………」

そこに居たのは…………

「アンタ……………斬月か!?!」

「ああ。いや、今の私の正式な名前は『天鎖斬月』だ」

黒いフード付きの服を身の纏つた、二十代くらいの青年と化した斬

月が、卍解としても自分のもう一つの姿・天鎖斬月を手にしていた。

「って、若返ったあああああああああ!?!」

「どうということアルかアアアアアアアアア!?!」

新八と神楽は、卍解した斬月の姿に驚きを隠せなかった。

「おいおい、万時屋のヤロウ……マジでやばいぞ」

普段銀時と喧嘩する土方も、コレばかりは彼の身を案じた。

「月牙……………天衝」

「！！！」

再び放つ月牙天衝に、銀時はすぐさま避けた。

「クソッ！ あの技、何発も撃てんのかよ！！！」

しかし斬月は、瞬歩で先回りして彼を蹴り飛ばした。

「ガッ！」

蹴られた銀時は、その場から吹き飛ばされた。

「この程度か……………興奮めだな」

そう言って斬月は、背を向けて歩き出す。

「（このまま……………負けるのか……………）」

銀時はそう思いながら、瞼を閉じた。

二十年前…一人の少年が屍の所持品を剥ぎ取っていた。

その姿を見た者は、彼を『屍を喰らう鬼』と呼んでいた。

そんなある日、少年の噂を聞きつけた男が現れた。

「おやおや、“屍を喰らう鬼”が居ると聞いて、此処まで来たのですが………」

男は、少年の頭に優しく手を置いた。

「なんとも、可愛らしい鬼がいましたね」

しかし少年は、男の手を払い、刀を構えた。

「良い刀ですね。それもその屍から取ったモノですか？ よく此処まで、己の身を守れましたね」

すると男は、自分が差していた刀を取り、それを少年に与えた。

「差し上げます。もうその刀は必要ないでしょう」

そう言つて男は背を向け、少年にこう言つた。

「刀（そいづ）の使い方を知りたければ来なさい。他人（ひと）に怯え、自分を護る為の剣はもう必要ない」

少年に優しく、穏やかな声でこう言つた。

「教えてあげますよ。敵を斬るための剣ではなく、己を護る為の剣でもない、己の魂を護る為の剣を……………」

斬月が立ち去ろうとしたその時、

「!?!?」

もの凄い闘気を背中から感じ取り、振り返つた。

そこには、ボロボロに身体に鞭を打つて立ち上がった銀時が、今まで感じられなかった闘気と剣気を放ちながら立っていた。

「うおおおおおおお！」

その瞬間、銀時は驚異的な速さで懐に入り、刀を振り上げた。

「!?!」

斬月はすぐさま攻撃を防ごうとするが、

「グッ！」

ザンツと彼の一撃を受けてしまった。

「クッ！」

斬月はすぐさま反撃しようと刀を振るうが、

ガシツとその刃を銀時に受け止められてしまう。

「!?!」

素手で刃を受け止めた銀時に驚く斬月であるが、

「(う……………動けない!?)」

ピクリとも刀が動けない事に驚きを隠せなかった。

刀を手放して引こうとするが、銀時は彼の足にドスンと刀を突き刺した。

「な!？」

刀を封じられ、足までも封じられた斬月には、もう逃げ場が無かった。

「オラアアアアアアアアアアアアアアアア！」

木刀を手に持ち、連続で叩き込む銀時。

「ガッ！」

怒涛の反撃に逃げる事が出来ない斬月。

実は銀時は、『白夜叉』と呼ばれ、敵味方双方から恐れられる程の実力を持っている。

そう、彼は呼び起こしてしまったのだ。

死神をも退ける、本物の夜叉おにを……。

反撃の隙が作れない斬月は、こう思った。

「（強い……恐らく、一護以上の修羅場を経験している……）」

「コイツで………終えだあああああああ……！」

最後に銀時の頭突きが決まり、

「（私の……負け………だ………）」

その瞬間斬月は、頭部と思われる部分にヒビが入った神転体へと戻ったのであった。

模擬戦第十試合………極限の命のやり取りの中で、奥底に眠る戦いの記憶を甦らせた銀時の勝利であった。

第三十一話：目覚めた夜叉（後書き）

次回、死神代行VS霊界探偵

第三十二話：死神代行VS靈界探偵（前書き）

虎龍

「遂に私がやりたかった戦いが始まります!!」

第三十二話：死神代行VS霊界探偵

自身の斬魄刀・斬月を倒した銀時に驚く一護であったが、

「オシ！ 行くぞ！！」

気合を入れ直したのであった。

「そんじゃ、宜しくな幽助」

「おう、こっちも宜しくな」

そう言って一護と幽助は、握手を交わすのであった。

第十一試合目のフィールドがモニターに映った。

これを見た石田が、ある事に気付いた。

「随分と普通のフィールドだね……何か、何処かの格闘技大会のリングみたいだな……………」

それを聞いた幽助が、あることに気付いた。

「ああー！ これ、暗黒武術会の闘技場のリングに似てねえか!？」

「あ、そう言われるとそうだなぜ!」

「懐かしいですね」

「フン」

それに続くように、浦飯チームのメンバーが感想を言った。

「そうだ。折角、幽助がこの模擬戦で戦うからな。これぐらいは派手にやった方が良くないかと思ってるな」

「サンキューな真之介！マジで楽しくなって来ちまったぜ！！」

真之介の言葉に幽助は嬉しそうに言った。

こうして、一護と幽助はフィールドにワープした。

第十一試合：暗黒武術会の闘技場フィールドの立つ一護と幽助。

「良く来たわね」

そう言って閃可がバニーガールの衣装を身に纏い、マイクを手に持っていた。

「何やってんだよ閃可？　つか、アンタは戦わないんじゃないかねえのか？」

一護がそう言うと、閃可がこう言った。

「何言ってるの！　私は審判なんだから、コレぐらい気合入れるの

は当然でしょう?。」

「審判? 何言ってるんだ? 模擬戦なんだからそんなの必要無いだろ?。」

「此処から暗黒武術会のルールに従って貰うからね。」

「マジでか!。」

ルール?という顔で疑問を持つ一護とは逆に嬉しそうな幽助。

「えーと……………この模擬戦のみのルールは、先に相手を倒した方が勝ちなんだけど、相手が倒れて10数える間に相手が起き上がらなければ勝ち。無論、場外に吹き飛ばした相手を10数える間にリングへ復帰させないのも勝ちに入るわ。」

「ハア!?! 場外負けて事なのか!?!。」

「そう……………今から、黒崎一護VS浦飯幽助による『ミニ暗黒武術会』を開催する!!!。」

そう言って閃可は叫んだのであった。

「あ……暗黒武術会と同じルールで戦えた！？」

「成程、この模擬戦自体を暗黒武術会にするということか」

「確かに、面白そうですね」

モニターを聞いた桑原、飛影、蔵馬の三人は様々な感想を述べた。

すると、なのはと上条がやって来た。

「今から試合？」

「はい。今、一護さんと幽助さんの試合になります」

「マジかよ。間に合って良かったぜ」

因みに、上条を見た一同は内心驚愕した。

「（え……一度気絶したのに、復活した！？）」

「（回復力早っ！？）」

「（不死身か！？）」

「ん？」

そんな上条本人は、全く気付いていなかった。

リングに立つ、一護と幽助。

「それでは……………始め！！」

閃可の合図と共に、二人の試合が始まった。

「行くぜ！」

そう言っで一護は斬月を構え、

「月牙天衝！」

必殺技『月牙天衝』を放った。

しかし、幽助は全く動こうとしなかった。

「な！？（何考えてるんだアイツは！？）」

一護はそう思ったが、驚くべき事が起きた。

「すう………喝ッ！！」

一度息を吸い込んだ幽助が、気合で月牙天衝を掻き消したのだ。

「な！？」

これには一護も、驚きを隠せなかった。

「行け、一護。 テメエの本気、見せて貰うぜ」

それを聞いた一護は、少し笑いながらこう言った。

「良いぜ……見せてやるよ。 コイツが俺の『卍解』だ！」

そう言っつて斬月を前方に向けた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

膨大な霊圧が解放され、それを肌で感じ取った幽助。

「（スゲエ霊力だぜ。 こんな奴が異世界に居ただけでも信じられねえ……）」

「卍・解！」

そして一護の身体を黒い霊圧が包み込み、

「す……………スゲエ……………」

幽助はその姿に驚きを隠せなかった。

そこには、斬月のコートに似た死魄装に黒い『卍』型の鍔と柄に途切れた鎖の付いた黒い日本刀を手にした一護。

コレこそ、彼の卍解・天鎖斬月である。

「行くぜ！」

一護は天鎖斬月の能力である超速移動で後ろに移動し、

「!?!」

「ウラァ！」

幽助に回し蹴りを叩き込んだ。

「（コイツ……………あの状況で肘打ちと蹴りを仕掛けようとしやがった!）」

しかし、油断も隙も無い彼の反撃に冷汗を掻いた。

「痛え……………良いもん持ってんじゃねえか」

そう言って幽助は立ち上がり、切れた口から出た血を拭った。

「あの幽助って奴、一護の攻撃に合わせて肘打ちと蹴りを仕掛けようとしやがった」

リボーンは、モニターで幽助の戦いを見抜いていた。

「あ、あの状況で反撃しようとしたって言うんですか!？」

獄寺は、幽助に驚きを隠せなかった。

「フン………幽助め、久々に戦り甲斐のある奴と出会えて楽しんでやがる」

そう言って飛影は、腕を組みながらニイと笑った。

「あの状況で反撃しかけるたあ、油断も隙もねえな」

「お前の蹴りも結構効いたぜ。コイツは禪締めて掛かんねえとな」

刀を構える一護に、幽助は唇をペロリと舐めながらそう言った。

「だったら、コイツはどうだ？」

そう言っで一護は、両手で刀を握り締める。

その瞬間、天鎖斬月の刀身から黒い霊圧が纏いだす。

「新技・月牙空斬^{けつがくうざん}！」

月牙天衝を纏った刃で、幽助に攻撃を仕掛ける一護。

「オラァ！」

「うおっとー！」

すぐさま幽助は避けるが、ドガーンという音と共にリングが抉れた。

「まともに喰らったら、ああなるのか……面白え」

「良い反応だな……」

そう言つて一護は、月牙を刃に纏いだすが、

「させるかよ！」

幽助が懐に入つて、高速でパンチを打ち込む。

「グッ!!」

「オラオラオラオラオラアアアアアアアアアアアア!!」

何とか斬月の刃で防ぐ一護であつたが、

「（何つう速えパンチだよ！ しかも、この一撃一撃が鉛みてえに重てえ!!）」

一発一発が重い幽助のパンチに驚きを隠せなかった。

「一護が押されてやがる！」

「信じられん……………あの一護が!?!」

恋次とルキアは、一護が押されているという事に驚きを隠せなかった。

「浦飯の奴、前よりパンチの速さが上がってねえか」

「確かに、また一段と強くなってますね」

「フン、次は必ず勝ってやる」

「モニターだけで、そこまで分かるんですか!?!」

幽助が強くなっている事に気付いた浦飯チームのメンバーに、神裂が驚いてしまった。

「（やべっ……もう、限界だ……）」

防ぐのが精一杯の一護であったが、

「オラア！」

ドガツと幽助のパンチを一発喰らってしまつた。

「い」

「そこだアアアアア！」

その一撃に、一護はすぐさま空中へ逃れた。

「くそお！ 空中うそかよー！！」

苛立つ幽助であったが、

「いつつうゝ………何つうーパンチだよ！ チャドのパンチより強いだろー！！」

一護は殴られた腹部を押さえながらそう言った。

しかし、それも束の間であった。

「喰らいやがれー！！」

指鉄砲のように構えた右手の人差し指から、幽助が強力な一撃を放った。

上空へ放たれた霊丸。

「な!？」

その巨大さに、一護はすかさず月牙を放った。

しかし、霊丸は月牙を飲み込み、そのまま一護に命中した。

「クッ……………」

だが、一護は大したダメージしか受けていなかった。

「咄嗟にもう一回月牙を撃って、威力を下げたか……………やるな」

そう言って幽助は一護の咄嗟の判断に感心を持った。

第三十二話：死神代行VS靈界探偵（後書き）

次回、似たもの同士

第三十三話：似たもの同士（前書き）

死神と魔族の激突は、更にヒートアップです。

第三十三話：似たもの同士

上空で幽助を見下ろす一護と、地上で一護を見上げる幽助。

「来いよ一護。喧嘩はタイムマンが常識だからよ」

「ああ………やってやるよ！」

そう言っで一護は再び月牙を刃に纏った。

モニターで幽助が放った技を見た死神メンバーと六課メンバーは、驚きを隠せなかった。

「な……………何だあの技は！？ 死神の鬼道に似ている！？」

「まるで私のデイベインバスター並の破壊力だよ！！」

ルキアとなのはは驚きながらそう言うと、真之介がこう言った。

「アレは『霊丸』と言ってな、幽助の十八番の必殺技なんだよ」

「どんな技なんだ？」

恋次の問いに、真之介は説明した。

「指に一点を集中させることで、強力な霊力、または妖力の弾丸を放つことが出来る技なんだ。まあ、あれでも二分にぶくらいの威力だぜ？」

「ウソやる！？ あれでまだ、20%しか出してないんか！？」

「おいおい……………飛影も蔵馬も、それに桑原もまだ本気を出してない

方なんだぜ？ あれを本気だと信じてる時点で、お前等は幽助達には勝てねえぞ」

驚くはやてであったが、真之介の言葉に再び驚愕してしまう。

「行くぜ！」

刃に月牙を纏わせた一護は、そのまま幽助に向かって急降下し始めた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！」

一護が急降下していく中、幽助は何かを待つように立っていた。

「（な……………何のつもりだ！？）」

疑問を感じた一護であったが、その疑問は一気に晴れてしまう。

斬月を振り下ろした一護。

しかし次の瞬間、

「な!？」

幽助が霊丸の構えを取りながら、こう言ったのであった。

「さあ、どっちが丈夫タフかな？」

この瞬間、零距离の月牙天衝と霊丸が相殺による爆発を起こした。

ドゴーンという音と共に砂煙が舞い上がる。

「あのヤロウ、一護が月牙を放つ瞬間を待ってやがったのか!！」

「以外に頭が良いな」

恋次は幽助の行動に驚き、リボーンはその意外性に感心した。

しかし、飛影が否定するようにこつ言った。

「違うな、幽助は自他認めるほどのバカだ。何を考えてるのはオレにも分かん」

「全くだぜ」

「ホントにバカですからね」

「それ、褒めてるんか?」

飛影に続くように桑原と蔵馬もそう言つと、それにはやてがツッコミを入れた。

閃可は、二人の安否を確かめるように見渡す。

「クソお、上手く行った筈なんだけどな」

そう言ってリングに戻った幽助。

「おいおいアイツ等、トンでもねえほどの靈力や妖力を解放してやがる！！」

「互いに次の勝負で決める気だ」

「フン、面白い」

モニターを観て浦飯チーム一同はそう言っていた。

「死神と魔族……境遇が良く似たもの同士の戦いが、此処まで面白いとはな」

真之介もそう言って、二人の戦いを観ていた。

構えを取りながら、一気に力を解放する二人。

「行くぜ！」

遂に、全ての力を出そうとしていた。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

一護は急降下しながら月牙天衝を放った。

「フンッ！」

幽助はすぐさま右手で受け取り、

「うおおおおおおお！」

そのまま別の方向へ投げ飛ばした。

しかし、その瞬間を見逃さなかった一護は、

「そこだあ！」

一気に月牙を纏った斬月を振り下ろした。

だが、その時であった。

ガシツと幽助が左手でその刃を受け止めたのであった。

「な!？」

これには一護も驚いてしまう。

「喰らえエエエエ……………」

そんな彼の隙を見逃さなかった幽助は、強力な一撃を叩き込んだ。

「霊光だあああああああん！」

放ったのは、霊光波動拳の技の一つ『霊光弾』。

「がっ
」

ドガーンという音と共に、一護は場外まで吹き飛ばされてしまった。

「何だあの技！？ 幽助の奴、あんな技まで持ってたのかよ!？」

驚くヴィータの問いに、真之介は説明をした。

「あれは『靈光弾』って言ってな……全体に集中した気を拳に集めて、相手に叩き込む技だ。一直線に撃つ靈丸と違って、広範囲に放つことが出来るため、バリエーションとして散弾銃のように飛ばすことも出来るんだ。アイツはそれを『ショットガン』って呼んでるがな」

それを聞いた茶渡は、驚くようにこう言った。

「つまり、幽助は遠近両方の技が撃てるということか？」

「そう言うことだ。まあ、アレでも精々50%くらいだと思っけどな」

最後の真之介の言葉に、全員が驚きを隠せなかった。

「5……6……7……」

カウントを行う閃可。

一護は全く起きようとしない。

「……………」

何時でも戦闘が出来る準備をする幽助。

すると、ガシャリと瓦礫の中から一護が起きるが、

「お前、スゲエな……………完敗……………だぜ……………」

そう言って再び倒れたのであった。

「9……………10！ 勝者、浦飯幽助え〜〜〜！！！」

「おっしやあ！」

模擬戦第十一試合…必殺技・霊光弾で、一護を場外負けにした幽助の勝利。

第三十三話：似たもの同士（後書き）

次回、マフィアVS極道

第三十四話：マフィアVS極道（前書き）

遂に最後の模擬戦となりました。

第三十四話：マフィアVS極道

第十二試合：夜空のフィールドでは、ツナとリクオが立っていた。

「行くぞリクオ、覚悟は良いな？」

「お願いします」

死ぬ気丸でハイパーモード化したツナと刀を構えたリクオが遂にぶつかった。

「ハアッ！」

最初に攻撃を仕掛けたのはツナ。

拳を放ち、リクオはそれを刃で受け止めた。

「ハアッ！」

反撃をするリクオ。

無論、ツナはそれをかわす。

「（速い……とても同じ歳には見えない！ 山本と同じくらいの剣術だ）」

そう思いながらも、ツナは拳を構える。

リクオも刀を構えながら、慎重になる。

「コイツはとても面白くなってきたな」

そう言つて真之介は、モニターを覗いていた。

「リクオ氏とボンゴレは、どっちが勝つのかな？」

大人ランボがそう言つと、獄寺がこう言った。

「アホ牛、十代目に決まってるんだろ！ あんなガキ、一撃で倒せるつて！」

「いいえ！ リクオ様が勝ちますわ！！」

すると氷麗^{Carla}が反論した。

「十代目だ！」

「若です！」

側近同士のいがみ合いを見ながら、呆然とするボンゴレメンバーと奴良組メンバー。

互いに構えながら、慎重になっている二人。

「成程、中々ですね」

「お前もな」

二人はそう言つて、互いに相手の実力を認め合う。

「その姿が、綱吉さんのもう一つの姿って考えても良いんですよ
？」

「ああ……それが何だ？」

ツナが質問をした、次の瞬間であつた。

「だから、見せてやるよ。俺のもう一つの姿を………」

「!?!?」

その瞬間、ツナはリクオの変化に驚きを隠せなかった。

一瞬にしてリクオは、長い白髪に鋭い赤い眼を持った17歳くらいの青年に変化した。

「その……………姿は!？」

「俺のジジイが、“ぬらりひょん”っていう妖怪でな。俺はその血を4分の1受け継いでいるんだ……………言わば混血^{クォーター}ってヤツだ」

驚くツナに、リクオは自分の事を少し説明した。

「マフィアと極道……………こんな面白い喧嘩、そう出来っこないぜ?」

楽しそうに笑うリクオにツナは冷静さを失いかけた。

「(く……………さっきまでの彼とは大違いの雰囲気だ。とても目を合わせられない)」

「何、つつ立てるんだ?」

「!？」

リクオは一瞬でツナの前に現れ、回し蹴りを脇腹に叩き込んだ。

「ゲアツ!」

蹴り飛ばされたツナは、すぐさま立ち上がり、リクオに突進する。

「うおおおおお！」

拳を叩き込むが、すぐさま攻撃を防がれてしまう。

「クッ！」

「どうした、そんなもんか？」

余裕の笑みを浮かべたリクオと、冷静さを失ってしまったツナ。

「よう、勝負の方は？」

控え室では、幽助と一護と閃可が戻ってきた。

「あ、黒崎君」

「ツナの試合は？」

「それが……」

一護に問われた織姫がモニターに顔を向けると、一護は信じられないものを目にしていた。

「な……………何だよアレ！？ アイツ誰だよ！？ ツナの相手は、リクオじゃなかったのか！？」

驚きを隠せない一護であったが、真之介がすぐに答えた。

「アレはリクオだ。 アイツは妖怪である爺さんの血を、4分の1受け継いでるんだ。 ただ、夜にしか変化出来ないという弱点があるがな」

それを聞いた一護は、驚愕してしまう。

「じゃあ……………アレはリクオなのか！？」

「そうだ」

「クッ！」

蹴られた脇腹を押さえながら立ち上がるツナであったが、リクオはすぐさまこう言った。

「何をビビッてるんだお前は？」

「何だと？」

「ツナ、お前の目には『恐怖』しか写ってねえ……そんなんじゃ、すぐに戦いで死ぬぜ」

「!！」

リクオの言葉に反論できないツナ。

「避ける時は“斬られるのが怖い”、誰かを護る時は“死なせるのが怖い”、攻撃する時は“殴るのが怖い”……そんなんじゃお前の拳は俺には届かなねえぞ」

そう言っつてリクオは、剣を向けながら指摘する。

「良いか？戦いに必要なのは『覚悟で、』『恐怖』は必要ない。寧ろ、『恐怖』からは何も生まれねえぞ。避ける時は“斬らせない”、誰かを護る時は“死なせない”、攻撃する時は“殴る”……俺の剣にも見えるだろ？ オメエを“斬る”っていう『覚悟』が」

それを聞いた瞬間、ツナは一瞬でリクオの懐に入り、彼の右頬を殴った。

「グッ！」

殴られたリクオは、すぐに体勢を直しながらこう言った。

「良い目だぜツナ……ソレが『覚悟』だ。今の一撃を忘れるなよ」

そう言っつてリクオは刀を構え、ツナは拳を構えたのであった。

「互いにちゃんとした自己紹介がまだつたな、リクオ」

「そうだな、ツナ」

「ボンゴレファミリー十代目ボス・沢田綱吉。全力で行かせて貰う！！」

「関東妖怪任侠一家『奴良組』三代目総大将・奴良リクオ。いざ、尋常に参る！！」

互いの自己紹介を終えた大空の守護者と魑魅魍魎の主は、互いの全力を出そうとしていた。

「ツナのヤツ、リクオの説教を食らった瞬間に変わりやがった!？」

一護が驚くとリボーンがこう言った。

「恐らくリクオの言葉で、戦う覚悟を決めたんだろう。 奴良リクオ、大した男だぜ」

そう言っつてリボーンは、リクオに敬意を表した。

「うっしやー、面白くなつてきやがったぜ! 頑張つて下さい十代目ええええええええ!」

「若も頑張つて下さああああああい!」

仲間達が見守る中、二人は拳と刃をぶつけ合ったのであった。

『ウオオオオオオオオオオオオオオ!』

果たして、戦いの行方は……

第三十四話：マフィアVS極道（後書き）

次回、鬼纏姫の能力

第三十五話：鬼纏姫の能力（前書き）

この戦いに、新たなる影が！！

第三十五話：鬼纏姫の能力

「ふぁー……あの人の命令とはいえ、退屈すぎるぜ。なあブレイ」

一人の男がそう言って欠伸をする。

「文句を垂れるな、グルー。元々この任務は俺が引き受けるつもりだったんだ。それをお前が行きたいといったから連れてやったんだ」

「へーへー、スイマセンスマセン」

グルーと呼ばれた男は、ブレイと呼ばれた青年にそう言われ、わざとらしく詫びる。

「さてと、早く連中と殺り合いたいぜ」

「焦るな、いずれ時が来る」

二人はそう言って姿を消した。

鬼纏姫の能力

ツナとリクオの攻防戦は、激しく続いた。

「良いぜ良いぜツナ！　これがホントの喧嘩ってヤツだ！！」

「随分楽しそうだな、リクオ」

「ああ、殺し合いの類じゃねえ。　こんな楽しい喧嘩、今までしたことなかったからな！」

ニヤリと笑うリクオとフツと笑うツナ。

「マフィアの十代目ボスと極道の三代目総大将……こんな夢の喧嘩は」

「ああ……確かに楽しい喧嘩だな」

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

二人の拳と刃が、更に加速を上げた。

それをモニターで見っていた一護達も盛り上がった。

「よっしゃあああ！ そのまま行けツナ！！」

「十代目、叩き潰して下さい！！」

「沢田アアアア！ 極限で決めるオオオオオオ！！」

「リクオ様、ファイトです！！」

「若、負けないで下せえ！！」

「リクオ、負けんじゃねえぞ！！」

上記から山本、獄寺、良平、氷麗^{ひつり}、青田坊、鳩の順で声援が上がった。

「極道とマフィア……互いのボスもそうだが、幹部もスゲエな」

一護がそう言って奴良組とボンゴレの声援に驚く。

戦いは遂に、終盤へと差し掛かった。

「ハア…………ハア…………ハア…………そろそろ…………限界だな…………」

「ハア…………ハア…………ハア…………ああ…………そうだな…………」

そう言って二人は構えを取り、

「ウオオオオオオオオオオ！」

急接近で勝負を決めようとした、まさにその時であった。

「「!?!」」

ドゴーンと、突如謎の人物が乱入してきたのだ。

「プツハア〜……此処が真之介ってヤツの隠れ家ってヤツか？」

「な!?!」

「何だデメエ!?!」

「ああ？」

その人物は、胸に孔が開いた褐色の肌の上に白い死魄装を着た、大柄の男であった。

「な……何だアイツは!?!」

「俺の結界を破壊する事が出来るのは、次元の破壊者かヤツに選ばれた幹部クラスの誰かだぞ!？」

驚く一護と結界が壊された事に驚く真之介。

「黒崎……あの男の胸………」

「な!？」

石田に言われて男の胸の孔を観た一護は、彼がどういう存在であるかがすぐに分かった。

「アランカル破面だと!？」

「おーおー、もしやお前等……奴良リクオと沢田綱吉か？」

「だから何だ!？」

「クッ!」

ツナとリクオは、目間の前の敵に警戒しながら構えを取るが、

「とりあえずは……死ね」

その瞬間、男の攻撃がリクオを命中し、

「ガッ」

そのまま彼を容赦無く吹き飛ばした。

「リクオオオオオオオ!!」

攻撃を受け、吹き飛ばされた仲間を心配するツナであったが、

「オラア！」

「クッ！」

男がその余裕を見せなかった。

「お前……何者だ！」

ツナの問いに男は答えた。

「アラシカル破面のグルーだ！」

そう言ってグルーは、再び豪快に拳を振るうが、

「グッ……」

ガキーンとすぐさまリクオが駆けつけ、刃で受け止めた。

「リクオ！」

「ボーっとすんなツナ！ 仮にもこっちは二人だ。一護達が来るまで時間を稼がなきゃならねえ、出来るか？」

その問いを聞いたツナは少し来ながらこう答えた。

「ああ……… やってやるぜ。行くぞ、奴良組総大将！」

「あたぼうよ、ボンゴレファミリーボス！」

そう言って二人は僅かな体力で戦うのであった。

「映せ『鬼纏姫』」
まといひめ

そう言ってリクオは、自身の斬魄刀を解放した。

「……お前、斬魄刀が使えるのか!?!」

「ああ、コイツは俺のもう一つの相棒……鬼纏姫だ」

なのはの試合の後だったのか、少し驚くツナにリクオはそう言って。

「行くぜデカブツ。コレが俺の斬魄刀あしほしの能力だちから」

その瞬間、鬼纏姫の刃から黒い妖気が纏いだし、

「月牙………天衝」

振り下ろした瞬間に、一護の必殺技・月牙天衝を放った。

しかも放ったのは、卍解時に放つ黒い月牙であった。

「一護の月牙だと!?!」

「何だと!?!」

ツナとグルーは驚きを隠せないが、そのまま月牙天衝はグルーへと飛んで来る。

「クソッ!」

グルーはただちに月牙を弾くが、

「狒々王蛇尾丸!」

リクオはそのまま恋次の卍解・狒々王蛇尾丸を叩き込んだ。

「ガアアアアアアアア！！」

これにはグルーも攻撃を受けてしまう。

「お前、ソレ……」

驚くツナにリクオは答えた。

「コイツが鬼纏姫の能力、名は『鬼發鬼襲』」

「鬼發鬼襲？」

「ああ、コイツには刃で映した相手の技を自分の技にする能力を持つんだ。しかも死神の斬魄刀の場合、人間は『始解』で妖怪だと『卍解』が使えるらしい」

そう言って自分の斬魄刀に未だに驚きを隠せずにいるリクオであった。

モニターからそれを観て驚く一護達死神メンバー。

「アレが、リクオの斬魄刀の能力!?」

「万能過ぎじゃねえか!」

「良いから、早くアイツ等を手助けに行くぞ!」

しかし真之介に怒鳴られ、すぐさま我に返ったのであった。

「(待ってるよ、ツナ……リクオ!)」

攻撃の影響で出来た砂煙がグルーの姿を隠す。

「やったのか?」

ツナがそう言うが、

「いや、あのデカさだからな……………多分生きてる」

そう言っつてリクオは刀を構えたが、

「なッ
」

ドガアーンと何かがりくオを吹き飛ばした。

「リクオ！」

「ガハッ……………」

攻撃を受け、その場で倒れるリクオ。

「危ない危ない、今はマジでビビったぜ」

煙が晴れると同時にグルーがそう言っつて現れる。

「クソッ……………」

「驚きだぜ奴良リクオ。まさか俺の『虚弾^{ハラ}』を喰らっつて生きてる
たあ、相当運が良いぜ？」

そう言っつてニヤリと笑うグルーに、ツナが接近した。

「ウオオオオオオオ！」

バアーンとツナは必殺技のX^{エクスパーナ}BURNERを放つが、

「ハアツ、全然効かねえな」

「何!?!」

全く無傷のグルーに驚きを隠せない。

「さて……………それじゃ、死ね」

その瞬間、ドスン　とグルーの手刀が、ツナの胸を貫いた。

「え　　」

一瞬の出来事であるため、何が起きたのかが分からずに敗れるツナ。

「つ……………ツナアアアアアアアアアアアア!!」

その光景を見たリクオの叫びも。虚しく聞こえたのであった。

一方その頃、屋敷の外の街では…

「新しい世界か……」

マゼンタ色のトイカメラを首から提げた青年が、そう言って屋敷に向かった。

「どうやら……この世界だけじゃなく、世界そのものも危ないようだな」

そう言って彼は、数枚のblankカードを眺めたのであった。

第三十五話：鬼纏姫の能力（後書き）

次回、その名はD/見参！ 世界の破壊者

第三十六話・その名はD/見参！ 世界の破壊者（前書き）

遂に彼が登場！！

胸を貫かれたツナは、そのまま投げ飛ばされてしまう。

「ツナ！！！」

一護が駆け寄るが、ツナには意識が全く無かった。

「ツナ、しっかりしろ！ ツナアアアアアアアア！！！」

「ハアツ！ 聞こえるかよ！！ 死んでるんだからよ！」

グルーが、笑いながらそう言うが、

「ウオオオオオオオオオ！！！」

怒りが頂点に達したリクオが、鬼纏まといひめ姫の刃を振るった。

ザンツと刃がグルーの身体を斬り裂く。

「ハアツ、良いぜ奴良リクオ。 今のは本気で俺を殺す気だっただ

……………」

しかしグルーは、その刃を握りだし、

「ちと殺意が足んかったぜ！！！」

そう言ってリクオを投げ飛ばしたのだった。

「ガア！」

投げ飛ばされたリクオは、その場で気を失ってしまっ。

「リクオ！」

一護が叫ぶが、その瞬間に翔太郎とフィリップが仮面ライダーWに変身した。

【CYCLONE・JOKER】

「オラア！」

グルーに殴りかかるWであったが、

「効かねえな……………」

「なん…………だと!？」

「オラア！」

「ガアツ！」

殴られたWは、すぐさまヒートトリガーにチェンジした。

【HEAT・TRIGGER】

「ハアツ！」

炎の弾丸が、グルーに放たれる。

「ハハハハハ！ 何だこりゃ、温けえぜ」

「クソッ！ 全然効いてねえ！！」

仲間が二人やられ、一人は瀕死の身。

「クッ、どうすれば……………」

そんなWが目にしたのは、

「若、しっかりしてください！！」

「リクオ様、しっかり！！」

「十代目、しっかりして下さい！！」

「沢田アアアアア！ 死ぬなアアアアアアア！！」

重傷のリクオと瀕死のツナに声を掛ける奴良組とボンゴレのメンバー。

その中でも、ツナの手を強く握りながら涙を流す京子。

「ツナ……………京子……………」

それを見た翔太郎は、ある決意をした。

Wはトリガーマグナムのスロットにメモリを差し込んだ。

【TRIGGER MAXIMUMDRIVE】

放つのは、ヒートトリガーの必殺技・トリガーエクスポージョン。

「ああ？ 何のつもりだ？」

しかし、Wはスロットからヒートメモリを取り出した。

気付いたフィリップは、すぐさま意識を宿して右腕を動かした。

それに続くように、照井も止めようとする。

「やめる翔太郎！ ツインマキシマムは危険だ！ それを使ったら君の身体は……！」

「左、気持ちは分かるが、それを使うのはよせ……！」

「もう、コレしか手段はねえんだよ……！」

「止める……止めてくれエエエエ!!」

照井とフィリップの意識を宿した右腕を払い除け、翔太郎の意識を宿した左腕は、マキシマムスロットにヒートメモリを差し込んだ。

【HEAT MAXIMUMDRIVE MAXIMUMDRIVE
E MAXIMUMDRIVE MAXIMUMDRIVE MA
XIMUMDRIVE MAXIMUMDRIVE MAXIMUM
MDRIVE……】

「ウオオオオオオオオオオ!!」

その瞬間、Wの体が真つ赤に燃え上がった。

この技はツインマキシマムと呼ばれ、ガイアメモリ二本分のマキシマムドライブを放つ強力な技だが、翔太郎の肉体に大きな負担を掛ける程のダメージを受けるため、諸刃の剣でもあるのだ。

「ウオオオオオオオオオオ!!」

【HEAT MAXIMUMDRIVE MAXIMUMDRIV
E MAXIMUMDRIVE MAXIMUMDRIVE MA
XIMUMDRIVE MAXIMUMDRIVE MAXIMUM
MDRIVE……】

トリガーマグナムを右手から左手に持ち替えたWは、そのまま引き金を引いた。

「ウオオオオオオオオオオ!!」

銃口から強力な炎が放たれ、それがグルーへと命中する。

「な!?!」

これにはグルーも驚き、

「ガアアアアアアアアアア!!」

その炎を浴びてしまう。

強制的に変身が解け、地面に膝を着き、

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

ツインマキシマムの影響で動けないほどのダメージを負う翔太郎。

しかし、その時であった。

「て………ダメエ………」

体が黒焦げになっているのを除けば、全く無傷のグルーが居た。

「ウソ………だろっ………!?!」

驚く翔太郎は、もう身動きが出来ない状態であった。

「コノヤロウ………ぶち殺す」

どうやってグルーは、翔太郎に拳を振り下ろした。

「ヤメロ!!!」

一護達が助けに行くも、拳は翔太郎に近づいた。
だが、その時であった。

バシッとグルーの拳を一人の青年が止めた。

「悪いな、コイツを死なせるワケにはいかないんだ」

首にはマゼンタ色のカメラを提げた青年。

驚く一同であったが、翔太郎だけがその顔を知っていた。

「おま……え……は……」

しかし、ツインマキシマムの影響下で気を失ってしまう。

「何だ、テメエ？」

グルーの問いに、青年は変わったベルトを付け、同時に付属されたケースから取り出したカードを構えながらこう言った。

「門矢士………通りすがりの仮面ライダーだ、憶えておけ！ 変身
!!!」

ベルトのバックルを展開し、その中にカードを差し込んで閉じた。

【KAMEN RIDE DECADE】

その瞬間に門矢士の体が虚像と一体化し、マゼンタ色のボディに緑の複眼と黄色いランプ、さらにプレートがバーコードを思わせるような頭部の戦士へと変わった。

世界の破壊者・仮面ライダーディケイドが、此処に光臨した。

「ディケイド……………これは予想外なのか……………それとも運が良いのか……………」

閃可はそう言いながら驚く。

「ぴ……………ピンクの仮面ライダー!？」

亜紀子がそれを見て驚きを隠せなかった。

それを聞いたディケイドがすぐさまこう言った。

「マゼンタだ! 覚えておけ!！」

「ハアッ！」

「な、何イ！？」

グルーの右腕を斬り落とした。

さらにそのまま銃型のガンモードに切り替え、

【ATTACK RID BULSUT】

引き金を引き、放たれた弾丸がグルーの体を撃ち抜く。

「ガア！」

「あのケース、銃にも剣にも替るのかよ！？」

「一体アイツは！？」

一護と恋次は驚き、その問いに真之介が答えた。

「仮面ライダーディケイド。様々な世界を旅するライダーで、通称『通りすがりの仮面ライダー』だ」

「アイツも世界を行き渡るのがよ！？」

「そうだ、しかも戦闘力も非常に高い」

驚く獄寺に真之介はそう言った。

ディケイドとグルーの戦いは、そのまま終盤に差し掛かった。

「悪いが、倒させて貰うぜ！」

そう言ってディケイドライバーにカードを差し込んだディケイド。

【FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE
ADE】

そのまま銃型のライドブッカーを構え、その前方にはカード状のエネルギーゲートが何枚か出現する。

放つのはライドブッカー・ガンモードから放たれる必殺技・ディメシオンブラスト。

引き金を引くと、巨大なエネルギー波がゲートを潜りながらグルーに放たれた。

しかし、その時であった。

バシインと一人の青年が『ディメシヨンブラスト』を弾いた。

外見はグルーと同じ白い死魄装で、頭部の右側には半分に割れた獣の頭蓋骨のような仮面、胸には穴が開いた黒髪の破面アランカルであった。

「……………新手か」

それを見ても冷静なディケイド。

「ぶ……………ブレイ……………」

グルーがそう言うが、破面アランカル・ブレイが突如手刀でグルーの腹部を攻撃する。

「!!!」

これには驚く一同。

「テメエ……………何を!?!」

怒るグルーに、ブレイはこう言った。

「バカが、勝手な行動は慎め。ヤツは世界の破壊者・ディケイドだ。今のお前じゃ何度やっても意味が無い」

そう言ってブレイは、黒腔カントルガを開いた。

「退くぞ」

「逃げる気か？」

デイケイドの問いに、ブレイは答えた。

「らしくない挑発だな、破壊者^{デイケイド}。いくら貴様でも、その塵共を守りながら戦うなどは到底不可能だ」

落とされたグルーの右腕を担ぎ、黒腔^{カントルガ}に入ったブレイはこう言った。

「次元の破壊者様に伝えておく。真之介と次元の護り巫女・閃可が選んだ者達は、殺すに足らない塵でしたとな」

「ついでに伝えとけ。同じ破壊者として、お前の野望を食い止めてやるってな！」

消えていく二人の破面^{アラシカル}にそう言ったデイケイドであった。

第三十六話・その名はD/見参！ 世界の破壊者（後書き）

次回、虚に堕ちたツナ

第三十七話：虚に堕ちたツナ（前書き）

物語の歯車は狂いだす。

第三十七話：虚に墮ちたツナ

グルーとブレイが退散し、戦闘態勢を解くディケイド。

「さて、早く重傷人の応急処置だな」

そう言って掛け寄った。

「おい、大丈夫か？」

「ああ……助かったぜディケイド、借りが出来たな」

真之介が全員を代表してディケイドに礼を言った。

「必要ない。今はソイツ等を運ばないと」

そう言って変身を解いた士は、リクオとツナと翔太郎を顎で指す。

しかし、彼らは知らなかった。

既に歯車が狂いだしている事を……

ホロウ
虚に堕ちたツナ

「ん…………んあ……………」

「若!」

「大丈夫ですか!」

「お前等……………何で?」

目覚めたリクオは、仲間達にそう言つと、

「覚えてないんですかい?」

「あのグルーってヤツにやられたんですよ」

「！！　そうだ！　ツナは！！」

青田坊から状況を聞かされたリクオは、ツナに目を向けると、

「な！？」

そこには胸を貫かれたツナが、織姫の瞬盾六花の技の一つ『双天帰盾』の結界内で治療を受けていた。

「ツナ……………」

表情が沈んだリクオに、リボーンはこう言った。

「気にするなリクオ。　オメエの所為じゃねえよ、相手が悪かったんだ」

「……………ああ」

励ますリボーンにリクオは頷く。

すると、突如ツナが立ち上がった。

「ツナ！？」

「十代目、大丈夫ですか！？」

山本と獄寺がそう言うが、ツナはピクリとも動かなかった。

「（何だ……………この胸騒ぎは！？）」

「（何だ……この嫌な予感は！？）」

これを見た一護と幽助は、突如胸騒ぎと予感を感じ取った。

そう、コレこそが歯車が狂い始めた瞬間であった。

突如ツナから邪悪な霊圧が解放され、

「あああああああああああああああ！！！」

顔から白い仮面が徐々に彼の顔を覆いだしてきた。

それに驚いた一同は、すぐさまツナから離れた。

「な、何だアレは！？」

士が驚くと、一護や死神メンバーはソレが何なのかを気付いた。

「まさか……ホロウ虚化か!?」

それを聞いた幽助は、一護に問いだした。

「待てよ！ 確か虚って、悪霊みたいな存在だって俺は閃可から聞いたぞ！ ツナがどうして虚になるんだよ!?」

「俺だって分からねえよ！」

すると真之介がこう言い出した。

「恐らく……グルーの攻撃を受けた際、“因果の鎖”までもブチ抜かれたかもしれねえ……」

「な!? そんなことがあるのかよ!?」

一護がそう言うと、因果の鎖のことを知らない幽助はこう言った。

「兎に角、今はツナを止めないと厄介なんだろ！ だったら止めるぞ、被害が広がるうちに」

「幽助の言うとおりだ。 此処はツナを止めるのが最優先だ！」

「クツ………分かったよ」

そう言って三人は覚悟を決めたが、

「つ………ツナ!?」

「ガアアアアアアアア！」

ツナは破面アラシカルの技・響転ソニートで近づき、山本の腕を吹き飛ばした。

「グワアアアアアアアアアアア！」

「山本！」

「双天帰盾！」

恋次が駆け寄り、織姫はすぐさま双天帰盾を山本に張った。

「お止め下さい十代目！ アナタ、自分が何をしたのかわかってるんですか！？」

獄寺がそう言って近づこうとするが、

「ガアアアアアアア！」

ツナが手から虚弾バラを放ち、獄寺の体は右の脇腹が肋骨と内臓ごと吹き飛ばされてしまう。

「十……代……目……」

「獄寺！」

「あやめ……！」

倒れる獄寺に、織姫は双天帰盾の結界を獄寺の方まで伸ばした。

「士……」

「土君!!」

すると、土を呼ぶ二人の男女が現れた。

「ユウスケ、ナツミカン!」

土と共に旅をする青年・小野寺ユウスケと土の居候先の写真館長の孫娘・光夏海であった。

「これは!?!」

「説明は後だ! ナツミカンは怪我人の避難誘導、ユウスケは俺とアイツを止めるぞ!!」

「分かった!」

「分かりました」

そう言つて夏海は重傷を負っている獄寺達の元へ、ユウスケは土と肩を並べる。

土はディケイドドライバーを装着してカードを構え、ユウスケはベルト・アークルを出現させて構えを取る。

「「変身!」」

【KAMEN RIDE DECADE】

土はディケイド、ユウスケは赤い装甲に同色の複眼を持つクワガタ

を模した金色の角の超古代戦士・仮面ライダークウガに変身した。

「フィリップ、亜紀子。左を連れて避難しろ」

「竜君は？」

「俺は沢田を止める」

「でも」

夫を心配する亜紀子であるが、

「心配するな、必ず戻る」

「……………うん！」

照井の言葉で、首を縦に振った。

「照井竜、気を付けてくれ。今の沢田綱吉はドーパント以上に手強いハズだ」

「分かった、気を付ける」

そう言って照井はアクセルドライバーを装着し、アクセルメモリを構える。

【ACCEL】

「変……………身……！」

【ACCEL】

挿入後に右グリップを捻り、仮面ライダーアクセルへと変身した。

「さあ………振り切るぜ！」

そう言っで一護達の元へと向かった。

夏海は織姫と恋次の元へ向かい、

「あの、何か手伝う事は？」

その問いに織姫はこう言った。

「山本君がすぐに直るから、彼を運んでくれる？」

「分かりました！」

そして先に傷が治った山本の腕に肩を掛けた夏海は、すぐさま彼を連れて避難した。

夏海を見送った織姫は、恋次にこう言った。

「恋次君、私は良いから、早く黒崎君達のもとに行つて上げて！」

「でもよー！」

「良いからー！」

最初は戸惑った恋次であったが、

「此処は僕らに任せてくれ」

「ホラ、早く行きな！」

「……………分かった……………無茶すんなよ」

「んじゃ、行くぜ！」

首無と毛倡妓に織姫を任せ、青田坊と共にすぐさま一護達の元へ向かった。

一方の一護達は、

「結局、動けるのはコレだけか」

「殆どが模擬戦で疲れてるからね」

そう言つて一護、幽助、桑原、蔵馬、飛影、石田、茶渡、恋次、青田坊、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、上条、ステイル、五和、ルキア、一方通行、アクセラレータ浜面、神裂、御坂、ディケイド、クウガ、アクセルの25名が暴走するツナに立ち向かった。

「咆える『蛇尾丸』!!!」

「シュランゲフォーム連結形態!!!」

恋次とシグナムの攻撃が来るが、ツナはそれを片手ずつ受け止めた。

「何!?!」

「バカな!?!」

驚く二人であった、そのまま投げ飛ばされてしまう。

「ガッ!」

「巨人の一撃!」

「オラァ!」

茶渡と青田坊が拳を叩き込むが、響ソニート転で避けられ、そのまま一撃を喰らう。

「ガッ」

「剣よ伸びろオオオオオオオオオオオオ!」

桑原が霊剣を伸ばすが、そのまま捕まれてしまい、投げ飛ばされる。

「ガァ!」

「クッ!」

蔵馬がローズウィップで動きを封じようとするが、

「ぐおおおおお!」

ツナの攻撃を受けてしまう。

「ガァ!」

「邪王炎殺剣!」

炎を纏った剣で斬り裂こうとする飛影であったが、

「グオオオオオオオオ！」

ツナは左手から虚閃セロを放った。

「グアッ！」

喰らってしまった飛影であったが、邪王炎殺剣でガードしたため致命傷は免れたが、重傷を負ってしまう。

「グオオオオオオオオオオオオ！」

そのままツナが虚閃セロを放とうとしたが、

「させるか！」

上条が『幻想殺し（イマジンプレイカー）』で打ち消した。

「今だ、御坂！！！」

「喰らいなさい！！！」

そう言って御坂は、十八番の『超電磁砲レールガン』を放つが、

「ガアアアアアア！」

ツナが素手で弾き飛ばす。

「ウソでしょ!?!」

これには御坂も驚くた。

「このままじゃ……………」

絶体絶命と感じ取った一同であった。

しかし、その時であった。

「ツナ君!」

突如京子が現れた。

「京子ちゃん!?!」

「バカ、危ねえぞ!」

なのはと幽助がそう言うが、

「お願い、これ以上皆を傷つけないで……………何時ものツナ君に戻って!」

涙を流しながら説得しようとする京子であったが、

「グオオオオオオオ!!」

ツナはそのまま彼女に標的を替えた。

「京子ちゃん!」

なのはが叫んだその時、

「ウラアアアアアアアア!!」

斬月との模擬戦でボロボロだった銀時が現れ、ツナを吹き飛ばすと、

『クワアアアアアアアア!』

するとファングメモリが攻撃を仕掛ける。

そのままファングはフィリップの掌に乗り、そのまま彼にメモリモードに変形される。

【FANG】

「行くよ、相棒!」

「ああ!」

そう言って亜紀子に運ばれた翔太郎がジョーカーメモ리를構えた。

【JOKER】

「変身!」

【FANG・JOKER】

こうして翔太郎とフィリップは、仮面ライダーW・ファングジョーカーに変身した。

翔太郎の回復力に驚くアクセル。

「左、体はもう良いのか!？」

「ああ、織姫ちゃんのお陰でな」

「彼女の能力もそうだけど、キミの回復力にはつくづく驚かされるね」

フィリップはそう言って、変貌したツナに顔を向ける。

「信じられねえ……本当にアレがツナなのか!？」

人間の姿を完全に留めていないツナに、翔太郎が驚きを隠せなかった。

「気持ちは分かるが、事実に変わりは無い」

「クツ……惚れた女ですら手に掛けようとするほど理性がねえのかよ」

「グオオオオオオオオオオオオ！」

それを見た一護は、最後の手段を使った。

「こうなりゃ……アレしかねえ！」

「何だい黒崎一護、アレとは？」

フィリップの問いに一護はこう言った。

「目には目を……虚化には虚化だ」

「まさか、黒崎!？」

石田の言葉に死神メンバーは、一護が何をするのかを知った。

「行くぜ、ツナ！」

一護が顔に手を当てた瞬間、髑髏の形をした血錆色の二本の筋の入った白い仮面が、彼の顔を覆い尽くした。

「ほ………虚の仮面だと!？」

「コレは一体!？」

死神メンバー以外が驚きを隠せない中、一護はツナに近づき、

「月牙天衝オオオオオオオオオオオオ！！」

ツナに強力な月牙を放ち、彼を気絶させたのだった。

その結果、ツナは仮面が砕け、元の姿に戻って気を失っていた。

ただし、その代償はとても大きかった。

一方その頃、とある別空間では……

「只今帰って来ました。次元の破壊者様」

グルーと共に主の下へ帰ってきたブレイが、全ての元凶・次元の破壊者にそう言った。

「御帰り、ブレイ……そしてグルー」

黒いマントに身を包んだ次元の破壊者は、彼にこう言った。

「では見せてくれないか？ 我々十三人の同胞の前で」

第三十七話：虚に堕ちたツナ（後書き）

次回、同じ気持ち

第三十八話・同じ思い（前書き）

徐々に内容がBLEACHっぽくなっています。

第三十八話・同じ思い

「では見せてくれないか？ 我々十三人の同胞の前で」

「はい……」

次元の破壊者にそう言われたブレイは、懐から小さな箱を取り出し、それを砕いた。

「どうぞ、ご覧下さい」

その瞬間次元の破壊者を含む、『十三人の同胞』達もそこから流れる映像を観た。

数分後、次元の破壊者がブレイにこう言った。

「成程、それでキミは彼らを殺す価値は無いと判断したという事かい？」

「はい、デイケイドの乱入は予想外でしたが、今の連中の強さは大した事はないと思ひまして……………」

すると、ブレイの後ろから女性の声がした。

「ふ〜ん…………それは面白そうね」

長い黒髪に黒い瞳、首には獣の上顎のような仮面の残骸を首飾りのように付けた、日本の和服のような白い死魄装と左耳の耳たぶに虚の孔が開いた女性がそう言った。

彼女の名はルイカ。

グルーやブレイと同じ破面アラシカルの一人である。

「というよりも、グルー……………アナタ思いつきりボコボコにやられ

てんじゃない。それじゃ返って“殺せませんでした”と言ってるのと同じじゃない？」

「ルイカ……テメエ、今の映像を見てなかったのか？俺と戦り合ったのは、ディケイドだ。沢田綱吉じゃねえ」

ルイカに指摘されたグルーは反論するが、

「あのね……まずWの攻撃で既にやられてんじゃない。その後ディケイドにやられてんだから、既に“殺せませんでした”と言ってるのと同じなのよ」

「テメエ！」

凶星を突かれたグルーは食い掛かろうとするが、ブレイに止められてしまう。

「よせ、ルイカの言葉にも一理あるが」

「どっちの味方だよ！」

だがブレイも同意見だったらしく、グルーはツッコミを入れた。

「それで、アナタどうするのブレイ？彼等が予想以上に強くなっただら？」

「中々鋭い質問を出すなお前は」

再びルイカの質問にブレイは冷静に答えた。

「そのときは、俺が始末する。それで文句は無いな？」

「フフフフ……良いわ、その考えは嫌いじゃないわよ」

すると、次元の破壊者がこう言った。

「良いだろう、キミの好きにすると良いよブレイ」

「有難う御座います」

そう言ってブレイは、主に頭を下げたのであった。

その夜…土達ディケイド一行は、真之介から状況を聞いていた。

「成程……つまりその次元の破壊者は、死んだ恋人を甦らせるため

に今回の騒動を起こしたのか」

「その通りだ」

「でも………死んだ人間を甦らせる事なんて、出来るのかな？」

そう言つてユウスケは首を傾げた。

「仮に出来たとしても、その人は彼の行った行為を知つたら余計に悲しみます」

夏海の意見に真之介も同意であつた。

死んだ人間を甦フイらせるといふ行為は、世界でも許されない最大の禁タ忌。

仮に次元の破壊者が恋人を甦フイらせたとしても、その恋人が喜ぶとは思えなかつた。

「大体分かつた。なら、協力させて貰うぜ。『破壊者』って言葉に愛着は無いが、俺が今回破壊するのは、ヤツの狂つた計画のよ
うだな」

「私も手伝います。 土君だけじゃ心配ですから」

「俺も手伝うよ。俺だつてこれ以上誰かの涙を見たくない、世界中の皆に笑顔でいて欲しいんだ」

土、夏海、ユウスケの三人は、そう言つて彼らと戦う事を決意した。

山本と獄寺は、織姫の治療で大事に至らなかったが、精神面は相当の重傷であった。

「それにしても……………何でツナが……………」

そう言って一護は、拳を握り締めていた。

すると、閃可がある答えに辿り着いた。

「これは私の仮説に過ぎないけど、恐らく世界が融合した事にしたことによって、なのはトリクオには斬魄刀……………ツナには虚の力が備わったって事ね」

「そんな事があるのかよ!？」

「あくまで仮説だけどね」

それを聞いたボンゴレメンバーは、『虚の力』という言葉で表情が

沈んでしまい、六課メンバーと奴良組メンバーはなのはとリクオがどうして斬魄刀を手にしたかが不思議でならなかったが、今の言葉で驚きを隠せなかった。

なのはとリクオも、それを聞いて自分達の刀を握っていた。

その後で士達が入って来た。

「ところで真之介、あのグルーってヤツとブレイってヤツは胸に孔開いてなかったか？」

士の問いに、真之介がこう言った。

「あの状況で良く見てたな士。流石だな、破面アラシカルの特徴に気付くとは」

「そう言えば真之介、破面アラシカルって何なの？」

なのはの問いに、真之介は説明をした。

「破面アラシカルってのは、虚ホロウだったモノが仮面を剥ぎ、死神の能力を得た虚の一団だ。当時は未生体のモノが多かったが、一護の世界で反逆を起こしたヤツがそいつ等に近づいた事で完全体の連中が多くなっただんだ」

「それだけじゃ無さそうだな」

士がそう言つと、真之介がコクリと頷いた。

「ああ……ただ分かったのは、あのグルーってヤツが次元の破壊者

の直属の戦闘部隊『十三鬼』の一人だ」

「もしかして、あのブレイってヤツも『十三鬼』の一人かい？」

「察しが良いな石田は。だが、どれじゃねえ……あの戦いでよく分かった、アイツ等は二人揃って最上級だつて事だ」

石田の問いに答えた真之介の言葉に死神メンバーは驚きを隠せなかった。

「おい、ちよつと待てよ！俺達にも分かりやすく説明してくれ。何だよその最上級って！？」

その状況が理解できない他の一同を代表に、上条が問うと日番谷が答えた。

「虚には『大虚』という虚がいてな。コイツには、三つの段階があるんだ」

「要するに……レベルアップすることかア？」

一方通行の言葉に、日番谷はコクリと頷く。

「ああ、最初は『ギリアン』……コイツは巨大で数は多いが知能が獣並みで、隊長格でも簡単に倒せる。人間で言うなら傭兵クラスだ」

「数が多いほど弱いつて事か」

飛影がそう言うと、日番谷はそのまま続けた。

「次に『アジューカス』。ギリアンより小さいが、奴等のまとめ役を行う事ができる」

そして　と日番谷が最後の説明をする。

「最後が『ヴァストローデ』。コイツはアジューカスより数が少く、大きさは人間に近い。だが、その実力は………隊長格より上だ」

それを聞いた一同が、驚きを隠せなかった。

「そんな、私達……そんな相手と戦わなきゃならないの!?!」

フエイトがそう言うが、幽助がこう言った。

「あのなあ……敵が自分より強いって言うのは、常識の範囲内だぞ?」

その一言で全員がさらに驚愕した。

冷静すぎる幽助達浦飯チーム。

すると、飛影がこう言い出した。

「だったら、奴等を上回るくらいの強さを手にすれば良いだけの話だ。それも常識の範囲内だろうが」

それを聞いた一同は、言葉を返せなかった。

「でもよ……十代目の虚化はどうするんだよ!?!」

獄寺がそう言うと、一護がこう言った。

「方法が一つだけある。いや、一つしかないって言えば良いかもな」

「あるのか、方法が!？」

それを聞いたりポーンに、一護が答えた。

「俺も経験があったからもしやと思ってよ」

「やっぱり、お前も虚化の経験があったか。ツナを止める時に、仮面を使ったからもしやと思ったが……」

士がそう言うと、一護は頷いた。

「まあな」

そして真之介がこう言った。

「後はツナにこの事を話す事だ。つらいかもしれないが、アイツには事実を受け止めてもらわないとな」

織姫と京子が励ますが、逆効果になってしまふ。

「男がメソメソ泣いてんじゃねえ！」

そう言つてリクオが怒鳴りだした。

その姿は妖怪の姿で、雰囲気はまさにヤクザの親分のようにあつた。

「良いかつな。自分の弱さを否定できないのは誰だつて同じだ！
何時までも悩んでも仕方ねえだろ！」

「おいリクオ、幾ら何でもそれは良い過ぎだろ！」

「テメエは黙つてろ一護！」

「……………す……………すみません」

一護が咎めようとするが、リクオの威圧と鋭い眼光の前で逆らえなかつた。

「リクオ君には、分かりっこないよ……………」

「ああ？」

「リクオ君には、分かりっこないよ！ 俺の気持ちなんて！！」

それを聞いたリクオは、ツナの胸倉を掴むと彼にこう言った。

「仲間を傷つける事が怖いだったら、絶対に護ると誓いやがれ！」

負けるのが怖いんだったら、二度と負けないと誓いやがれ！ 虚化が怖いんだったら、それを上回るくらいの強さを身に着けやがれ！ お前は一人じゃねえ、仲間オしたちがいるだろっだ！！」

「！！！」

それを聞いた瞬間、その言葉がツナの心に響く。

「リクオ君……う……ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
！」

「そうだ。泣きてえ時は、仲間の胸の中で泣きやがれ。俺もそれを受け止めてやるからよ」

そう言ってリクオはフツと笑った。

部屋の外でそれを聞いていた鳩は、

「やるじゃねえか、リクオ」

そう言って腕を組みながら小さく笑った。

第三十八話・同じ思い（後書き）

次回・いざ、内なる世界へ！！

第三十九話：いざ、内なる世界へ！（前書き）

遂にツナに試練が！

第三十九話：いざ、内なる世界へ！

翌朝、ツナは食堂へ向かった。

「お早う御座います十代目！」

すると獄寺が後ろから現れた。

「へ、獄寺君！？」

「どうしました？」

「あの……その……昨日は……」

「気にしないで下さいよ十代目。早く行かないと、朝飯無くなっちゃいますよ」

そう言っただけで笑う獄寺に、ツナは少し安心した。

食堂へ向かうと、他の一同も何時もの雰囲気を見せていた。

「うお、ツナ。起きたか」

「沢田、極限良く寝たかアアアアアアアア！」

一同の言葉に安堵するツナ。

こうして彼らの食事が始まったのであった。

いざ、内なる世界へ！

食事の時、ゆらはご飯に何かを掛けていた。

「おい、ゆら。オメエ、何食ってんだ？」

朝食を終えた一同は、真之介からこんな話をされたのであった。

「えーと、今からツナの虚化ホロウがの制御の事について話すが、ここからは一護の説明を聞いてくれ」

そう言って一護に説明を任せた。

「実は、俺も自分の虚化の制御を行うために、同じ境遇を辿ってる仮面の軍勢【ヴァイザード】って連中の下でその修行を行ったんだ。上手く言つと、ツナが自分の虚と戦っている“内在闘争”を行っている間、俺達は暴走したツナと戦う事になる。ツナ、その覚悟はあるか？」

一護の問いに、ツナはこう言った。

「正直に言つと、怖いです。だけど、仲間が傷付く方がもっと怖い……だから、やらせて下さい!」

「よし、決まりだ！」

そう言つて一護は、ツナの覚悟を受け取った。

「とりあえず、メンバーは俺達死神側で大半を構成したいけど、自分から出たいと言うヤツがいれば良いけどよ……」

それを聞いた夏海が手を挙げた。

「じゃあ、私がやります」

それを聞いた士とユウスケ以外の一同は、驚きを隠せなかった。

「ほ、本気で言ってるのか？」

「当たり前です」

「でもよ……アンタ、どう見ても戦える感じじゃねえし……」

一護がそう言つと、夏海は突如彼の後ろに回りこみ、親指を突きたて、

「光家秘伝・笑いのツボ！」

そう言つて親指を一護の首筋に突きつけた瞬間、

「ぎ……ギャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

「！？」

突如一護が笑い出したのだ。

「コレでも私が非戦闘者だと思えますか？」

その一言で一同は全員、断固として首を横に振った。

「……………よ、よし俺も戦うか」

一番この技を受けている土は、青ざめながらそう言った。

「じゃあ、俺も参加するよ」

そう言っつてユウスケも参加する。

「それじゃ、俺がツナを内なる世界に導く。その後には修行場に行くぞ」

「で、出来るのかよ!？」

真之介の一言に驚く一護。

「当たり前だろ、俺を誰だと思ってる？」

自信満々の真之介であるが、

「自称・時空の旅人の天才超モテモテ男」

「っつておい!」

閃可が冷たくそう言った。

「んじゃ、行くぜツナ」

そう言っつて真之介がツナを眠らせた後、地下の修行場に向かった。

その際、一護がこう呟いた。

「（ツナ……此処から先は、食うか食われるかの戦いだ。必ず食
い尽くせ）」

ツナを寝かせた後、閃可が結界を張った。

「結界術・かこいじゆかい困呪界」

その結界に一同が驚きを隠せなかった。

「コレはとても凄い！ 興味深いよー！」

特にフィリップはかなり興奮していた。

「真之介、周りに被害が及ばねえように結界を張られるか？」

「安心しろ、閃可の結界術は本物だ。悔しいけど俺以上だぜ」

「んじゃ、冬獅朗」

「日番谷隊長だ」

「ツナの五体に、結界を張れるか？」

「……自信はねえけど、やってみる」

そう言って日番谷は縛道の詠唱を開始した。

「鉄砂てつさの壁 僧形そうけいの塔 灼鉄しゃくてつ？？ 湛然たんぜんとして終に音無し……

「・

そして、日番谷は組んだ状態で両手を上に挙げ、地面に叩きつけるように振り下ろした。

「縛道の七十五『五柱鉄貫』！！」

するとツナの五体に五本の柱が落ちてきた。

「おお〜」

驚く一同であるが、獄寺は腸煮えくり返っていた。

「あのガキ！ 十代目の体に変なもん落としやがって！！」

「落ちて着け獄寺、アレは日番谷の鬼道だ」

一方、内なる世界に入ったツナ。

「此処が……俺の……内なる世界……」

何も無い荒野。

「！？」

何かの気配を感じ取ったツナは、すぐさま死ぬ気丸を飲んでハイパー化して構える。

「待ってたぜ、沢田綱吉」

そう言つて一人の人影がいた。

「誰だ!？」

「誰だあ? 同じ自分に対してその言い方はねえだろうがよっ?」

その人物はツナに瓜二つであるが、肌髪、さらに衣服が全て白く、
眼球の色は黒で瞳は黄色であった。

「お前が……俺の“内なる虚”か!」

「ようやく分かったなツナ。 さあ………」

その瞬間、ハイパー化したツナの内なる虚（以下虚ツナ）。

Xグローブと額の死ぬ気の炎は、真っ黒に染まっていた。

「!?!?（黒い、死ぬ気の炎!?!）」

「始めようぜEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE!」

こうしてツナは、内なる虚と戦うのであった。

一方の現実世界では、

「来るぞ！」

ゴゴゴゴ…とツナから邪悪な霊圧が放たれてくる

「Xグロープ、遠くに離れたほうが良いんじゃないかな？」

「いや、そんなことしたら暴走を広めるだけだ」

スバルがXグロープを隠す事を提案したら、シグナムがすぐに提案を切り捨てた。

「最初は私達ですね、ルキアさん」

「ああ。頼むぞ夏海」

そう言ってルキアと夏海は、結界内に入った。

「キバーラ！」

「それじゃ、行くわよ」

そう言つて白いコウモリ・キバーラを手に持った夏海。

「変身！」

その瞬間、夏海の周りはハートに包まれ、彼女の姿はコウモリを模したような白いボディの仮面ライダーに変身し、手には剣を持っていた。

白き蝙蝠の剣士・仮面ライダーキバーラが此処に参上した。

「じよ、女性仮面ライダー！？」

これには亜紀子や他の女性陣が驚いた。

「女性の仮面ライダーとは、実に興味深い」

フィリップはそう言つて、彼女の姿に再び興奮する。

そしてツナは、顔が虚の仮面に徐々に覆われながら立ち上がった。

これにはボンゴレ女性陣は、背筋を凍らせた。

「殺すなよ」

「私達が死ななければな」

一護の言葉に返答したルキアとキバーラは、戦闘態勢に入った。

「十三番隊・朽木ルキア……いざ、参る」

「仮面ライダーキバーラ……行きます」

こうして、ルキアとキバーラは、虚化したツナに立ち向かった。

一方で内なる世界では、

「グッ！」

「おいおい、そんなモンか？」

ツナは自分の内なる虚に押されていた。

「お前……何でその姿になれる!？」

「まだ分からねえのか？」

すると虚ツナは、彼を思いつきり投げ飛ばした。

「俺はお前だツナあああああああああああああ！！」

「ぐわあああああああ！」

そのままツナは、後ろの岩山まで吹き飛ばされた。

「う……………」

「良いかツナ？ 俺とお前は元々一つの存在だった。肉体の主導権を『生』が握っている間は肉に覆われ、『死』が支配した時は骨と化する。単純にそれだけだ。『死神の世界』が俺達の世界と一体化したことで俺の意識は徐々に芽生え、グルーって破面アラシカのお陰でお前の意識を乗っ取ることが出来るようになった」

それを聞いたツナは、強い眼差しで虚ツナを睨みつける。

「じゃあ…………お前を倒せば、お前は俺の力になるって事か？」

「ハッ、無理だね！」

するとツナは、匣ボックスから大空ライオンのナッツを取り出し、右手に乗せる。

「やって見なきゃ、分からなねえだろ！」

「無駄だって言ってるだろ？」

そう言っただけツナも、黒い炎に染まったナッツを取り出し、右手に乗せた。

「!!」

「へッ！」

強く睨み合う二人。

「ナッツ……形態変化だ！」

現実世界でも、戦闘は激しく増していた。

「舞え、そでのしらゆき『袖白雪』!!」

するとルキアは、柄に長い帯の付いた純白の斬魄刀に変わった。

「あれが、ルキアさんの斬魄刀……」

「綺麗……」

その姿に、一同が心を奪われた。

「初の舞い・月白！」

瞬歩でツナとすれ違ったルキアは、彼の足元に円を描く。

その瞬間、巨大な氷の柱が出現し、ツナを凍らせた。

「やった！」

「これで暫らくは動けんハズ」

キバールとルキアは安堵するが、

「グオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

ツナは豪快に氷を破壊し、姿を現した。

「やはり簡単にはいかんか」

「そんな……」

さらにその瞬間、ツナの胸に孔が開きだした。

「始まったか」

内在闘争に異変が起きた事に気付いた一護。

「3……2……1……0……時間だ、結界を開けてくれ」

そう言って土とユウスケは、すぐさま変身をした。

「変身！」

【KAMEN RIDE DECADE】

「ハア……すまぬ夏海、どうやら体力が……」

「それは私も同意です」

遂に限界に達した二人であったが、

「ルキアちゃん、夏海ちゃん。早く此処を出て！」

「此処は任せろ」

ディケイドとクウガがタイミング良く現れた。

「すまぬ！」

「頼みます！」

変身を解いた夏海とルキアは、補助・回復系の織姫の元まで向かい、

「小野寺ユウスケ……仮面ライダークウガだ」

「門矢士……仮面ライダーディケイド。通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ」

それを見送ったディケイドとクウガが戦闘に入った。

「（早くしてくれよ、ツナ……じゃねえと俺達は、お前を殺すことになる）」

戦いを見ながら一護はそう呟いた。

一方で内なる世界では、

「……………」

二人のツナが、ナッツが変形したボンゴレー世のガントレット（ミネーナ・デイ・ボンゴレ・プリーモ）を装着し、

「行くぞ」

「来いよ」

再び激突した。

「何でお前がその武器を！」

「言っただろ、俺とお前は同じ『沢田綱吉』……コイツを使えることも出来るんだよ……！」

そう言っただけツナは、再び彼を吹き飛ばした。

「グッ！」

吹き飛ばされたツナであったが、すぐさま体勢を治し、再び虚ツナに立ち向かった。

仲間を護るための力を得るために……

その頃、現実世界では……

「おりゃあ！」

「ハアツ！」

クウガのパンチで怯んだところをデイケイドがライドブツカーでツナノ肩を斬り裂くが、肩の傷が治りだしたのである。

「傷が回復した!？」

「チツ、^{ホロウ}虚つてのは何でもありかよ!」

傷が治った事に驚くクウガと反則的な虚の能力に舌打ちをするデイ

ケイド。

「どつする士!?!」

「仕方ねえ………だったら落とすまでだ!」

そう言つてデイケイドは、ARカードをドライバーに差し込んだ。

【ATTACK RID SLASH】

「ハアッ!」

残像が見える程の斬撃を放つたデイケイドは、ツナの腕を斬り落とした。

「ガアアアア!」

その光景に一同は背筋を凍らせた。

しかしその瞬間、右腕の切断面から口のようなものを付けた触手が出現した。

「な!?!」

「士さんとユウスケさんが!」

「ヤベエ! 二人が喰われる!!」

キヤロと山本が驚くが、真之介が叫んだ。

「士！ 『ヒビキ』のカードだ！ 虚に対抗するにはそれしかない！！」

それを聞いたデイケイドは、あるカードを差し込んだ。

「成程、コレか！」

【K A M E N R I D E H I B I K I】

その瞬間、デイケイドの体が紫色の炎に包まれ、消えた瞬間に紫色を基調とした鬼を思わせる外見の仮面ライダーに変身した。

唯一の共通は、デイケイドライダーを装着しているという事であった。

「士さんが変わった!？」

「何なの、あの姿」

驚く一同に真之介が説明した。

「あれは『カメンライド』って言ってな、デイケイドの能力の一つだ。デイケイドは様々な世界を代表する仮面ライダーに変身することが出来るんだ。あの姿は【音撃おんげき】と呼ばれる能力を使う仮面ライダーで、名前は響鬼ヒビキだ」

「って、何でもありって事なのか!？」

デイケイドの能力に、上条は驚きを隠せなかった。

「行くぜ！」

【ATTACK RID ONIBI】

カードを差し込んだデイケイドは、口から炎を吐き出してツナを攻撃した。

「アイツ……やり過ぎだろ」

「そんな事、キミが知ってるだろ？」

デイケイドの戦いに意外な言葉を口に出した一護であったが、石田に言われて癩癩を起こした。

攻撃が止んだと同時に煙が晴れ、そこには右腕が異形と化したツナがいた。

その姿を見た女性陣やボンゴレメンバーは恐怖を感じ取った。

「以外と姿が変わってきたな」

デイケイドがそう言って響鬼から変身を解いた。

果たして、ツナは内なる虚を倒す事ができるのか……

第三十九話：いざ、内なる世界へ！（後書き）

次回、王と騎馬の違い

第四十話・王と騎馬の違い（前書き）

果たしてツナは、内なる虚を制御できるか！

第四十話：王と騎馬の違い

結界内のデイケイドとクウガを観ながらルキアは一護に問う。

「休憩時間は!?!」

「一人（もしくは一組）10分だから、ローテーションで8人×10分で80分だ」

「何言ってるんだ！ 朽木さん・夏海さんペアが抜けたから、70分だろ!?!」

「チツ、後7人×10分で70分だ」

一護は残り時間を答えるが、石田に訂正され、少し不機嫌になるもすぐさま訂正した。

その際、閃可がこう言った。

「あのさ……私は結界張る係りなんだけど。もしかして、その計算に私も入ってるの?」

その瞬間、一護と石田は目を泳がせる。

「ヤッパリか!?!」

王と騎馬の違い

内なる世界で、自身の虚と激突するツナ。

「そうカリカリすんなよ。　楽しくやろつぜ。」

「黙れ！」

そう言つてツナは、虚ツナを吹き飛ばした後、そのまま突進しながら強力な一撃を放った。

「ビックバンアクセル！」

しかし虚ツナは左手で弾き飛ばす。

「な!?!」

そのまま懐に入った虚ツナは、零距离から協力な一撃を放った。

「ビックバンアクセル」

爆発音と共に、吹き飛ばされしめうツナ。

「ガッ……………」

零距离からのビックバンアクセルは、意識が朦朧としていた。

「ハア……………ハア……………ハア……………」

「何だ、その程度か？」

「クッ！」

「だらしねえな……………どうやらテメエにはねえみてえだな……………」
「戦いを求める本能”ってヤツが”」

「本能……………だと!?!」

何を言っているのかが若分らないという顔をするツナに、虚ツナは鎖を振り回しながらある問い掛けをした。

「もつと分かり易く簡単例で説明してやろう・・・ツナ、ずばり“王とその騎馬の違い”は何だ？」

「王と・・・騎馬・・・？」

「“人と馬”だとか、“二本足と四本足”だとか、そういうガキの謎かけをしてんじゃねえぞ。姿も能力もそして力も！全く同じ二つの存在があったとして！そのどちらかが王となって戦いを支配し残りのどちらかが騎馬となつて力を添える時、その違いは何だ！？と訊いてんだ！！」

「・・・・・・・・・・」

「・・・答えは一つ・・・」

そう言つと、虚ツナは鎖を振り回すのを止めて鎖を剣にして高らか

にこう叫んだ。

「本能だ！！ 同じ力を持つ者がより大きな力を発するために必要なもの、王となる者に必要なものは・・・ただ只管に戦いを求め、力を求め、敵を容赦なく叩き潰し、引き千切り、切り刻む、戦いに対する絶対的な渴望だ！！ 俺たちの皮を剥ぎ、肉を抉り、骨を砕いた神経のその奥、原初の階層に刻まれた研ぎ澄まされた殺戮反応だ！！！！」

さらに続けるように虚ツナは、ツナに向かってこう言った。

「てめえにはそれが無え！！ 剥き出しの本能って奴がな！！ てめえは理性で戦い理性で敵を倒そうとしてやがる。例えるなら、剣士が剣の先に鞘つけたままで一体誰を斬るってことと同じだ！！ だからてめえは俺より弱えエんだよ、ツナ！！」

そう言うと、虚ツナは持っていた黒い炎の剣をツナの腹部目掛けて垂直に投げつけた。

ツナは徐に腹部を見ると、ツナの腹にはしっかりと黒い炎の剣が身体を貫通していた。

「・・・俺は御免だぜ、ツナ。奴等はどう思ってるか知らねえが、俺は自分よりも弱えエ王を背中に乗せて走り回って、一緒に殺されるのは耐えられねえ。てめえが俺より弱えエなら、てめえを潰して・・・」

虚のツナはツナに近付き、腹部に刺した剣を徐に握り締めた状態ですなにか言いきった。

「俺が王になる」

ツナはこの時、朦朧とする意識の中で……不意にこんなことを考え始めた。

「（本能？戦う……戦いを……求める。戦う……譲れない……戦う……本能！！）」

その時、ツナの意識は一端この精神世界でない別のところに移っていった。

ツナが気が付くと、そこは古城がたたずむ閑静な場所だった。

ツナはハイパー状態のまま、仰向けになっていた。

「……何処だ？……ここは……」

「何処だ」かと？何をぬかしてやがる、カスが！」

ツナは聞き覚えのある声に耳を澄ませた。

そして、急に襲ってきた攻撃を回避して前を向いてみると――

「お……お前は……!?」

ツナがもう一つの精神世界の先で目撃したもの――

それは……あの男だった。

「漸く目を覚ましやがったか……カスがっ!!」

「!ザ……ザンザス……!?」

その男こそ、ツナと共に大空のボンゴレリングの継承を争い、十年後の世界ではミルフィオーレとの戦いで協力してくれたツナの一番の強敵……

ボンゴレ独立暗殺部隊ボス、ザンザスXANXUSであった。

「何で・・・お前がここに・・・？それより。ここは一体・・・！？」

すると、XANXUSはそんなツナの様子を知る由も無いまま愛用の銃で攻撃を仕掛けてきた。

それを咄嗟に回避するツナに対し、XANXUSは意外なことを口にした。

「XANXUS」だと・・・？何だそりゃ？俺はただ・・・てめえを殺しに来ただけだ！！」

XANXUSは殺意をむき出しにして、ツナに容赦なく銃弾を連射し始めた。

ツナはXANXUSの行動にあたふたしながらも攻撃をかわし続けた。

そして、眉間に皺を寄せながらツナは徐に尋ねた。

「何・・・なんだ！？XANXUS！！」

「何遍も言わすな・・・俺はてめえを殺しに来ただけだ！！XANXUSなんて名は知らねえよ！！」

XANXUSにそう言われると、ツナの頭の中にはこれまでの戦いの記憶が走馬灯のように駆け巡った。

戦いを繰り返すごとに、ツナは確実に自覚をしていった。

自分が、言われなくても”戦いを求める貌に生まれついた者”だということ。

それを自覚した瞬間から、頭の中には無数の”戦”の文字が浮かんだ。

その数は増え続け、そして・・・ツナの脳裏に、巨大な”戦”の文字が、最後に浮かび上がった。

「(- - - ”戦” - - -)」

その瞬間、ツナの意識はもとの精神世界に戻ってきた。

そして黒い炎の剣を右手で握り締めた、黒い炎の剣は忽ち色を済んだ橙色へと変色していった。

それを見た虚ツナは咄嗟にそれを放し後ろに下がった。

「!!!!!!!!!!」

虚ツナの右腕の袖のところが少し通常の大空の炎に侵食されていた。

今までとは様子が違うツナの様子に驚きを隠せない虚ツナ。

すると、ツナは突き刺さった剣を血を噴出しながらゆっくりと引きずり出し、それを右手で持つとそのままの状態で静止した。

やがて、先程とは違う”戦う本能を秘めた瞳”を虚のツナに見せつけ、剣を一度回転させた後それをしっかりと握り締め、虚ツナ目掛けて突撃して行った。

虚のツナはここで本来ならば防御の体制に入るはずだが、敢えてそれはせずに真正面からツナの攻撃を受けてしまった。

「ちっ」

ツナの剣は見事に虚のツナの身体を貫通し、暫くの沈黙が流れた。

そして、背中の方からツナの澄んだオレンジ色の炎が湧き上がり虚のツナを包み込んで言った。

そして、重い口で虚のツナはこう語りだした。

「……………くそっ……………どうやらてめえにも……………少しは残ってやがったみたいだな……………”戦いを求める本能”ってやつが……………」

そう言うと、虚のツナの身体は大空の炎で燃え上がりだし……………

次第に身体が消え始めていった。

「……………しょうがねえな。俺を倒しやがったんだ……………取り敢えずはてめえを王と認めてやるさ……………だが忘れんなよ、俺とてめえはどちらが王にも騎馬にもなるってことをな。てめえに少しでも隙があれば、俺はいつでもてめえを落として、てめえの頭蓋を踏み砕くぜ……………」

「…………………………」

そして、最後に顔が燃え尽きようとした寸前……………虚のツナは突き刺さった剣先を？みながらこう言い残した。

「……………それからこいつは助言だ。本当にてめえの一番大事なモンを守り通したきゃ……………せいぜい奪われねーよ気をつけな……………」

「……………」

ツナは最後の言葉に耳を傾けながら、虚のツナが消えていくことを

見送りそれと同時に精神世界は光を帯びて何も見えなくなってしまうた。

その頃、現実世界では…

仮面ライダーWが結界の中に入ってツナと戦っていた。

「くっっ!!!!」

Wは虚化したツナの攻撃をギリギリでかわして、空中を三回転して着地した。

そしてWは、改めてツナの姿を見てみた。

ツナの姿はほとんど通常の虚と同じようなもので、まるでいつものツナらしさを感じるものなど全く無かった。

京子達はそれにショックを受けながらも、最後まで姿を見続けた。

「……おいおい、人の姿が留まってねえなツナ」

「最早見た目は完全に虚そのものだね。」

その様子を見ながら結界の外でしゃがんで待機をしていたルキア。

そして、心中こんなことを考えていた。

「（W中に入った時点で既に一時間が経過した……次は私の番か……）」

そう考えながら、ルキアは腕時計を見続ける恋次に質問をした。

「……恋次。一護が虚化の為の内在闘争でかかった時間は……どれくらい分かるか？」

「確か……一護の話じゃ、およそ69分15秒だ。」

「今は……何分だ？」

「69分27秒。」

すると、ほぼ完全に虚化したツナが指先をWのほうへ向けて霊圧を上昇させた。

それと同時に左手からは黒い死ぬ気の炎を融合させていた。

その様子を見て危機感を覚えたルキアは、大声で二人に叫んだ。

「虚閃とX BURNERが同時に来るぞ、二人ともっ！！！」

「まずいな……翔太郎！」

「ああ、コレしかねえ！！！」

「「エクストリームだ！！！」」

その瞬間、鳥のガジェットがフィリップの体を取り込み、閃可がそれを見てすぐさまガジェットを結界の中に入れた。

そしてWが手に取ると、ダブルドライバーに装着した。

【X T R E M E】

真ん中の境界線・セントラルパーテーションを開き、クリスタルサイバーを出現させ、W型の触覚もXを思わせる装飾が頭部に変わって出現する。

その様子を見ていた六課メンバーは驚いた。

「ええええええええ！！ アレって何ですか！？」

「アレはエクストリームって言って、Wの最終形態でもあるの」「スバルの質問に亜紀子^{コトシ}が答えると、

「ってモロ完全な融合^{フシオン}じゃねえか！！！」

その姿にヴィータが驚きを隠せなかった。

エクストリームと化したWが戦闘を開始しようとしたその時、突如ツナの左肩に輝が入り、全員はその光景に驚いた。

「何だ!？」

ツナの異変に気付いた茶渡は焦った様子で真之介にこう指示した。

「真之介! 今すぐ結界からWを出してやってくれ!!」

真之介は手際よく結果から二人を取り出し結界を閉じた。

「おい、どうなってるんだ!？」

結界から出た後に変身を解いた翔太郎がそう言うと、ツナは人間ものとは思えないような声を上げながら苦しみ始めた。

そして、いたるところの輝から血を噴出した。

やがて、ツナの身体から光が放出され、結界の中で大爆発を起こしたのだった。

全員はその爆発に驚きながらも、結界の中の土煙のほうを見続けた。すると、そこには虚化が解けてもとの姿に戻ったツナが血塗れになりながらしっかりとした仮面をつけて立っていた。

虚の身体は徐々に粉々になり消えていった。

それを見た一護は、真之介に言った。

「・・・真之介、結界を。」

「ああ・・・。」

真之介は右手で指を鳴らした。

すると、結界はいとも簡単に解かれた。

その瞬間、無言のツナは額の炎を消して仮面をつけたままその場に倒れ込んだ。

全員が見守る中、一護はゆっくりとツナのほうに近付きこっぴど尋ねた。

「……………気分はどうだ、ツナ。」

すると、暫くしてツナが仮面外してゆっくりと一護のほうへ振り返り柔らかい表情でこっぴど言った。

「……………えエ……………悪くは無いです。」

それを聞いた一護は暫く沈黙をした後、同じく柔らかい表情でこっぴど言った。

「……………そうか。」

その瞬間、全員の緊張の糸が一気に緩み心の底から安堵した。

京子達は涙を流しツナの無事を心から喜んだ。

リポーンとなのは心の中でよくやったとツナを褒めた。

この時、ツナは最後のほうで虚ツナに言われたことを思い返しながら、目の前の仮面に向けこっぴどいい残り、眠りに付いた。

「……………悪いな……………」京子ちゃん”は……………俺の命に代えても守って見せるさ……………」

第四十話：王と騎馬の違い（後書き）

次回、本修行開始！！

第四十一話・風呂上りの飲み物は牛乳とは限らない(前書き)

特別篇です。

第四十一話・風呂上りの飲み物は牛乳とは限らない

ツナの内在闘争を終えたメンバーは、疲れを癒すために浴場へ向かった。

「うし、ひとつ風呂浴びて寝るとするか」

しかし、彼らは知らなかった。

その浴場で、トンでもない事件が発覚する事に。

風呂上りの飲み物は牛乳とは限らない

何かを言おうとするエリオに石田が問いかけると、エリオは気まずそうにこう言った。

「いや……その……男性の人達とお風呂に入るのって、中々無かったので……」

それを聞いたフィリップは、すぐにその意味に気付いた。

「そう言えば、キミの周りは女性ばかりだったね」

「あ、確かにそうだな……」

「……………大変そうだな、エリオ」

「分かる……何かスゲー分かる」

翔太郎もすぐに納得し、一護は少しばかりエリオに同情するが、浜面が一番納得していた。

元々彼の所属するチーム『アイテム』の構成員も女性が多いため、浜面はエリオにかなり同情したのであった。

扉を開けると、巨大な湯船やサウナ、そして様々な機能の風呂と
いった温泉や健康ランドにありそうな光景が目にと止まった。

「真之介、此処がもしかして……………」

「この屋敷の風呂場だ」

「……ってでか過ぎだろオオオオオオオオオオ!!」

一護の問いに答えた真之介の言葉に、翔太郎は新八に勝るも劣らな
いリアクションを取った。

「うっしやアアアアアア! 一番乗り!!」

「ケツ、お子ちゃまが」

まるで子供のようににはしゃぐ恋次に獄寺がそう言うが、

「何だあ〜? 怖えのか?」

「あつ! 上等だ!!」

恋次の挑発ですぐさま走り出した。

コレを観た一護とツナは、似たもの同士だと察した。

湯船に浸かり、メンバーは一息ついていた。

「しっかし、こんなでかい風呂に入るなんて、ある意味じゃスゲー事だよな」

一護がそう言うと、辺りを見渡した。

「湯加減も良いですし、極楽ですね」

蔵馬がそう言って窓の景色を見ていたが、

「!?!」

「何ですか、黒崎君？」

「蔵馬……お前………ヤツパリ男だったんだな………」

一護の一言で、ビキリと青筋を立てた。

「ヤツパリ”？ ヤツパリとは、どう言うことですか？」

「ヒイ！」

余計な一言を言ってしまった一護は、兎に角蔵馬を鎮めようと何かを言うとしたが、

「あん？ 蔵馬オメエ………此処男湯だぞ」

恋次の余計な一言が、遂に彼の頂点を達してまった。

「ほう………随分とバカにされたものですね………」

「「ヒイ！」」

普段の蔵馬から想像付かない黒いオーラに、徐々に恐怖を感じ取った一護と恋次。

「丁度水風呂もありますし、少し頭を冷やしましょうか？」

その一言を聞いた二人は、

「「スンマセンでしたアアアアアアアア！」」

とても綺麗な土下座を行って謝罪した。

それを観た一同は、何も言えなかった。

寧ろ大半が蔵馬を女だと思ったからである。

浦飯チームのメンバーに関しては、

「そういや、アイツ等にちゃんと言っておけば良かったな」

「そうだな……………」

「知るか」

そう言ってその光景を見ていた。

そんな中、獄寺と青田坊がツナとリクオにこう言った。

「十代目、お背中流します！」

「若、背中流しますぜ！」

それを聞いたツナとリクオは、一度顔を見合わせると、

「それじゃ……………お願いしようかな、獄寺君」

「頼むよ、青田坊」

「お任せください！」

そう言って獄寺と青田坊は、互いの大将の背中を流すのであった。

（女湯）

同時刻、女性陣も風呂場に入っていた。

「凄オオオオオオオオオオオオい！ これ本当にお風呂場！？」

「私……聞いてない！！」

風呂場を見たスバルと亜紀子が驚きを隠せないでいた。

「……………あのエロジジイ……………また改装したのね」

そう言って閃可が溜め息を吐くと、一同が一斉に固まった。

「か、改装したんですかコレで!?!」

「私から見れば改装と同じよ」

驚く五和に閃可はハッキリそう言った。

浴槽に浸かると、はやては神裂の胸を眺めていた。

「え〜と……何ですか?」

神裂がそう言うと、はやては彼女の胸を突如揉みだした。

「ひゃあ!／＼／＼／＼」

「グフフフ……なかなか良え乳やな。シグナムと同じくらいの揉み
応えやでえ〜」

その後女性陣は、露天風呂に向かったのであった。

夜空に光る星に、全員が満喫していた。

「綺麗……」

「星が沢山……」

すると京子が、ある質問をなのはに問う。

「そう言えば、なのはさんはヴィヴィオちゃんのお母さんですよ
ね？」

「うん、そうだけど」

「それじゃ、なのはさんには旦那さんと呼べる男性がいるって事
ですよ？」

「え……」

その一言でなのはは、顔を真っ赤に染めた。

「まままま待って京子ちゃん！ ヴィヴィオとは血が繋がって
いないから、事実上私独身なの。だから旦那さんと呼べる人は…
…」

「でもなのはさん、ユーノさんとそう言う関係じゃないんですか？」

「わーわー……」

慌てるなのはにティアナが追い討ちと呼べる一言を放ち、はのはは再び慌てたのであった。

「でも良いですよ。好きな人がいるっていうのは」

織姫がそう言うと、亜紀子がこんな事を言い出した。

「織姫ちゃんも、好きな人がいるの？」

「え……」

それを聞いた織姫は、顔を赤くした。

「知りたいなあ、織姫ちゃんの好きな人……」

「織姫。女同士なんだし、良いじゃない」

「織姫ちゃん、教えてくれへんとその特盛巨乳揉み倒すで」

なのは、フェイト、はやての順でそう言ってさらに問い詰められていく織姫であった。

〈男湯〉

同時刻、一護達も露天風呂に入っていた。

すると、真之介が酌と数枚のお猪口を持ってきた。

「ようオメエ等、どうだ湯加減は？」

「ああ、良い感じだぜ」

「てかその酒なんだ？」

「露天風呂といえば、酒が相場だろ」

そう言っつて高そうな酒瓶から酌へと酒を注ぎだす。

そしてそのままお猪口へ注いだ。

「ほいよ。未成年でも飲めるように、甘酒用意したからよ」

「って甘酒かよ！ 瓶ごと持ってくるもんだから、てっきり酒だと思っただわー！」

「未成年に酒を飲ませるほど俺は無責任じゃねえぞ」

そう言つて真之介は、お猪口に注いだ甘酒を飲みだす。

「それじゃ、俺は先に上がるぜ」

「俺も上がるぞ」

「同意だ」

上から日番谷、飛影、アクセアレータ一方通行が露天風呂を後にする。

「え、お前等も上がるのか？」

「俺は熱いのが苦手なんだよ」

「これ以上お前等と馴れ馴れしくするつもりは無い」

「俺ア特にねエが、先に行つてるぞ」

「……………お、おい……………ちょっと待て!？」

「お前等……………何のつもりだ？」

その質問に、二人はニヤリと笑いながらこう言った。

「俺はこう言うおいしい所は、持って行くんでね」

「ついでに土方さんも死んでください」

そう言っつてバズーカから砲弾を放った。

「……………ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア!」「……………」

バズーカの弾が男性陣を容赦無く吹き飛ばすが、

「ふう……………危なかったな」

「そうだな」

「ですね」

幽助、桑原、蔵馬の三人は、勘が良いためすぐさま浴室に逃げ
て、

「ふうー、助かったぜ河童」

「いえ、これくらいは」

奴良組メンバーも河童の能力で露天風呂を脱出していた。

その頃、露天風呂では…

「イテテテ……あの二人……トンでもない事しやがって」

腰を擦りながら一護達は見上げると、女性陣がもの凄い殺気を放っていることに気付いた。

「皆……何してるのかな……こんな所で？」

そう言っただけなのは、普段とは違う一面を見せ、男性陣を凍りつかせた。

「一護と恋次なら兎も角、石田と茶渡まで堕ちてたとはな……」

そう言っただけでルキアがボキボキと手の骨を鳴らせる。

「お兄ちゃん、これはどういうことかな？」

京子もハイパー化したツナのような雰囲気を漂わせ、

「山本さんも獄寺さんも、そのエロい牛柄の人も見損ないましたよ」

ハルも鋭い目付きで睨みつけた。

「翔太郎君、フィリップ君……それに竜君も……覚悟は良いわよね？」

亜紀子も金色で“このド変態が！”と書かれた緑のスリッパを両手に構えていた。

「ステイル……アナタがそういうことをするような人だとは思いたくなかったのですが……」

「お覚悟を」

「覚悟は出来てるわよね……この変態神父！」

「ケケケケ……んじゃ、ミサカもお仕置きタイムに参加しますか」

神裂、五和、御坂、番外固体の順でステイルに向かってそう言った。
ミサカワースト

「銀ちゃん、新八……それに汚職警官共、覚悟は良いアルな？」

マジギレの神楽に、銀時と新八と土方と近藤は顔を青ざめた。

「ち、違うんだオメエ等！ 銀さんと近藤さんと恋次が覗こうとしたのを止めようとしてたら真之介と沖田がバズーカで」

一護が弁解しようとするが、言い訳にしか聞こえないため、全く聞いて貰えない。

「京子、俺は潔白だ！ 信じてくれ！！」

そう言っつて良平は信じて貰おうとするが、そんな状況ではなかった。

「待て亜紀子、俺は警察だ！ 犯罪に手を染めるワケが無いだろ！！」

「しかし……今の時代は、警察官が犯罪者になつてる時代だからね……………」

「フィリップウウウウウウ！ それ言っつなアアアアアアアアアアアアアア！！」

照井が必死で弁解するが、フィリップが現実的な事を言い放つたため、翔太郎がツッコミを入れた。

「なあ、浜面。 お前から何か言っつて」

そう言っつて一護はが振り返ると、

「っつてオイイイイイイイイイイイイ！！」

そこには、京子の裸を見たツナとキャラコやフェイトの裸を見たエリ

男性陣は袋叩きにあったのだった。

先にリビングで缶コーヒーを飲んでいた一方通行とアクセアレータコーヒー牛乳を飲んでいた日番谷であったが、

「!?!」

浜面、ツナ、エリオの三人と、浜面に背中で気絶中の上条、青ざめている幽助、桑原、蔵馬に奴良組男性陣や土にユウスケ以外が青痣や瘤、さらには引つ掻き傷が体中に付いていた。

「お……お前等、何だアその怪我は？」

「喧嘩でもしたのか？」

青ざめた二人は、つい問いだしてしまったのだった。

第四十一話・風呂上りの飲み物は牛乳とは限らない(後書き)

次回、指導者と組み合わせ

第四十二話：指導者と組み合わせ（前書き）

遂に修行の組み合わせが発表！

第四十二話：指導者と組み合わせ

翌朝、一同は広間に集まっていた。

「ようし、今から本修行に入ることになるが……」

そう言っつて真之介は、なのはを指差しながらこう言った。

「まずはなのは、お前は斬魄刀の使い方を学んで貰うために、ある人物を講師に招いた」

「講師？」

「ああ、入って良いぞ」

その言葉で一人の人物が現れた。

「よう、朽木。 元気してたか？」

白い長髪に黒い着物、その上から十三と書かれた白い羽織を着た男性・浮竹十四朗は、部下であるルキアにそう言った。

「浮竹隊長！」

「え〜と……一護君、誰なのあの？」

なのはの疑問に、一護はすぐに答えた。

「浮竹十四朗さん。 護廷十三隊十三番隊長で、ルキアの上司だ」

「浮竹、何でお前が此処に？」

日番谷がそう言って質問すると、

「やあ、日番谷隊長。 実は真之介君から彼女に斬魄刀の使い方を講師して欲しいと頼まれてな」

そう言っただけなのに顔を向ける。

「キミがなのは君だね？ 宜しく頼むよ」

「は、はい！ 宜しくお願ひしますー！」

「ハハハハハハ……そう固くならなくても良いって　ゴホッゴホッ！」

緊張するのはに笑いながらそう言った浮竹であったが、突如咳き込んでしまい、終いには血を吐いてしまう。

「「「！？」」」

これには死神メンバー以外の一同は、驚きを隠せなかった。

「だ……大丈夫なんでしょうか？」

心配する五和に日番谷は答えた。

「浮竹は生まれつきの病持ちでな、隊首会の大半はよく休んでた」

「何か、心配になってきた………いろんな意味で」

説明を聞いた御坂も、少し青ざめてしまう。

気を取り直した一同は、真之介からこう告げられた。

「んじゃ、気を取り直して修行の事について説明する。それぞれ俺が作ったチームに別れて修行して貰う」

そう言っただけの壁に貼り付けられた紙に書かれている名前を見る一同。

そこには、こう書かれていた。

以降は下記の通り。

『接近フロントチーム』

茶渡安虎

スバル・ナカジマ

ノーヴェ・ナカジマ

笹川良平

神楽

青田坊

「オオオオオオオ！ 茶渡やスバルにノーヴェと修行できるとは、
極限素晴らしいではないか！！」

興奮する良平に対し、茶渡とスバルとノーヴェは困惑気味であった。

「あははは……何か嬉しいような、悲しいような、怖いような……」

「まあ、分からんでもないが……」

「同じく……」

しかし茶渡は、あることに気付いた。

「ム？ しかし何故、神楽も入ってるんだ？ 青田坊なら体格的に
分かるんだが……」

「おお、俺も茶渡殿に同意だ」

「私も」

「私もだ」

それを聞いた銀時は、黒い笑みを見せながら神楽にこう言った。

「神楽、論より証拠だ」

「了解アル」

そう言つて神楽は、茶渡の腕を突如掴むと、

「ホワチャアアアアアアアアアアア!!」

「ム!?!」

そのまま彼を背負い投げで地面に叩き付けたのである。

「「「!?!」」」

これにはスバル達や他の一同も驚きを隠せなかった。

特に死神メンバーに関しては、まさか茶渡くらい体格の人物を神楽のような少女が投げ飛ばすとは思ひも寄らなかったため、相当驚いていた。

「続いて次のチームなんだが……」

そう言つてスルーした真之介であった。

『間接戦闘フロント』

朽木ルキア

井上織姫

ティアナ・ランスター

クローム髑髏

蔵馬

浜面仕上

「コイツは後方支援だ。幻術と特殊技で相手を翻弄する。さらに相手の戦法と地形の使い方を上手く考えれば、どんなに強い相手も敵じゃない。俺的にはこのメンバーが良いと思ってるんだがな」

真之介がそう言うと六人は考え込んでいた。

確かにティアナとクロームは最適で、そこに相手の攻撃を見てから戦法を変える蔵馬と足場の地形を利用する浜面が加われれば強いと考えられるが、ルキアと織姫がこの位置で良いのかを悩んだ。

「なあ、真之介。私と井上はこの位置で良いのか？ 斬術と鬼道は少しは出来るが、皆に迷惑を掛けないか？」

「私も…回復や防御は出来るけど、攻撃はちょっと……」

ルキアと織姫がそう言うと、浮竹が二人にこう言った。

「それは違うよ二人とも。己の力が非力なら、仲間にそれを補助して貰ったり、自分の得意分野を活かして仲間の弱点を補助すれば良い。それに二人は自分の弱点を既に認めているという事は、その分を誰かに補助して貰えば良い。仲間はそのためにあるんだ」

それを聞いた二人は、少し安心した顔をする。

「有難う御座います隊長！ 行くぞ、井上」

「うん！」

その光景を見たのはやりボーンは、浮竹の経験の豊富さに感心したのだった。

「それじゃ、此処も決まりって事で！ そのまま次の発表だ」

『特殊戦闘フロント』

日番谷冬獅朗

フェイト・T・ハラオウン

エリオ・モンドユラム

ランボ

ステイルII マグヌス

御坂美琴

番外固体
ミサカワースト

氷麗
ヒツリ

河童

「炎・氷・水・雷と言った特殊な系統の持ち主同士のチームだ」

真之介がそう言うが、日番谷がある事に気付いた。

「おい、飛影の名前が載ってないぞ。能力的にはアイツも炎を使
うんだから、コッチじゃねえのか？」

「いや、飛影には別にいつて貰う」

そう言って真之介は、次のチームを発表した。

『近距離遠距離フロント』

・男性部門

石田雨竜

山本武

桑原和真

土御門元春

首無

小野寺ユウスケ（仮面ライダークウガ）

志村新八

近藤勲

・女性部門

シグナム

キャロ・ル・ルシエ

神裂火織

五和

毛倡妓

光夏海（仮面ライダーキバ）

「ほう、これは面白い組み合わせだな」

そう言ってシグナムは、早く戦いたいと闘争心を燃やしていた。
それを見た一同は引き気味であった。

『迎撃粉碎フロント』

阿散井恋次

獄寺隼人

ヴィータ

沖田総悟

黒田坊

猩影

「なっ！？ 俺が刺青野郎と鉄槌チビと組むのかよ！？」

「テメツ！ そんなに俺と組むのが嫌かよ！！ このタコ頭！」

「アタシはガキじゃねエエエエエ！！ 分かったかこのガキ！！」

「んだとテメエ等！！」

獄寺の発言に恋次とヴィータはキレ、三人はそのまま喧嘩になる。

「ほう、俺が迎撃ですかい？ まあ、土方と違うチームじゃなくて良かったぜい。 んじゃ、宜しく頼みますぜ、フードの旦那に笠坊主の旦那」

「あ……ああ」

「宜しく頼む」

そう言って沖田の挨拶を返す猩影と黒田坊であった。

『独立防衛フロント』

雲雀恭也

飛影

照井竜（仮面ライダーアクセル）

アクセルレータ
一方通行

土方十四郎

「独立防衛だ？　なのにこの組み合わせとはな」

そう言っつて飛影は相槌をした。

「独立防衛か……　一体何をするつもりだ」

「さあな」

照井の疑問に、土方は煙草を吸いながらそう言った。

『非常砲撃フロント』

八神はやて

ラインフォース？

リポーン

花開院ゆら

真之介

???

「え！？ 真之介、お前も出るのかよ!？」

「一護君の言うとおりやで！ どういう風の吹き回しや!？」

はやてがそう言うのと、真之介がこう言い出した。

「勘違いすんじゃないぞ！ はやてとラインを鍛えるために専属コーチをしてやるって言うてるんだ。Sランクオーバー魔導師をどんな方法で苛めるか、楽しみだぜ」

それを聞いた一同は、心の中でSだなと思った。

「ところで、この『???'』は誰だい？」

石田がそう言うと、閃可がこう言った。

「ああ、その人物は私が呼んだ相手よ。この戦いに備えるために」

一体どんな人物なのか、全員がそう思いながら疑問を感じた。

実はこのサプライズは、真之介にも黙っているのです、彼も知らない
のである。

『主要戦力フロント』

上条当麻（仮面ライダージョーカー・ホワイトフレア）

左翔太郎（仮面ライダーW）

フィリップ（仮面ライダーW）

門矢士（仮面ライダーディケイド）

坂田銀時

浦飯幽助

高町なのは

奴良リクオ

沢田綱吉

黒崎一護

「主要戦闘フロントは…とりあえずなのはは浮竹から斬魄刀の使い方をおわってからで、ツナも一護の下でコーチをして貰ってから、リクオも閃可のコーチの下、上条も士と翔太郎とフィリップの下で修行してから模擬戦で良いな」

「ああ、分かった」

こうして、各フロントの修行が始まった。

次回、拳の語り合い？と一護の指導と独立防衛フロントの相手

第四十二話：指導者と組み合わせ（後書き）

次回、拳の語り合い？と一護の指導と独立防衛フロントの相手

独立防衛フロントに、あの男が！！

第四十三話・拳の語り合い？と一護の指導と独立防衛フロントの相手（前書き）

独立防衛フロントに、あの男が！！

第四十三話：拳の語り合い？と一護の指導と独立防衛フロントの相手

岩のフィールドでは……

「うーん……どうすれば良いのか、全く分からん」

「そうだな……まだ皆で模擬戦をしてないからな……」

「じゃあ、一度模擬戦で戦ってみたい？ 丁度六人だから、チームで勝負しようよ」

「私もスバルに同意」

「待ってアル」

「うっしやあー！ 腕が鳴るぜ！！」

「確かに……それしかないな」

スバルの提案に、ノーヴェ達四人が同意すると、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！ 遂に拳の語り合いが始まるのか！！ 極限楽しみだぞ！！」

気合の入った良平に全員が引き気味であった。

「アハハハハ……何かヤル気満々だな、良平君は……」

「そうだな」

「ん~~~~~………極限!!」

こうして、接近フロントチームの模擬戦が始まったのであった。

拳の語り合い?と一護の指導と独立防衛フロントの相手

「ウワアアアアアアア！」

草原のフィールドでは、一護の下で修行するツナであるが、ホロウか虚化が上手く制御できずにすぐに解いてしまった。

「何勝手に解くてんだテメエは！！！」

「んが！」

しかし、一護に容赦なく蹴られてしまう。

「だって一護さん！ 今のは解かないとやばかったんですよ！！！」

「ウルセエ！ ヤバイとこまでやんのが修行だろうが！！ ヤル気ねえんなら止めちまえ！！！」

「そ、そんなあ〜」

この修行でツナは、一護のスパルタっぷりに、普段の彼とは違う一
目を見ることになり、

「（うう〜……………今の一護さん、リボンよりスパルタかも）」

涙目でそう呟いた。

「ふあ〜……………暇だ」

その様子を見ていた幽助は、欠伸をしながらそう言った。

そんな中、独立防衛フロントチームは…

「……………」

街のフィールドで何かを待っていた。

彼らは真之介から、

（今からお前等には、ある人物と戦って貰う。独立防衛だから、チームで戦うの良しだし、独断で戦うのも良しだ）

そう言われて、その人物を待っていたが。

「……………来ないな」

「ああ……………」

照井は何時でも戦えるように既にアクセルに変身していた。

土方は煙草を吸いながら、照井の言葉に答える。

「何時まで待たせるんだい？ その人物が来ないんなら、僕は帰るよ」

そう言つて雲雀が自分からその場を立ち去ろうとするが、

「「！」「」」

飛影と一方通行が既に構えていた。

アクセアラータ

「どオやら、お出ましのよオだな」

「ああ……………来るぞ」

まさにその瞬間であつた。

「「「！？」」「」」

アクセル、土方、雲雀の三人が、突如何かを感じ取つた。

「（何だ……………この異常なまでの霊圧は！？）」

「（さつきから距離を取ろうとしても、全然縮まった気がしねえ……………）」

「（まるで……………喉元に刃を突き付けられたようだ）」

数々の攘夷志士達と激突を繰り返した土方やドーパントと戦つてきたアクセルこと照井、そしてボンゴレファミリー最強の雲雀ですら驚愕させる程の霊圧。

アクセルに関しては、ドーパントでもなければガイアメモリの能力でもない、全く別の存在に押されたのはこの状況が初めてなのである。

魔界と人間界：二つの世界で戦いを経験してきた飛影、学園都市の『闇』と第三次世界大戦に足を踏み入れた一方通行アクセアラータにとっては、この程度の霊圧は耐えられるレベルであった。

その瞬間、突如声が聞こえたのである。

「お前等か？」

「「「「「！！」「」「」」」」」

その声を聞いた五人には、すぐさまビルの方へ顔を向けた。

そこには、ビルの上から彼等を見下ろす男がいた。

だが、その時であった。

「どうした？ 何時までそつちを見てるんだ？」

その瞬間、飛影と一方通行アクセアラータは振り向き、アクセル、土方、雲雀は突如、胸を貫かれた感触を覚えた。

「「「「「.....」「」「」」」」」

「（今のは.....殺気か！？）」

「まさか殺気だけでコレだけのことが!？」

「(……………)」

飛影と一方通行は前方にいる相手を睨み、アクセル、土方、雲雀は殺気に驚いていた。

「雲雀恭也に照井竜……土方十四郎に飛影、そして一方通行だな？」

その声にアクセル、土方、雲雀は振り向き、飛影は剣を構え、一方通行は電極に手を当てていた。

「何で俺達の名を!」

アクセルがエンジンブレードを構えながら問うと、その人物はこう答えた。

「何だあ？ 真之介ってヤツから聞いてねえのか？」

その言葉を聞いた五人は、真之介の言葉を思い出した。

(その人物は、何者なんだ?)

照井の問いに真之介はこう答えた。

(会えば分かるさ。ただし、お前等がヤツに恐怖を感じなければな)

(ソイツの名は?)

そして目の前の人物は、自らの名を名乗った。

「護廷十三隊十一番隊隊長・更木剣八（まきけんぱち）。 テメエ等と、殺し合いに来た！」

今、尸魂界最強にして最凶の死神が、五人の前に立ちはだかった。

剣八の放つ霊圧に、アクセルはこう思った。

「（あれが……更木剣八……黒崎達と同じ死神だとは聞いていたが、こんなに凶悪な雰囲気を漂わせる人物だとは聞いていないぞ）」

土方はというと、

「（何か……万時屋の知り合いのあの……屁怒組とかいう天人を人間にしたらこんな感じかもな）」

そう言って心底ビビッていた。

しかし、五人はすぐさま構えを取った。

「ほう……構えはイマイチなヤツもいたりもすれば、中々のヤツもいるな。雲雀に関しちゃ、殺気は中々のモンだし、照井と土方は結構視線を潜り向けてるな？ とても中学生やお巡りとは思えねえぜ」

「そりゃ……………どうも」

「クツ（ダメだ……………目が合わせられない）！」

「何時でも僕はキミを咬み殺せるよ」

土方は剣八の言葉に返答し、アクセルは未だに威圧に耐えられず、雲雀は挑発をした。

「んでもって、飛影と一方通行は……………結構殺し合いを経験してるみてえだな」

「フン」

「チツ」

剣八の言葉に飛影は感情を面に見せず、一方通行は舌打ちをする。

「言っただろ、俺はテメエ等と殺し合いに来たってよ。どうせなら少しハンデをくれても良いぞ？」

そう言つて剣八は上着を広げ、筋肉の鎧に覆われた肉体を晒しながらこう言つた。

「テメエ等から先に攻撃させてやるぜ」

「!?!」

これには五人は驚きを隠しきれず、アクセルがこう言い出した。

「ふざけるな！ 無防備の人間を斬り付けるなんて、そんな真似が出来るか!?!」

「ほう……構えてねえヤツを斬り付けたくないというその良心は認めるが、そんな半端な考えじゃ俺は殺せねえぞ？ 誰かが死のうが死なないが、所詮は暇つぶしだろ？」

「!?!」

最後の剣八の言葉に、アクセルと土方に雲雀は背筋を凍らせ、。

「見掛け倒しじゃない事を祈るぜ」

「上等じゃねエか!」

飛影と一方通行は、アクセアラレータ戦闘態勢に入った。

「クツ、後悔するなよ!」

「咬み殺す!」

【ENGINE ELECTRIC】

電気を纏ったエンジンブレードを構えたアクセルとトンファーを構えた雲雀は、そのまま剣八に飛び込んだのだった。

一方その頃、接近フロントは……

「茶渡さん、ノーヴェ、神楽ちゃん、準備は良い？」

「ム……………」

「ああ、何時でも良いぜ」

「掛かってくるヨロシ」

三人一組の2チームに分かれて、ガチンコ対決をする事に提案し、クジ引きでメンバーを決めた。

神楽が地面に拳を当てると、彼女の拳を中心に地面が抉れた。

「うオオオオオ！ 極限凄い拳だ！！」

そんな神楽の攻撃に、感心する良平であった。

アクセルと雲雀は、驚きを隠せなかった。

「……………」

それは剣八に攻撃したはずなのに、彼の体には傷が付かず、雲雀の腕から血が流れていて、電気を纏ったエンジンブレードの斬撃をこんなものかと平然としている剣八に驚きを隠せなかったのだ。

「な……………何故だ！？」

「ど……………」

驚きを隠せない二人であつたが、

「何だあ？ この程度かよ」

そう言つて剣八は、エンジンブレードの刃と刃の仕込み入りのトンファーを掴みながら、つまらなそうな顔をした。

驚いたアクセルと雲雀はすぐさま後ろへ引いた。

「（エンジンブレードの刃を素手で掴むだと！？）」

「（僕の攻撃が効かないだと！？）」

疑問を隠せない二人に剣八はこんな事を言つた。

「教えるぜ照井、雲雀。 何故お前等の攻撃が俺に効かないのか？」

「何だと？」

「俺達死神の戦いは、自分と相手の霊圧の強さと押し合いで勝負が決まるんだ。 少しでもつて、弱えヤツは押されて負ける。 単純にそれだけだ」

「つまり、照井の剣から繰り出すガイアメモリの能力とテメエを殺すために研ぎ澄まされた雲雀の殺気は、テメエの霊圧に押されちまつたつて事かア？」

「ああ、そういう事だ！」

分かり易く解釈した一方通行に、アクセアレータ 剣八はニヤリと笑つた。

そんな中、ツナはというと……

「んが！」

「だ・か・ら！ 仮面付けてからの初動が襲いって言ってんだよ！
！ ちゃんと人の話し聞けボケ！！」

未だに一護のスパルタに扱かれてしまい、

「幽助、ツナの虚化の保持時間は？」

「……1秒」

「早えよ！ 本当にヤル気あんなのかテメエは！！」

果たして、ツナは虚化を制御出来るのか？

頑張れツナ！！

（オマケ・3年Z組銀八先生）

銀八

「はい、この小説を読んでいる人、これは作者と銀さんからのお願いです。折角銀魂がコラボしてるんだから、このコーナーくらいは出そうと思ってな、それで諸君の質問を受け取りたいと思う。投稿しなかったヤツは志村姉の卵焼きとシヤマルの料理を食ってもらう」

一護

「銀さん、それは拷問じゃねえか!？」

なのは

「幾ら何でもそれは可哀想だよ!」

上条

「というか、志村姉の卵焼きだけでも厄介だったのに」

シグナム

「シヤマルの料理は流石に厄介だな……」

シヤマル

「それどう言う意味!？」

銀八

「というワケで、皆の質問宜しく!」

第四十三話・拳の語り合い？と一護の指導と独立防衛フロントの相手（後書き）

次回、近距離遠距離フロントの修行です。

第四十四話：タッグバトルとリクオVS鬼纏姫（前書き）

近距離遠距離フロントの修行です。

第四十四話：タッグバトルとリクオVS鬼纏姫

近距離遠距離フロントチームは、平等にチーム分けを行いタッグバトルをする事になった。

「それでは、準備は良いですか？」

神裂の呼びかけに全員が返答する。

因みに、タッグはこの通りになった。

タッグバトルとリクオVS鬼纏姫

タッグ名：霊力チーム

メンバー：石田雨竜、桑原和真

「ヨッシャアアアアア！ 頼むぜ石田！」

「何か、君を見てると黒崎か阿散井と手を組んでるみたいだよ」

ヤル気満々の桑原に、石田は呆れるしかなかった。

タッグ名：マフィア&魔術師チーム

メンバー：山本武、土御門元春

「ま、気楽に行くぜよ」

「宜しくっス」

土御門と山本は、笑いながらそう言った。

タッグ名：天草式十字凄教チーム

メンバー：神裂火織、五和

「参りますよ五和」

「はい」

既に準備万端の神裂と五和。

タッグ名：ライティング部隊チーム

メンバー：シグナム、キャロ・ル・ルシエ

「油断をするなよキャロ」

「は、はい」

既に戦う気満々のシグナムに付いていけないキャロ。

タッグ名：仮面ライダーチーム

メンバー：小野寺ユウスケ（仮面ライダークウガ）、光夏海（仮面ライダーキバラー）

「行くよ、夏海ちゃん」

「何時でもOKです」

クウガとキバラーはスタンバイOKの様子であった。

タッグ名：奴良組チーム

メンバー：首無、毛倡妓

「ホラ、行くわよ首無！」

「あ、ああ……」

毛倡妓の知りに敷かれる首無。

タッグ名：侍チーム

メンバー：志村新八、近藤勲

「行くぞ、我が義弟おとつとよ！」

「誰が義弟だ!!！」

勝手に義兄宣言する近藤にツッコミを入れる新八。

それぞれのチームが模擬戦を行うこととなった。

一方でリクオは、地盤のフィールドに向かうと、

「おお〜リクオ、待ってたぞ」

「……………」

「お爺ちゃん、牛鬼……と誰？」

そこには、リクオの祖父・ぬらりひょんと幹部の牛鬼、そして頭に傷がある口髭を蓄えた死神がいた。

「護廷十三隊一番隊隊長及び護廷十三隊総隊長、山本元柳斎重國と申す」

「！！ 奴良組若頭及び三代目総大将の奴良リクオです」

「オッホッホッホッホ……そう固くならんでも良いぞ」

緊張するリクオに、元柳斎はそう言った。

すると、閃可が転神体を担ぎながら現れた。

「総隊長殿と総大将には、鬼纏まといひめ姫の能力とアナタの修行を見てもらう事になるから。リクオ、刀を転神体を突き刺して」

リクオは言われたとおりに刀を突き刺すと、

「お久しぶりです、リクオ様……」

短い黒髪に黒い着物を纏った女性がリクオの後ろに現れた。

「もしかして……鬼纏姫？」

「はい……」

少し驚くリクオであったが、閃可がこう言い出した。

「リクオ、今からアナタには『正解』を会得して貰うわ」

「ば……『正解』を!？」

「ええ……奴等と対等に戦うには、『正解』の習得しか方法は無いわ」

そして閃可は、鬼纏姫にこう言った。

「後のことは任せるわ」

「ええ……」

すると鬼纏姫は、地面からリクオと自分の足元に二本の刀を一本ずつ出現させる。

「『正解』の習得は唯一つ……具象化した斬魄刀の本体を倒して、屈服させること……」

互いに刀を構えた鬼纏姫とリクオは、

「……………行くぞ！」

遂にぶつかり合った。

果たして、リクオは『正解』を習得出来るのか!?

近距離遠距離フロントチームのタッグ戦では、もの凄い戦いが繰り広げられていた。

くウガ&キバーラVS新八&近藤

「おりやアアアアア！」

クウガが跳び蹴りを仕掛け、近藤がそれをかわした。

「ウオツ！」

「ハアツ！」

それに続くようにキバーラが剣を振るうが、新八がそれをガードする。

「新八君って、以外に強いですね」

「僕だって銀さんの下で働いてますからね……………ただ給料一銭もくれませんけど」

「それには同感です。ユウスケは兎も角、土君は家賃一銭も払わないんですよ」

「……………うわ、家賃の事なら銀さんも同じですよ」

徐々に家賃談義で話しが合ったキバーラと新八であったが、

「安心しろ新八君！俺は義弟の強さを知っているぞ！！」

「人の姉上をストーキングしといて、何義兄宣言してんだよ！！」

近藤の発言に新八は見事にツツコミを入れた。

「……………近藤さん、ストーカーしてたんですね」

「よく逮捕されなかったな……………」

クウガとキバーラは、今まで逮捕されなかった近藤に若干引き気味であった。

〈石田& a m p・桑原VS山本& a m p・土御門〉

銀嶺弧雀による射撃を放つ石田。

それを刀で受け流すように弾く山本。

「流石だね、山本君。キミは一番要注意だと思ってたから」

「やっぱアンタは厄介っスね、石田さん」

互いに慎重になりながら距離を取る二人であったが、

「んじゃ、俺も始めますかな」

そう言つて土御門が動いた。

足を思いつきり踏みこみ、一気に距離を縮める。

「石田、危ねえ！」

桑原がそう言って土御門に接近するが、

「ガッ！」

「へッ」

土御門の拳が、見事に桑原にヒットした。

さらに肘打ちを頭部に叩き込み、そのまま地面にダウンさせた。

「な!？」

「マジかよ!？」

これには石田と山本は驚きを隠せなかった。

「言い忘れてたけどな、俺はこれでも暗殺に必要な殺しの技を徹底的に叩き込まれている。まあ、桑ちゃんの打たれ強さにはちっと骨が折れるけどな」

「こんのヤロオ〜〜〜」

自身の戦法を教える土御門は、そう言って立ち上がる桑原を見ていた。

「土御門さんって、トンでもない人っすね」

「普段から飄々してるから、分からなかったけど」

山本と石田は、土御門の意外な一面に驚いていた。

く神裂& a m p・五和V Sシグナム& a m p・キャラク

神裂とシグナムが、互いに見合っていた。

「遂にお前と相對することが出来るとは……………準備はいいな、神裂」
「フウ……………戦いたくないというのはウソになります、アナタの力を見てみたいというのは本音です」

既に戦う気が満々の二人。

「キャラク、手を出すなよ。回復でのサポートは任せるが」

「は、はい！」

「申し訳ありませんが五和、回復魔術でバックアップを」

「はい、分かりました！」

互いに刀を構え、

「いぞ……」

「勝負！！」

遂に二人の女性剣士の戦いが始まったのだった。

く首無& a m p・毛倡妓VS??& a m p・??

首無と毛倡妓の奴良組ペアは、模擬戦の相手がいなかった。

「僕等だけ相手がいないって……少し寂しいような……」

首無がそう言うと、後ろから誰かが現れた。

「君達かい？ 奴良組とかいう組織の幹部は？」

その声に二人はすぐに振り返ると、

「十一番隊第五席・綾瀬川弓親だよ」

「十番隊副隊長・松本乱菊よ」

「僕らは真之介って人から、この戦いに加わってくれと頼まれたんでね」

「アンタ達、覚悟しなさいよ」

死神が二人、刀を構えていた。

「さあ、美しく戦おうじゃないか」

「ちゃっちゃんと、決めましょうか」

「あら、あんまり甘く見ないで欲しいわ」

「僕等『奴良組』の力、見せてあげるよ」

こうして、護廷十三隊VS奴良組の模擬戦が始まった。

一方その頃、迎撃粉碎フロントチームは……

「よし、今から俺の考えた企画^{プラン}を説明しておく。 テメエ等の頭に知識を叩き込んでやる!!」

そう言つて真之介からの助っ人として加わつた斑目一角と共に図書室に来ていた。

因みに図書室なのは、修行の企画^{プラン}を作ると言つて獄寺が言い出したのである。

「 っていつか刺青野朗オオオオオオオオオオ！ テメエ、イキナリ居眠りしてんじゃねえええええ!!」

そう言つて眠たそうな顔をする恋次を怒鳴るが、

「ZZZZZZ……………」

「 ってテメエは普通に寝んなアアアアアアアアアア!!」

愛用のアイマスクを着けた沖田が、普通に眠つていたのですぐさま怒鳴る。

「ぶち抜けアイゼン！！」

「延びろ『鬼灯丸』！！」
ほおすさまる

四人が大喧嘩している中、

「いやあく、今の内に逃げて良かったぜい」

「良いのか、アレで？」

「猩影、気持ちは分かるが……今はそつとしておけ」

沖田、猩影、黒田坊の三人は、図書室の外からその様子を眺めるのであった。

「教えて！ 銀八先生」

銀八

「はい、というワケで、最初の質問をしたいと思います。ハンド
ルネーム『鳴神ソラ』さんのキャラクター達からの質問」

ネス

「んじゃあ質問『内のマリオについてどう思う?』」

ルイージ

「いやいやいや!」

フォックス

「思いつきり内関連での質問はどうかと思うぞ!」

スネーク

「質問だ『それぞれ別の世界に住む者を見てどう思う?』」

マリオ

「質問『何でシャルマルやお妙の料理が×ゲームなんだ?』美味しいのに!」

ルイージ

「(それ兄さんだけだよ...)(上条君に質問『ディケイドを見てどう思う?』」

アング

「ツナは伸ばせられるのかが今後の課題だな...」

カザリ

「アクセル達の方も大変だね!」

〈ネスの質問〉

銀八

「ではまずはネスの質問をこの銀八先生が代表して答えます。ぶ

「つちゃけ言つと、化物だ！ 何であのお妙とシャマルの料理普通に食えるんだよ！ んでもってスネークの質問を各作品の主人公達が代表でお答えします」

〈スネークの質問〉

一護

「そうだな……幽助は俺以上にバケモン退治に関してはかなりキャラアツつか、ベテランだって言うのは良く分かったぜ。アイツから見れば、俺は子供扱い同然だからな」

ルキア

「ある意味では、ホロウが虚化使っても勝てんかもしれんな」

一護

「う……ソレ言われたら、何か凹む」

幽助

「俺は……そうだな……一護とリクオだな。どっちもスゲエ戦い経験してるからな」

桑原

「全然理由になつてねえよ」

幽助

「あとなのはだな。俺の霊丸とアイツのディバインバスターと勝負したいからな」

ぼたん

「……………バトルマニア」

上条

「俺は……………始めは銀さんのことをダラケタ人で“まるでダメな男”ってイメージだったけど、実は凄い人だって良く分かった」

御坂

「あ、私もソレ思ってた」

一方通行

「俺もだ」

浜面

「実は俺も……………」

銀時

「ってテメエ等、俺の事そんな風に見てたのか!!」

神楽

「まあ、銀ちゃんの性格じゃ当たり前アル」

銀時

「ぐっ! ………………因みに俺は一護だ。理由は卍解が使えるから」

新八

「全然理由になってねええええええええええええ!!」

なのは

「私はリクオ君と当麻君かな」

はやて

「そういえばリクオ君が始めて戦ったのは8歳の時やから……
って当時の私達より一つ下の時に覚醒したんか!？」

フェイト

「何か……凄い敗北感……」

なのは

「リクオ君の場合は、仲間達に頼る形で戦うから、今度管理局の指導の参考にしたと思って。で……当麻君は……お、思い出すだけでも怖いイメージが……」

はやて

「そやな。本気出したなのはちゃんのアタマをモロに喰らって、全く倒れなかったからなあ」

フェイト

「一番敵にしたいもんね」

リクオ

「僕は綱吉さんかな。同じ境遇があるから、親近感もてるのが理由かな」

ツナ

「俺はリクオ君かな、何か共感できる部分があるから」

リボーン

「だけどリクオは成績も良いし、運動も出来るぞ？ 明らかにお前と正反対だぞ」

ツナ

「う！」

翔太郎

「そうだな……色々いるが、やっぱりツナだな。惚れた女と仲間のために全力を賭けるところが理由だな」

フィリップ

「それにしても、ボンゴレファミリーには実に興味をそそられるよ」

翔太郎

「フィリップ、その辺にしてくれ」

士

「どう思うと言ってもな……そいつらにはそいつ等の経験や戦う理由がある。自分を評価できるのは自分だけって言うことだ」

くマリオの質問く

銀八

「はい次はマリオの質問。テメエには一生分からんワアアアアアアア（怒）！！ んでもって当麻、お前の答えは？」

上条

「え？ 別に、士さんは士さん。それ以上でそれ以下じゃない」

銀八

「だそうですというわけで鳴神ソラさん。お妙の卵焼きを食べな

がら廊下にたつてなさい」

上条

「続きまして、武田軍兵士 清坂剣麻さんのキャラクターの皆さんからの質問です」

小牟

「わおう！ 質問コーナーじゃな？ ならば齡765（ナムコ）歳の仙狐であるわしから女性陣に質問じゃあ！！ ぬしらは男同士のカップリング（例：上条×一方通行）なら誰と誰なら見てみたい」

アシエン・ブレイデル

「初っぱなからへんちくりんな質問しやがりましたなこの駄狐。ではあつしから風呂を覗いた変態男共に質問しちやつたりします」とよ。 目の保養はできたのか？ 出来たら地獄を楽しむんだな」

御坂美己（御坂妹）

「ミサカからあつちのお姉様に質問。 最近出番がないようですが、コレを着てお色気担当でもしますか？ つとミサカは胸の小さいお姉様に対しそう質問します」

*極薄服：腹出し、太もも出して生地が薄い服（わかりやすく言う）と無限のフロンティアに出てくる鈴華姫の格好＋スパロボのアルフィミイの服）

（小牟の質問）

はやて

「別に男性同士のカップリングは、翔太郎さんとフィリップ君で十分やし」

フィリップ

「翔太郎、今さっきボーイズラブについて検索したんだけど」

翔太郎

「そんなもん検索しなくて良いわあああああ!!」

くアシエンの質問く

銀時

「いや、その……あの袋叩きのせいで……記憶が吹っ飛んでしまったというか……」

恋次

「思い出したくもねえ……」

近藤

「何言ってるんだ万時屋。フェイト殿とシグナム殿と神裂の胸をかなり凝視してたじゃねえか」

銀時&恋次

「言っなああああああああ!!」

女性陣

「死ねエエエエエエエエエ!!」

銀時・恋次・近藤

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

（御坂美己の質問）

御坂美琴

「ふざけるなああああああああ／／／／」

銀八

「以上で終了ですが、武田軍兵士 清坂剣麻さんは逆立ちしながら廊下にたつてなさい」

第四十四話：タッグバトルとリクオVS鬼纏姫（後書き）

今回は特殊戦闘フロントと非常砲撃フロントの修行です。

〈斬魄刀紹介〉

名前：鬼纏姫まといひめ

所有者：良奴リクオ

解放の句：映せ『鬼纏姫』

能力：鬼發鬼纏きほつかさね

詳細：死神の力を覚醒させた良奴リクオの斬魄刀。

解放すると柄尻に鎖で中に『畏』と書かれた菱形の装飾が繋がれた日本刀に変形する。

他者の能力を刀身に移すことで、その能力を使うことが出来る。

死神の斬魄刀も例外ではなく、始解・卍解問わずに使うことが出来る。

本体は着物を纏った女性であるが、昼は黒い短髪の女性で着物も黒く、夜は長い銀髪に白い着物のという、リクオの血に合わせて姿が変わる。

第四十五話：魔【すけっと】（前書き）

遂に助つ人が発覚。

第四十五話：魔【すけっと】

特殊戦闘フロントは、各属性でチームを分けることにした。

↳ 雷・電気属性↳

・フェイト

・エリオ

・ランボ

・御坂

・番外固体

↳ 氷・水属性↳

・日番谷

・氷麗
CANDY

・河童

（炎属性）

・ステイル

こうして、彼等の模擬戦が始まった。

魔【すけっと】

唯一一人のみのステイルは、

「言うておくが、僕は一人だと思って甘く見るなよ」

そう言うて手から刃と化した炎を出現させる。

「炎剣！」

「氷輪丸！」

しかし、日番谷に相殺されてしまう。

「チッ！」

「悪いがコッチはチームなんでな、相手の状況を考えて行動した方が良いぞ」

「それはコッチの台詞です！」

するとフェイトは、バルディッシュを展開させて攻撃を仕掛けるが、二人はすぐさま回避する。

「ならば！ 『炎の紅十字』！！」

しかしステイルは、両手から炎剣を発動させて攻撃する。

無論、二人はすぐさま回避した。

「ちっ、仕方無い……………」

そう言ってステイルは、突如走り出した。

その際、何枚かのカードをフィールドの各所に貼り付けた。

「（何だ！？）」

作業を終えたステイルは、今度は呪文を唱えた。

「いでよ……………魔女狩りの王【イノケンティウス】！！」

その瞬間、彼の後ろから炎に包まれた巨人が出現した。

「うおおおおおおオオオオオオオオオ！！」

「な！？」

「炎の……………巨人！？」

「僕を舐めるなよ！」

そう言ってステイルは攻撃を仕掛けるのであった。

非常砲撃フロントでは、真之介とはやてとリインがいた。

リボーンがいないのは、真之介がツナの様子を見てきても言いと言われたためである。

「いいんかい、真之介君・・・こっちはリインも含めた完全な状態やで。それでも、一人で戦う気なのかいな!？」

「てめえらなんて・・・俺一人で充分だ!なんなら・・・こっちはハンディキャップをつけてもいいぜ!」

挑発的な真之介の態度に、はやてとリインはとうとう堪忍袋の緒が切れた。

「いい・・・やる・・・こうなったら、全力で君を叩き潰したるわ・・・この八神はやてと、リインフォース?がな。いくで、リイン!」

「はいですー!ー!ー!ー!」

そう言うと、はやては騎士甲冑のバリアジャケットに身を包み、リインとユニゾンをした。

「リイン・・・ユニゾンインー!!」

はやてがそう言うのと、リインははやてとユニゾンした。

ユニゾンしたことによってはやての魔力は普段の力を遥かに超えるものとなり、髪の色は白く変色する。

「じっくり見させてもらうぜ・・・オーバーSランクの魔導師の力つて奴をな・・・じゃあ、俺もそろそろいくか」

すると、真之介は懐から機械のような籠手を取り出し、それを自分の左腕に装着した。

そして、今度は自分の腰元の方を手でいじりだし、何かを探し始めた。

「今日は・・・『4番』にするとしよう・・・」

すると、真之介は腰元のベルトからローマ字で『?』と書かれた小型で薄いメモリーチップを取り出した。

「何や!?! そんなもの・・・どうやって使うんや?」

「直ぐに分かるさ・・・」

そう言うのと、真之介は先程左腕に取り付けた籠手の差込口にそのメモリーチップを嵌め込んだ。

そして、嵌め込み終わると籠手につけられている0から9までの数字

のうち、4番を押した。

「4 number strike stand by ready?
」

箆手から聞こえてくる音声を確認すると、真之介は数字の隣についてある『Enter』ボタンを押した。

「Awaking
」

その瞬間、真之介の箆手は変形し始めた。

そして、はやてが驚くことを良いことにー……

真之介の箆手はティアナのクロスミラージュよりも一回り大きい独特なデザインをした銃に姿を変えた。

「な……何や……それ……!??」

「俺の武器……『クアトロ・プラスター機関銃』。今回はこいつでめえをノックダ

ウンさせてやる……」

「言いたい放題言ってくれるやないか……その言葉……代償は高いで!!!」

そう言うと、はやては空中高く舞い上がると、自身のデバイスである夜天の書を取り出すと、魔法陣を展開して詠唱を開始した。

真之介はその様子を余裕の表情で見ていた。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け……」

すると、真之介の頭上高くに魔方陣と六つの光が展開されて――

そこからは強大な魔力反応が窺がえた。

「石化の槍……ミストルティン!!!!」

すると、はやてが杖を振り下ろした瞬間、真之介の頭上の魔方陣と六つの光から同時に光が照射された。

はやての放ったこの技は、遠隔発生型の砲撃魔法にして、敵を石化させ破壊することが出来る……ミストルティン。

合計七つの光が真之介の頭上目掛けて飛んでくる。

真之介は全く焦る様子も見せずに左手の銃を右手に持ち替えて再び腰元から違うメモリーチップを取り出し、銃に差し込んだ。

「ミストルティン……結構怖い技だな……けど、こいつの前では何の意味も持た無えよ!!」

すると、真之介は銃についている1から9の番号のうち……今度は『110』とうち、エンターを押した。

「110……light blaster ready……FIRE!!」

その瞬間、真之介の銃から巨大な光の砲撃がはやての放ったミストルティンに向って発射された。

真之介の放った砲撃はミストルティンの七つの光を全て吸収し、無力化して何事も無かったかのようにした。

「なっ!? 私のフルパワーの……ミストルティンが……
……!?!?何なんや……それは!?!」

「『ライト・ブラスター光の砲撃』。この世の全ての物理的現象・エネルギーをすべて

吸収し、無力化する。てめえの魔法も俺から言わせてみればこの世の物質だ・・・消すことも出すことも容易い・・・」

「くう~~~~~!!!」

はやては齒を食いしばって激しく悔しがった。

そんなはやてを見て嬉しくなったのか、今度は真之介のほうがり笑みを浮かべて、はやてに銃口を向けてきた。

「お次はこっちからいくぜ・・・言っとくが、除けようなんて考えは止したほうがいいぜ・・・」

「何!?!?どう言う・・・意味や・・・!?!?」

すると、疑問に答えるかのように真之介は腰元からさらなるメモリーチップを取り出して銃に装填。

番号を今度は『177』と打って、エンターを押した。

「177・・・infinity volcano jet・・・
ready・・・FARE!!!」

すると、銃口から凄まじい熱反応と共に灼熱色の炎の銃弾がはやて目掛け放たれた。

「『インファイニティ・ボルカノ・ジェット
無限砲撃火炎弾』!!!」

真之介の銃から発射される灼熱の銃弾がはやてに襲い掛かる。

はやては咄嗟にそれを回避しようとして高速で移動したが、真之介の銃弾は無敵と言っただけ合って無尽蔵に連射され、徐々に逃げ回るはやてを追い詰めていく。

「ちよっ…ちよつとまった！！いくらなんでもこんな技はズルイやる！？」

「いいこと教えてやるぜ、はやて・・・」狡猾な世の中を良く抜くためには、己もまた狡猾にならなければいけない”んだよ！！ズルイなんて言葉は通じねえ！！”

そう言うと、真之介は容赦なく灼熱の火炎弾をはやてに発射し続けた。

はやても段々逃げ回るたびに魔力が消耗していき、どんどん窮地に追いやられていくのであったが、

「！？」

突如真之介が、何かの気配を感じ取った。

「な……何だこの気配は！？ それにこの魔力の質量……………」

無論、はやてもリインも驚いていた。

「こ……コレは一体誰のや！？」

そしてその気配の正体は、すぐさま三人の前に現れた。

「真之介というのは貴様か？」

スカーフと洋装に、前髪が黒でそれ以外は金髪青年が現れた。

「我が輩は脳嚙ネウロ。閃可という女に呼ばれて、助っ人という形で貴様等の相手になった。有難く思うが良い」

『魔人探偵の世界』の出身者・脳嚙ネウロが現れたのだ。

「の………脳嚙ネウロ!? 閃可のヤツウウウウウウウ!! よりによって、厄介なヤツを呼びやがってエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!」

先程まで余裕の笑みを見せていた真之介は、顔を真っ青にしてガタガタ震えてしまう。

「(し、真之介君がビビル程の相手やと!? 一体どんな能力を!?)」

その様子を見たはやては、驚きを隠せなかった。

「じゃあミサカからあつちのおねーたまに質問。 出番が少ないみたいだけど、短パン止めたりへそ出しにしてみたらう。 まあ、クローンにいろいろ負けてるオリジナルが

やっても効果あるかわかんないけどね」

こっちの美琴

「上等だ！ 今すぐそこになおれ小娘えー！ー！ー！っ！！！」

番外個体

「きゃー こっちのおねーたまが怒った。 ミサカ怖い。 別に怖がってない。」

くハーケン・ブラウニングの質問

銀八

「はい、では先生が代表で答えましょう。 世界が一つになっても此処とが一つならきつと友達が出来るさ」

新八

「先生、答えになってません」

くロベルト・カツツエの質問

銀八

「はい、此処は代表として御坂と五和に答えて頂きましょう」

御坂

質問です。

皆さんは内の剣心を如何見ますか？

一護

「やつぱ『るろ剣』の主人公でもあるからな、自分の信念を貫こうとするところが良いな」

新八

「銀さんと違って、ちゃんと仕事してくれそうですし」

銀時

「がああああああああん！！」

特別ゲストの出演はありますか？

虎龍

「この小説では無理ですが、同時連載の『仮面ライダーW』another world story』で良ければゲストに出したいと思います」

銀八

「何気に宣伝してんじゃねえよ」

永遠のロリータへ

ドチビで頭の悪い自分を如何思いますか？

ヴィータ

「アタシは頭は悪くねえし、これでもガキじゃネエエエエエエエエエエエ
エ！！」

銀八

「はい、次は『鳴神ソラ』さんのキャラ達の質問です」

ネス

「主人公メンバーにしつもん『亀鳥虎龍さんが知ってるマンガやアニメで行きたい世界はある？』」

カザリ

「質問『亀鳥虎龍が知ってる敵キャラでこいつは苦手だな』と思うのは？』」

リンク

「作者さんに質問です『主人公キャラを好きな順で表すならどう言う感じになる？』」

くネスの質問く

銀時

「俺は『化物語』だ。阿良々木のツツコミが新八よりキレがあるからな」

ネウロ

「我が輩は『デスノート』だ。主人公・月と^{ライト}頭脳戦には興味をそそられる」

翔太郎

「俺は『緋弾のアリア』。探偵を育成する学校つてのに興味があるからな」

士

「『キノの旅』だな。様々な国を旅する話しが面白い」

なのは

「私は『けいおん!』。女子高生のほのぼのした学園生活が面白いから」

一護

「『鋼の錬金術師』だ。エルリック兄弟の友情が良いからな」

幽助

「強者揃いの『烈火の炎』だ!」

リクオ

「うっん……特にないかな」

ツナ

「俺も無いな」

上条

「俺も全く無い」

くカザリの質問く

虎龍

「多すぎて言えません」

くリンクの質問く

虎龍

「上条 幽助 ネウロ 銀さん……」

一護

「何か、聞きたくないような……」

ツナ

「同じく……」

銀八

「とうとうケで今回はこの辺で！」

第四十五話：魔【すけっと】（後書き）

次回をお楽しみに。

第四十六話：ランチタイム（前書き）

閃可

「次は誰を呼ぼうかな」

???

「そう言っって呼んでるクセに」

第四十六話：ランチタイム

間接戦闘フロント組みは、フィールドではなく、屋敷内にあるコンピュータ室に来ていた。

「とりあえず、模擬戦は午後から始めるとして………これからの戦いに向けて、どう対応をするのかを計画しますね」

蔵馬はパソコンを操作しながら、修行の計画表を作成する。

「午前中からやらないんですか？」

「一度計画を練った方が無駄に時間と体力を消費しませんからね」

ティアナの台詞に蔵馬はサラッと言った。

「まあ、計画表でも十分に時間が掛かるので、何かアイデアとか意見があれば言ってください」

ランチタイム

「イテテテ……………」

「つたく、こんな事で弱音吐くなよな」

リボーンを肩に乗せた一護がそう言つと、ツナが痛みながら答える。

「だって一護さん、ちつとも手加減してくれないじゃないですか」

「バカかお前？ 本気出さなきゃ、修行じゃねえだろうが！ いつもリボーンにやられてんだからこれぐらい慣れるよな」

「一護の言つとおりだ。オメエはもう少し、忍耐つてヤツが必要だな。一護、午後は徹底的に苛めて良いぞ。ダメならその場で殺せ」

「それは止めてくれリボオオオオオン！」

「鬼畜だな……………」

リボーンの一言に泣き出しそうなツナを見ながら幽助はそう言った。

すると、別の方向から石田達『近距離遠距離フロント』と茶渡達『接近戦フロント』と合流し、織姫達『間接戦闘フロント』と合流する。

「あれ、井上達は修行はしなかったのか？」

「うん。蔵馬さんが一度計画を練ってから修行した方が良かったから、修行は午後からやることになったの」

それを聞いた一護は、必要なかという顔をしてしまう。

すると今度は『特殊戦闘フロント』と合流するが、

「!?!」

フェイトやエリオに御坂は解けきっていない氷が体に付いていて、日番谷と氷麗は黒焦げ、ステイルはその両方でその上にならず濡れであった。

何故か番外固体ミサカワーストと河童は無傷であった。

「お、お前等…………それは修行の!?!」

今度は『非常砲撃フロント』が現れるが、

「ゲッ!？」

そこでトンでもないモノを見てしまう。

「よ………よっ………」

はやてとリインとゆらと真之介がボロボロで、ネウロだけが済ました顔で笑っていた。

それも、無傷で。

「し………真之介、大丈夫か？」

一護が尋ねるが、真之介が滝のような涙を流しながら答えた。

「大丈夫じゃねえよ！ はやてとゆらなら勝てると思ったのに、閃可が連れて来たヤツがネウロだぞ！ もう勝てる要素がなくなったわ!!!」

更に叫んだのであった。

そしてリビングに着くと、京子達が食事の用意をしていた。

「うおおー！ー！ー！ー！ 美味そうじゃねえか！ー！」

銀時と恋次がそう言って料理に手を出そうとするが、

「ダメ！ まだなのはママと浮竹さんが来てないよ！ー！」

「あと、とうま達もなんだよ！ー！」

そう言ってヴィヴィオとインデックスが叫ぶと、二人は食事に手を出せなかった。

「ふん、子供に注意されるとは、まだまだ子供だな」

「「何い！？」「」

皮肉タツプリの台詞にキレ銀時と恋次は、すぐさま振り返ると、

「誰だ!？」

二人の青年がいた。

「時空管理局提督のクロノ・ハラオンだ」

「無碍書庫の司書長、ユーノ・スクライアです」

黒髪の青年・クロノと金髪の青年・ユーノが名を名乗った。

「な!？」

「何だ？」

銀時がクロノの声を聞いた瞬間、大声で叫んだ。

「俺と同じ声エエエエエエエ!？」

声色が自分と同じである事に気付いたのだった。

「冗談じゃねえ! こんな空気の読めなさそうなヤツと同じ声だと
!?!」

「誰がKYだ!」

そう言っつて二人は喧嘩になるが、

修行の後でもあるだろうか、なのはは制服が少し汚れていて、髪の毛の焦げている部分があった。

「にやはははは………浮竹さんにごつてり鍛えられちゃって………スバル達の気持ちがあつてきたかも」

「いやあ、俺も少しやりすぎたかなあ？　ハハハハ………」

そう言つて笑う浮竹を見た一同は、少し引き気味であつた。

なお、ネウロはドS顔であつたが。

「何じゃい、もう来おつたのか」

そう言つてぬらりひょんと牛鬼、そして山本元柳斎が入ってきた。

「総大将！」

「牛鬼様！？」

「総隊長！？」

組織のトップが現れたことに驚く奴良組メンバーと死神メンバー。

「何固くなつとんじゃ、飯の時間じゃろうが」

すると、今度は上条と翔太郎とフィリップと土が戻ってきた。

上条は全身がボロボロで、全員が驚愕する程であつた。

「か、上条さん、大丈夫なんですか!？」

「ああ。こんな傷、大した事ねえよ」

ツナの質問に、上条は笑いながらそう言った。

「ハア、何が大した事はないだ？ 自分から怪我するよつなことしやがって、コツチは心臓がバクバクしちまったぜ」

「でも、彼の行動力には実に興味をそそらるよ」

「俺は観ていただけだったどな」

翔太郎、フィリップ、士の順でそう言った。

「そついや、リクオは?」

一護が確認すると、ぬらりひょんが答えた。

「リクオは修行が長引くそうじゃから、昼飯は後にするみたいじゃ」

「んじゃ、飯にするか」

「」「頂きまあ~~~~~す」「」

真之介が言った後、全員が食事を始めた。

インデックスとスバルなどが、カレーやサラダを平らげるが、

「すみませえくん、おかわり！」

桂木弥子の食欲に驚きを隠せなかった。

神楽やインデックスの食べている量の倍も食べていたのであった。

「す、スバルより凄い……」

「どんな圧縮力であんな量が……」

神楽やスバル以上の食欲に、驚きを隠せないティアナと新八。

また、銀時がクロノとチキンの取り合いになると、

「いい加減にしやがれえ！」

「「んが！」」

痺れを切らした鳩に殴られたのであった。

なのはに至っては、ユーノが隣に座ってるため、少し嬉しそうであった。

すると、幽助があることを思い出す。

「そっぴゃ、『独立フロント』はどうなったんだ？」

「確かにそうだな……真之介、飛影達の相手って誰だよ？」

桑原の問いに、真之介はサラッと答えた。

「更木剣八だ」

それを聞いた死神メンバーは、ブーと嘖き出す者いれば、咽てしまふものがいた。

「おま 剣八を呼んだのかよ！ 何考えてるんだ！！」

怒鳴る一護を観て、神裂は何気に聞いてしまふ。

「あの、黒崎一護。 その剣八という方は、どんな人物なんですか？」

「人っていうか、死神だ！ しかも護廷十三隊十一番隊隊長で、尸魂界最凶の戦闘狂！ 戦うためなら死も苦痛も愉しむっていうバケモンだぞ！ 俺が前に戦ったときは、斬月の刃を肉に食い込ませて……血はおるか傷一つ入らなかつたんだぞ。 そんな相手と戦ったら、間違いないくアイツ等が死ぬぞ！！」

その言葉を聞いた一護は、食べることをやめて身体中から寒気を感じた。

「そ・・・そんな・・・!?じゃあ、雲雀さん達が危ないじゃないですか!」

「だからそう言っただよ!」

ツナの言葉に一護が即答で答えた。

一護は必死に真之介に向って今すぐ戦いをやめさせると説得するが、聞き入れてもらえない。

それどころか、真之介は逆にこう言い返してきた。

「お前だっけ知ってるはずだぜ。戦場踏み入った剣八は最早、生肉を放られた”ケダモノ”だぞ。割って入れば諸共に喰われて死ぬ。ケダモノに喰われて死ぬなんて、如何にもバカらしいじゃねえか。」

「だ・・・だけど!」

「それに、アイツ等も剣八と戦ったぐらいじゃ死なねえよ。何の確証もないが、ここで死ぬような男じゃないと思ってる。剣八もアイツ等との戦いを存分に愉しめるはずだ。あいつらのことだ、飯食うのも忘れて夢中で戦い続けるぜ、きつと。」

「あ、あのなあ」

その台詞に若干青ざめる一護であるが、

「フザケンじゃねえぞ！」

突如幽助が怒鳴った。

「幽助……………」

今の自分と同じ気持ちなんだろうと思った一護であるが、

「ふざけんなよ……………飛影のヤツ……………そんな……………そんな強えヤツと戦ってんのか！ 羨ましいじゃねえか！！」

「そつちかぁ……………い！」

剣八の話を聞いてバトルマニアが復活した幽助に、ずっこけてしま

う。

「何で羨ましいんだよ！」

「だって、尸魂界最凶の戦闘狂なんだろ！ ぶっちゃけ戦いたいし……………」

ヤル気満々の幽助に、全員が青ざめてしまう。

「確かに……………尸魂界最凶というのは、この目で視てみたいですね」

「確かにな」

蔵馬と桑原の台詞に、さらに驚いてしまう。

「オメエ等には、怖いものが無えのかよ」

本気でそう思った一護であった。

こうして、一同は食事を続けたのであった。

「教えて！ 銀八先生」

銀八

「はい……というワケで、久々のお便りを読みたいと思います。ペンネーム『鳴神ソラ』さんのキャラクターからの質問です。」

ツッコミメンバー

「(ドSがきよったあああああ！)」

マリオ

「さらに激しくなりそうだな……」

ネス

「質問『ウチの仮面ライダーカリバーについてどう思う?』」

リュカ

「（ウチ関連……）質問です『ツッコミのメンバーで誰が一番苦労してますか?』」

スネーク

「作者に質問だ『ドストリオを書いている全ての小説で誕生させるのは好きだからか?』」

一護

「じゃあ、俺が代表で答えるけど……カリバーは、やっぱり速いかな?」

士

「投げやりすぎだろ。良いか? カリバーは剣技とスピードを活かして敵を翻弄させる。どう見たって中々良い戦い方だぜ」

銀八

「はい、流石は仮面ライダー。 尊とは違って言い解説です」

一護

「尊じゃねえ、一護だ!」

銀八

「はい、次の質問の答えですが、答えは新八です。 他のツッコミ

ネウロ

「ほう、こついつ手もあったか」

弥子

「（ヤル気だ！）」

↳質問3の答え↳

御坂

「いやあああああああああ！！」

銀八

「はい、最後は『支配者』さんのキャラからの質問です」

今回はネウロが出て来ましたね。

神楽「ドSはあのクソがきだけで十分なのにアル」

まあ、言いや質問れす。

沖田さんへ

ネウロと一緒に土方を抹殺したいですか？（黒笑）

皆さんへ

屁怒紹ティラノを送り込みました。

貴方達を殺すのが目的です

戦って見て下さいな。（黒笑）

沖田

「無論、魔人の旦那でよければ」

ネウロ

「フハハハハハ、構わんぞ沖田よ」

番外固体

「ミサカも手伝うぜ」

土方

「ふざけるなアアアアアアアアア（怒）！！」

屁怒紹テイラノ

「グオオオオオオオオオオオオオオ！」

ネウロ& amp ;沖田& amp ;番外固体

「早く逃げんと死ぬぞ」

弥子& amp ;新八

「普通に飼いならしてるウウウウウウウウウ！！」

全員

「ギヤアアアアアアアアアアアア」

銀八

「は……はい、というワケで次回も見てくださいね」

第四十六話：ランチタイム（後書き）

次回もお楽しみに！

第四十七話：心の葛藤と一護のボイコット（前書き）

独立防衛フロントに、あの男が！！

第四十七話：心の葛藤と一護のボイコット

食事の最中、京子が何気にツナの傷だらけな顔を見て心配そうな顔で尋ねた。

「ツナ君・・・・・・・・顔・・・・・・・・大丈夫？」

「えっ！？ああ・・・・・・・・大したことないから！全然大丈夫だから、ボントー！」

「本当にそう・・・・・・・・修行でまた無茶ばかりしてない？」

「う・・・・・・・・うん！大丈夫だよ・・・・・・・・一護さん、厳しいけど無茶はさせてないよ、ねえ・・・・・・・・一護さん！！！」

「あ・・・・・・・・ああ。そうだな・・・・・・・・（まったく、急にこっちに振るなよ。それに、お前・・・・・・・・嘘つくの下手だな。俺は確かに扱き方は酷いが、無茶はなるべくさせないようにしてる。だが、ツナは進んで無茶しやがる。こんなにボロボロになっちまうのも、半分以上はお前の無茶のせいなんだぜ。）」

「そう・・・・・・・・・・・・・・・・」

京子はツナに言いくるめられて悲しそうな顔をしたまま、食事を取った。

隣に座っていたハルも同じだった。

一護となのはそんな二人の様子に敏感に察知していた。

リボンも、その様子に気付きながら黙って食事を続けた。

心の葛藤と一護のボイコット

午後の訓練も終わり夜も徐々に深まっていったその日、ツナは邸内の風呂から上がり獄寺たちに今日の修行の成果を聞いていた。

「どう？そっちのほうは・・・上手くいつてる!？」

「おお! こっちは早くも茶渡殿と青田坊殿が技の開発に取り掛かってるところだ。俺もスバルと合体技が出来るところだぞ!！」

「俺も、神裂さんとシグナムさんとの合体技が出来たところだ」

「俺もエリオ氏の技と協力することで、今迄以上の力を持った電撃角が出来上がりましたよ」

「へえ〜〜三人とも凄いや! もうそこまで。ああ、そう言えば獄寺君のほうは?」

ツナがそう言うと、獄寺は何もいえないらしく口を籠もらせ沈黙した。

ツナもそれを見て、ああ上手くいつてないんだと理解した。

すると、今度は了平がツナに修行の成果を聞いた。

「沢田はどうなのだ、一護殿との修行は?虚化維持は上手くいつておるのか?」

「いいえ。俺が思ってた以上に虚化の維持って難しくて……まだたった4、5秒ぐらいしかもたないんです。それに引き換え一護さんは自由に仮面を着けたり外したりして、完璧に虚化を使いこなしてる。今日一日の修行で身体中が悲鳴を上げて、今もかなり痛いんで

すよ
「よ

「あのオレンジ頭!!十代目にこんなになるまでやらせやがって!!
!!いつかぶっ飛ばしてやる!!」

「そ、それは止めようよ獄寺君!!」

初日はこんな感じで終わった。

脱衣所から出た直後、ツナ達の下に京子とハルが神妙な顔つきを
してやって来た。

「あの・・・突然なんですけど・・・」

「話があるんだけど・・・」

ツナはすぐにその声に反応して後を振り返った。

「京子ちゃん!ハルも!!」

「おう、京子。」

「よう、お疲れ！」

了平と山本がそう言っても、二人は顔色一つ変えない。

そんな二人を見てツナ達は心配になって来た。

「ど、どうしたの？何かあったの？……えーと、俺達……何かしたかな！？」

「俺は……何もしておらんぞ！」

「誓って俺も、奥方達には何もしておりません……十代目！」

「お……俺だって！」

「俺もですよ！」

男性陣は、必死で何もしていないと釈明をする。

すると、ハルが黙っていた口を開きツナ達に語りだした。

「誤魔化しても仕方ないので、単刀直入に言います。」

「えっ？う……うん……」

ツナ達がハルのいうことに耳を傾けると、暫くの沈黙の後ハルは真剣な様子でこう言った。

「ハル達にも・・・ツナさんの虚化のことや、修行の様子を・・・もっと詳しく見せてほしいんです。」

ハルの発言を聞いたツナ達全員は言葉を失った。

暫くの沈黙が流れた後、ツナが慌てた様子で喋りだした。

「ちょ・・・な、なななな・・・何言ってるの!?!」

「アホ女!! てめえ自分が何を言ってるのか分かってるのか!?!」
獄寺がそう怒鳴りつけると、京子とハルは拳を強く握り締めて、ハルがそんな獄寺にこう言った。

「これはハルからのお願いなんです! ツナさんの様子が心配で、修行の様子を見たいって言ってきたのは・・・京子ちゃんのほうなんです!」

「えっ!?! 京子ちゃんが!?!」

ツナが意外なことを聞いて驚いていると、そんなツナに向かって京子が心配そうな眼差しと声色で話しかけてきた。

「ツナ君…私…ツナ君が、そんなになつてまで傷つくツナ君をこれ以上見たくないの！虚化とか…よく分かんないけど、でも…ツナ君の傍で修行の様子を見れば、きっとツナ君と同じ傷みを分かち合えると思うの。私達は直接戦うことは出来ないけど…痛みを共有することは出来ると思うの！私達も…一緒に戦いたいの！」

「京子…ちゃん…」

「京子……」

「奥方……」

ツナと了平と獄寺は、明らかにいつものと違っていて、覚悟のある目をした京子に衝撃を受けた。

ツナは心の中でそんな京子の言葉に対する葛藤が生まれた。

「（京子ちゃんがそんなこと……でも……でも駄目だ。京子ち

やん達を危険なところに巻き込んだじゃ。ボンゴレのことを教えたことだけでも遣る瀬無いのに、まして虚化のことなんか知らなくていいんだ。」

ツナは心の葛藤の末、京子に向って重苦しい表情をなるべく避け、精一杯の誤魔化しで京子に返事をした。

「気持ち嬉しいけど・・・ホントに危険なんだ。もし、俺の修行を見て京子ちゃん達がそれこそ大怪我とかしたら俺は嫌だし、何よりも知らなくてもいいことなんだよ、今回のことは。もう、ボンゴレのことだけでも知ってもらってるのにこれ以上危険な目に合わすのは耐えられないよ。だから・・・俺を信じて、もう少し・・・我慢してくれないかな？」

ツナの言葉を聞いた京子の表情は、一気に曇り始め、悲しみの表情一色となった。

ハルも京子と同じ気持ちになった。

獄寺も了平もツナの後に続けて二人に説得を促した。

だが、ハルは諦めずに交渉し続けた。

「けど！！京子ちゃんはこんなにツナさんのこと心配してるんです！！少しは京子ちゃんの気持ちも考えて！！」

「・・・いいよ、ハルちゃん。」

すると、そんなハルを見かねた京子が顔を地面に向けたまま辛い気持ちを抑えてそう言った。

「え？・・・京子ちゃん・・・」

「本当に・・・もういいの・・・ありがとう、ハルちゃん・・・
・・・ごめんねツナ君・・・突然変なこと言っちゃって・・・私
達・・・もう寝るね・・・お休み・・・

・！
」

京子は精一杯の作り笑顔でツナにそう言うと、ハルをつれて部屋へ戻って行った。

ツナはそんな今日を心配そうな眼差しで黙ってみることにしか出来なかった。

獄寺たちも同じだった。

そんなツナ達の様子を、ずっと影で聞いていた一護は腕を組んだまま
ま思い表情で深く考え込んだ。

その日の夜遅く、一護はふと京子の自室まで訪れドアをノックしようとした。

すると、ドアの向こう側から京子のすすり泣く声が聞こえてきたのを一護ははつきりと聞いた。

「黒崎一護、何やってるんだい？」

そんな一護を翔太郎とフィリップ、そしてなのはが尋ねた。

「お前等……」

「随分と難しそうな顔してるね。何かあったのかい？」

フィリップの言葉を聞いた一護は、

「丁度良い。ちょっと顔貸してくれるか？」

「うん、良いけど」

「構わないよ」

「同じく」

そして四人はリビングに向かい、一護は先程までの出来事を話した。

「……つー訳なんだ……」

「うん……そう……京子ちゃんがそんなことを……」

「……俺……あの時の京子の気持ちを含んでやりたいけど……あいつがそれを許そうとしねえ……こう言う場合、一体どうすればいいと思う？ツナは……まだ分かつちやいなんだ。『守る』っていう意味を本当のところまで」

「……そうだな……京子ちゃんの覚悟は本物だと思うな。綱吉君と同じ痛みを共有したいって気持ちも嘘じゃないと思う。一護君の言う通り、綱吉君は少し傲慢かな」

一護となのはがそう言うと、翔太郎とフィリップがこう言い出した。

「全くだ。アイツのやってることは、自分の身勝手な判断で周りを傷つけてる」

「しかも、最も心配してくれてる人を泣かしてしまった。許されない『罪』だよ」

『罪』という言葉に少し引っ掛かった一護は、すぐさま訂正しようとした。

「いや、いくら何でも『罪』は言いすぎじゃねえのか？」

しかし、翔太郎はこう言いだす。

「お前等にとつちや、言いすぎかもしれない。でも、俺達にとつちや『罪』であることに変わりはない」

「どつして……そこまで？」

なのはの問いに、翔太郎は暗い顔で答えた。

「俺は嘗て……師匠を目の前で殺された」

「！？」

驚きを隠せない一護となのはは、声が出なかった。

「俺の勝手な判断が、あの人を死なせた。だから俺は、その罪を背負わなければならねえんだ」

するとフィリップは、翔太郎の肩に手を置きながらこう言った。

「翔太郎……その事に関しては、僕も同罪だ。僕も自分の罪を背負っているんだ。キミばかりに背負わさないよ」

「そうだな……悪い二人とも、辛気臭い話になっちまって」

そう言って翔太郎とフィリップは、その場を立ち去った。

二人の背中を見た一護は、ある決断をした。

翌日、二日目の修行の開始時刻になった。

一護はツナをつれて昨日と同じように修行場に来た。

ツナは早速ハイパー化をして、準備を整えていた。

「俺はいつでも準備万端だ…一護。早速虚化の訓練を始めよう……」
だが、一護はツナがそう言っているにも関わらず、ツナに背中を向けたまま何も喋らずにいた。

不審に思ったツナは一護に大きい声で呼びかけた。

「おい、一護！！聞いているのか！？」

ツナがそう言うと、一護はゆっくりと振り返った。

そして、暫くの沈黙の後ツナにこう言った。

「……………悪りーな、ツナ。」今”のお前に修行をさせる意味はねえ
…やるなら一人でやれ。俺は知らねえ」

一護の言葉を聞いたツナは驚きを隠しきれないでいた。

そして、ハイパー化を解いて慌てて一護に問いただした。

「ちょ… なななな何言ってるんですか、一護さん！？修行をしないって… 一体どういうことですか！？虚化の保持訓練は一護さんがいないと話にならないんですよ！！」って、一護さん聞いてるんですか！？どうしてなんですか！？応えてくださいよ！？」

ツナは何も言わずに横を通り過ぎる一護に必死で呼びかけようとするが、一護はそれを無視して通り過ぎようとする。

そして、ツナとある程度の距離をとった時、一護は背中を向けたままツナにこう言った。

「…自分の胸に聞いてみりゃいい…」守る』ってというのがどういう意味なのかを…」

「え？『守る』…！？」

一護はそれだけを言うと、ツナの下を去っていった。

ツナは一護を追う事もなく、ただ頭の中で一護が修行をしないと云ったのか、そして去り際の言葉の意味を考えていた。

「（…どうしてなんだ！？どうして一護さんは…突然修行をしないって言ったんだ。俺…何か変なことでも言ったのかな！？それとも別の何かか！？それに、最後のほうで一護さんが言ったあの言葉…あれは一体どういう意味なんだ！？『守る』ってというのがどういう意味か…訳わかんないよ！！）」

ツナは一護の行動と言葉の意味が全く理解できずに、その場にしゃがみこんで両手で頭を抱えて困惑した。

その後、一護はリビングにいる京子を発見した。

「京子、ちょっと話があるんだ。俺と一緒に来てくれないか？」

「えっ？私に……ですか……！？」

「ああ。済まねえが……ハルとヴィヴィオはここで待っていてくれないか。こいつは、俺達二人で話したいんだ。」

真剣な眼差しで一護がそう言うと、ハルもヴィヴィオをも快く了承してくれた。

「サンキューな、二人とも！！そんじゃ、京子……付いてきてくれ。」

「あつ、はい！じゃあ、ハルちゃんにヴィヴィオちゃん……お皿洗いよろしくね！」

「はい！任せて下さい、京子ちゃん！」

「いつてらっしやい、京子さん」

ハルとヴィヴィオは京子に元気よくそう言つと、一護に京子を任せ
てた。

一護は京子のある場所まで連れて行き、歩きながら昨日のことを話
し始めた。

「昨日の夜……たまたまお前とツナの会話を聞いちゃったんだ……」

「え！？……ああ……はい……」

「ツナも冷たい奴だよな。まっ、あいつの気持ちも分からない訳じ
やないけどな……なあ、京子。虚化のことを知りたがっていたよな
？」

「えっ！！」

京子は一護の意外な一言に耳を疑ってしまった。

「俺で良ければ……全部教えてやるぜ……勿論、今のあいつの
状況も全て……」

「で……でもそれじゃあツナ君に……！！！」

「いいんだ……そうじゃないと意味が無いんだよ……この作戦を実
行した意味がな……」

「え？作戦……！？」

京子は訳の分からないまま一護の後についていき、そして目的の場所まで到着した。

そこは、意外なところだった。

理由も良く知らぬまま一護に連れて行かれる京子。

そして、徐に一護が足を止めた。

京子が改めてその場所をよく見渡してみると、そこはツナが修行をしている場所だった。

「聞こって………ツナ君が修行してる………」

「ああ。京子……あれ、見てみるよ………」

一護が京子にそう言って前方のほうへ指を指すと、20メートルぐらい先の岩場で一人虚化の修行を続けるツナの姿が見えた。

ナッツも一緒になって修行をしていた。

「ツナ君！！ナッツ君まで！！」

その光景に京子は驚いた。その時、京子の目に衝撃的なものが入ってきた。

ハイパー化したツナが右手を顔に近づけると、白と黒の入り交じった虚の仮面が現れそれを顔につけたのだった。

その姿を見た京子は一瞬身体中が恐怖で凍りついてしまった。

そして、暫く見た後・・・思わずツナの名前を言った。

「・・・・・・・・ツナ君・・・・・・・・？・・・・・・・・あれは本当に・・・・・・・・ツナ君なの・・・・・・・・？」

そんな京子を気かけながら、一護は隣で黙った様子でツナの様子を見ていた。

すると、つけた仮面がすぐに砕かれてしまい、激しい勢いで岩場に叩きつけられてしまった。京子はそれを見て居た堪れなくなった。

「ツナ君！！！」

そして、急いでツナのもとまで走っていきこうとすると、一護は京子の腕をつかみそれを止めようとした。

「放して下さい、一護さん!!!! ツナ君が・・・ ツナ君が!!!!」

「今ここでお前が行った所で・・・この問題は解決しねえんだ・・・お前にとっても、ツナにとっても・・・」

「えっ!?!」

京子はそう言われると、一度走ることをやめて一護の指示に従うことにした。

二人は、再び目の前のツナの様子を見てみた。すると、満身創痍になりながらもナッツと共に身体のことを省みず再び虚化をするツナが目映った。

「ツナ君・・・どうして・・・あんなになってまで・・・無茶しないでって言ったのに・・・なんで!?!」

すると、ツナの姿を見て心の底から心配している京子に対して、一護は真剣な様子で語りかけてきた。

「・・・あいつは・・・自分が傷つこうが関係ないんだ。大切な人を守りたいという一身で奴は平気で無茶をする。つくづく俺と似てるんだ・・・あいつは・・・」

「え?一護さんと・・・ツナ君が・・・ですか!?!」

「ああ。あいつは俺と同じように、大切な人が傷つくことを...守れなかったときの事を恐れているんだ。だから強くなるうとする。敗北をしないために、守り抜くために。」

「守り抜く……ために……」

「特に、あいつにとってお前が一番守りたい人なんだ。だから、お前が傷つくことが一番あいつにとっては嫌なんだ。自分のことの為に、お前をまきこき込んで怪我とかさしたくないんだ。」

「ツナ君が……そんなに私のことを……」

そう言われると、京子はまたツナの修行の様子を黙って見つめていた。

自分の目の前でいくら傷つこうが決してやめることなく修行を続けるツナを見ているうち、京子の手を握る力が強くなる。

すると、また一護が京子に語りかける。

「でもよ……この頃になって俺も漸く分かったんだ。本当に強い奴ってというのは……単純に人を傷つけないように守り抜ける人じゃないってことにな。」

「え！？単純に……？」

「つまりだ……俺が思うに、『守る』っていう本当の意味は……”人を悲しませない”ってことじゃねえかって」

「人を……悲しませない……!？」

「今のあいつは、虚化とかよく分からないことに直面して気が動転してる。そして、自分でも訳分からないことにお前を巻き込んでし

まうことがどれだけあいつにとって嫌なのか。だから、お前がいくら言っても自分の気持ちだけを押し通してお前を守り抜こうとするんだ。けどよ、あいつはお前を悲しませている時点で……『守る』ってことを履き違えてる。俺はあいつにそれを分かってほしくて、態と修行をしないって言ったんだ。」

京子は一護の話を真剣な様子で聞いた後、昨日のことをもう一度振り返ってみた。

あの時の自分とそれに対するツナの応答。

それをよく思い出してみると、京子の瞳には自然と涙が溜まっていた。

「……ツナ君……」

一護と京子はツナのそんな様子を暫く見た後、気付かれないようにそつとその場を後にした。

京子は自分のことをどんなに大切に思っているのか、その為に自分が傷ついて構わないというツナの気持ちを改めて知って、歩きながら涙を昨日の夜よりも多く流していた。

そんな京子に、一護はそつと肩に手を置いたのだった。

「教えて、銀八先生」

銀八

「はい、今日も素敵なお便りを読み上げたいと思います。ペンネーム『支配者』さんからの質問です」

質問です。

リリカルキャラ以外の皆さんへ

貴方達が管理局の闇を知ったら如何思いますか？

クロノ

「な！？ 管理局が！ そんなバカなことを！！」

ネウロ

「ふん、お笑いだな。 そんな事でよく提督などやっているな」

クロノ

「何だと！ 管理局に無知なキミに何が分かる！！」

ネウロ

「フハハハハハ……無知でスマン。 管理局に付いて説明せんと、

貴様の頭を潰すぞ?」

愉快に笑いながら、クロノの頭を本当に潰せそうな握力で握るネウロ。

クロノ

「ギヤアアアアアアアアアアアア!」

ドストリオへ

ドスのカーチャを如何思いますか?

ネウロ

「フム、中々素質があるな」

沖田

「いや、全くですね」

番外固体

「ミサカも同感」

女性キャラの皆さんへ

貴方達の服を溶かしてスッポンポンにする珍獣「イロガーマ」を送り込みました。一人残らずスッポンポンになって下さい。(黒笑)

女性陣

「ふざけるなアアアアアアアアアア!」

銀八

「はい、というわけで『支配者』さん。ドストリオの相手をしな
がら廊下に立ってなさい」

第四十八話：一護と幽助の見学〜バトルマニアVSバトルマニア〜（前書き）

一護と幽助が、修行を見に行きます。

第四十八話：一護と幽助の見学〜バトルマニアVSバトルマニア〜

ツナに『守る』という事の本当の意味を分からせるまで、一護は暫らくのボイコットを行った。

すると、一緒に歩いていた幽助が問いだす。

「良いのかよ、あれで？」

「ああ……アレしか方法は無かったからな」

その後、急に何かを思い出したのか、幽助がこう言い出した。

「そっだ、どうせなら他の奴等の修行でも見に行ねえか？」

「は？」

こうして、一護と幽助の修行見学が始まったのであった。

「護と幽助の見学〜バトルマニアVSバトルマニア〜」

「まずは此処だな」

そう言つて二人は、『近距離遠距離フロント』の修行を見に来ていた。

「ハッ！」

「オラア！」

そこでは、神裂と山本の模擬戦を他のメンバーが見学していたところであった。

「おー、やってるやってる」

「す、スゲエな……」

「護と幽助がコッソリ見ようとするが、」

「何やってるんだい黒崎？」

石田に気付かれてしまう。

「ゲツ！ 何で分かった！？」

驚く一護であるが、桑原が呆れながら答えた。

「そんなバカ高い霊力、感知能力が低いヤツでも分かりやすいぞ？
オメエ、今まで霊力のコントロールが全然出来てねえって口だろ
？」

「うー！」

流石にこの一言で、一護も何も言えなかった。

「というか、さっき浦飯君の気配も感じたけど……彼は今何処に
」

そう言って辺りを見渡す石田であるが、

「石田、後ろだ」

「へ？」

「よう」

桑原の一言に振り返ると、そこには幽助がいた。

「ウオツ！？」

これには石田も驚きを隠せなかった。

「い、何時の間に!？」

「オメエが一護と話してる時からだよ」

「(あ……あの状況で気配を消して、後ろに回りこんだのか!？
油断も隙も無い)」

気配まで消せる幽助に、石田は驚きを隠せなかった。

「んでよ、どうんな状況だ？」

「あ、ああ……山本君と神裂さんの模擬戦を見ているところなんだ」

「てか……沢田の修行は良いのか？」

桑原の問いに、一護は答えた。

「ああ、アイツには『課題』を出したからな」

すると、二人を見たシグナムはニヤリと笑いながら近づいてきた。

「ということは、今のお前たちはフリーということか？」

「あ、ああ……そうなるな」

「だったら、次の模擬戦で私と戦わないか？」

「え……」

シグナムの申し出に、一護は戸惑ってしまつが、

「マジで!? やるやるうー！ー！ー！！！」

幽助は嬉しそうに答えた。

「……………だと思った」

それを見た桑原は、幽助の性格ならそうなるだろうと呆れてしまった。

神裂と山本の模擬戦が終わった後、幽助とシグナムが位置に着いた。

「フフフフ……感謝するぞ浦飯。貴様とは一度でも良いから戦ってみたいと思つていたんだ」

「そりゃ、お互い様だ。俺もアンタみたいなヤツと喧嘩できるから、ワクワクしてきたぜ」

嬉しそうに笑うシグナムと幽助。

「止めなくても良いんでしょうか？」

五和が引き気味になりながら答えるが、

「今の二人を止める自信はあるのか？ 言っとくが、俺は巻き込まれて死ぬのは嫌だぜ？」

桑原がそう言うと、全員が青ざめてしまう。

そんな彼等を他所に、二人の勝負が始まった。

「行くぜ！」

最初に動いたのは幽助であるが、

「は、速い！」

「俺とバトった時よりも速い！」

石田は幽助の速さに驚き、一護は自分と模擬戦をした時より速くなっていた事に驚く。

そして、そのまま幽助もパンチがシグナムの顔を命中した。

相当な威力だったのか、シグナムは6mと吹き飛ばしてしまう。

「あれ、決まった？」

これには少し驚く幽助。

「ふ……普通のパンチであの威力！？ ありえねえ……………」

模擬戦で幽助のパンチを受けた事がある一護は、顔を引きつってしまっ
まう。

「桑原さんがヴィータ副隊長の攻撃を喰らって平然としていたこと
が、何となく分かってきました」

キヤロは苦笑しながら桑原がヴィータとの模擬戦で、彼女の攻撃を
受けて立っていられた根源を目にしまった。

「まさか……一発KOじゃないよね？」

石田も恐る恐るそう言っが、

「ふざけんなコラア！ 早く起きんか！！ じゃねえーと、永遠の

眠りにつかずぞー!!」

「「「「（鬼だあああああああ!!）」」」」

幽助の鬼のような発言に、全員が心の中で叫んだ。

すると、シグナムはゆっくりと立ち上がり、

「フツ、貴様と戦っているとペースが乱れてしまうな……………」

そう言っつてレヴェンティンを構えた。

「相手の攻撃を真っ向から受けてみたいと思ったことは、初めての経験だよ」

「だろお？ そのうちに病み付きになるぜ？」

「フフフフ……………冗談に聞こえないのが怖いかな」

そしてシグナムは、真っ向から飛び込み、レヴェンティンを振り下ろした。

「!!!」

幽助はすぐさま避けるが、シグナムはそこに蹴りを仕掛ける。

無論、ガードをされてしまったが、二人は楽しそうに笑っていた。

「ハアアアアアアアア!!」

「うおおおおおおおおおお！！」

二人のバトルマニアの戦いは、かなりの時間を費やしていく。

「……………やっぱり、止めるべきだったか？」

「そんなことしたら、間違いなく殺されるぞ。俺は嫌だぜ」

一護の言葉に、桑原が青ざめながら答えると、

「僕も桑原君に同意」

「私もです」

「同じく」

「俺もっス」

「……………以下同意」

石田、神裂、キャロ、山本、その他のメンバーも同じ意見であった。

「……………だよな」

流石に一護も、同じ意見であった。

「教えて、銀八先生」

銀八

「はい、今日も沢山のお便りが届いております。ペンネーム『鳴神ソラ』さんのキャラクターからの質問です」

スネーク

「…誰が巻き込まれるんだろうな…ドSトリオに…」

フォックス

「敵もそうだが…味方もいるだろうな…」

ネス

「だね…質問です『仮面ライダーカリバーと戦って見たい人はい

「ますか?」

リュカ

「質問です『バトルジャンキーの人は何人ぐらいいますか?』」

ルイージ

「新八君へ『もうこの人は疲れると言うツツコミ所ありまくりな人
はいますか?』…後、ガンバ!」

銀八

「はい、まずは最初の質問の答えから」

シグナム

「無論、私は構わないぞ! というか、私をゲストに出してくれ!
!」

幽助

「俺もだ!」

剣八

「ハハハハハハ! 面白えぜ!」

銀八

「……怖いですね。 続いてはリュカの質問の答えですが……」

一護

「え〜と……幽助だろ……剣八だろ……シグナムだろ……恋次、
角、弓親、あと雲雀だろ……結構いるじゃねえか!」

銀八

「おいおい、厄介じゃねえか！ 次に任天堂キャラクターの地味キャラにしてコンプレックスの塊で永遠の2番手・ルイージからの質問の答え！」

新八

「言い過ぎだろ！ お前にルイージさんの何が分かるんだ！？ そうですね……：：：やっぱネウロさんです。正直に言つと……：：：沖田さん以上のDSだし、番外^{ミサカワースト}固体さん以上に悪巧み考えるし、たまに出る魔界トークが怖いし、やりにくいです」

銀八

「はい、流石『銀魂』一の永遠の2番手だな」

新八

「褒めてねえだろ……！」

銀八

「はい、次に『武田軍兵士 清坂 剣麻』のキャラの質問だ」

シユテル・ザ・デストラクター（大人バージョン）

「お久しぶりですナノハ……：：：つと言つてよいのはわかりませんが。私からアナタに質問が、新たな力を手に入れたアナタは、今どのような気持ちですか？ それからアナタに私が開発した特注力ートリッジ《試作型》（弾丸一発にSSSランクの魔力）一式を、アナタの娘さんにうさぎのぬいぐるみを送らせていただきます。それと最後に……：：：アナタと再びみえる日を、私は心待ちにしております」

レヴィ・ザ・スラッシャー（大人バージョン）

「見よオリジナル！ シュテるんにより新制され、さらに強く！
速く、かつこよく（？）なったボクの姿を！！ それでね、ボクが
こっちで倒した魔物の戦利品のレプリカをそっちにおくるから〜
〜！！ 見ておののけエ〜！！」

美己

「ではミサカからお姉様に質問。 フェイト・Ｔ・ハラウンを見て
いて思った事は何かありますか？ ミサカはとある部分が圧倒的
に負けてるお姉様に聞きます」

ロード・ディアーチエ（大人バージョン）

「我から小鴉・・・今は大鴉と言うべきか？ まあよい、ともかく
質問するからありがたく思え！？ 何故貴様は胸がそれほど大きく
ない！！？ おかげで我も臣下である２人より胸元が寂しくなつて
しもうたではないかッ！！ 他人の乳ばっか揉んどらんで自分の乳
もデカくしとけいこのアホ鴉！！！」

*現在のマテリアルはストライカーズの時のなのはたちの姿を元に
アップデートしております。

なのは

「ふえ！？ 何でそんなことするんですか！？ てかそれって、兵
器ですよね！？」

御坂

「 って、バカにしてんのかアアアアアアアアアアアアアア！！」

銀八

「はい、以上で終わりたいと思います。 というワケで『鳴神ソラ』
さん、シグナムと幽助と剣八をゲストにしてください」

第四十八話：一護と幽助の見学〜バトルマニアVSバトルマニア〜（後書き）

次回はパート2です。

第四十九話：一護と幽助の見学？！戦闘バカ？（前書き）

遂に超危険な戦いが！！

第四十九話：一護と幽助の見学？～戦闘バカ～

久々に楽しめた喧嘩に上機嫌の幽助と、それに呆れる一護。

「で、次は何処行く気だ？」

一護の質問に、幽助がニヤリと笑いながら答えた。

「『独立防衛フロント』」

「え!？」

それを聞いた一護は、一気に凍りついた。

一護と幽助の見学？～戦闘バカ～

「ハーハーハーハー！ 良いぞテメエ等、良い反応だ！！」

高く笑う剣八に、『独立防衛フロント』のメンバーは、生傷が絶えない状況であった。

アクセルですら、装甲の大半に亀裂が入っていた。

「い、何時見てもヤベエ……」

そんな彼の戦いぶりに、一護は青ざめてしまう。

「おおーーーーーい、お前等あーーーーー！！」

すると、幽助が突然声を上げた。

「　　っ、うおおおおおおおい！！」

これには一護も驚きを隠せなかった。

「んあ？」

すると剣八は、すぐさま二人の方へ跳び上がり、

「ウラアアアアア！」

その一撃を二人に叩き込んだ。

「ウオオオオオオオオ!!」

「おっと」

驚く一護とは浦原に、幽助は難なくかわした。

「何しやがんだ!」

「はあ? 何言ってるんだ一護。 久々に俺と戦いに来たんじゃないかねえのか?」

「んなワケねえだろうが!」

剣八の発言に、一護は断固とツッコミを入れるが、

「はいはあーい! 俺は戦いに来たぜえー!」

「コラあああああああ!」

ヤル気満々幽助に、ツッコミを入れた。

それを聞いた剣八は、ニヤリと笑った。

「ほう……お前、名前は?」

「浦飯幽助、アンタと喧嘩しに来た」

ニヤリと笑う幽助に、剣八は笑い出した。

「ハハハハハハハハ！ 面白えぜ！！」

そして、二人は戦場に立ったのであった。

「行くぜ剣八、準備は良いか？」

「何時でも良いぜ幽助、掛かって来い！」

すると幽助は、こう考えていた。

「（剣八は、護廷十三隊十一番隊隊長で尸魂界最凶の男………だつたら、小細工は必要ねえな！）」

その瞬間、幽助から膨大な妖気を解放した。

「な！？」

これを見た一護は、驚きを隠せなかった。

「アイツ、こんな力を隠し持ってたのかよ!？」

そんな幽助の妖気を肌で感じた剣八は、嬉しそうに笑った。

「良いぜ、最高だ！　こんなに研ぎ澄まされた気を感じたのは一護と戦った時以来だぜ！」

「行くぜ剣八、アンタも本気で掛かって来い！」

「良いぜ、行くぞ幽助！」

戦いを愉しむ男と戦いを楽しむ男は、全力でぶつかり合った。

「おらあ！」

剣八の刃を受けた幽助であったが、

「オラア！」

気にせずに剣八にパンチを喰らわした。

「良いぜ、最高だ！ もっと、もっと愉しませろよ幽助！！」

「アンタも期待させろよ、剣八！」

殴られ、斬られながらも笑いながら戦う二人。

「……………幽助のヤツ……………マジで楽しんでやがる。あの剣八を相手に……………」

そんな二人の様子を見ながら、一護は青ざめてしまった。

「俺達でも苦戦したあの男と……………互角に！？」

「バケモンかよ！？」

その光景を見た照井と土方も、驚きを隠せなかった。

「オラアアアアアアア！！！！」

ぶつかり合う二人に、手も足も出ないと思う一同。

因みに一方通行は、
アクセアレータ

「ハア……………ハア……………厄介にも程があるだろオガ」

そう言いながらも、消耗した電極のバッテリーの充電をしていた。しかも剣八を相手にしていたため、後20秒という危機的状況であった。

幽助の打撃と剣八の斬撃がヒットし、二人はかなりのダメージを受ける。

「へへへ。アンタのようなヤツと戦えるなんて、正直思わなかったぜ」

「ハッ、俺もお前みたいなヤツは初めてだぜ」

「んじゃ、行くぜ！」

すると幽助は、人差し指を前方に構え、

「霊丸！」

必殺の霊丸を放った。

しかし、剣八は微動だにしないどころか、

「ウラァ！」

片手のみで弾いたのだった。

「な!?!」

これには幽助も、驚きを隠せなかった。

「(だろうな……十八番の技を弾かれたんじゃ、流石に)」

一護も流石に同情しかけるが、

「スゲエ！ やっぱアンタスゲエよ剣八!!」

本人は落ち込むどころか興奮していた。

「って、何でだよオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

これには一護も叫ぶしかなかった。

戦ってから4時間後、

「ふう、なかなか面白い喧嘩だったぜ」

「ハハハハハ！ 面白えヤツだぜオメエは！」

互いに霊力と妖力が完全に半分以上に消耗するが、未だに楽しんでいた。

「でもよ、此処は一回休戦にしねえか？」

「何？」

幽助の突然の発言に、剣八は疑問を感じた。

「アンタも俺も、まだ本気を出しちゃいねえ。 どうせなら『次元の破壊者』を倒してから、もう一回戦らねえか？」

それを聞いた剣八は、再び笑い出した。

「ハハハハハハハハ！ 本当に面白えヤツだぜ！！ 良いぜ、それまで強くなれ幽助！ 絶対に死ぬんじゃないやねえぞ！！」

「当たり前だろ！ 次に戦う時は、返り討ちにしてやるからな！！」

それを見た一護は、

「もう、いい加減にしてくれ!!」

本気で泣きそうになったのであった。

〈3年Z組銀八先生〉

銀八

「はい、今日の授業は冬休みの思い出を発表して貰いたいと思います。まず発表したいヤツは手を挙げる」

なのは

「はい!」

銀八

「よし、なのは。お前の冬休みの思い出を言ってみろ!」

銀八に言われ、冬休みの思い出を話すのは。

なのは

「私の冬休みの思い出は、クリスマスにユーノ君とデートしたことです!」

銀八

「おおーい。大声でそんな事自慢しないでくんない? 彼女がいない銀さんは泣くよ?」

なのは

「そ……それでその夜の……ユーノ君と大人の階段を登りましたノノノノ」

ユーノ

「ノノノノ」

生徒一同

「え!?!」

それを聞いた全員は、まさかと思った。

銀八

「あの……もしやソレって……」

なのは

「はい……S Xですノノノノ」

銀八

〈復活版・突撃！ 隣の愉快犯〉

『突撃！ 隣の愉快犯』とは、『魔人探偵脳噛ネウロ』の原作コミックのオマケページで、弥子が主要人物達の取材をするコーナーである。

この小説で、遂に復活を遂げたのである。

第一話・黒崎一護in脳噛ネウロ

一護

「 って最初がアンタかよ!! 」

ネウロ

「 文句あるのか? 」

一護

「 いえ、何でもないです(汗) 」

ドS顔で睨むネウロを見て、逆らえない一護であった。

寧ろ、逆らったら殺されると悟った。

一護

「ところで、聞いて良いか？」

ネウロ

「何だ？」

一護

「アンタ、いつも土足だけど全然床が汚れてねえよな？」

ネウロの靴を見て不思議に思った一護に、彼はサラッと答えた。

ネウロ

「フム、これは魔界特有の歩法を使っていて、靴を汚さないようにしているのだ」

一護

「ホントかよ？」

ネウロ

「だったら舐めて見るか？」

説明を聞いて疑う一護にネウロが問うが、

一護

「冗談言うなよ。　じゃあな」

一護はその場を立ち去ろうとする。

しかし、ネウロは一瞬で彼の手足を手錠で拘束した後、

一護

「んが！」

思いつきり地面に倒した後、いかにも地位の高い人が座りそうな椅子に座って靴を彼の顔に近づけた。

一護

「（あれ？ まさかマジで舐めさせる気満々！？）」

ドSオーラを放つネウロと、青ざめながら精神的に追い込まれた一護であった。

第四十九話：一護と幽助の見学？〜戦闘バカ〜（後書き）

『教えて、銀八先生』は、次回行います。

第五十話：『守る』という意味（前書き）

遂にツナが答えを出した。

第五十話：『守る』という意味

もうすぐ昼食の時間が迫ってきたが、ツナが戻ってくる気配が無く、一護は溜め息をついた。

「たく！飯の時間だっていうのにまだ修行やってんのかよ・・・しようがねえ、俺が・・・」

「待ってくれ一護君、ここはわしが呼んでくるわい。」

すると、椅子から立とうとする一護をハイゼンハウワーが呼び止め代わりに自分が行くと言い出した。

「おっ、そうか。だったらお願いするぜ！」

「ああ・・・じゃあ、ちょっと行ってくるわい。」

そう言うと、ハイゼンハウワーは机に立てた杖を取って中庭のほうまで歩いていった。

『守る』という意味

ハイゼンハウワーが外に出ると、目の前には未だに一人で虚化保持の訓練をし続けるツナがいた。

身体は満身創痍だというのに一向に止め様としないツナ。

ハイゼンハウワーは複雑な眼差しで見ると、ツナの近くにまで来て一言かけた。

「……精が出るの……綱吉君……」

すると、ツナもそれに気付きハイパー化を解いてハイゼンハウワーに答えた。

「あっ……ハイゼンハウワーさん……どうしてここに!？」

「夕飯の時間じゃよ。訓練もこの辺にして腹ごしらえをしたほうがいいと思うんじゃない？」

すると、ツナは緊張の糸が切れたのか急に腹の虫が鳴り出し赤面した。

「はははは・・・はい・・・そうします・・・」

そして、二人はゆっくりと歩きながら今日の修行の成果について話をした。

「どうじゃ、修行のほうは？」

「ええ・・・見ての通り全然駄目ですよ。一護さんも相変わらずボイコットしたままだし・・・多分、修行が一番進んでいないのは俺だと思っています。」

「しかし妙じゃの・・・何故一護君は急に君の修行をしないと行って来たのかね？」

ハイゼンハウワーは顎鬚を手でなぞりながら疑問に思った。

「俺にもさっぱりですよ・・・ただ、一護さんは俺が修行をもう一度してくださいって頼むと・・・決まってこう言っんですよ。『守る』ことの意味が本当に分かるまでは駄目だって・・・」

「『守る』・・・か。」

すると、ハイゼンハウワーは突然立ち止まりツナにこう言った。

「綱吉君・・・君はその言葉を聞いたとき、ズバリ『守る』とはどういう意味だと思った？」

「えっ！？俺・・・ですか？いや～～色々考えては見たんですけど、やっぱり”大切な人を守り抜く”ことかなって思ったんですよ。でも、それを一護さんに言ったら・・・じゃあそれはどう意味かって言われて、益々訳分かんなくなっちゃいましたね。」

「大切な人を守り抜くか・・・確かにそれも”守る”ことじゃと思ふな。だが、それを突き詰めていった先に何が本当の答えかを考えたことはあるかな？」

「え？突き詰めていった先に・・・！？」

「ああ・・・わしも嘗て同輩に同じことを言われたよ。こう見えても昔は政府の諜報機関で働いていたんだ。ある時、任務で命がけの戦いから満身創痍になりながらも無事に帰還したとき、わしの同輩と妹に物凄く叱られた。妹は泣きじゃくになりながらわしに抱きついたよ。何で無事に帰還したはずなのに、わしは叱れているんだ？そしたら同輩は言ったよ・・・お前は『守る』ことの意味を履き違えてると。そのときはわしは漸く気付いた。『守る』こととは、単純に人を危険から守りぬくことだけでなく・・・”人の笑顔を絶やさぬこと”だと。」

「人の笑顔を・・・絶やさぬこと・・・！？」

「ああ・・・つまり言い換えれば、”人を悲しませないこと”一護君はきつと君にそれを分かってほしくてあんなことを言ったんじゃないのかな？」

ハイゼンハウワーの話聞いたツナは、言われたことをもう一度
思い返しながらかこ一週間の自分を振り返ってみた。

すると、ツナは思いだした。

あの時、虚化のことや訓練の様子を見せてほしいと京子が言ってきたことを。

だが、自分はそれを自分の気持ちだけを押し通して京子を深く悲し
ませてしまっていたことを。

「（そうか・・・俺も同じか。自分の気持ちだけを押し通して、京
子ちゃんの気持ちなんて全く考えもいなかったんだ。守ることは・
・本当に守るということは、人を悲しませない。そして、常に笑顔
を絶やさないこと。俺は自分の中の下らない意地のために、京子ち
ゃんや周りの皆を悲しませてたんだ。だから一護さんはそれを俺に

分かってもらうために・・・ワザとあんなことをしたんだ・・・俺・・・最低だ！！）」

すると、ツナはその場に立ち止まりながら悔しさと京子に対する申し訳なさから涙が瀧のように流れてきた。

そんな様子を見て、アイゼンハウアーも徐にツナの肩に手を当て優しく語りかける。

「誰も人の気持ちを全て見通せるほどの心眼など持たぬ。それは君の超直感でも同じことじゃ・・・だからこそ気持ちをきちんと伝えることは大切なんじゃ。さあ・・・涙を拭いて。守ることの意味をしっかりと理解した”今”の君ならば、一護君も京子ちゃんも他の皆も分かってくれる。単純なものや言葉ほど・・・難しいものは無いんじゃ・・・」

「は・・・はい・・・（京子ちゃん・・・一護さん・・・みんな・・・ごめんね・・・俺・・・漸くわかったよ・・・本当の意味の『守る』ってことを。」）

ツナは右腕で零れる涙を脱ぎ去り、ハイゼンハウアーと共に邸内に戻っていった。

食堂に戻ってきたツナとハイゼンハウワーを見た一護と京子は、ツナの表情を見て不思議に思った。

「ツナ君・・・顔・・・どうかしたの!？」

「ああ・・・傷とかなら分かるけど・・・なんか涙の痕のようなものが残ってるんな・・・」

「ああ・・・ちよつと色々ありましたね・・・京子ちゃん、一護さん・・・後で話がるんですけどいいですか？」

一護と京子は互いに不思議に思い顔を見合ったが、暫くして二人は微笑みツナに答える。

「うん・・・分かった。」

「ああ・・・いいぜ。」

「・・・ありがとう・・・二人とも・・・」

そして昼食後、ツナは先に京子に今回のことに関して謝罪をした。

ツナの謝罪を黙って聞いた後、京子は満面の笑みを浮かべありがとう、とツナ君にそれだけを言ってツナに返事をした。

そして、一護にも漸く『守る』ことの本当の意味を伝えてみた。

すると、一護は鼻で笑いツナにこう言った。

「・・・分かってくれて嬉しいぜ・・・よーーーーーし！明日から修行再開だ！！」

「一護さん・・・はい！ありがとうございます！！」

そんな二人の様子を壁によっかかって聞いてリボンも、鼻で笑い今回の騒動がひと段落着いたのだと納得した。

なのはと翔太郎とフィリップもそれを耳にいれ、同じように喜んだそうだ。

一方のリクオはというと、

「ハア……ハア……」

「流石は我が主。 此処まで粘ってくれないと困りますから」

無邪気に笑う鬼纏姫まといひめとは違い、徐々に体力を奪われていた。

「（強い……これが本当の鬼纏姫の強さなのか！？）」

自身の斬魄刀かたなの圧倒的な強さを前に、リクオは苦戦してしまう。

「でも、まだまだ行きますよ」

刀を構え、互いに突進する二人。

それを見ていた閃可は、

「（それにしても、死神の戦いを昨日と今日で全て吸収していくなんて……この子、一護以上の素質ね）」

そう思いながらリクオの成長に驚きを隠せなかった。

その午後、真之介はなのはと浮竹、そしてユーノを修行場に呼んだ。

するとなのはと浮竹は、真之介が持っていた『転神体』を見て疑問を感じた。

「これって……『転神体』だよね？」

「どうするするつもりなんだい？」

浮竹の問いに、真之介が答えた。

「浮竹の話しじゃ、修行はちよくちよくと進んでるようだな？」

「うん……なんとか……」

「こつからは最終修行だ。コイツで具象化した斬魄刀の本体と戦って勝って、そして屈服させる」

「え!？」

真之介の説明を省略すると“『卍解』を完成させる”ということ、これにはなのはは驚きを隠せなくなる。

「待ってくれ真之介君！ 幾ら何でも『正解』を完成させるなんて、そんな簡単に言わないでくれ！！」

浮竹が講義をするが、真之介はすぐさま反論した。

「何言ってるんだ？ 奴等と戦うにはこれしか方法は無いんだ」

「そうかも知れんが……」

「なのは、お前はどうする？」

それを聞いたなのはは、少し考えた後こう言った。

「分かったよ。 真之介君、お願い！」

「決まりだな。 それじゃ、刀を転神体に刺せ」

言われたとおりになのはは、星界を転神体に刺し込んだ。

すると次の瞬間、転神体が光だし、

「久しぶり、なのは」

「あ、あなたは！？」

星界の本体が、姿を現した。

浮竹とユーノは驚くが、特にユーノは自分と同じ姿をした銀髪の人物が現れたことに驚きを隠せなかった。

「話しは聞いたか？」

「ええ」

「じゃあ、方法は任せる」

すると星界は、指でなのはの額に触れた後に二本の刀の内、一本をなのはに渡す。

「あの……星界君、これは？」

その問いに星界は答えた。

「今から僕と戦って貰う。魔法が使える回数は三回までだ」

「え！？」

「無論、それ以外は己の身体能力で戦って貰うよ」

一方で真之介は、具現化した斬魄刀の姿を保つための装置の役割を持つ紐をユーノに渡す。

「俺は閃可のような高い魔力や霊力を持ってないからな。ユーノ、コイツはお前に任せた」

それを聞いたユーノは、コクリと頷いた。

こうして、なのはの『卍解』習得が始まった。

その頃、とある別世界では…

「『次元の破壊者』様」

「やあ、来たかいブレイ？」

次元の破壊者が、ブレイと他の『十三鬼』を椅子に座らせるところ
言った。

「例の『アレ』は、見つかりましたか？」

「ああ……遂に分かったよ。場所は」

「分かりました。すぐに準備をいたします」

彼の話聞いたブレイは、準備に取り掛かろうとする。

「そうしてくれると嬉しいよ。そうだ、決定権をあげよう。好
きな相手を選ぶが良い」

「はい」

果たして、次元の破壊者の見つけたモノとは？

「教えて、銀八先生」

銀八

「はい、今日は何か面倒なんで、下記の質問を表記しておきます」

『武田軍兵士 清坂 剣麻』さんから

真田幸村

「おおッ！！ 某も浦飯殿やシグナム殿と戦ってみたくなりましたぞ
なるうっつうつうつ！！！！！！！！」

清坂剣麻（作者）

「では某から皆様方（剣八、ネウ口除く）に質問いたします!!
皆様方も武田漢祭り（特別バージョンで女性陣参加有り）に参加い
たしませぬかあああああッ!!!!!!?」
「ラボではありません」

美己

「それではミサカからあつちのお姉様他主要戦力チームに質問。
タローズ+（モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リユウタロ
ス、ジーク、デネブ、テディ）に憑依されるならどれがいいですか
つとミサカは問います。 続いてもう一つ小野寺ユウスケに質問。
『電王の世界』にてアナタに起きた悲劇（喜劇）をどう思っ
てますかつとミサカは問います」

（質問?）

一護

「いや、結構で」

良平

「うおおおおおおおおお!! 極限参加させて欲しいぞ
!」

一護

「うおおおおあああああ!!」

（質問?）

士

「俺は既に経験済みだから、お断りだ」

一護

「うーん……デネブかな」

当麻

「キンタロス？」

御坂

「えーと、テディかな？」

「質問？」

ユウスケ

「それだけは絶対に嫌だ」

『支配者』さんから

質問です

皆さんへ

銀時と戦い人は何人いますか？

銀さんへ

主人公の中で最も主人公らしくなく目立たなさ120%の自分を如何思いますか？

亀鳥虎龍さんへ

鬼目の狂は出ませんか？狂と戦いたい思う人はどれくらいいますか？

730

〜質問？〜

シグナム

「無論だ！」

剣八

「ハハハハハハ！ 掛かって来やがれ！！」

銀時

「（剣八に対して）いやああああああああ！！」

「質問？」

銀時

「そつなんだよ！ 何で俺の出番が少ねえんだよ！！」

一護

「……大変だな、銀さん」

当麻

「頑張れ」

御坂

「きつと良いことあるって」

ネウロ

「でも、作者から忘れられてるかもな」

銀時

「イヤアアアアアアアアアアアア！！」

「質問？」

虎龍

「うーん……ちょっと難しいですね。でも、一応考えてる企画に使わせていただきます。」

剣八

「ハハハハハハハ！ 上等だ、掛かって来やがれ！！」

『支配者』の鬼眼の狂

「ハハハハハ！ 面白え！ 相手してやるぜ」

一護

「剣八が二人いるウウウウウウウウウ！！（泣）」

『鳴神ソラ』さんから

ネス「質問です『マリオさんと戦って見たい人はいますか？』」

スネーク「質問だ『お妙の××料理や他の××料理を食べれる胃の持ち主がいたら驚くか？』ちなみに内のマリオとゼフィランサスがその持ち主」

ゼフィランサス「あれ？入っちゃったよ」

サイサリス「事実だろ」

ソロ「主人公陣に質問だ『自分の世界の住人以外でこいつはライバルと思ってるのはいるか？』」

フォックス「ってかバトルジャンキー多いな」

（質問？）

剣八& amp ; 幽助& amp ; シグナム

「上等だ！ だからゲストに出してくれ！」

一護

「こじらあああああ!!」

く質問?」

弥子

「うわ、ウチのお母さんのよりマシだな」

万時屋トリオ

「ええええええええええええええええええええええええ!!」

土方

「ドンだけ酷いんだよ!」

シグナム

「どんな料理なんだ!」

弥子

「でも全員無理だと思います」

く質問?」

一護

「幽助!」

幽助

「一護」

ツナ

「う〜ん……リクオ君かな？」

リクオ

「ツナさんかな？」

銀時

「ネウロだ！　ただし天敵としてだ」

なのは

「ネウロさん。理由は銀さんと同じ」

士

「特にナイ」

翔太郎

「同じく」

ネウロ

「沖田だ」

主役陣

「ウソだ！　それはライバルじゃなくて相方だろ！！」

銀八

「はい、というワケで以上です。　作者、ネタが無いので廊下に立つてなさい」

〈復活・突撃！ 隣の愉快犯〉

第2話：志村新八 in 桂木弥子+

今回は新八が、同じツツコミ担当の弥子を取材する。

「では、桂木さん。 苦手なモノとありますか？」

新八の質問に、弥子は苦い表情を見せながら答えた。

「お母さんの手料理です」

「ハハハハ……お母さん、お料理が苦手なんですわ？ 僕の姉も料理が苦手です……食べた人は腹痛になるわ、酷い頭痛を起こすわで、暗黒物質ダークマタークラスですから……」

新八は姉の料理の不味さを笑って答えるが、弥子は震えながら答えた。

「以前……母とギョーザを作った時……お母さん、皮をくっ付けるのに……接着剤を使おうとしたことがあって……」

「接着剤!？」

「一度だけ、お父さんを殺しかけた事があって」

「マジで!? 殺人レベルの不味さなの!？」

「地元の祭りで、お母さんが作った豚汁を食べた人の95%が病院送りになって……………」

「最早テロリストクラス!？」

「不味いだけならまだしも、非常に強い毒性があつて……………」

「た、大変ですね……………」

「お父さんが亡くなった時も、お母さんの料理を差し入れにすると、独りでに遺影が倒れて……………」

「死んでも食べたくないレベル!？」

これを聞いた新八は、弥子の鉄の胃袋と神楽以上の食欲の根源を知ったのであつた。

そんな二人の会話を隅で聞いていた八神家の三人は、

「シャマル以上の料理が下手な人がおったんやな」

「しかも、テロリストクラス」

「想像したくないですね……」

シャマルの料理の方がまだ可愛いと思ったのであった。

第五十話：『守る』という意味（後書き）

くオマケ…復活・突撃！ 隣の愉快犯の続き

弥子

「あと……料理の買出しと言って、ホームセンターでドリルやニト
口を買ったり……それからケーキを作る時に、「同じ鶏で出来てる
から」と言っつて卵と鶏肉と一緒に混ぜて……出来た結果、家から高
濃度の放射線反応が」

新八

「もう良い！ 聞きたくない（泣）！！」

第五十一話：新たなる敵（前書き）

遂に、敵が動きます。

第五十一話：新たなる敵

修行開始から四日後の夜……

「ハア……ハア……やつ……た……」

なのはは魔力と霊力を消耗させたため、そのまま気を失ったのであった。

「お疲れ、なのは……」

そう言ってユーノは、膝枕をして彼女を寝かせた。

果たして、修行は完了できたのか……

新たなる敵と味方

早朝、事件は起きたのだった。

空間が歪み、五人の男女が現れる。

「チツ、何で俺達が行かなきゃならねえんだ？」

炎のように赤い髪に獣のように鋭い黒い瞳を持つ破面・トルネイド
アラソカル
がそう言った。

すると、隣の女性・ルイカが答えた

「まあ、良いじゃない？ 強いヤツと戦えるなら」

「チツ」

舌打ちをしながらトルネイドは霊圧を察知する。

「成程な………ルイカ、お前の言うとおりだな。連中、かなり強
くなつてやがる」

ニヤリと笑ったトルネイドは、

「任務とはいえ、久しぶりの戦いだ。ひと暴れしてやるぜ！」

その瞬間、彼を中心に他の五人が途轍もない霊力や魔力を放った。

「!?!」

一護達は、何者かの気配に驚愕してしまう。

「おい、この気配は!?!」

「アラシ破面だけじゃない、他にもいるのか!?!」

「まさか……連中が遂に動いたのか!?!」

驚きを隠せない一同に、真之介は叫んだ。

「慌てるな! お前等も修行して来たんだ。慌てたりしちゃった
ら、敵の思っ壺だ!」

それを聞いた一護は、冷静さを取り戻しながら答えた。

「そうだな、兎に角連中をぶっ倒すぞ！」

「ああ、行かせオメエ等！」

「おーーーーー！！！」

幽助の合図と共に、一同は叫んだのであった。

こうして彼らは、此処にはいない『独立防衛フロント』を残して外へ得たのであった。

彼等が外へ出ると、

「な、何だよコリヤ……」

昨日まで沢山の人達が歩いていた街が、完全な荒地と化していた。

「ヒゲエ……」

その中には命を奪われた人々の遺体があった。

「ふざけやがって……」

死体の中には、原型を留めていないモノがあった。

だがその時、思わぬ人物と遭遇する。

「デイケイドオオオオオオオオ！」

「あん？」

土が声のする方へ顔を向けると、そこには帽子を被った中年男性がいた。

「鳴滝……何でお前がいる!？」

「貴様を倒すため、私は『次元の破壊者』と手を組んだのだ!！」

そんな二人のやり取りを見て、ルキアは夏海に尋ねた。

「夏海、あ奴は一体？」

「あの人は鳴滝さんと言って、土君を『破壊者』と呼んで倒そうとしてる人なんです。以前戦った時は“ゾル大佐”って名乗ってましたが……」

それを聞いた獄寺は、先程の会話で鳴滝の今の状況に気付いた。

「つまり、テメエは破壊者を倒すために破壊者と手を組んだって事か!」

「哀れだな!」

「まさに、“ミイラ取りがミイラになる”っていうことだな」

続くように、シグナムとルキアがそう言った。

「うるさあ——————い! 兎に角私は、デイクイドを倒すまでは諦めんぞ!」

それを聞いた銀時が、サラッと言った。

「つまり、アンタストーカーか?」

「何でそうなる!?」

これには鳴滝も反応してしまつ。

「当たり前ですよ。倒そうとしてるってことは、何度も同じ場所に現れるって事ですよね? 完全なストーカーじゃないですか」

「う!」

しかし新八の一言で、すぐさま反論出来ない状態になり、

「マジキモイアル。しかも男狙いだからホモアルな」

「何故そうなるんだあああああああああ！」

更に神楽の毒舌で変な誤解を掛けられてしまい、

「コイツあ “まさに、ダメなオッサン” で “マダオ” ですね」

「いやいや、コイツは “まさに世界に必要な、ダメで人間の屑で、男好きのオッサン” の “マダオ” だな」

最後に沖田とネウロのドS発言で、一気に気分が沈んでしまったのであった。

因みに最後の台詞はネウロです。

「おのれえ〜〜………ディケイドオオオオオオオオオ！」

「俺の所為かよ！」

完全な八つ当たりにはキレル土であるが、突如オーロラが出現し、三人の仮面ライダーを呼び出した。

「はあ………イライラするんだよ」

鏡の世界『ミラーワールド』を舞台に戦う仮面ライダー王蛇。

「兄貴、ここにもいたよ………ライダーが………」

「ああ………行くか、相棒」

『地獄兄弟』の異名を持つ仮面ライダー、キックホッパーとパンチ

ホッパ！。

「仮面ライダーだと！」

「チツ、ライダーにはライダーってことか。 変身！」

【KAMEN RIDE DECADE】

【CYCLONE】

【JOKER】

「「「変身！」「「「

【CYCLONE・JOKER】

デイケイド、W、クウガ、キバラーのライダーメンバーは、鳴滝が
召喚したライダーと撃突する。

「お前等、此処は任せろ！」

「早く行きたまえ！！」

「クツ、分かった！」

こうして、一護達は先へと進んだ。

「にしてもこの街は広えから、どうやって捜すか分かんねえぞ」
「だったら、二手に分かれるしかない」

石田の提案で、各フロントに別れることになったのだった。

- 1 ・主要戦闘フロント & a m p ・間接戦闘フロント
 - 2 ・迎撃粉碎フロント & a m p ・接近フロント
 - 3 ・近距離遠距離フロント
 - 4 ・非常砲撃フロント & a m p ・特殊戦闘フロント
- 4チームに分かれた各フロントチームは、すぐさま二手に分かれたのであった。

〈非常砲撃フロント& a m p・特殊戦闘フロント〉

酷すぎる死体の山を見て、各メンバーは直視できなかった。

「何だぁ……やっとな来たのか？」

そう言つて一人の破面^{アラシカル}が現れた。

緑の短髪に黄色い瞳、鬼のような鋭い角が付いた仮面の残骸を頭部の左側に付けた男の破面^{アラシカル}であった。

「お前がやったのか！」

日番谷の問いに彼は答える。

「まあ、否定はしねえがな」

すると彼は、刀を抜き、日番谷達にこう言った。

「『十三鬼』に使えし精鋭部隊『閻龍』^{あたいゆつ}が一人……ディリードだ！
掛かって来い雑魚共！！」

こうして、非常砲撃フロント&mp・特殊戦闘フロント組みVS
ディリードの戦いが始まった。

〈近距離遠距離フロント〉

貴重な戦力であるクウガとキバーラを失った近距離遠距離フロン
ト組みの前には、一人の女性が現れる。

「あら、貴方たちが私の相手？」

青い長髪に青い瞳、そしてダークスーツに身を包んだ女性であった。

「アナタも『十三鬼』の一人ですね？」

神裂の問いに、女性は素直に答えた。

「いいえ、私は彼らに使える部隊『閻龍』の一人・フリーズ＝リー
バ。宜しく」

そう言ってフリーズは、双剣を構えていた。

く迎撃粉碎フロント& a m p ; 接近フロントく

「お、やっとお出ましか？」

そう言ってルイカは刀を構える。

「『十三鬼』が一人、ルイカ・クインよ」

「しじ寧どつもですぜい、ついでにやられて下さい」

そう言って沖田がバズーカを構えていた。

ドォーン！ という音と共に、バズーカの砲弾が放たれた。

〈主要戦闘フロント & a m p ; 間接戦闘フロント〉

ヒト過ぎる街を見渡しながら走り出す一護達。

その瞬間、幽助と蔵馬が何かを察知した。

「どうした!」

「近いぞ!」

「何!??」

すると、三人の人影が現れる。

その時幽助は、その内の二人に見覚えがあつた。

「ヒヒヒヒヒ……久しぶりだな浦飯」

「今度こそアナタへの借りを返しますよ」

「戸愚呂……乱童！」

「まさか、俺達の世界からこんな連中が………」

知っている敵に驚きを隠せない幽助と蔵馬。

すると、一人の破面アラシカルが名乗り出た。

「『十三鬼』の破面アラシカル・トルネイドだ、宜しくな！」

遂に、激突が始まった。

彼らと別行動を取っていた閃可は、ある人物を連れて来ていた。

「クツ……遅かったわね」

悔やみながら閃可は拳を握る。

「厄介だなこりゃ……」

「早く加勢に行かないと！」

「向かきましょう！」

果たして、彼等の正体は一体！？

）復活・突撃！ 隣の愉快犯

第3話：桂木弥子 in 沖田総悟

「それじゃ、沖田さん。お話しを聞かせて下さいね」

「おう、任せなせい」

そう言いながら、四つん這いになった弥子の背中に台を置く。つとめる沖田。

「……って、イキナリ人を家具にすんなアアアア！」

「チツ」

「全く、何考えて」

すぐさま立ち上がった弥子であったが、

「ンガ！」

ネウロに地面に叩きつけられ、そのまま二人の椅子にされてしまう。

その際、沖田はアイマスク着用で睡眠、ネウロは読書を楽しんでいた。

「……………（外道の間言葉は要らない）」

心の中でそう思った弥子であった。

第五十一話：新たなる敵（後書き）

次回は味方の増援です！

第五十二話：〇との再会／欲望の王と魔【いかり】と英霊（前書き）

遂に味方が登場です！

他キャラのポジション

ユーノ、ネウロ 主要戦闘フロント&mp・間接戦闘フロント

牛鬼 迎撃粉碎フロント&mp・接近フロント

??? 近距離遠距離フロント

クロノ 非常砲撃フロント&mp・特殊戦闘フロント

ぬらりひょん、鳩、山本元柳斎、浮竹 待機

第五十二話：〇との再会／欲望の王と魔【いかり】と英霊

ユーノとネウロを加えた主要戦闘フロント& a m p・間接戦闘フロントは、トルネイドと戸愚呂、そして乱童と激戦を繰り広げる。

「ウオオオオオオオオオ！」

一護とツナは、空中でトルネイドと交戦する。

「ハッ、そんなもんか？」

斬月の刃を腕の鋼皮イェロでガードする。

「チッ！」

「何やってんだよ黒崎一護！ テメエが知ってるだろうが！！！」

「クソッ！」

流石アランカルに破面を相手にするため、卍解を解放した。

「卍・解！」

卍解を解放した一護は、ツナと共にトルネイドとぶつかる。

「来たか！」

〇との再会 / 欲望の王と魔人の怒りと英霊

幽助達は現在、乱童と戸愚呂と交戦していた。

「さあ、何処からでも掛かって来いよ」

「そう言われて“ハイ分かりました”って言う馬鹿だと思うか？」

「特にお前は、一番用心なきや行けないからな」

「ギャハハハハハハハハ！ 良く分かってるじゃねえか！！」

顔見知りである幽助と蔵馬は、一番戸愚呂の恐ろしさを知っているため、用心していた。

「そもそも何でテメエがいるんだ！」

幽助の言葉を聞いた戸愚呂は、

「ヒヒヒヒヒ……良いだろう、教えてやるよ」

これまでの自分の経緯を説明した。

「俺はあの戦いで、蔵馬の『邪念樹』による永遠の幻影を見せられた。だが、あの人は俺を解放してこう言ったんだ」

(私と組めば、キミの望みを叶えるよ)

「そして、その願いが叶ったんだよ！」

「成程……そう言うことか……」

それを聞いた幽助は、少し納得したと、

「え？」

一瞬で戸愚呂の懐に入り込み、ドガアと殴り飛ばした。

「ガッ！」

「言うておくが、俺達をあの時と同じだと思つなよ」

「今度こそケリを着けてやるよ」

そう言うって骨を鳴らす幽助と、鋭い目付きで睨む蔵馬。

しかし、戸愚呂は何故か余裕であった。

「ニイ……」

「おい、何笑ってんだ？」

疑問を感じた幽助。

だが、その時であった。

「そこだあ！」

戸愚呂は腕を刃に変え、一気に伸ばした。

「ウオツ！」

幽助は難なく避けるが、

「掛かったな！！」

そう言っただけ高く笑う戸愚呂。

その刃の向かう先は、乱童と交戦中のなのであった。

「しまった！」

「なのは、危ねえ！！」

「え！？」

もう間に合わない、二人がそう思った。

「え……………」

戸愚呂の刃が、見事に貫いた。

しかし、貫いたのはなのではなく、彼女を庇ったユーノであった。

「ガハッ」

「ユーノ君！」

刃が引き戻されると同時に倒れるユーノ。

「ユーノ君、しっかり、ユーノ君!!」

深手を負ったユーノを抱くのは。

「な……のは……は……良かった」

そのまま瞼を閉じてしまい、そのまま動かなくなってしまう。

「ユーノ……くん……起きて……ねえ……起きてよ……」

何度も叫ぶが、動く気配を見せないユーノに、

「いや……い……いやアアアアアアアアアア!!」

なのはは涙を流しながら叫んだのだった。

「ギヒヤハハハハハハハハハハ! この俺が何も策も考えずに攻撃すると思っただか? 甘いんだよ!!」

「戸愚呂オオオオオオオオオオ!!」

怒りが頂点に達した幽助が、戸愚呂に拳を向けようとした。

そう言つて右腕を掴み、

「貰いますよ、その腕」

「え？」

「真空・斬天刃」

手から放たれる真空波でその右腕を切り落とした。

ポトリと落ちた右腕。

変身が解けた上条。

「やはり、右手首以外には攻撃が効くようですね」

笑いながら上条の首を掴む乱童。

「さあ、此処で死んで貰いますよ？」

「やめろ！」

リクオが接近するが、

「おっと、彼の命がどうなっても？」

「ぐっ！」

「卑怯者！」

「フハハハハハハ！」

ティアナの怒りを嘲笑う乱童であった。

「戸愚呂オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

怒りが頂点に達した幽助が、戸愚呂に拳を向けようとした。

しかし、信じられない事が起きた。

ザンツと戸愚呂の右腕が落ちたのだった。

「な、何イイイイ!?!」

これには戸愚呂本人も驚いてしまう。

「貴様のようなヤツには、少しお仕置きが必要のようだな……ダニ
め!」

そう言つてネウロは、背中に奇妙なデザインの翼を六枚広げていた。

「お、おい……何だよ、その翼は？」

幽助の問いに、ネウロはすかさず答えた。

「魔界777ツ能力『激痛の翼【イビルトーチャラー】』。コイツは大した能力を持たないが、我が輩が「したい事」を察してそれを実行する能力だ」

「面白え……掛かつてきやがれ!!」

落とされた腕を再生させた戸愚呂が、両手を鎌に変えて仕掛けてきた。

しかし、激痛の翼はそんな事もお構いなしに戸愚呂の体を拘束した。

「まず、一つ目の翼が相手の動きを封じ……」

すると、真ん中の翼が戸愚呂の体を突き刺し、

「二つ目の翼が、体内でミンチになるまで羽ばたくのだ」

バサバサバサと羽ばたく翼に、

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

流石の戸愚呂もダメージを受けてしまう。

そしてネウロは翼を動かし、戸愚呂を地面に叩きつけた。

バキバキと骨が折れる音が、幽助と蔵馬の耳にも響いた。

「が……あ……………!!」

「しまった、肋骨まで折ってしまった。後に取っておこうと思ったのに」

困ったような顔で指を口元に近づけるネウロであるが、内容はかなりのサディスティックなものであった。

「さあ、拷問は始まったばかりだぞ？」

ネウロはそう言って近づく。

「（ふざけやがって……………）」

そう言って戸愚呂は邪悪な笑みを見せながら、足元に亀裂を入れた。実は目の前にある戸愚呂は生き人形で、実際の戸愚呂は地面中を潜っていた。

「（ヒャーハハハハハハ！ ザマあ見やがれ!!）」

嘲笑う戸愚呂であったが、体が全く動かないことに違和感を感じる。

「（ん、何だ？ 体が引き寄せられて……………）」

「まあ、貴様の下らん策はどうでも良いとして……………!!」

「な!？」

「さあ、拷問を続けよう」

予想外の相手に戸愚呂は驚きを隠せず、再び激痛の翼に拘束される。

「フハハハハハ……さて、貴様は疲れてはいないか？ 今から水を飲ませてやるぞ、三つ目の翼はそれを行うのが好きでな……」

そう言つてネウロは、地下水路から引つ張り出した水を戸愚呂に無理やり飲ませた。

「ング!？」

ゴクゴクと無理やり飲ませられる戸愚呂であったが、ドガアとネウロのボディブローを受けて、中の水を吐き出してしまふ。

「ガハッ、ガハッ!」

「フハハハハ、汚い水芸が出来たぞ」

「(コイツ、化物か!?)」

戸愚呂はネウロに対して、厄介な相手を敵に回した事を思い知ってしまう。

「さて、これで我が輩のストレス発散は終わったが……」

するとネウロは、邪悪な笑みを浮かべながらこう言った。

「卑劣な戦法で我々をコケにしてくれた罰を、貴様の体で支払って貰うぞ」

ゾクリと背筋を凍らせた戸愚呂は、初めて恐怖を感じ取った。

「無論、我が輩とて根は悪ではない。命乞いをしてくれたら、許しても良いぞ」

「た……たす」

戸愚呂が命乞いを行おうとしたその時であった。

「おや？　なのはの泣き声が五月蠅いな、聞こえん」

「……………」

完全に命乞いをさせる気がないネウロの一言に、完全に絶体絶命となった戸愚呂。

「い、一番…敵にしたくねえな……………」

「ど、同感です」

こればかりは幽助と蔵馬も、ネウロに苦手意識を感じた。

「卑怯者！」

「フハハハハハハ！」

ティアナの怒りを嘲笑う乱童であったが、

「!？」

その瞬間、何かの気配を感じ取った。

乱童は相手を探そうとするが、それは目の前にいた。

その人物は上条当麻であった。

「な、何だ!？」

つい首を掴んでいた手を離してしまい、

「ふ……フフフフ……ギャハハハハハハハハハハハハハハハ！」

同時に上条は、まるで狂ったように笑い出した。

「な、何だコイツ!？」

乱童はすぐに上条を警戒するが、彼はまるで一方通行アクセアラータのような口調で喋りだした。

「こんなモンで、俺の『幻想殺し』を潰した積もりかア？ 甘いんだよ!」

その瞬間、右腕の切断面からあるモノが出現した。

「!?!」

それはまさに、不透明な竜王の顎……ドラゴンストライクであった。

「（な、何だあの竜は!？ 僕は聞いてないぞ!?!）」

今まで出あって来た敵の中でも、上条当麻は異常中の異常であった。

乱童は恐怖の余りに、体が動かなくなってしまった。

「今度は、俺がお前を食い潰す番だ!?!」

その竜王をまるで自分の腕のように、思いっきり乱童に突き出した。

「ウラアアアアアアアアア!?!」

「うわあああああああ!?!」

竜王を真っ向から喰らった乱童であったが、

「う……ウソ……無傷!？」

「そんな!？」

これにはティアナと織姫は驚くが、

「ぼ……僕は、誰だ!？」

「え?」

乱童は自分の存在そのものを失っていた。

否、竜王の顎により、精神面を喰い殺させたのだった。

無論、上条本人はその場で倒れたのであった。

「オラァ!」

「グアッ！」

ライダー組みは、未だに激戦を繰り広げていた。

「クソッ！」

「ダメだ、数ではコッチが有利のハズなのに」

「ホッパーのクロックアップが厄介で打つ手がない」

「終わりだ！」

鳴滝が召喚したライダー達が止めに入ろうとしたその時であった。

コロコロと何かが転がってきて、

「あーちよつとちよつと！」

何者かがそれを追いかける。

ソレはディケイドの足に当たり、その場で止まった。

「これは……」

ディケイドがそれを拾うと、それは鷹の絵柄が描かれた赤いメダルであった。

「あ……」

すると、奇妙なベルトを装着した一人の青年が現れる。

「翔太郎、まさか彼は!?!」

「ああ、間違いねえ……」

Wは彼の顔を見て、誰であるのかを理解した。

「ゴメン、それ俺の」

「あ、ホラよ」

デイケイドが投げると、それを青年が受け取る。

「ちっ、余計なヤツが現れやがった」

王蛇がイライラし始め、

「此処は危険です！ 早く逃げてください!!」

キバーラが大声でそう言うが、

「ありがとう。でも、そういうワケにはいかないから」

そう言って青年は、先程の鷹のメダルを右、緑で飛蝗の絵が描かれたメダルを左の溝に詰め、最後に黄色で虎の絵が描かれたメダルを真ん中の溝に差し込み、腰のスキャナーでスキャンした。

「変身！」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

すると青年は、緑の複眼に赤い鷹の頭部、黄色い虎の腕部、そして緑の飛蝗の脚部の装甲を身に付けた、胸部の円盤にメダルの絵と同じ生物が描かれていた戦士に変身した。

「行くぜ！」

彼は飛蝗のようにジャンプすると、王蛇に飛び蹴りを叩き込む。

「クツ、お前は一体！」

「オーズ、仮面ライダーオーズ！」

この戦いに今、欲望の王・仮面ライダーオーズが光臨した。

「ふざけやがって…！」

そう言って王蛇が攻撃を仕掛けるが、

「セイヤアー！」

オーズの跳び蹴りをまともに喰らったしまい、吹き飛ばされてしま
う。

「「ライダージャンプ」」

【RIDER JUMP】

地獄兄弟は天高く跳び上がると、必殺技を叩き込んだ。

「ライダーキック」

「ライダーパンチ」

【RIDER KICK】

【RIDER PUNCH】

それを見たオーズは、ゴリラの描かれた灰色のメダルを黄色のメダ
ルと取り替えた。

【タカ・ゴリラ・バッタ】

すると、オーズの腕部がガントレットの付いた灰色の腕に変わり、
ベルトのメダルをスキャンさせた。

フリーズ＝リーバと近距離遠距離フロントであったが、

「あら、この程度？」

「ぐっ……」

しかし、彼女の圧倒的な強さの前では、複数で戦っても叶わなかった。

「ウフフフフ……さあ、これで終わりよ」

そう言ってフリーズが止めに入ろうとしたその時であった。

「そこおー！」

「！？？」

突如、何者かの攻撃で、中断してしまう。

「何者だ！」

その問いに、『彼等』は答えたのだった。

「我が名は剣士サーヴァント・セイバー！」

「そのマスターの魔術師・衛宮士郎！」

遂に新たな味方が出陣したのだった。

「教えて、銀八先生」

銀八

「はい、再びお便り頂きました。下記の通りです、ぶじぞ」

武田軍兵士 清坂 劍麻

弥子

「止めて！ 死人が出るから！！」

支配者

皆さんに質問

剣八と鬼目の狂、どっちがマシだと思います？

全員

「どっちも嫌です！」

ビアンキへ

リポーンが皆さんにビアンキ様の絶品料理を食べさせたいからご馳走してくれといっていました。如何しますか？

銀八

「すみません、この小説はビアンキはいませんので」

幽助へ

苦手なものってやっぱり幻界師範ですか？

幽助

「ま……まあ、そうかもな……あとネウロもだ」

鳴神 ソラ

マリオ「色々と難しいよな守るって言葉は…守ってるつもりが守れてないのもな…」

ルイーダ「だね」

ネス「質問『ツツコミの皆さん全員でドSトリオとバトルジャンキー以外でツツコミ所満載な人は誰ですか？』」

ピット「作者さんに質問『好きなライダーはなんですか？』」

リュカ「質問です『もしライダーに変身出来るなら何になりますか？』」

次回を待っています！

新八

「ネス君の質問の答えだと、スバルさんや織姫さんですかね」

弥子

「ある意味天然だからね」

虎龍

「クウガ、カブト、Wですかね。」

リュカの質問ですが、悩みます」

第五十二話：Oとの再会／欲望の王と魔【いかり】と英霊（後書き）

『復活・突撃！ 隣の愉快犯』は次回再会します。

第五十三話：〇との再会／英霊と蠍と最・狂・光・臨！（前書き）

上条

「何故にサブタイトルを『フォーゼ』風に!？」

第五十三話：Oとの再会／英霊と蠍と最・狂・光・臨！

『十三鬼』に使える精鋭部隊『闇龍』の一人・フリイズ・リーバと戦うも、その圧倒的な強さで追い込まれてしまった近距離遠距離フロントチーム。

しかし、そんな彼等を救った者達がいた。

「我が名は剣士サーヴァント・セイバー！」

「そのマスターの魔術師・衛宮士郎！」

青いドレスに鎧を纏いし金髪の女性と、白を基調に袖が青い長袖Tシャツを着た赤銅色の髪の青年が堂々と名乗った。

セイバーと衛宮士郎は、目の前の敵に集中する。

「話しは閃可という方から聞きました。貴様とその主の所業、許す訳には行きません」

「全力で止めさせて貰うぞ！」

二人は構えながらフリイズを強く睨む。

「ほう、試してみよ！」

そう言ってフリイズは、右手からガラスのような透明の剣を生み出した。

「アイスブレード氷結剣。私の一族は、先祖代々から氷を活かした魔術を得意としていた」

「成程、名前が『フリイズ』というのもそれが由来か」

「まさに、“名は体を表す”ってヤツか」

「そういうことだ!」

そしてフリーズは氷の剣を構え、そのまま二人に襲い掛かった。

「ハッ!」

「ハア!」

フリーズが振り下ろした氷の剣を、セイバーは防御した。

しかし、彼女が持っているモノは何の無かった。

否、魔術によって武器を消していたのだった。

「何!?!」

「その程度の剣術では、私は斬れん!」

すぐさま距離を取るフリーズであるが、

「シロウ、今です!」

「そこだあ!」

セイバーの合図と同時に士郎が弓を構え、矢を放った。

ドン!と方に矢が刺さり、体制を崩してしまうフリーズ。

「クッ！」

「勝負ありです」

セイバーが彼女の首筋に、見えない刃を近づけながらそう言った。

同時刻、『闇龍』の一人・ディリードと戦う非常砲撃フロントチームと特殊戦闘フロントチーム。

「おいおい、コッチはまだ刀抜いてねえんだぞ？ 刀を抜かせるくらいの実力ア、少しは見せてくれよ？」

しかし、ディリードの圧倒的な強さの前では、彼らは手も足も出なかった。

「ハア……………ハア……………」

「つ、強い」

「か……………掠り傷一つもしないなんて……………」

一人の破面アラシカルの前に、彼らは絶体絶命となっていた。

しかし、その時であった。

「な!?!」

ゾクリと何かがデイリートの背筋を凍らせた。

「な、何だ! この出鱈目な霊圧は!?!」

その瞬間、六人の人影が出現した。

「ハハハハハハハ! 良い霊圧だ! 愉しませてくれよ破面アラシカルウウウウウ!」

それは剣八を含む、他より少し遅れた『独立防衛フロント』チームであった。

「ほう……………アンタがあのも木剣八か……………」

ニヤリと笑いながら、デイリードは刀を構える。

「面白エ！ テメエを倒せば、俺は手柄を得られるってことかアアアア！」

するとデイリードは刀を立て一直線に浮かせ、両腕を胸元で交差させる。

「毒せ、『スコル鞭尾毒蠍』」

交差させた両腕を展開させたと同時に、霊圧が破裂したように解放され、

「……………行くぜ」

デイリードの姿は、両手と両脚に鋏みの様な鉤爪が二本ずつと、後頭部には蠍を思わせるような先端が鋭い尾を持った姿へと変わった。

その姿に、フェイト達は驚きを隠せない。

「何だ死神？ こいつ等には教えてなかったのか？

オレたち破面の刀剣解

「良いぜ、最高じゃねえか！！ ソレぐらいの力を解放してくれねえと、面白くねえからよ！！！」

そして彼は剣を構え、接近してきたのだった。

「行くぜ、十三鬼！！！」

剣八の刃が振り下ろされ、

「オラァ！」

「ハッ！」

それをディリードがそれをかわす。

するとディリードは、鉤爪で剣八の手足を拘束し、

「オラア！」

ドスツ！と、後頭部の尾で彼の肩を刺し、鉤爪を放した。

「!？」

「どうだ、これがコレがオレの本来の戦い方だ！ オレはこの鉤爪で相手の動きを封じ、この尾で相手を刺し殺す事ができるんだよ！」

変則的戦闘力に、一同は驚きを隠せないが、

「ハハハハハハハハ！ 良いぜ最高じゃねえか！！ ソレぐらいやってくれねえと、面白くねえからな！！」

全く驚くどころか、嬉しそうに笑い出す。

コレには一同は、驚きを隠せなかった。

「ハア……アレが更木剣八だ。 戦いのためなら、苦痛も恐怖も平気で愉しむヤツだ」

日番谷はそれを見て呆れてしまう。

すると、雲雀がトンファーを回転させながら接近してきた。

「良いねキミ、僕は強いヤツなら大歓迎だよ」

だが、そんな隙を与えないディリードは、

「ハッ！」

尾を鞭のように動かし、トンファーを弾いた。

「中々面白いぜ雲雀恭也！」

「チツ！」

「おい、雲雀い！ ソイツはオレの獲物だ！ 邪魔してんじゃねえ
！！」

「何言ってるんだい？ コイツは僕の獲物だよ」

「ふざけるな！ オレも破面アラソカルと戦ってみたいんだ。 貴様等は引っ
込んでろ」

「何言ってるんですかア？ オレがぶっ飛ばすんだよ！」

剣八、雲雀、飛影、一方通行アクセアレータの四人は険悪な雰囲気を見せ、

「オレは誰でも良いぜ！ 何だったら、全員掛かって来いよ！！」
それを見たデイリードが接近するも、

「……ウルセエ（さい）！ 引っ込ん（ん）でろ（よ）！！」「」
「」

そう言つて四人の一撃を喰らつて吹き飛ばされてしまふ。

「ガア！」

ソウルソサエティ
“尸魂界最狂の死神”と“ボンゴレファミリーの雲の守護者”と“浦飯チーム最速の邪眼師”、そして“学園都市最強の超能力者”の放った一撃は、想像を絶するものであった。

「……………」

その光景を見ていた照井と土方は、

「俺達の出る幕ではないな」

「だな」

目の前の仲間の強さに言葉も無くなったのであった。

一方の一護とツナは、トルネイドと交戦していた。

一護の刃とツナの拳を刀と拳で片方ずつ相手するトルネイド。

そして、ツナの胸倉を掴んでそのまま投げ飛ばし、

「ぐわあ！」

「ツナ！」

「余所見してるたあ、良い度胸じゃねえか！」

一瞬の隙を見せた一護を踵落しで叩き落した。

「ガツカリさせんじゃねえぞ黒崎、沢田あ！ 少しはマシに戦わねえのか？ アア！？」

しかしその瞬間、勢いを付けたツナが急接近し、

「ウオオオオオオオオオ！」

右手の拳からのパンチを懐に叩き込み、

「ぐー！」

「X B U R N E R！」

一瞬の隙から『X B U R N E R』を放った。

ドガーンという音と共に命中したツナの『X B U R N E R』。

「ハア……ハア……」

煙が晴れると共に、

「な？」

胸の真ん中に火傷のような傷跡を付けたトルネイドがいた。

「ククククク………ハハハハハハハハハハ！！ 流石だな沢田綱吉！
ボンゴレ十代目の称号は伊達じゃねえってことか！！」

嬉しそうに笑いだすトルネイド。

「このまま延長してえところだが………」

するとトルネイドは、一瞬すました顔をする。

「悪いな、時間だ」

その瞬間、トルネイドの真上から謎の光が出現する。

無論、他の『次元の破壊者』の一味の上からも光が出現する。

ルイカと交戦中だった迎撃粉碎フロント & amp; 接近フロントチームも、コレには驚きを隠せない。

「ヤロオ！」

獄寺がフレイムアローを撃とうとするが、恋次に止められる。

「よせ獄寺！」

「何すんだよ！」

「あの光は反膜^{ネガシオン}って言ってな…メノスが同属を助けるときに使うもんだ。あの光に包まれたら最後、光の内と外は干渉不可能な完全に隔絶された世界となって、最早あいつ等には触ることすらかなわねえ。」

すると、光の内側にいるルリカの地面だけが浮き上がり、死神メンバー以外の一同が驚く。

「御免なさい。実を言うと、あの御方の悲願のために時間稼ぎをさせて貰ったわ」

それを聞いた一同は、驚きを隠せなかった。

「何……だと!？」

「というワケで、また機会があったら戦いましょう」

そう言い残し、ルイカはその場を去った。

一方、近距離遠距離フロントチームも同じであった。

「セイバー、離れる！」

「……」

士郎の言葉に、すぐさま離れたセイバー。

そして反膜ネガシオンに包まれたフリーズ。

「任務完了ね」

意味深な言葉を吐き出し、フリーズは消えていった。

「逃げられましたね」

「ああ。でも、好都合だ」

そう言ってセイバーと士郎は、戦闘態勢を解いたのであった。

ネガシオン
「反膜ネガシオンに包まれたディリードは、

「チッ、もう少しで楽しめたのに」

舌打ちしながら地面ごと浮き上がり、下にいる剣八を見下ろす。

「勝負はお預けだが、必ず潰してやるよ！」

そう言って黒膝へと消えて言った。

「チッ、何だよ……………面白くなってきたのによお」

剣八も不機嫌そうにそう言ったのであった。

トルネイドも反膜ネガキャンによって浮き上がっていく。

無論、ネウロの拘束が解けた戸愚呂と上条に精神を殺された乱童も反膜ネガキャンによって浮き上がっていく。

そしてトルネイドは、一護とツナにこう言った。

「勝負はお預けだが、次に会った時がテメエ等の最後だ！」

最後にニヤリと笑いながら、

「このトルネイド・タイガーソードがテメエ等を喰い潰してやるよ
」！

自身の名を名乗りながら、その場を去ったのであった。

「教えて、銀八先生」

銀八

「はい、再びお便り頂きました。下記の通りです、どうぞ」

武田軍兵士 清坂 剣麻さんの質問

剣麻

「主要戦力チーム（ネウ口除く）に質問。 次の内、喰らったら流石に死ぬと思うのはどれですか。

- 1・廬山抗龍霸ろくざんかうりゅうは ここの字が出なかった。
 - 2・無明神風流殺人剣奥義『朱雀』
 - 3・爆流波
 - 4・完璧マツスル・スパーク
- 美己

「それではミサカからあっちのお姉様に質問。 最近出番がないようです。マギア・エレミア
……. ipp そのこと感卦法か闇の魔法でも習得し

ますか？ つとミサカはお姉様に聞きつつ、もう一つ門矢士もやしに質問。
写真の腕は上がりましたか？とミサカは問います」

・質問？

一護

「代表で答えるが、全・部・嫌・です！」

・質問？

御坂

「本気で起こらせたいの……（怒）」

士

「もやしって言うな！ 後それについてはノーコメントだ！」

鳴神 ソラさん

デステイニー

「ユーノはどうなるんだ!!」

デスサイズ

「死神化か！」

ウイング

「死神のお前が言うなよ」

デスサイズ

「んじゃま質問『ネウロに拷問されるのと俺に魂を抜かれるのでどつちがきつい?』」

デステイニー

「どつちも拷問だろ!!たくつ…質問『スマブラに出るキャラで好きなのは?』」

ネス

「オリキャラの人に質問!『ネウロさん以外でギャグ的な意味でのトラウマはありますか?』」

マリオ

「それでオーズが加わったな」

ルイージ

「後、士郎君とセイバーもね」

・質問?

全員

「どれも嫌です!」

・質問?

虎龍

「カービィにソニックですね」

・質問？

真之介

「特にない」

閃可

「同意」

銀八

「はい、というワケで、次回に続きます。」

〈復活・突撃！ 隣の愉快犯〉

第4話：脳嚙ネウロin神裂火織

「まさか、アナタが私の取材とは　！？　そ……ソレは！？」

驚きながら神裂は、ネウロが持っている服を見て震えだす。

「フフフフ……土御門から借りてきたのだ。貴様がこつこつのを好んでいると」

「土御門オオオオオオオオオオ！」

「もしかして、嫌か？」

「当たり前です！ 誰がそんな服 / / / / /」

断る神裂であつたが、

「嫌か？」

「（着なければ、殺される！！）」

後ろから稲妻が走る程の衝撃的不吉な予感を感じ、

「わ……………分かりました」

「お……、来てくれるのか（棒読み）」

嫌々ながらも承諾した。

こうして、『墮天使エロメイド』の出現に、男性陣（特に恋次と銀時）は興奮して眠れなかつたのであつた。

因みに、二度体験した上条はトラウマが甦って気絶し、一方通行と土と浦飯チームは啞然、フィリップは興味深いと言ってその姿を眺めていたのであつた。

第五十三話：Oとの再会／英霊と蠍と最・狂・光・臨！（後書き）

新メンバー

・仮面ライダー○○○

火野映司、アंक、伊達明、後藤慎太郎、泉比奈、里中エリカ

・Fate/stay night

衛宮士郎、セイバー、遠坂凜、アーチャー

因みに『オーズ』は『MEGA MAX』の後という設定で、アंकは40年後の世界から来ています。

第五十四話：敵の目論みと深夜の騒動と新たな世界へ！（前書き）

〈新メンバー紹介〉

・空の境界

両儀式、黒桐幹也、黒桐鮮花、蒼崎橙子

・月姫

遠野志貴、遠野秋葉、アルクエイド・ブリュンスタッド、シエル、
シオン・エルトナム・アトラシア、翡翠、琥珀

第五十四話：敵の目論みと深夜の騒動と新たな世界へ！

十二鬼の襲撃から数分後、上条とユーノはすぐさま屋敷の医療施設に運ばれ、伊達の執刀による手術を受けた。

「こっちは……急所は喰らってるが、応急処置が良かったみたいだな」

そう言っつて伊達はユーノの治療を終えると、すぐさま上条に移った。

「後藤ちゃん、その子の怪我の具合は？」

伊達が確かめると、後藤慎太郎がすぐさま答える。

「腕が切断されて、出血が酷いみたいですが……」

「ん？」

「トンでもない生命力です。多量出血にも関わらず、未だに呼吸が安定してます」

「そりゃ、ビックリ仰天だな。切断面は？」

「細胞同士が無事のようにですね」

「よし、それなら上手く結合できるかもな。後藤ちゃん、輸血用の血液パックを頼む」

「分かりました」

果たして、二人は無事に助かるのか……

敵の目論みと新たな世界へ！

手術室の扉の前で、二人の治療を待つ一同。

「大丈夫か？」

一護が心配するが、火野映司は答える。

「大丈夫です。伊達さんの腕は確かですから」

すると、扉が開くと同時に伊達と後藤が出てくる。

「伊達さん、後藤さん。治療は？」

映司の問いに、伊達は笑顔でサムズアップをする。

「大成功！意識が戻るまでは、暫らく安静にした方が良いな」

それを聞いた一同は、安心したのであった。

リビングに入った一同は、一息ついた後に、真之介からこんな事を聞かされた。

「安心して一息ついている所悪いけど、まずは奴等の目的について

考えないとな」

それを聞いた一同は、ゾクリと背筋を凍らせた。

「そう言えば、十三鬼のルリカってヤツが、時間稼ぎとか行ってたな」

恋次がそう言うと、閃可がこう言い出した。

「どうやら、何かを私達に隠してるわね。戦いはそれから私達の注意を逸らすための時間稼ぎにすぎない」

「そんな……じゃあ、どうすれば!」

ツナと同じ考えがあったのか、全員が不安を隠せずにいる。

しかし、唯一一護が立ち上がりながらこう言った。

「しよげてる場合じゃねえだろツナ! 出来なかつたんなら、絶対止めるために強くなれば良いだろうが!」

それを聞いた瞬間、全員の心が晴れたのであった。

「そ、そうですね! 有難う御座います一護さん」

「気にすんな」

その光景を見た後藤と伊達。

「ほう…今の若者にも、ああいう奴がいるんだな」

「最近は見ないですからね」

映司とアंकも同じであった。

「凄い子だな」

「ハッ、人間にも面白いヤツがいたもんだ」

こうして、彼らは強く『次元の破壊者』を止めることを決意した。

深夜、自室で眠ろうとなのはが襖を開けた瞬間、

「お姉え~~~~~さあ~~~~~ん？」

突如、何者かが彼女に跳びかかってきた。

「キヤアアアアアアアアアア!!」

それに対して大声を上げるのは。

「どうした!？」

悲鳴を聞いた一護達が駆けつけると、

「え……………一護!？」

そこにはなのはの腰にしがみ付いたコンがいた。

「コン、テメエ何やってるんだ?」

沸々と湧き上がる殺気に、コンはすぐさまなのはから離れた。

「ち、違っんだ一護。　これはスキンシップのつもりで」

「女を怖がらせるところの何処がスキンシップだ!」

「姐さん、助けてえ—————!!」

恐怖で頭が真っ白になったコンが、ルキアに助けを求めるが、

「自業自得だ。　今回ばかりは、私も弁護できんぞ!」

「イヤアアアアアアアアアアア!!」

完全に見放されたのであった。

ボコボコにされたコンを一護が連れて行った後、なのははトイレに行った後に、再び襖を開けるが……

「待ってたよ」

そこにはアイゼンハウワーが、禪一丁になって布団に潜っていた。

元軍人だけに、鍛え抜かれた肉体を見せながら。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

それを見て、再び悲鳴を上げるのは。

「またか！ 今度は何だ！？」

そう言って再び一同が起きると、

「　　って何やってんだ爺さん!？」

「あ、いや……………これはスキンシップのつもりで」

「　　って、テメエもコンと同じかよオオオオオオオオオオオオ！」

「グパア！」

言い訳をするアイゼンハウワーに、一護が容赦ないケリを叩き込む。

「　　って、それ私が15歳の時にやったわよね!？」

閃可が当時の事を思い出しながら、怒りがこみ上げてきた。

「だったら、二度と夜這いが出来んようにしてやろう」

そう言ってネウロは、手から何かを取り出し、

「魔界777ツ能力どつく『妖謡・魔【イビルストリンガー】』」

それをアイゼンハウワーの頭に刺した。

「我が輩から、素敵な子守唄をプレゼントしよう」

すると『妖謡・魔【イビルストリンガー】』は、弦の無い弦楽器を持った蝙蝠のような姿に変わる。

「人に寄生する楽器なのだが、自分の弦は持っていない。その代わりに、宿主の神経線維を引きずり出して使うのだ」

完全に自室で寝れなくなったなのはであったが、

「良い場所があるわよ」

閃可に言われて、その部屋に向かった。

そこには、ユーノが眠っていた。

「ユーノ君……」

自分を庇って重傷を負ったユーノの寝顔を見て、

「……………有難う……………」

そう言って彼の隣で眠ったのであった。

「ん……あれ、何で僕　　ってなのはあああああ！？　何やつてるのオオオオオオオオオオ！？／／／／」

ユーノは目覚めるが、目の前のなのはの姿に驚いてしまう。

「ん………ふえ？」

寝ぼけながら起きるのではあったが、

「ふえええええええ！？　何で私、ユーノ君に抱きついてたの！？
／／／／／」

どうやら本人も気付かないうちにやってしまったようで、彼女自身も赤面してしまった。

その後、朝食を摂ろうと廊下を歩くが、

「あのお~~~~~……昨日はマジで反省したんで、許して貰えない

でしょうか？」

木に吊るされてしまっているコンとアイゼンハウワーがいた。

二人の前には、ネウロと沖田、そして番外固体ミサカワーストが立っていた。

「何言ってるんですかい？ そんな事言って、また夜這いとかやるんじゃないですかい？」

ポーカーフェイスで沖田がそう言うと、コンが激しく反論した。

「な、何言ってるんでい！？ 確かにかなりの巨乳美女がいて、お触りしたいなあなんて思ってたねえよ！！！」

「なんでい、セクハラはしたいみてえだな」

「は」

ついボロを出してしまい、慌てるコン。

「全然反省してねえようだな」

「では、その行為が二度と出来んように……」

するとネウロは鼻フック、沖田はタバスコを手に取り、

「少しお仕置きしてやるっ」

「というワケで爺さん。これ、鼻から飲んでください」

二人の鼻に鼻フックとタバスコを仕掛けた。

「え、ウソ!? マジでやるの!? やめ ギャアアアアアアアアアアアア!」

「ちよつ待つて! タバスコはやバイから、ちよつ ギャアアアアアアアア!」

「次はワサビか辛子、どっちがいい?」

さらに番外固体がワサビと辛子を片手に持っていた。

「おい、トシ。そろそろ下ろしてやれよ……いい加減にしないと、総悟がSに目覚める」

「なあ、一方通行アクセレータ。早く助けないと、あの子やバイ事になっちゃうよ?」

「おい弥子。あれ、何とかならねえ?」

近藤が土方、上条が一方通行アクセレータ、銀時が弥子にそう言うが、

「何言ってるんだ? アイツはサディスティック星からやって来た王子だぞ?」

「何言ってるんだア? アイツは『妹達』シスターズ一のドSだぞ?」

「何言ってるんですか? ネウロに文句言ったら殺されますよ?」

「『もう手遅れだ(です)』」

三人は当たり前のようにサラッと答えたのであった。

朝食の時間、ユーノはなのはに抱きつかれたのがまだ印象に残ってしまっているのか、

「大丈夫か？」

「うん……／＼／＼」

未だに顔を赤くしていて、

「~~~~」

なのはも顔を赤くしているが、嬉しそうに食事を摂っていた。

すると、閃可がこう言った。

「食事中で悪いけど、今の内に言っておくわ」

「「「ん?」「」」

その一言に、全員が顔を近づけた。

「実は、まだ破壊されていない世界が存在していることが分かったわ」

「え………つてことは!?!」

「恐らく、十三鬼が現れたのはその世界へ『次元の破壊者』を移動させるための時間稼ぎね」

それを聞いた一同は、驚きを隠せなかった。

「んじゃ、その世界に行かなきゃ行けないって事か?」

「ええ。ヤツがいると思われる世界は三つ」

そう言つて閃可は、三つの世界を紹介する。

「一つは、土郎や志貴達の住む『魔術師の世界』とは全く並行する世界『聖杯戦争の世界』」

「俺達の世界と並行する世界!?!」

それを聞いた土郎は、驚きを隠せなかった。

「二つは、銀さん達の住む『侍の世界』」

「マジで!?!」

今度は銀時が驚く。

「そして三つ目は、私も言ったこと無い世界『怪異の世界』」

「怪異?」

一護はそう言って頭を傾げた。

「『怪異』とは、分かり易く言うなら怪奇現象とは全く異なる存在。現実と背中合わせの存在……あやふやの世界」

「あやふや……」

「私達の出来ることは、この三つの世界にいるかもしれないヤツを捜すこと。良いわね?」

それを聞いた一護はコクリと頷いた。

無論、他のメンバーもであった。

「決まりね」

こうして、新たな戦いの舞台へと彼らは向かう準備をするのであった。

「教えて、銀八先生」

銀八

「はい、再びお便り頂きました。 下記の通りです、どうぞ」

武田軍兵士 清坂 劍麻

番外個体

「ミサカから背がちっちゃいシロちゃん（日番谷）にしつつも、
ん 幼なじみ（雛森）との付き合いはどくですか、それと」
誰がミジンコ豆粒ドチビかあ〜！！』って言ってみて〜」

美己

「それではミサカからあつちのお姉様に質問。 敗北したようです

が、王道ではない特訓でもしますか？とミサカは声が似ているネギ先生が辿った道を行くのかとお姉様に聞きます」

劍麻

「それでは主要戦力チームに質問。次の内、器が大きいと思える人物は誰ですか。

- 1・城戸沙織アテナ《聖闘士星矢》
- 2・野上良太郎
- 3・ゴリラ（近藤）
- 4・チビたぬき（はやて）
- 5・徳川家康（戦国無双）

＼質問？！

日番谷

「関係ねえだろそれは。あと最後のは俺に対する挑戦か？（怒）」

＼質問？！

御坂

「ゴメン、作者が『ネギま』読んでないからよく分かんない」

＼質問？！

全員

「野上良太郎」

はやて

「何でなん!？」

近藤

「そつだぞ、何でだ!！」

ネウロ

「文句あるのか？」

近藤 & a m p : はやて

「いえ、ありません」

鳴神 ソラ

デスサイズ

「あつ、やっぱり」

デステイニー

「当然だろ、それにしても時間稼ぎ……」

マリオ

「誰かを消す為か？」

ルイーシ

「どうなんだろう?」

ゼフィランサス

「質問『ドSトリオに拷問されるか××料理を食べるかを迫られたらどっちにする？ちなみに拒否したらどっちも受ける事になるから』」

サイサリス

「ひでえな兄貴!!」

ネス

「セイバーに質問『自分の必殺技と同じ技を使うカリバーについてどう思う?』」

リユカ

「質問です『オーズのFFRは出るんですか?』」

「質問?」

全員

「それは「死ね」って言ってるのか!!」

「質問?」

セイバー

「そうですね。是非果し合いたいものですね」

「質問?」

士

「あるぜ。ただし、まだ取っておくがな」

映司

「オースのFFRって、どんなのが……」

ユウスケ & amp; 翔太郎

「う~~~~ん……」

フィリップ

「興味深いね」

〈復活・突撃！ 隣の愉快犯〉

第5話：坂田銀時 in 志村新八

「何で俺が新八の取材なんざ」

「何ですか、そのヤル気の無さは!?!」

余りにもヤル気を見せない銀時に、新八はツッコミを炸裂させる。

「だってよお、しんぱつつあんの必要なシーンといえば、殆どツッコミしかねえじゃねえか」

「フザケンな！ 僕だってな、その気になれば強いつてコトを照明できるわ!?!」

キレる新八であったが、銀時がさらに追い討ちを掛けた。

「でもよお、考えてみ？ 『赤夜叉』さんを始めとして、『支配者』さんや『黒神』さんの小説だと、お前アニメオタクなってるぞ?」

「 ってうおおおおおい！ それ言ったら訴えられるぞ!?!」

「兎に角、どの小説でも、オメエが良いトコを見せるシーンは何処にもねえんだよ!?!」

「そ……そんな……」

銀時に事実を言われ、完全に心のが折れた新八であった。

く死神図鑑Gく

三つの世界へ出発する一同であるが、映司だけが来ていなかった。

一護

「なあ、映司のヤツ……遅くねえか？」

石田

「何やってるんだろう……あの人」

一護と石田がそう言うと、急いで駆け寄る映司がいた。

シグナム

「遅いぞ火野！ 何をやってたんだ！！」

映司

「すみません、パンツ洗ってました！」

一同

「え！？」

伊達

「ハハハハ、やっぱり火野だな」

後藤

「そうですね」

比奈

「映司君らしいですね」

アंक

「まったく、相変わらずだな」

映司が遅れた理由を聞いて驚きを隠せない一同とは対照的に、伊達やアंक達四人は当たり前前のようにそう言った。

第五十四話：敵の目論みと深夜の騒動と新たな世界へ！（後書き）

次回、新章突入です！

アングはそう言って、映司の“明日のパンツ”に呆れていた。

いざ、異世界へ！！

第五十五話：再会と出会い！？

次元の破壊者がいると思われる三つの世界の内の一つに移動する事になった一同は、チームに分かれて調査を行ったのであった。

第一の世界は、『聖杯戦争の世界』。

チームメンバーは一護、映司、アング、ユウスケ、はやて、シゲナム、ヴィータ、リン、銀時、志貴、士郎、セイバー、浜面、桑原の14名。

果たして彼らは、次元の破壊者を見つけることが出来るのか？

再会と出会い！？

別世界に来ているため、少し緊張している一護達。

しかし、管理外世界での事件に関わった経験のある八神家の四人や士達と旅をしているユウスケは動揺する事は無く、国から国を旅して回っている映司も余り驚いていない。

また、アंकはどうでも良いという雰囲気であった。

「しかし、まずはどうやってヤツを捜すかだ……………」

一護がそう言つと、ユウスケが答えた。

「まずはこの世界の情報を知らない」と

それを聞いた映司が答えた。

「確かに…………… 士郎君とセイバーちゃんとは違って、俺達は『聖杯戦争』について知らないからな」

「そう言えば、俺達だけ知ってるっていうのは不公平ですよね」

「確かに、教えた方が良くかもしれませんね」

そう言つて士郎が苦笑し、セイバーが『聖杯戦争』について語りだした。

また、志貴は関わっていないが、大抵の事はシエルやシオンから聞いているため知っていた。

「聖杯戦争とは、嘗て英雄と呼ばれた者達が、そのマスターとなる魔術師に召喚され、契約を果たし、二人一組の7組によるバトルロイヤルです」

「……って言う事は、殺し合いつてコトかな？」

「エイジの考えが普通ですかね」

「物騒な話やな」

セイバーの説明を聞いたはやてがそう言うが、銀時だけが青ざめていた。

「待てセイバー」

「何でしょう？」

「お前今、召喚されたってコトは……一度死んでんの！？」

「ええ、そうですけど……」

「じゃあお前……幽霊なの！？」

「心外な言い方ですが、そう言うことになりますね」

街を探索している彼らであったが、

「!?!」

突如アंकが、何かに反応した。

「どうした、アंक?」

映司が問うが、

「いや……気のせいだ」

アंकがそう言ったため、全員が気にしなかった。

しかし、アंकは何かを感じ取った。

「(何だったんだ? 一瞬、ヤミーの気配を感じたが……まさかな)」

そんな彼らより少し離れたビルの屋上では、

「まさか、こんな所で会えるとわな……オーズ……アंक!」

緑色のジャケットを着た金髪の男が、映司とアंकを眺めていた。

「見てろよ。俺のヤミーが、お前達を抹殺するからな！」

一方、とある屋敷では……

「ふう〜……………」

黒い短髪に青いラインの入った白いTシャツに黒いジャケットを羽織った青年・間霧剣護まきりけんごは、外で木刀を振るっていた。

「今日はここまでかな」

そう言って頬を伝う汗を拭いながら、屋敷の縁側に座った。

すると、一人の女性が現れる。

「剣護、お茶を持ってきましたか？」

「あ、貰うよ」

長い銀髪にスタイル抜群の女性、彼女こそこの世界の聖杯戦争に召喚された剣護のサーヴァントで、クラスはキャスターである。

「なあ、キャスター。一つ確認して良いか？」

「はい、何か？」

「いや、大事な事なんだけど……」

「え？」

「お前が聖杯に叶える願いつて、何だ？」

それを聞いたキャスターは、少し沈黙した後に、ハッキリとこう言った。

「……強いて言うなら……嘗ての主との再会です」

「……そうか」

「あの……驚かないのですか？」

それを聞いて静かに答えた剣護に、キャスターが逆に驚いてしまう。

「まあな。聖杯戦争に参加する連中の大半は、薄汚い欲望が多い

からな。お前みたいなそついう見た目が小さく見えても、己にとつては大きい願いだからな」

「……………マスター／／／／」

マスターの優しさに少し微笑むキャスターであったが、

「!?!」

突如何かを感知した。

「この魔力!?!」

「どつした!?!」

「この近くで、魔術師が戦っています」

「サーヴァントとそのマスターか?」

「いえ、しかし……………」

「ん?」

「とても、懐かしい感じです」

そう言ってキャスターは、感傷に浸っていた。

そんな彼女の気持ちを察した剣護は、

「なら…すぐに行くぜ、キャスター」

「はい、マスター！」

彼女と共に屋敷を後にした。

その頃、映司達はというと……

「……………」

「セイバー、どうした？」

士郎の言葉に、セイバーが重い口を開いた。

「シロウ……分かってる筈です」

「やっぱり、気付いてたか？」

「ヤツパリ二人もか？」

セイバーの言葉から士郎と志貴は警戒し、

「な、何だ？」

「氣い付けるよー護………」

疑問に感じた一護に銀時は答え、

「来るぞ」

「マジかよ!？」

桑原の言葉に浜面は驚く。

「な!？」

「どどどど何処にですか!？」

「何処に!？」

「隠れてないで出て来いよ!！」

八神家の四人は動揺や緊張を隠せず、

「映司、構えとけよ」

「ああ、分かってる」

「一体、何処に!?!」

アंकの言葉に映司はメダルをセットし、ユウスケも変身できるように構える。

その瞬間、真上から何かはやてに降ってきた。

「主!」

すぐさまシグナムは攻撃を弾く。

「降りて来い外道め! 正々堂々と戦え!」

彼女の発言に『彼』は答えた。

「随分な言い方だな」

そうやって『彼』は、彼等の前に姿を現した。

「私はこの聖杯戦争に召喚されしサーヴァント。 クラスはアサシンと呼んでおこう」

そう言つて赤い髪を束ねた洋装姿、顔には『不忍』と書かれた白い仮面を被った腰に刀を二本差した男が自らのクラスを名乗った。

「それにしても、先程の反射神経は中々のものだな」

「随分な言い分だな」

シグナムが構えるが、アサシンは表情を変えずにこう言った。

「安心しろ、此処は一端退いておく。真昼間から奇襲を行ったのは、魔力の高さからお前達の実力を確かめるためだ」

「何だと!？」

「アサシン、貴様の目的は何だ!」

「不答。^{こたえず}それにこの考えの提案者は我が主であり、私はその命令を果たすまで。そう言うことで、私は失礼する」

そう言うってアサシンはその場を去った。

「アイツ、何が目的なんだ!？」

「あのアサシン……気を付けた方が良いでしょうね」

「そっちな」

ヴィータは苛立ちを覚え、はやてとシグナムはアサシンに用心する。

その瞬間、再び誰かが現れた。

「あれ……今サーヴァントの気配がしたけど……あの金髪の子かな？」

そう言っつて剣護が彼等の前に現れた。

「また誰か来た！」

「え、何！？」

驚く一護に、剣護はビクリと反応した。

しかし、剣護はリインを見て目を思いつきり開いた。

「え！？」

「な、何です！？」

「き……キャスターのちびっ子版！？」

「ち、ちびっ子じゃないです！ リインには、リインフォース？ という名前があります！！」

「え？」

怒るリインであつたが、彼女の名を聞いて剣護は再び驚いた。

「リインフォースって」

「やはり、アナタ方の魔力でしたか……………」

その瞬間、剣護の背後から実体化したキャスターが出現した。

それを見た一同であつたが、

「 * # * # ! ? 」

一番驚いた銀時は、気絶してしまう。

「「銀さああああん!!」」

それを見た一護と浜面は、慌てて彼を介抱する。

その中でも、シグナムとヴィータが一番驚き、

「ば……………バカな!？」

「ウソだろ!？」

はやては、キャスターに向かって小さく彼女をこう呼んだ。

「り……………リインフォース!？」

「お久しぶりです、主はやて。そして、ヴォルケンリッターの騎士達」

キャスターの英霊・リインフォースは女神のような優しい笑みを彼女達に見せたのであった。

「教えて、銀八先生」

銀八

「はい、再びお便り頂きました。

下記の通りです、どうぞ

武田軍兵士 清坂 劍麻

美己

「ではミサカからあつちのお姉様に質問。魔法少女になってみたいですかつとミサカは愉快型魔法ステッキ（カレイドルビーのあれ）をお姉様に送りつつ聞きます」

劍麻

「では某から魔術陣営の方々に質問いたす。聖闘士が纏う鎧である『クロス聖依をどう思いますか。わからない場合に備え、簡単な説明は致します」

*クロス聖依：ギリシャ神話に出てくる女神に、神話の時代より仕え、この世に邪悪がはびこるとき、必ず現れるという希望の闘士『セイント聖闘士』が纏っている防具のことをいい、最下級である青銅聖依、ブロンズクロス中級の白銀聖依、シルバークロス最上級の黄金聖依に分かれている。

劍麻

「もう一つ主要戦力チーム（ネウロ除く）に質問。次の内、会いたくない人は誰ですか？

1. 『冥王』ハーデス（聖闘士星矢）
2. 奈落（犬夜叉）
3. BADAN大統領 JUDOノスサノオ（仮面ライダー SPIRITS）
4. 悪魔將軍（キン肉マン）
5. 異端審問会 FFF 団（バカとテストと召喚獣）

（質問？）

御坂

「なななな何言ってるのよ！ いらないわよ……！！／＼／＼／」

く質問？く

神裂

「どじつと言われても………」

士郎

「作者が『セイント聖闘士星矢』を知らないの………」

く質問？く

全員

「全部嫌という選択肢で……！」

ネウロ

「ダメだろうな」

全員

「う………」

鳴神 ソラ

ゼフィランサス

「んじゃあ拒否ったって事でドSトリオの皆さん、
××料理食べさせちゃってください」

サイサリス

「ホントに鬼だな兄貴!!」

デステイニー

「ってかあいつ、別サイトにあるフルカラー×東方でも発揮してたよな…」

ネス

「初々しいね〜」

マリオ

「しかし、どこの世界に…」

ブリッツ「主人に中心な人達に質問でござる!」もし主人が乗り物に乗って気分が悪くなった時どうするでござるっ?」

ガンダム

「(ああ…あれか…)」

サイサリス

「質問だ『内の兄貴であるゼフィランサスについてどう思う?』」

ルイーダ

「新八君に質問です『この人は凄いと思った人はいますか?』、他の小説での扱いに負けない様に頑張ってね!!」

次回を待っています!

ネウロ&mp;沖田&mp;番外固体

「では、早速」

全員

「イヤアアアアアアアアア!!」

「質問?」

シグナム

「まずは主の体調を確認します」

セイバー

「それ以前に乗り物に乗る前の健康診断を」

士郎

「セイバー……そんなことしたら、乗り遅れるから(汗)」

「質問?」

ネウロ

「中々、興味深いな」

「質問？」

新八

「弥子さんです。神楽ちゃん以上の胃袋が厄介すぎます」

上条

「ありゃ、インデックス以上だな」

ティアナ

「いや、スバル以上ね」

銀八

「というワケで、今回はコレで終わりです。次回もお楽しみに！」

第五十五話：再会と出会い！？（後書き）

とある屋敷では、

「ん~~~~~……………暇だな」

「そう言うなセイバー。私だって暇でしょうがないが、敵が自分から来るとは限らん。少しは我慢して欲しい」

紅葉を思わせるボサボサ頭に絢爛豪華の赤い上着に紅葉柄の黒い袴の和す姿の青年に、同じく紫を基調にした絢爛豪華な着物姿で白い長髪の美女がそう言った。

青年は彼女に召喚されたサーヴァントで、クラスはセイバーである。そしてそのマスターである武藤むつうとがめは、先祖代々からの魔術師の家系で、彼女はその当主である。

暇すぎるセイバーは、小さくこつ呟いた。

「ハア）……………めんどろだ」

第五十六話：虚刀の剣士と千刀の投擲者と最狂の鬼（前書き）

バレーサーカーとアーチャーが登場。

第五十六話：虚刀の剣士と千刀の投擲者と最狂の鬼

生まれつき、呪術師の家系に生まれた自分は、いずれ聖杯戦争に参加する事になっていた。

そして、彼が英霊召喚の儀式を行い……

「汝よ……我が言葉に答えよ!!」

『彼女』が召喚された。

「お聞きします……アナタが、私のマスターですか？」

これが、魔術師・間霧剣護と英霊サイヴァントキヤスター・リインフォースとの出会いであった。

屋敷で彼女を召喚した時の出来事を話す剣護であったが、

「んな話しが信じられるか!!」

ヴィータがそう言って拳で机を叩き付けた。

「誰も信じろなんて言わないぞ」

そう言って彼は来客用に出したアイスキャンディーを啜っていた。

「ヴィータ。気持ちは分かりますが、真実なんです」

キャスター……リンフォースが答えると、流石のヴィータも納得するしかなかった。

「まあ、とりあえずユツクリしてくれ。キャスター、俺は道場に行くから」

「分かっています。夕食にはお呼びします」

「頼む」

そう言って剣護は道場に向かった。

同時刻、とある神社では…

「ん〜……流石にこの時代は賑やかだねえ〜」

神主のような格好をした若い女性が、背伸びをしながらそう言った。

「アナタのそのバサバサした性格は、何とかならないのかしら？」

巫女服を着た18歳くらいの女性・旧堂真弓（まゆみ）がそう言って呆れていた。

「そう言うことは言わない事だよお嬢ちゃん」

神主のような服装の女性は、笑いながら前向きな台詞を吐く。

彼女こそ真弓のサーヴァントで、そのクラスはアーチャーである。

「兎に角、これから必要な物品の買出しよ」

「ハイハイ。 んじゃ、お酒も宜しく」

「…………… ホントにバサバサした人ね」

呆れながらも真弓は、アーチャーと共に買出しへと向かったのだった。

セイバーとがめは、近くのスーパーで買い物をしていた。

尚セイバーは、姿が目立つために霊体化している。

「品物は、もうコレで良いのか？」

「ああ、十分だ」

店を後にし、そのまま屋敷へ戻る二人であったが、

「!？」

「どうした、セイバー？」

突如セイバーが何かを察知した。

「サーヴァントの気配が……二つある」

「何だと!？」

「どうするかがめ？ 俺はアンタの命令を聞く」

「そうだな……」

セイバーから問われたのがめは、一度考えた後に答えた。

「まずは屋敷に戻るぞ！ …………… 買い物帰りだしな」

「了解」

剣護が道場で鍛錬をしている間、茶の間は賑やかであった。

「それじゃ……アナタが“祝福の風”リインフォース……お姉ちゃん!？」

リインに『姉』と呼ばれたリインフォースは、少し頬を赤くして彼女を指先で撫でていた。

そんな賑やかな雰囲気を、一瞬で破壊する出来事が起きた。

「「「「「!？」「「「「」

突如、ゾクリと一同の背中を凍らせた。

「な、何だ!？ この異常なまでの殺気と威圧は!？」

その殺気を感じた一護は、すぐさま外へ飛び出した。

「何だあ？ お前が俺と戦り合うのか？」

そこには、黒く長い髪に黒い着物姿の男がいた。

しかし、その手には2mもありそうな長刀を持っていて、面にはまるで鬼が如き紅い眼が鋭く光っていた。

「（な、何だ！？ この殺気はコイツが放ったのか！？ 異常すぎだろ！？）」

目の前の相手に、一護は初めて剣八と戦った時の事を思い出す。

「おい、何時まで黙ってるんだ？」

「何言ってるんだ！ コレだけ殺気を出しといて、よく言っせ」

「ああ？ ちょっと睨んだだけだったのによお……………」

呑気にそう言っつて、男は頭をボリボリと掻く。

その台詞に、一護はゾクリと背筋を凍らせた。

「（ちよつとだと！？ ちょっと睨んだ程度でコレだけの殺気が出せんのかよ！？）」

まだ本気を出していない男に、恐怖を感じ取った。

「そついや、まだ名乗っていなかったな……………」

そう言っつて男は、ニヤリと笑いながら、

「パーサーカー狂戦士のサーヴァント・鬼眼の狂だ」

自らのクラスと真名を名乗った。

「それでもって、私がマスターの雨崎千代よ」

ついでにそのマスターも。

「ついで!?!」

バーサーカー……鬼眼の狂は、その紅い眼で一護を睨みだす。

「(クソツ! 眼が合わせられねえ!! 今まで色んなヤツと出会って来たが、こんなヤツと出会ったのは初めてだ。まるで………
…鬼だ)」

そう思いながら一護は、狂の存在を例えたのである。

一護はすぐさま斬月を構えると、狂は嬉しそうに言った。

「ほう……やっと戦う気になったか」

嬉しそうに笑う狂と対照的に、一護は恐怖で手元が震えていた。

「(クソッ！ まるで……………剣八と戦ってるみたいだぜ。こんなヤツが、この世界にいたなんて!!)」

「それじゃ、始めるか！」

こうして死神一護と、鬼眼の狂の戦いが気って落とされたのだった。

「ウオオオオオオ！」

豪快に斬月を振るいながら、狂を攻める一護。

「ハッ！ 良いぞ、良い動きだ！」

しかし、狂はそんな攻撃を待っていたかのような顔をしていた。

「お前のようなヤツと斬り合いが出来るたあ、嬉しいぜ！」

「（やっぱりコイツも剣八と同じだ！ 完全に殺し合いを楽しんでやる！！）」

完全に恐怖で頭が一杯になった一護に、

「次は、俺の番だ」

そうやって狂は、刀を構えた。

「無明神風流……………殺人剣……………」

大技を発動させる狂であったが、

「そこまでだよ」

突然聞こえた声と共に、何本かの刀が雨のように降ってきた。

「うおー！」

「！」

ドストドスと地面に突き刺さる無数の刀。

その数は百本。

「随分と派手にやってくれるね」

そうやって神主姿の女性と、巫女服姿の女性が現れた。

「何だ、テメエ等！」

一護が身構えると、神主姿の女性がこう言った。

「アーチャー弓兵のサーヴァント・敦賀迷彩。君達を止めに来たと言っておこうか？」

「何だと？」

アーチャー……敦賀迷彩の発言に、狂が彼女の方を振り向いた。

「鬼眼の坊や、私はキミといずれ戦う事になるかもしれないが、今は休戦という形にしてくれないかい？ そうしてくれたら、コトが済んだ後に私がキミの相手をするよ」

ニヤリと笑う迷彩の言葉に、

「面白え！ 良いぜ、その話乗った！」

狂はアッサリOKしたのであった。

「帰るぞ、女」

「……って、英霊アナタが主わたしに命令するな!!」

そう言って二人はその場を去ったのであった。

「た……助かった……」

そう言って一護は、腰を抜かしたのであった。

「教えて、銀八先生」

銀八

「はい、再びお便り頂きました。下記の通りです、どうぞ」

鳴神 ソラさん

ゼフィランサス

「んじゃあオマケのみでDSカルテット組まない？」

サイサリス

「おい、被害者増える…」

マリオ

「最初は聖杯戦争の世界か…」

ルイージ

「それでリインフォースが出たね」

スネーク

「それで銀時の奴…」

ゼフィランサス

「同士に質問『一番弄りがいのある子は？』」

サイサリス

「（早速弄る気だ…）質問だ『見るからに英霊はFate以外の様々なアニメやゲームのキャラが入ってるのか？』」

「質問？」

第五十六話：虚刀の剣士と千刀の投擲者と最狂の鬼（後書き）

次回、Fateセイバーと本作のアーチャー（迷彩）の対決です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9297t/>

次元の破壊者～繋がる世界の絆～

2012年1月2日07時50分発行